

東京外国語大学記述言語学論集

思言

第3号

論文

- モンゴル語の終助詞 *yum* と日本語の「だ」「のだ」など文末形式の対照研究……ジンガン (3)
フィンランド語の疑問小詞 *-kO* ……………坂田 晴奈 (22)
南琉球語伊良部島方言の音韻論 ……………下地 理則 (35)
ブルヤスキー語における特定性標示 ……………吉岡 乾 (84)

修士論文 要旨

- モンゴル語の一人称代名詞 *MAN* について ……………チュルンバートル セレンゲ (107)
福島方言の記述的研究—動詞を中心に— ……………幡 早夏 (109)
日中オノマトペの対照研究—マンガを資料とした対照研究— ……………黄 慧 (111)
モンゴル語の終助詞に関する記述的研究 ……………ジンガン (113)
可能表現における日本語と中国語の対照 ……………李 京玉 (115)
新聞と週刊誌にみられる皇室敬語—戦後昭和と平成の事例を中心に—
……………スリ ブディ ルスタリ (117)
ブルヤスキー語フンザ方言形態論 ……………吉岡 乾 (119)

卒業論文 要旨

- 日独対照研究—身体部位名称を含む慣用句を用いて— ……………加藤 奈美 (123)
ロシア語動詞と日本語動詞のアスペクトの対応関係に寄せた対照研究 ……………小湊 歩 (131)
ソロン語の母音調和に関する音響音声学的研究 ……………佐藤 健太郎 (139)
ビルマ語の助動詞 *-khE* についての考察 ……………高橋 麻衣 (147)
ビルマ語助動詞配列の再考察 ……………田森 佳奈 (155)
広告キャッチフレーズにおける比喩の諸相 ……………土佐 栄樹 (163)
ヒンディー語の *echo formation* ……………仲地 加奈 (171)
スペイン語における認識に関わる二動詞—*saber* と *conocer*— ……………西野 剛 (179)
広島方言の継続アスペクト ……………仁村 哲也 (187)
文章表現におけるオノマトペの使用傾向 ……………増野 奈央 (195)
中国語（北京官話）指示代詞の統語的用法 ……………森川 太介 (203)
動物名詞を用いた拡大 *Augmentativbildung* についての研究 ……………柳 有紀子 (211)
アイヌ語北海道諸方言における神謡の人称 ……………山田 洋平 (219)
漫才におけるおかしみの構造の言語学的分類 ……………山本 貴也 (227)
擬音語・擬態語から見た日本語非外来語片仮名表記の考察 ……………吉田 由佳 (235)
-

2007年

東京外国語大学

地域文化研究科・外国語学部

記述言語学研究室



序言

『思言』の第3号をお届けする。

さいわい今年度も多様なテーマに関する卒論・修論の要旨から後半部の内容を構成し、刊行することができた。ただしその内容や体裁・形式に関してはまだまだ未熟であると思う。指導教員の力不足も大きな原因であるが、自身も精進するとともに、こうした『思言』での蓄積、伝統の形成によって少しずつでも質の高いものにしていきたいと考えている。読んでくださった方々からは、今後も広くご批判ご叱正を賜りたい。

前号にも書いたが、投稿論文に関して、今後は外部からの投稿を受け付け、より開かれた紀要にしていきたいと考えている。執筆要項については現在整備・検討中である。この点に関しては今回整備を進めることが叶わなかった。次回以降の課題としたい。

今回も印刷・刊行に関して東京外国語大学学部の競争的経費を申請し、その援助を賜ることができた。記してお礼申し上げます。

前号の第2号での反省を生かし、この第3号ではより確定した年間スケジュールにのって準備することができ、早めに編集を進めることができた。今後はこのペースを維持するとともに内容面での一層の充実が課題である。

この第3号の編集にあたっては、張盛開君と山田洋平君が中心になって尽力してくださった。ゼミの院生・学部生諸氏もよく手伝ってくれた。ここに記して感謝の意を表したい。

海外より雄編を寄稿してくれた下地理則氏にもお礼申し上げたい。

重ねて、読んでくださった方の、率直且つ厳しい批判をお願いする次第である。

2007年11月

風間伸次郎

思言 第3号 目次 :

論文

モンゴル語の終助詞 *yum* と日本語の「だ」「のだ」など文末形式の対照研究
A Contrastive Study of the Sentence-final Particle *yum* in Mongoliana and the Sentence-final
Form *da, noda* in Japanese ジンガン (3)

Question Particle -kO in Finnish

フィンランド語の疑問小詞-kO.....坂田 晴奈 (22)

Irabu Phonology

南琉球語伊良部島方言の音韻論.....下地 理則 (35)

ブルシャスキー語における特定性標示

Specificity Marking in Burushaski 吉岡 乾 (84)

修士論文 要旨

モンゴル語の一人称代名詞 MAN について

On First Person Pronoun "MAN" of the Mongolian Language
..... チュルーンバートル セレンゲ (107)

福島方言の記述的研究—動詞を中心に—

A Descriptive Study of the Fukushima Dialect: with a Special Focus on Verbs
.....幡 早夏 (109)

日中オノマトペの対照研究—マンガを資料とした対照研究—

Contrastive Studies of Japanese and Chinese Onomatopoeia黄 慧 (111)

モンゴル語の終助詞に関する記述的研究

A Descriptive Study on Sentence-final Particles in Mongolianジンガン (113)

可能表現における日本語と中国語の対照

Contrastive Study of Potential Expressions Between Japanese and Chinese
.....李 京玉 (115)

新聞と週刊誌にみられる皇室敬語—戦後昭和と平成の事例を中心に— Honorific Expressions for the Imperial Family as Appearing in the Japanese Newspapers and Weekly Magazines	スリ ブディ レスタリ (117)
ブルシャスキー語フンザ方言形態論 The Morphological Grammar of Hunza Burushaski	吉岡 乾 (119)
卒業論文 要旨	
日独対照研究—身体部位名称を含む慣用句を用いて— A Contrastive Study of Japanese and German: Idiomatic Expressions Involving Body-part Nouns	加藤 奈美 (123)
ロシア語動詞と日本語動詞のアスペクトの対応関係に寄せた対照研究 Contrastive Studies on Aspects of Japanese Verbs and Russian Verbs	小湊 歩 (131)
ソロン語の母音調和に関する音響音声学的研究 An Acoustic Phonetic Study of Vowel Harmony in the Solon	佐藤 健太郎 (139)
ビルマ語の助動詞-khE.についての考察 An Examination of the Auxiliary Verb -khE. in Burmese	高橋 麻衣 (147)
ビルマ語助動詞配列の再考察 A Re-consideration of the Auxiliary Verb Arrangement in Burmese	田森 佳奈 (155)
広告キャッチフレーズにおける比喩の諸相 The Circumstances of Figure of Speech in Japanese Tag Lines	土佐 栄樹 (163)
ヒンディー語の echo formation Echo Formations in Hindi	仲地 加奈 (171)

スペイン語における認識に関わる二動詞— <i>saber</i> と <i>conocer</i> — The Two Verbs Expressing Recognition in Spanish— <i>saber</i> and <i>conocer</i> —	西野 剛 (179)
広島方言の継続アスペクト The Progressive Aspect of Hiroshima Dialect	仁村 哲也 (187)
文章表現におけるオノマトペの使用傾向 An Examination of Tendencies Towards Onomatopoeic Expressions in Novels	増野 奈央 (195)
中国語（北京官話）指示代詞の統語的用法 A Syntactic Characterisation of the Chinese Demonstrative Pronouns "zhe" and "na"	森川 太介 (203)
動物名詞を用いた拡大 <i>Augmentativbildung</i> についての研究 A Study on Animal Nouns as <i>Augmentatives</i> in German	柳 有紀子 (211)
アイヌ語北海道諸方言における神謡の人称 The Person System of Ainu Hokkaido Dialects: with a Special Focus on the Gods in Kamuyyukar Texts	山田 洋平 (219)
漫才におけるおかしみの構造の言語学的分類 The Structure of Laughter in <i>Manzai</i> (Japanese Comic Dialogue)	山本 貴也 (227)
擬音語・擬態語から見た日本語非外来語片仮名表記の考察 An Examination of the Japanese Non-loanword Katakana Notation: with a Special Focus on Onomatopoeic Words	吉田 由佳 (235)

論 文

モンゴル語の終助詞 *yum* と日本語の「だ」「のだ」など文末形式の対照研究

ジンガン

東京外国語大学大学院博士後期課程地域文化専攻

キーワード：終助詞、文末形式、意味・機能、対照研究

0. はじめに

0.1 本稿の研究目的および研究対象

モンゴル語¹には *yum* という終助詞²があり、しばしば日本語の「だ」「のだ」「ものだ」などの文末形式に訳される。本研究では、モンゴル語の終助詞 *yum* の意味・機能を明らかにする。さらに日本語の文末形式「だ」「のだ」「ものだ」などと対照し、その類似点、および相違点を明らかにする。

0.2 表記について

本稿の記述に際しては、モンゴル文字で書かれた文献の引用、及び文学作品から収集した用例はモンゴル文字のつづり通りにローマ字転写で記述する。転写方法はフフバートル・松川・栗林(1997)に従うが、 $q[x]$ と $k[x]$ での表記を x で、 $\gamma[g]$ と $g[g]$ での表記を g で統一³し、記述を簡略化する。キリル文字で書かれた文献、及び例文はキリル文字のつづり通りにローマ字転写して扱う。また、モンゴル文字の語末の分かち書き母音の境界をアンダーバー “_” で表記し、接辞境界をハイフン “-” で表記する。

例文の日本語訳は日本語で書かれた文献の引用以外、すべて筆者の訳であるが、終助詞 *yum* を日本語の「だ」「のだ」「ものだ」に訳さず SFP (Sentence Final Particle) と表記する。

1. 先行研究

以下では、モンゴル語の終助詞 *yum* と日本語の「だ」「のだ」「ものだ」など文末形式の先行研究についてそれぞれ年代順に述べる。なお、管見の限りでは、モンゴル語の終助詞 *yum* と日本語の「だ」「のだ」「ものだ」などの文末形式との対照研究は見当たらない。

なお、モンゴル語の先行研究に関しては、キリル文字で書かれたハルハ方言の研究も参照する。

¹ 本稿で言うモンゴル語は、モンゴル国のハルハ方言や内モンゴルの諸方言を含むが、内モンゴルのチャハル方言を中心に扱う。

² 本稿でいう終助詞とは、以下のような条件を満たすものである。I 形式の面で、①常に文の述部に位置する。②語形変化しない。③他の要素の後続なしに単独で文を終了させることができる。II 意味・機能の面では、命題を操作し、命題の性質をマークする。

³ モンゴル文字ではこれら単音を区別し、それぞれ異なる文字で表記しているが、音声の問題は本研究に影響を与えないため、記述を簡略化する。キリル文字表記では x 、 r という二つの文字を使っている。

1.1 モンゴル語の終助詞 *yum* の先行研究

1.1.1 Street(1963)での記述

Street(1963:158)では、*yum* を補語小辞(complement particle)と名づけ、以下のように述べている。

小辞 *yum* (同音異義語として「もの」という意味の名詞がある) は名詞的補語(nominal complement) と形容詞的補語(adjectival complement) とともに出現する。 *bayin_a* と対照可能な位置に出現するとき、それは現在のではなく、より一般的な真実の事を示す。(中略)

yum が形容詞類(adjectival)の後に現れる時、場合によって補語小辞(complement particle)として働いているのか、名詞の「もの」という意味であるのかは判定しにくい。

Street(1963:159-160)

1.1.2 Hangin(1968)での記述

Hangin(1968:87)では *yum* を叙述の小辞(predicative particle)と名づけ、以下のように述べている。

叙述の小辞 *yum* は動名詞補語(verbal noun complement)の後に出現し、事実を示す。疑問文で頻繁に使われる。(中略)

肯定文で現れる時、それは話者の確信(conviction)、あるいは新しく発見した事実を示す。

Hangin(1968:87)

1.1.3 Čenggeltei(1979)での記述

Čenggeltei(1979:428)では *yum* を断定虚辞と名づけ、物事を一般に述べる際に用いられると述べている。出現位置について、文末では名詞述語の後(例1)、形動詞述語の後(例2)に、そしてその他として、文中にも出現することを述べている(例3)。

(1) šürenčeceg bol ene jil arban naiman nasu-tai, orgilug-san sedxil-tai
人名 Top. この年十八才-AFS 沸く-NDS 心-AFS
xeöxen yum.

女子 SFP

(シュリンチチグは今年十八歳の、情熱的な心がある女の子 SFP)

Čenggeltei(1979:429)

(2) erxebsi sirgagu surulča-ju bayi-manjin sayi ejemsi-jü čida-xu
必ず 勤勉 勉強-VDS いる-VDS やっと 身に着ける-VDS できる-NDS
yum.

SFP

(勤勉に勉強してやっと身に付けることができる SFP)

Čenggeltei(1979:429)

- (3) *bi öbertegen erig-sen yum bol lab eri-jü ol-xu ügei.*
1sg. 自分 探す-NDS SFP ならば 絶対 探す-VDS 見つかる-NDS Neg.
(私が自分で探したならば絶対見つからなかった。)

Čenggeltei(1979:429)

1.1.4 小沢(1978, 1997)での記述

小沢(1978)では、*yum* を指定詞と名づけ、以下のように述べている。

yum はある事態、現象、動作などを指定する際に、それらの事実、現象などの単なる叙述ではなく、話し手の心情、感情の吐露が含まれているのである。

小沢(1978:91)

小沢(1978:91)では以下のような例文を挙げている。例文の日本語訳は小沢(1978)の訳であり、日本語の「だ」や「のだ」に訳されている。

- (4) *bi xödöö yav-san yum.*
1sg. 田舎 行く-NDS SFP
(私は田舎へ行ったのです。)

- (5) *ene bol minii nom yum.*
これ Top. 1sg.gen. 本 SFP
(これは私の本です。)

また、小沢(1997:296)では、*yum* について以下のように述べている。

yum はいわゆる繫辞(copula)として現代語では、話し言葉と文語の両者に於いて多用される語である。(中略)

繫辞としての *yum* も単なる「～です」ではない。例えば、現代のハルハ方言で、*bi bagši yum*【筆者による転写、原文はキリル文字表記】と言えば、日本語では一応「私は先生です」となるが、事実は、「私は先生です、……」のように、話し手としての気持ちは「先生です」で言い切りではなく、後にまだ何かを言い足したい気持ちがあり、例えば「私は先生です、(だから学生と同じようには行動できない)」のような、何か次に含みをもった表現なのである。

小沢(1997:296-297)

1.1.5 向井(2001)での記述

向井(2001)では、*yum* を「名詞句化」マーカーと解釈し、以下のように述べている。

モンゴル語における焦点調整の原理としての「名詞句化」は、少なくとも共時的には、あくまでも形動詞形の直後に表れる *yum* という語の作用によって初めて行われる文法過程であり、形動詞形が一次的に備えている準体機能によるものとは別だと考えなければならない。言い換えれば、準体機能を果たしている形動詞形の直後に *yum* が現れていると見るのではなく、歴史的な文法化の過程をひとまず捨象するとすれば、現体系では、逆に、*yum* の直前であるために機能にかかわらず動詞の範疇が制限されているのだと解釈するほうが整合的である。

向井(2001:77)

「名詞句化」の例文として向井(2001)は以下のような例文を挙げている。

- (6) aav ire-x **yum** biš. xarin eeĭ ir-ne.
 父 来る-NDS NM Neg. Con. 母 来る-PrT
 (お父さんがくるのではない。お母さんが来る。)

向井(2001:77)

また、向井(2001)は「名詞句化」だけで、*yum* の機能を説明し切れないことを認識しつつも、*yum* を含むすべての形式の機能と意味を、「名詞句化」から敷衍される本質的機能を核に発展するものとしてみると主張し、以下のように述べている。

yum 以前の部分が話し手の認識の範囲の外において成立した、あるいは成立することが一般に諒解されるべき事態であり、さらにその事態がすでに存在していることをことさらに表現するというニュアンスが明らかに感じられるのは事実である。そして、ここからは、*yum* が作用域を明示するために用いられる場合の「名詞句化」の副作用としての「客体化」・「概念化」とも通底する、*yum* という語そのものの根本的機能の一端をうかがうことができる。

向井(2001:86)

「名詞句化」で説明できない例文として向井は以下の例文を挙げている。

- (7) am'dral gedeg ünexeer xačin šüü. öör-iin bod-son-oor bol-dog
 人生 とは 本当に 奇妙 SFP 自分-gen. 考える-NDS-inst. なる-NDS
yum geĭ barag ügüi. sanaan-d orom-güi genet-iin züil olon
 もの とは ほとんど Neg. 考え-loc. 入る-Neg. 突然-gen. 類 沢山
 toxioldo-x **yum**.
 突き当たる-NDS SFP

(人生というのは本当におかしなものです。思ったとおりになるということはほとんどありません。考えもしなかった突然の出来事に沢山突き当たるのです。)

向井(2001:85)

1.1.6 Kullman・Cerenpil(1996)での記述

Kullman・Cerenpil(1996:338)では、*yum* について次のように述べている。

この小辞は強意コピュラ(intensifying copula)として名詞や形容詞の後ろで広く使える。終止形として働く形動詞の後ろでは小辞(particle)として働く。*bayin_a* と合わさって、話題の対象が今発見されたという意味を表し、*bile* と合わさって以前に経験されたことを示す。

Kullman・Cerenpil(1996:338)

以下は Kullman・Cerenpil(1996:338)で挙げている例文である。

(8) Monggol ulus bol azi-yin oron yum.

モンゴル 国 Top. アジア-gen. 地域 SFP

(モンゴルはアジアの国 SFP)

(9) minu eji 1.8m öndör yum.

私の 母 1.8メートル 高い SFP

(私の母の身長は1.8メートル SFP)

(10) minu ečige exe xüdege amidura-dag yum.

私の 父 母 田舎 暮らす-NDS SFP

(私の両親は田舎に暮らしている SFP)

(11) tere yexe jab ügei bayi-dag yum bayin_a.

3sg. 大きい 暇 Neg. いる-NDS SFP いる-PrT

(彼はとても暇がない SFP)

(12) gérman-čud čag-i yexe narin barimtala-dag yum bile.

ゲルマン-pl 時間-acc. 大きい 細い 従う-NDS SFP SFP

(ドイツ人はとても時間を守る SFP SFP)

上記の *yum* の先行研究での記述をまとめると表1の通りになる。

表 1 yum の先行研究のまとめ

研究者	意味・機能
Street(1963)	一般的事実の表示
Hangin(1968)	事実の表示／確信／新発見
Čenggeltei(1979)	平叙
小沢(1978,1997)	話し手の心情、感情の吐露が含まれる叙述／繫辞
向井(2001)	名詞句化マーカー／客体化、概念化
Kullman・Cerenpil(1996)	強意コピュラ

1.2 日本語の「だ」、「のだ」の先行研究

日本語の「だ」は一般に判定詞、指定詞と呼ばれている。「のだ」は助動詞に分類され、構文的カテゴリーとしてしばしば「説明的表現」、「説明のモダリティ」などと呼ばれている。また、日本語では、「のだ」と同じカテゴリーに属する「ことだ」、「ものだ」、「わけだ」など形式名詞に「だ」がついたものがあり、「だ」、「のだ」と深く関わっている。そのため、以下では、両者の先行研究および、補助的に「ことだ」、「ものだ」、「わけだ」などの先行研究を概観する。

1.2.1 寺村(1984)、および寺村他(1987)での記述

寺村(1984:305-311)では、「のだ」は準体助詞「の」に判定詞「だ」が結びついたものであり、先行する節の内容に対する話し手の説明のムードを表す機能を持つと述べている。また、「ものだ」、「ことだ」など他の説明的表現は互いにパラディグマティックな関係のみをもち、シンタグマティックな関係はもちえないのに対し、「のだ」は両方の関係を持ちうると述べている。そのため、「のだ」はより広い説明のムードを表すことができるとみなしている。

寺村他(1987:82)では、述語が何等かの先行文脈で前提されているときに、その述語を「だ」で代用した文を「うなぎ文」と定義している。つまり、判定詞「だ」は「うなぎ文」を形成させる不可欠な要素でもある。

1.2.2 益岡・田窪(1989)での記述

益岡・田窪(1989:24-27)では、「だ」を「判定詞」だとしている。動詞と形容詞が単独で述語になるのに対して、名詞は単独で述語になれないため、名詞と結合して述語を作るのが「判定詞」であるという。また、「XはYだ。」という「名詞+判定詞」を述語とする文において、XとYの関係は、主として三つの場合があると述べている。それは、Yが指し示す集合体にXが属する場合、XとYが同一のものを指し示す場合、また、XとYの間に直接的な論理関係が存在しない場合、の三つである。XとYの間に直接的な論理関係が存在しない場合とはいわゆる「うなぎ文」のことを指している。

益岡・田窪(1989:28-30)では、助動詞を、形式名詞を要素として含むものと含まないものにわけ、「のだ」を、形式名詞を含む一類に所属させている。それとともに、「のだ」はすべての述語に接続することができるものとして、「わけだ」、「はずだ」、「ようだ」と並列している。

1.2.3 野田(1995, 2002)での記述

野田(1995)では、「ものだ」、「ことだ」、「のだ」という三つの形式について、「名詞性の助動詞の当為的な用法」という観点から分析している。野田(1995:259)では、以下のような例文を用い、「のだ」と「ことだ」、「ものだ」の区別を述べている。

(13) (騒いでいる子供に向かって)

こらっ、静かにする {*もんだ/*ことだ/んだ}。

野田(1995:259)

そして、さらに「のだ」について以下のように述べている。

ノダは、その行為を実行することが望ましいという判断が、何らかの形ですでに定まっていれば用いることができる。話し手が同じ命令を繰り返すときでもよいし、一般的に望ましい行為の実行を示すときでもよい。また、行為の主体が必ず二人称である点でもモノダ、コトダと異なり、もっとも命令形に近い。

野田(1995:259)

野田(2002)は「のだ」についての専門的な研究であり、助動詞「のだ」の機能を全体的に述べている。野田(2002)では、「のだ」の機能を大きく「説明のモダリティ」を表すものと「否定のスコープ」を表すものの二つに分けている。以下では野田(2002:234)で示している「のだ」の機能の全体像を表2で示す。

表2 野田(2002)の「のだ」の全体像

説明などのモダリティを表す「のだ」	対人的 (聞き手必要)	関係づけ (事情・意味の提示)
		非関係づけ
	対事的 (聞き手不要)	関係づけ (事情・意味の提示)
		非関係づけ
否定などのスコープを表す「の (だ)」		

関係づけの対人的「のだ」とは、聞き手に対する先行文脈などの「説明」であり、「説明のモダリティ」とよばれる「のだ」の典型的な機能である。例として以下のようなものがある。

(14) 翌日は、朝、早く目が覚めた。電話がなったのである。

野田(2002:230)

非関係づけの対人的「のだ」とは、何か事態を聞き手に認識させようとする場合に用いられるもので、以下のような例が挙げられる。なお、野田(1995)で述べている「当為的用法」は、野田(2002)の「のだ」の全体像のうち、非関係づけの対人的「のだ」に属すると考えられる。

(15) 「今度はいつ会えるかしら」

石山が沈黙した。その時間が長く感じられ心配になる。会えなくなること。カスミはそれだけを怖れていた。

「俺、別荘買うことにしたんだ」

なぜ、今そんなことを言うのだろう。

野田(2002:231)

関係づけの対事的「のだ」は、状況や先行文脈の「事情」や「意味」を話し手が把握したことを示す。非関係づけの対事的「のだ」は、先行文脈などとは関係づけずに、事態をすでに定まっていたものとして把握したことを表す。関係づけの対事的「のだ」、および、非関係づけの対事的「のだ」の例は、以下の例(16)、例(17)のようなものである。

(16) 「少しドライブしようよ」

こちらを見ずに浜崎は言う。展開があまりにも思ったとおりなので、私は怖いと思うのと同時に落胆もしていた。くだらない。この男は出来の悪いドラマの見すぎなのだ。私はただ黙っていた。

野田(2002:232)

(17) あ、そうだ。今日はお客さんが来るんだ！

野田(2002:232)

なお、否定などのスコープを表す「のだ」とは、以下のようなものである。

(18) その人間がポリシーを決めるのではない。ポリシーがその人間を決定するのだ。

野田(2002:235)

2. 研究方法

本研究では、モンゴル語の終助詞 *yum* についての先行文献を踏まえながら、実例を分析し、その意味・機能を明らかにする。さらに実例を分析して得られた結果を日本語の「だ」「のだ」など文末形式の研究結果と対照し、その類似点と相違点を明らかにする。

モンゴル語の終助詞 *yum* の実例は、内モンゴル大学で構築された“100 *tümen üge-tei odo üy_e-yin monggol xele bičig-ün deyita xömörge* (100万語現代モンゴル語コーパス (筆者訳))”という電子コーパスから、文字列検索ソフト Kwic Finder⁴を用いて収集する。このコーパスの語数は100万語(約8.69MB)であり、内容としては、小中学校、高校で使われているモンゴル語教科書の全内容、文学作品(翻訳作品を含む)、新聞記事などがあり、すべて1949年以降のものである。本稿ではMC100と略す。

3. 考察

3.1 *yum* の例文分析

全コーパスでの *yum* の出現数は7,555例であった。行の頭に位置⁵する493例(6.5%)を除外すると、7,062例となる。そのうち、形動詞に後続したものは3,768例で、半分以上(53.4%)であり、最も高い割合を占める。続いて、名詞述語や、形容詞述語に後続した例も多くあり、数量詞に後続した例も若干あった。本動詞の過去形 *-l_a(l_e)* と *-ba(be)* に後続したものがそれぞれ1例、現在形 *-n_a* に後続したものが1例あったが、内省による判断では不自然に感じられる。副動詞に後続した例も若干あったが、それは *-gsagar(gseger)* に後続した場合である。この形式は「~のまま」という継続している状態を表す形式であり、単独で文を終了させることができる。Čengeltei(1979:311)によれば、この形式は形動詞語尾 *-gsan(gsen)* に格助詞 *-iyar(iyer)* (具格 *instructive*) が後続した形式から変化したものである。いずれにしても、この形式は単独で文を終了させることができ、その点で他の副動詞と異なる。したがって、終助詞の継続も可能である。

以下の表3で例文の内訳を示す。なお、本動詞に後続した例は不自然と考えられるので除外した。その他の例は、述語と *yum* の間にフォーカス小辞 *ču, le, ni* などが挿入されたもの、陳述副詞 *lab*、疑問詞 *yagu*、助動詞 *bui* などに後続した例である。コーパス全体からの例文は大量であったため、前後の文脈を確認する際、各形式において、例文の10%の割合で確認した。例えば、形動詞に後続したのが3,768例であるが、その約10%、377例について前後の文脈を確認した。

⁴ http://www31.ocn.ne.jp/~h_ishida/ を参照。最終確認日 2006/12/03

⁵ 検索対象のコーパス中の位置が行の頭に位置する場合、検索ソフト Kwic Finder では先行文脈が空白となる。

表 3 yum の例文の内訳

先行要素	形式	各形式例数(%)	品詞類による例数(%)
名詞 ⁶	N+yum	758 (10.7%)	758 (10.7%)
形容詞	A+yum	934 (13.2%)	934 (13.2%)
数量詞	Num.+yum	8 (0.1%)	8 (0.1%)
形動詞	-xu(xü)+yum	1,316 (18.6%)	3,768 (53.4%)
	-g_a(ge)+yum	245 (3.5%)	
	-gsan(gsen)+yum	1,452 (20.6%)	
	-dag(deg)+yum	727 (10.3%)	
	-mar(mer, m_a, m_e)+yum	17 (0.2%)	
	-gusitai(güsitei, xuiča, xüče)+yum	11 (0.2%)	
副動詞	-gsagar(gseger)+yum	25 (0.4%)	25 (0.4%)
終助詞	mön+yum	7 (0.1%)	7 (0.1%)
否定	bisi+yum	133 (1.9%)	133 (1.9%)
	ügei+yum	975 (13.8%)	975 (13.8%)
その他		454 (6.4%)	454 (6.4%)
			計 7,062 (100.0%)

検出された実例から明らかになったのは、yum が名詞述語、形容詞述語、形動詞述語に後続することが最も多いということである。以下でそれらの実例を挙げる。

- (19) čixin-u xöndei bol tuyil-un emjeg gaĵar yum.
 耳- gen. 腔 Top. 極-gen. 弱い ところ SFP
 (耳の奥はとても弱いところ SFP)

(MC100:351⁷)

- (20) čixin-u bötöče bol masi narin yum.
 耳- gen. 構造 Top. とても細い SFP
 (耳の構造はとても緻密 SFP)

(MC100:2075)

⁶ 代名詞 40 例を含む。

⁷ 出典における数字は、当該用例がある行の番号である。

(21) *teüxe-yi bol arad olan egüdüin bötöge-gsen yum.*

歴史-acc. Top. 人民 創める 造する-NDS SFP

(歴史は人民が創造した SFP)

(MC100:23270)

先行研究でみたように、終助詞 *yum* は、指定辞、繫辞、コピュラなどと説明される場合が多いが、上記の例の文末の *yum* を除去しても文は成立する。そのため *yum* がコピュラであるという説には賛同できない。また、「一般的事実の表示」という説もあるが、以下の例(22)は未来に起こりうることを述べているので一般的事実ではないと考えられる。その根拠として、*lab* という判断を表す陳述副詞が共に出現している点を指摘できる。また、*margasi* (明日) という具体的時間を表す要素を挿入することもできる。従って、一般的事実ではなくても *yum* は出現する。

(22) *önödör ene oxin nige čüideng ču xudaldu-ju garu-gsan ügei tula*

今日 この 娘 一 マッチ FP 売る-VDS 出る-NDS Neg. 原因で

abu-ni lab tegün-i jodo-xu yum.

父-POS 絶対 3sg.-acc. 殴る-NDS SFP

(今日この女の子はマッチが一本も売れなかったのでお父さんが絶対殴る SFP)

(MC100:5669)

他方、向井(2001)では「名詞句化マーカー」と解釈している。「形動詞述語+*yum*+*bisi* (否定)」という構造では、否定のスコープを拡大させているということである。ただし、*yum* は常にこのような構造に出現するわけではない。～*bisi yum* という形(例(23))で出現する場合もあり、「形動詞+*yum*+*siü*」のように、他の終助詞が承接した構造(例(24))もある。また～*mön yum* という終助詞に後続した形式(例(25))もある。これらの形式をすべて「名詞句化」で説明するのは、無理があると考えられる。

(23) *man-u xobisxal xi-jü bayi-g_a bol bayaji-xu-yin tülüge bisi yum.*

1pl.-gen. 革命 する-VDS いる-NDS Top. 儲かる-NDS-gen. ため Neg. SFP

(我々が革命をしているのは儲けるためではない SFP)

(MC100:4280)

(24) *ulaganbagatur-tu yexe bolbasun debel emus-deg yum siü.*

ウランバートル-loc. 大きい文明 服 着る-NDS SFP SFP

(ウランバートルではとてもいい身なりの服を着る SFP SFP)

(MC100:45370)

- (25) *mulum gedeg čini jingxini abu ni mōn yum uu?*
 人名 という Top. 本当 父 3 POS SFP SFP QP
 (モロモというのは彼の本当の父 SFP SFP か)

(MC100:16596)

本研究では、モンゴル語には、「名詞句化」の標示としての *yum* と話者の主観を表すモーダルな小辞としての *yum* がそれぞれ別個存在すると考える。以下では「名詞句化」の標識としての *yum* と終助詞としての *yum* に分けて、それぞれ論じる。

3.1.1 「名詞句化」の標示としての *yum*

まず、「名詞句化」の標示としての *yum* であるが、ここでいう「名詞句化」は向井(2001)で述べているような否定のスコープが拡大される場合の「名詞句化」である。典型的な形としては「*~yum bisi, xarin ~ (yum)* (*~*をするのではなく、*~*をする (のだ))」である。

- (26) *aav ire-x yum biš. xarin eej ir-ne.*
 父 来る-NDS NM Neg. Con. 母 来る-PrT
 (お父さんがくるのではない。お母さんが来る。)

向井(2001:77)

これは *bisi* の機能の必然的帰結とも言える。つまり、*bisi* は本来名詞を否定する要素であるため、その前にくるものは名詞的でなければならない。先行文献でも指摘しているように、*bisi* は形動詞にも直接後続するものであるが、モンゴル語の形動詞はそれ自体がテンスの意味を持ち他の要素がなくても文を終了させることができる。そのため、モンゴル語の形動詞自体はやはり「事柄・行為」を示す性質が強くなり、「事態概念」を表す性質は弱い。その根拠として、題名などで形動詞が使われるとき、常に *ni* というフォーカス小辞を伴わなければ題名として使えないことが挙げられる。以下は有名な民話のタイトルである。

- (27) *alunguw_a ex tabun müsü-ber xeoxed-iyen sarga-gsan ni.*
 人名 母 五つ 矢-inst. 子供-Ref. 教える-NDS FP
 (アロンゴア母が五つの矢で子供たちに教説した FP=「アロンゴア母の教説」)

この例文の最後の小辞 *ni* を使わず、形動詞のまま文を終了させるならば、「アロンゴアという母親が五つの矢を用い、子供に教えた」という「事柄・行為」を表す文になる。

本論に戻るが、上述のように形動詞の性質により、「事柄・行為」ではなく「事態概念」を表すためにこの *yum* が出現する。なぜ「事態概念化」するために *yum* が出現するのかと

いうと、この小辞が *yagum_a*⁸ (もの) という名詞から変化してきたからであると考えられる。つまり、「もの」という概念から「こと」という概念が生じたと考えられる。上記の例(26)を例(28)のように分析することができる。

(28) [[aav irex] **yum**] **bisi** [[eji irex] **yum**]
 [父 来る] こと Neg. [母 来る] こと

また、次の例(29)のように、この「もの」という意味が「こと」という意味に拡張され、さらに「一般通念的なこと」という意味に拡張されたと考えられる。つまり、*~yum bisi* という構造においては、「言及されていることは一般的通念として導き出される結果 (こと) ではない」という意味を実現する。

(29) xüü čü yagaxi-xu bui? gilalja-gsan sergüleŋ le er_e. ajił
 息子 FP InP-NDS QP 光る-NDS 聡明 FP 男 仕事
 yabudal-du ču xümün-iyer xelegül-xu **yum bisi**.
 出来事-loc. FP 人- inst. 言う-Cau.-NDS SFP Neg.
 (息子は言うことなしだ。いきいきして、頭のよい男だ。仕事などで人にとやかく言われることはない。)

(MC100:47112)

このような意味を表す場合、上記の例(28)との相違は、「A ではなく B である」という構造を取らない点にある。この場合は「こと」という意味から「一般通念的なこと」に移行している段階にあると考えられる。

以上をまとめると、「名詞句化」を示す *yum* は *bisi* の機能とともに生じるものである。つまり、「形動詞述語 + *yum* + *bisi* (否定)」という構造において現れるものである。

3.1.2 終助詞としての *yum*

次に、モーダルな小辞、つまり終助詞としての *yum* について述べる。終助詞としての *yum* は、「[NP1+*bol*] NP2」+ *yum* というトピックマーカ―*bol* を含む文に出現できることや、「[NP1+*bol*] NP2」+ *mön* + *yum* のように終助詞 *mön* に後続する点で「名詞句化」の *yum* と異なる。

(30) xariyačai **bol** xümün-du tusa-tai amitan **yum**.
 ツバメ Top. 人- loc. 利益- AFS 動物 SFP
 (ツバメは人間に有益な動物 SFP)

(MC100:6055)

⁸ モンゴル文字表記では上記のように記述するが、キリル文字では *yum* と記述し、小辞の *yum* と全く同じである。

- (31) yexe bag_a-bar xedüi adali ügei bol-baču yexe üyiles-ün “nige
 大きい 小さい-inst. InP 同じ Neg. なる-VDS 大きい 事業 一
 xeseg” **mön yum.**
 部分 SFP SFP
 (規模が他とは違うが、大きな事業の「一部分」 SFP SFP)

(MC100:44159)

また、前後の文脈が因果関係にある場合、あるいは、何らかの事柄の理由を説明している文脈では *yum* が多く出現する。つまり、「～*bolbal(bol)* ～*yum* (～なら～である)」、あるいは、*eyimü(teyimü)-eče* (したがって)、*tula* (～であるため)、*~ača(eče) bolugsan* (～による) など因果関係を表す形式、あるいは理由、言い訳を述べるときに使われる形式と共起しやすい。

- (32) xümün xerbe erdem medelge-tai **bolbal** yamar yagum_a-yi ču
 人 もし 学問 知識-AFS なら InP もの-acc. FP
bütüge-jü čida-xu yum.
 作る-VDS できる-NDS SFP
 (人は知識があればどんなものでも作れる SFP)

(MC100:912)

- (33) usu xülde-xü-degen mön ču ös-deg bayin_a. **eyimü-eče** usu
 水 凍る-NDS-loc.Ref. また 増える-NDS いる-PrT そのため 水
tele-jü usun gang-i delbel-deg yum.
 張る-VDS 水 樽-acc. 爆発-NDS SFP
 (水も凍ったら膨張するんだ、だから甕を破壊する SFP)

(MC100:885)

- (34) xola-yin barag_a xöxe-re-n xaragada-ju bayi-xu **učir ni** ödxen
 遠い-gen. もの 青い-VFS-VDS 見える-VDS いる-NDS 理由 FP 濃い
jujagan agar-un dabxurg_a bayi-xu-ača bolu-gsan yum.
 厚い 空気-gen. 層 いる-NDS-abl. なる-NDS SFP
 (遠くのもの青く見えるのは、厚い空気層があるから SFP)

(MC100:26050)

上記の例(32)は「知識があるなら物事に困ることはない」という因果関係でもあり、「知識を持つ」ということから導き出される「一般的通念」でもある。「一般的通念」を表す場合、「総称的主語＋トピックマーカ－＋形動詞述語＋*yum*」という構造をとる。このような

例文で現れている *yum* は「こと」を表す意味の *yum* から「説明」を表す意味の *yum* に移行している過渡期にあるものと考えられる。例(33)、(34) は事柄の成立の理由、原因などの説明である。

3.1.3 *yum* のまとめ

以上をまとめると、終助詞としての *yum* は「**当該命題は、述べられている事柄・行為についての説明である、あるいは当該命題は先行文脈の説明であることを示す標識**」と仮定することができる。

また、前述したように、現体系において「名詞句化」機能を持つ *yum* とモダリティを表す終助詞としての *yum* が共存するということは、*yum* という形式が名詞 *yagum_a* から変化したからであると考えられる。そのため、前述の例文分析に基づき、変化のプロセスをひとまず、以下のようなものであると仮定する。

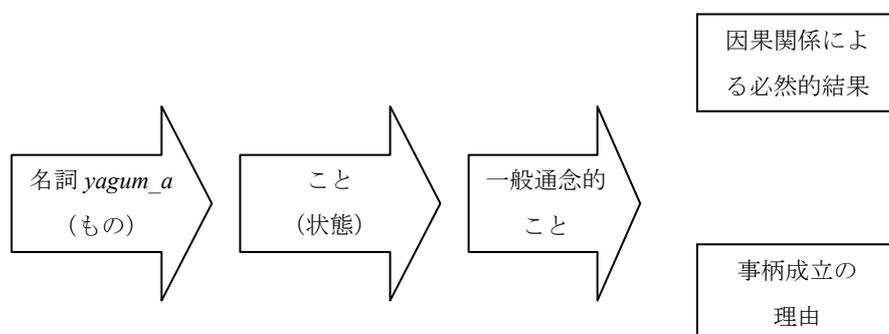


図 1 *yum* の変化プロセス

この仮説を証明するためには通時的観点から研究しなければならないが、現段階では本稿の考察範囲を超えるものであるので、今後の課題とし、示唆するにとどめておく。

3.2 *yum* と「だ」「のだ」の対照分析

3.2.1 形式の面から

モンゴル語の *yum* は形式の面では、語形変化しない⁹。それゆえ、「終助詞」と呼ぶのが適切である。これに対して、日本語の判定詞「だ」は「だった」、「だったら」などのように語形変化するものであり、モンゴル語の *yum* と異なる。「のだ」は意味上再分節することが難しいが、構造上は、準体助詞「の」に判定詞「だ」がついたものとみなすことができる。また、「のだった」のように語形変化もする。つまり、形式の面では、モンゴル語の *yum* は「助詞」に属するものであり、日本語の「だ」は「判定詞」、「のだ」は「助動詞」といったそれぞれ性格の異なる品詞類に属するものである。

⁹ *yum* には、*yumsan*, *yumsanjai* のような形式がまれに見られるが、それは *yum* に *agsan*, *agsan ajai* のような助動詞が後続した形のくずれた形であり、*yum* の活用ではない。

3.2.2 意味・機能の面から

モンゴル語の *yum* について、本研究では「名詞句化マーカ―」、つまり、否定などのスコープを表すものと、終助詞として「命題関係」を表すものという二つの機能があることを主張した。「名詞句化マーカ―」としての *yum* は、野田(2002)で述べている「否定のスコープ」を表す「のだ」と極めて類似している。また、終助詞としての *yum* も「命題関係」を表す点において、「のだ」の関係づけという機能と似ている。先にみたように、野田(2002)では、モダリティを表す「のだ」について表 3 で示したような細かい分類をしている。以下では、野田(2002)での分類を用いて、モンゴル語の *yum* と対照させる。

まず、関係づけの対人的「のだ」の場合であるが、モンゴル語の *yum* は、「当該命題は、述べられている事柄・行為の成り行きの説明である、あるいは当該命題は先行文脈の説明であることを示す標識」である。そのため、日本語の「のだ」は、聞き手に対する、先行文脈などの「説明」という基本的機能においては、モンゴル語の *yum* と似ている。

次に、非関係づけの対人的「のだ」の場合、モンゴル語の *yum* は、先行文脈と関係づけずに、聞き手に何か事態を説明する点において、非関係づけの対人的「のだ」と似ているが、「対人的」性質は日本語ほど強くない。特に、例(13)のように何らかの事態を命令的に聞き手に認識させることはできない。モンゴル語では、何らかの事態を聞き手に命令的に認識させる場合、動詞の命令形や依頼形で示す。例(13)と同じような場面をモンゴル語にするならば、以下ようになる。

- (35) dugui sagu !
 静か 座る
 (静かにしろ!)
- cf. ?? dugui sagu-xu yum.
 静か 座る-NDS SFP

続いて、関係づけの対事的「のだ」の場合であるが、これは、話し手自身が言語外状況や先行文脈から「事情」あるいは「意味」を把握したことを示すものである。モンゴル語では、このような話し手自身の認識を表す場合、すでに Kullman・Cerenpil(1996)などで指摘している通り、*bayin_a* によって示される。例えば、以下のような例文である。この例文は、話し手は島の現状を見て、この島は本当に噂通りだということを、自ら再認識した場面である。

- (36) bida onguča-bar yabu-gsagar sibagu-tu aral oyiratu-xu tutum
 1pl. 船-inst. 行く-VDS 鳥-AFS 島 近づく-NDS ほど
- ganggar gunggur yad yad gad gad ged olan sibagu šuugi-n šagildu-n.a.
 Ono. Ono. Ono. Ono. Ono. Con. たくさん 鳥 騒ぐ-VDS 騒ぐ-PrT
- ene xü tüg tümen sibagu-d-un narin бүдүгүн dagun-u nayiral xөгјim
 この FP Red. 一万 鳥-pl.-gen. 細い 太い 声-gen. 調和 音楽

ni xümü-s-tü alus-un jočid-i bayarla-n ugtu-ju bayi-g_a yum
 FP 人-pl.-loc. 遠い-gen. 客-acc. 喜ぶ-VDS 向かう-VDS いる-NDS SFP
 sig sanagda-gul-dag.

ように 感じる-Cau.-NDS

ulus dayagar ner_e aldarsi-ju, xümün amitan-u xüsel-i tata-gsan
 国 みんな 名 広がる-VDS 人 動物-gen. 意欲-acc. 引く-NDS
 ene sibagu-tu aral ünexer ner_e ni nider-tegen toxira-gsan yum
 この 鳥-AFS 島 本当に 名 FP 実名-loc.Ref. 適合-NDS SFP

bayi-n_a.

ある-PrT

(私たちの船がショボート島に近づくほど、鳥の騒ぐ声が聞こえる。この何万の鳥のさまざまな声がオーケストラのように遠くから来たお客をよるこんで迎えているように感じられる。全国的に有名で、人々の興味を引くこのショボート島は本当にうわさにたがわないのだ。)

(MC100:46577)

最後に、非関係づけの対事的「のだ」であるが、野田(2002:253)によると、非関係づけの対事的「のだ」は、初めて把握したことを示す場合が多い。この意味で文脈や状況などから何かを「発見」したことに近い。このような、今現在発見し、意味、事情を把握する場合、モンゴル語では、やはり *bayin_a* なしには完全に表現し切れない。例えば、以下のような例である。

(37) a ene čini činw_a bisi yum bayi-n_a.

Int. これ Top. 狼 Neg. SFP ある-PrT

(あ、これは狼じゃないんだ。)

(MC100:23077)

また、表3(§3.1)から分かるのは、モンゴル語の *yum* は形動詞に後続する場合が最も多いということである。このうち、「総称的主語+トピックマーカ+形動詞+*yum*」という構造の文においては、「一般的通念」を表すことができる。野田(1995:256)によれば、日本語の「ものだ」は「本来的性質・傾向」を表す用法と、「こうするべきだ」という当為の判断を表す用法があると述べている。本研究でいう、*yum* の表す「一般的通念」という意味は、日本語の「ものだ」の表す「本来的性質・傾向」と類似していると考えられる。例えば、以下のような例がある。

(38) teüxe-yi bol arad olan egüdünbötöge-gsen yum.

歴史-acc. Top. 人民 沢山 創める 造する-NDS SFP

(歴史とは人民が創造したものだ。)

(MC100:23270)

(39) čigirag bey_e-tei xümün gegči eyimü le ide-rxeg bayi-dag yum.

健康 体-AFS 人 Top. このように FP 力-AFS いる-NDS SFP

(健康な人はこのように力があるものだ。)

(MC100:8059)

4. おわりに

本稿では、モンゴル語の終助詞 *yum* の意味・機能を明らかにし、さらに日本語の「だ」「のだ」などの文末形式と対照させ、両者の類似点と相違点を明らかにした。形式の面から言えば、日本語の「だ」「のだ」は形態的变化を有するものであり、それぞれ「判定詞」と「助動詞」という品詞類に属するが、モンゴル語の *yum* は形態的变化がなく、いわゆる「助詞 (particle)」といえる品詞類に属するということが結果として明らかになった。

意味・機能の面から見ると、モンゴル語の *yum* は「当該命題は、述べられている事柄・行為の成り行きの説明である、あるいは当該命題は先行文脈の説明であることを示す標識」であり、「説明」を表す点においては日本語の「のだ」と類似している。また、モンゴル語の *yum* は、「一般的通念」の説明という点においては、日本語の「ものだ」にも近い。ただし、「のだ」には、「当為的用法」として命令に近い一面があるが、モンゴル語の *yum* にはそのような性質はない。

以上をまとめると、表4のとおりになる。

表4 モンゴル語の *yum* と日本語の「のだ」および「ものだ」

	本来的性質・傾向	当為性
<i>yum</i>	+	-
のだ	-	+
ものだ	+	+

※ + 該当機能あり - 該当機能なし

以上、モンゴル語の終助詞 *yum* と日本語の文末形式「だ」、「のだ」などを対照させて、それらの相違点と類似点を明らかにした。今後は、モンゴル語の *yum* 以外の終助詞なども考察し、日本語の終助詞と対照し、両言語の終助詞全体の体系における類似点と相違点を明らかにする必要がある。

略語一覧

* 非文	N noun	Top. topic
? 不自然	NDS noun determining suffix	V verb
_ 語末分かち書き母音	Neg. negative	VFS verb formation suffix
- 接辞境界	NM nominalization marker	VDS verb determining suffix
1,2,3 一、二、三人称	Num. numeral	abl. ablative
A adjective	Ono. onomatopoeia	acc. accusative
AFS adjective formation suffix	POS possessive particle	gen. genitive
Cau. causative	PrT present tense	inst. instructive
Con. conjunction	QP question particle	loc. locative
FP focus particle	Red. reduplication	pl. plural
Int. interjection	Ref. reflexive	sg. singular
InP interrogative proword	SFP Sentence Final Particle	

参考文献

- Čenggeltei (1979) *Odo üy_e-yin monggol xelen-ü jüi. Xöxe-xota : Öbör monggol-un arad-un xeblel-ün xoriy_a.*
- Hangin, J.G. (1968) *Basic course in mongolian.* Bloomington : Indiana university
- Kullman, R. ・D. Cerenpil (1996) *Mongolian Grammar.* Hong kong : Jenco Ltd.
- Street, J. C. (1963) *Khalkha structure.* Bloomington: Indiana university
- 小沢重男 (1978) 『モンゴル語の話』 大学書林
- _____ (1997) 『蒙古語文語文法講義』 大学書林
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版
- _____ ・鈴木泰・野田尚史・矢澤真人(1987) 『ケーススタディ日本語文法』 おうふう社
- 野田春美 (1995) 「モノダとコトダとノダ—名詞性の助動詞の当為的な用法—」 宮島達夫・仁田義雄編 『日本語の類義表現の文法 (上) 単文編』 :253-262 くろしお出版
- _____ (2002) 「説明のモダリティ」宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃共著 『新日本語文法選書4 モダリティ』 :230-260 くろしお出版
- フフバートル・松川節・栗林均編 (1997) 『モンゴル語研修テキスト 3』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 益岡隆志・田窪行則 (1989) 『基礎日本語文法』 くろしお出版
- 向井晋一 (2001) 「モンゴル語の焦点調整形式」 『日本モンゴル学会紀要』 31:69-90

Question particle -kO in Finnish

Haruna Sakata

(PhD student, Tokyo University of Foreign Studies)

Key words: question particle, Finnish, corpus (*Kielipankki*)

0. Introduction

In this paper I will examine the question particle *-kO* in Finnish¹. The question particle *-kO* in Finnish is an enclitic², and as such attaches not only to verb, but also to various word classes, such as noun and adverb. In this study I will examine the appearance and functions of question particle as attaches to the element except for verb, following a frequency-based analysis. I will pose and answer the following two research questions:

- a) What kind of elements can the question particle *-kO* attach to?
- b) What is the function of the question particle in each element?

1. Question particle -kO

Let us begin our discussion with a brief examination of question particle in Finnish³. According to Karlsson (1999: 71), direct questions that can be answered by ‘yes’ or ‘no’ are formed by moving the word being questioned to the beginning of the sentence and adding to it the enclitic particle *-kO*, which almost always follows the initial word of a sentence. For example, (1) bears several different yes/no questions as exemplified in (2) to (5), in each of which *-kO* follows the initial word.

(1) *Pekka saapu-i Turku-un aamu-lla.*
Pekka arrive-P+3SG Turku-ILL morning-ADE

“Pekka arrived at Turku in the morning.”

(2) ***Saapu-i-ko*** *Pekka Turku-un aamu-lla?*
arrive-P+3SG-QP Pekka Turku-ILL morning-ADE

“Did Pekka arrive at Turku in the morning?”

¹ Finnish belongs to Baltic-Finnic languages, Finno-Ugric group of Uralic language family, and the basic word order is SVO. It has some phonetic phenomenon like vowel harmony or consonant gradation, and is typologically an agglutinative language. For more details, see Karlsson (1999) etc. I take the orthography for the notation. If there are allomorphs in affixes because of the vowel harmony, *a/ä* will be represented as *A*, *o/ö* as *O*. In this paper, Finnish means the common language, spoken mainly at Helsinki.

² I define the question particle in Finnish as an enclitic. I followed the previous studies, such as Karlsson (1999).

³ The descriptions of previous studies and the glosses of examples are translated by the author. For the abbreviations of glosses, see Abbreviations. In examples question particles are written in boldface.

- (3) ***Pekka-ko*** *saapu-i* *Turku-un* *aamu-lla?*
 Pekka-QP arrive-P+3SG Turku-ILL morning-ADE
 “Was it Pekka who arrived at Turku in the morning?”

- (4) ***Turku-un-ko*** *Pekka* *saapu-i* *aamu-lla?*
 Turku-ILL-QP Pekka arrive-P+3SG morning-ADE
 “Was it at Turku that Pekka arrived in the morning?”

- (5) ***Aamu-lla-ko*** *Pekka* *saapu-i* *Turku-un?*
 morning-ADE-QP Pekka arrive-P+3SG Turku-ILL
 “Was it in the morning that Pekka arrived at Turku?”

(Karlsson 1999: 71)

As we see above, the question particle in Finnish can attach to the element except for verb. Besides, Karlsson (1999: 71-72) claims that if the question particle attaches to an element other than a verb, it indicates that the element in question is emphasized, as is shown below.

- (6) ***Ruotsi-ssa-ko*** *Kalle* *on?*
 Sweden-INE-QP Kalle COP+3SG
 “Is Kalle in SWEDEN?” (capital letters indicating emphasis)

- (7) ***Presidenti-ksi-kö*** *Koivisto* *valit-t-i-in?*
 President-TRA-QP Koivisto select-PASS-P-3SG
 “Was Koivisto elected PRESIDENT?”

(Karlsson 1999: 72)

However, the element to which the question particle attaches is not always emphasized. According to Hakulinen et al. (2004: 1593), when the question particle attaches to adverbs such as *kauan* “for a long time”, *paljon* “many” etc., it serves as interrogative adverbials such as “how long/ how many (much)”, which are otherwise encoded by a combination of the adverbs in question and *kuinka* “how”, as in *kuinka kauan* or *kuinka paljon*. The examples are listed below:

- (8) ***Kauan-ko*** *usko-t* *aika-a* *kulu-va-n*
 long time-QP believe-2SG time-PAR pass-PR.PART-GEN
kuohu-n *laantumise-en?*
 bubble-GEN calm-ILL

“How long do you think it takes before calming down?”

(Hakulinen et al. 2004: 1593)

Though descriptive grammars of Finnish such as Ogishima (1992) etc., do not refer to possibility where the question particle attaches to the interrogative pronoun like *mikä* “what”, *kuka* “who” etc., Hakulinen et al. (2004: 1591) reports that a question particle *-kOhAn*, consisting of *-kO* followed by an emphatic particle *-hAn*, attaches to the interrogative pronoun. In that case, it indicates the same meaning as the form *-hAn* only. In addition, as is shown in (10) below, *-kOhAn* may alternate with *-kAhAn*.

(9) *Mitä-kö-hän* *Mikko* *nykyään* *puuha-a?*
 what+PAR-QP-PC Mikko recently work-3SG

“What does Mikko work recently?”

(Hakulinen et al. 2004: 1591, partly changed by the author)

(10) *Miksi-kä-hän* *tämä-n* *ohjelma-n* *lähetys* *lopete-tt-i-in?*
 what+TRA-QP-PC this-GEN programme-GEN broadcast finish-PASS-P-3SG

“Why was the broadcast of this programme finished?”

(Hakulinen et al. 2004: 1591)

Moreover, according to Hakulinen et al. (2004: 1600), the question particle can attach to the interrogative pronoun without the *-hAn* support. In that case, this construction tends to be followed by a rhetorical answer rather than a response to the literal interrogative reading.

(11) *Miksi-kö* *harrasta-mme* *saappaanheitto-a?*
 what+TRA-QP be interested-1PL throwing boots-PAR

Tämä on niin hullu laji!
 this COP+3SG so foolish kind

“Why are we interested in throwing boots? This is so foolish!”

(Hakulinen et al. 2004: 1600)

2. Method of research

My database in this study is a corpus called *Kielipankki*, which Finnish IT center for science has released on the Internet. *Kielipankki* contains a huge amount of the data of articles such as daily newspapers, weekly papers (include local papers), and organs of political party. It contains about 185,000,000 words in total. As the primary data of this

study, I used articles of *Iltalehti* in 1996 (henceforth IL1996) and *Aamulehti* in 1995 (henceforth AL1995). Both *Iltalehti* and *Aamulehti* are daily newspapers issued at Helsinki. IL1996 contains about 960,000 words and 2,928 articles in total, while AL1995 contains about 3,830,000 words and 13,980 articles. First, to grasp roughly to which kind of elements the question particle can attach, I retrieved and extracted the examples of question particle from IL1996 as a preparatory research. Second, I extracted the examples of question particle from AL1995, except for the examples that it attaches to the verb. These examples include the indirect questions.

The elements that carry a question particle were classified by the part of speech. The criterion of judging part of speech is based on Ogishima (2000). The verbs include the plain verb, the copulative verb, and the negative verb⁴.

3. Analyses

First, I will show the number of examples which carry the question particle in IL1996. In this data, there were 1,260 examples which carry the question particle. Below is a table that indicates the number of examples classified by the part of speech. The number written in brackets indicates the proportion against the total number (the unit is percent, and the number is rounded off to the first decimal place).

Table 1. The elements which carry the question particle in IL1996

Part of speech		Examples	Total
Verb	Plain verb	664 (52.7)	1189 (94.4)
	Copulative verb	396 (31.4)	
	Negative verb	129 (10.3)	
Pronoun	Indefinite pronoun	13 (1.0)	34 (2.7)
	Personal pronoun	8 (0.6)	
	Demonstrative pronoun	7 (0.6)	
	Interrogative pronoun	6 (0.5)	
Adverb			20 (1.6)
Noun			9 (0.7)
Conjunction			7 (0.5)
Postposition			1 (0.1)
Total			1260 (100.0)

As we see above, the question particle can attach mostly to the verb. This is followed

⁴ In case of the negative expression in Finnish, the negative word in principle inflects by the person and the number of the main verb, and the latter loses the inflection. The negative word in Finnish therefore is called the negative verb.

by the pronoun (especially the indefinite pronoun) and the adverb.

Second, I will show the number of examples in AL1995 to give a detailed analysis of the other parts of speech than the verb. In AL1995, there were 390 examples in which the elements except for the verb carry the question particle. Below is a table that indicates the number of examples. As I do not consider the examples of verb here, I will not show the number of verbs below.

Table 2. The elements except for the verb which carry the question particle in AL1995

Part of speech		Examples	Total
Adverb			192 (49.2)
Pronoun	Indefinite pronoun	60 (15.4)	113 (29.0)
	Interrogative pronoun	22 (5.6)	
	Demonstrative pronoun	21 (5.4)	
	Personal pronoun	10 (2.6)	
Noun			54 (13.9)
Conjunction			22 (5.6)
Adjective			7 (1.8)
Postposition			2 (0.5)
Total			390 (100.0)

Although there is a slight distributional difference between IL1996 and AL1995, we can say that the adverb and the indefinite pronoun are the majorities, except for the verb. I will describe the result of analyses about each part of speech below.

3.1. Adverb

The largest number was the examples⁵ of adverb (192 examples). As we saw in Hakulinen et al. (2004: 1593), the question particle is likely to attach to *kauan* “for a long time” and *paljon* “many”, and these examples may be the idiomatic expressions. Besides, there were also quite a few examples in which the question particle attached to the adverb *jo* “already” like (14), and these three types occupied the majority of the attested examples of *-kO* as attaching to adverb.

- (12) *Kauan-ko* *ole-t* *ol-lut* *mukana?*
 long time-QP COP-2SG COP-PERF together
 “How long have you been together?”

⁵ On the references of examples, the left side of slash mark is the name of data, and the right side is the code of articles which contain the example.

(AL1995/417926)

- (13) *Paljon-ko se maksa-a?*
 many-QP it cost-3SG
 “How much is it?”

(AL1995/412281)

- (14) *Jo-ko sinä nyt tul-i-t?*
 already-QP you now come-P-2SG
 “Did you already come?”

(AL1995/415465)

When the question particle attaches to *jo*, it seems to encode interrogative as well as emphatic meaning. This distinguishes *jo* from the other two, i.e. *kauan* and *paljon*, where the question particle seems to form the question word.

3.2. Pronoun

Pronouns occupied the second largest portion of the total examples of *-kO* (113 examples). The indefinite pronoun was most frequently observed, where the question particle attached to *moni* “many people (things)” or its inflected forms. The form *moni* + the question particle may also be the idiomatic expression. The following (15) is an example of it:

- (15) *Mon-ta-ko kirjasto-a on Tamperee-lla?*
 many-PAR-QP library-PAR COP+3SG Tampere-ADE
 “How many libraries are there in Tampere?”

(AL1995/421109)

In the examples of the interrogative pronoun (22 examples), there were four occurrence where the form *-kOhAn* appeared, and in the rest, only the question particle attached to the interrogative pronoun. As we saw in Hakulinen et al. (2004: 1600), there was a sentence that could be the answer soon after the question sentence in eighteen examples, such as (17).

- (16) *Miksi-kö-hän tutkija-t e-ivät ole ol-leet*
 what+TRA-QP-PC researcher-PL NEG-3PL COP COP-PERF
kiinnostu-ne-i-ta?
 be interested-P.PART-PL-PAR

“Why the researchers had not been interested in?”

(AL1995/414219)

- (17) *Mitä-kö* *siveyslaki-a?* *Se* *on* *latinankielinen*
 what+PAR-QP law of morality-PAR it COP+3SG latin
pronssitaulu, *jo-lle* *on* *raapuste-ttu* *vanh-in*
 board in bronze REL-ALL COP+3SG scrawl-PASS.P.PART old-SUP
säily-nyt *senaati-n* *päätös.*
 conserve-PERF the Senate-GEN decision

“What is the law of morality? It is the oldest decision of the Senate, which was scrawled on the board in bronze in latin.”

(AL1995/421529)

In the examples of the demonstrative pronoun, it has inflected by the case in fifteen examples of 21, like (19).

- (18) *Nämä-kö* *ovat* *valtti-mme* *kansainvälise-ssä* *kilpailu-ssa?*
 this+PL-QP COP+3PL trump-Px.1PL international-INE competition-INE

“Is it these which are our trumps on the international competition?”

(AL1995/410504)

- (19) *Tä-hän-kö* *men-nä-än?*
 this-ILL-QP go-PASS.PR-3SG

“Is it here where we go?”

(AL1995/417057)

The following is an example of the personal pronoun:

- (20) *Me-kö* *e-mme* *muka* *osaa* *hoitaa* *mets-i-ä-mme?*
 we-QP NEG-1PL probably can take care forest-PL-PAR-Px.1PL

“Is it we who can’t probably take care of our forests?”

(AL1995/419224)

It is noted that when a personal pronoun was marked by *-kO*, that clause tended not to contain the verb (seven examples of the total 10). In these seven examples, the copulative verb between the subject and the complement was abbreviated in five examples, such as (21). Moreover, in these five examples there was the first person pronoun, so these may not be purely the question, but the expression that expresses

some ironic nuance.

(21) *Mitä, minä-kö muka syllinen?*

what+PAR I-QP probably guilty

“What, is it me who is probably guilty?”

(AL1995/415283)

3.3. Noun

It is noted that when a noun was marked by *-kO*, that clause tended not to contain the verb (thirty eight examples of the total fifty four), such as (23). However, these examples include many one-word sentences, in which there is only the noun with the question particle. Some verbless sentences in which there is not only the noun are the headlines of articles.

(22) *Virkamiehe-t-kö ve-i-vät valta-a?*

officer-PL-QP take-P-3PL authority-PAR

“Was it the officers who took the authority?”

(AL1995/421595)

(23) *Sakko-ja-ko valotto-mi-lle pyöräilijö-i-lle?*

fine-PAR-QP unlit-PL-ALL bicyclist-PL-ALL

“The fine against the unlit bicyclists?” (a headline of article)

(AL1995/416753)

Besides, as is illustrated below, there are a few exceptional cases which go against the previous studies’ claim that “the word being questioned is moved to the beginning of the sentence” (Karlsson 1999: 71), That is, two examples involved a construction where the noun followed by the question particle was not on the beginning of sentence.

(24) *Talvisoda-n paisu-neen budjeti-n-ko takia?*

war in winter-GEN augment-P.PART+GEN budget-GEN-QP for

“Was it because of the budget that the war in winter augmented?”

(AL1995/410541)

(25) *Oikein märkä imaisu poske-t lommo-lla-ko?*

really damp air cheek-PL pit-ADE-QP

“Was it really the pit of cheek where the damp air came to?”

(AL1995/413513)

3.4. Other parts of speech

In this section I will describe about the conjunction, the adjective, and the postposition. First, I will show the examples of the conjunction below.

- (26) *Että-kö* *saksalaise-t* *tilaa-vat* *tällais-ta?*
 that-QP German-PL order-3PL like this-PAR
 “Do the Germans order like this?”

(AL1995/413897)

- (27) (...) *rakasta-a-ko* *vai-ko* *ei.*
 love-3SG-QP or-QP NEG+3SG
 “Does s/he love, or not?”

(AL1995/418025)

In case of the conjunction, there were only two forms above; *että* “that” and *vai* “or”. *vai* occupied the majority (nineteen examples). The form *ettäkö* may emphasize the following content, and the form *vaiko* may emphasize the opposite contents which exist before and after it. The latter form is likely to emphasize two opposite contents especially on the headline of article, like (28).

- (28) *Natsi* *vai-ko* *populisti*
 the Nazis or-QP populist
 “The Nazis or the populist?” (a headline of article)

(AL1995/411986)

Since there were not so many examples of the adjective (7 examples), it cannot be analyzed in detail. The only thing that I note here is that there were three examples that had no verbs.

- (29) *Vai* *oma-ko* *korva-ni* *pettä-ä?*
 or own-QP ear+PL-Px.1SG deceive-3SG
 “Or is it my own ears that deceive?”

(AL1995/418296)

- (30) *Toinen-ko* *kissa?*
 another-QP cat
 “Another cat?”

(AL1995/419806)

I confirmed that the question particle could attach to the postposition, but there were only 2 examples in AL1995. Therefore I also retrieved from articles of *Helsingin Sanomat* (the biggest daily paper in Finland, issued at Helsinki) in 1995 (about 22,060,000 words, 102,763 articles; henceforth HS1995). Consequently, there were five examples in which the question particle attached to the postposition. The example (31) below is extracted from AL1995, and (32) is from HS1995.

(31) *Hoito-a vastaan-ko -- mutta miksi ihmee-ssä?*
 nursing-PAR against-QP but what+TRA surprise-INE
 “Is it against nursing? -- but why in the surprise?”

(AL1995/421486)

(32) *Miten-kö-hän sie-ltä sitten on tarkoitus poistua, jalkakäytävä-n kautta-ko?*
 how-QP-PC it-ABL then COP+3SG
 plan leave sidewalk-GEN across-QP
 “Then, how does the plan leave from there? Is it across the sidewalk?”

(HS1995/672390)

At the present moment, I have not seen any description concerned with the fact that the question particle attaches to the postposition, but such a case can be seen from the data.

4. Conclusion

As is shown below, I have confirmed three functions of *-kO* as attaches to parts of speech other than verb. *-kO* in such environments serves to:

- A) express the question
- B) emphasize the part of speech that carries it
- C) make the idiom by following the adverb or the indefinite pronoun

The function A) is obviously the primary function of question particle, but in case that it attaches to parts of speech except for the verb, B) can also appear. Moreover, C) can appear when it attaches to the adverb or the indefinite pronoun, and this function has not seen when it attaches to the verb. However, note that *-kO* can have these three functions at a time, in such a way that these are not independent but interrelated. Although these functions have been observed in previous studies, this study has

revealed that the question particle can attach to the postposition. We can say that the question particle in Finnish shows very interesting distribution.

Abbreviations

-: Affix boundary	PASS: Passive
+: Plural grammatical category in one element	PC: Particle (except for question particle)
1, 2, 3: First, second, third person	PERF: Perfect aspect
ABL: Ablative case	PL: Plural
ADE: Adessive case	P.PART: Past participle
ALL: Allative case	PR: Present tense
COP: Copulative verb	PR.PART: Present participle
GEN: Genitive case	Px: Possessive suffix
ILL: Illative case	QP: Question particle
INE: Inessive case	REL: Relative pronoun
NEG: Negative verb	SG: Single
P: Past tense	SUP: Superlative
PAR: Partitive case	TRA: Translative case

References

- Hakulinen, Auli, Maria Vilkuna, Riitta Korhonen, Vesa Koivisto, Tarja Riitta Heinonen, Irja Alho (2004) *Iso suomen kielioppi*. Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.
- Karlsson, Fred (1999) *Finnish: an essential grammar*. London: Routledge.
- Ogishima, Takashi (1992) *Kiso Finrando-go Bunpoo*. Tokyo: Daigakushorin.
- _____ (2000) *Finrando-go Nihon-go Shoo-jiten*. Tokyo: Daigakushorin.

The corpus

Kielipankki (released on the website of *Finnish IT center for science*)

URL: <http://www.csc.fi/kielipankki/>

フィンランド語の疑問小詞 -kO
坂田晴奈
東京外国語大学大学院博士後期課程

要旨

フィンランド語の疑問小詞 -kO は動詞だけでなく、様々な要素につきうる。本研究では動詞以外の要素における疑問小詞の出現について分析することを目的とした。本研究のリソースは文語コーパスである。コーパスは、現地の新聞記事などが収録されている Kielipankki である。

コーパスからの用例で、疑問小詞を伴う動詞以外の要素は頻度順に、副詞、不定代名詞、疑問代名詞、指示代名詞、人称代名詞、名詞、接続詞、形容詞、後置詞であった。動詞以外の品詞に後続する疑問小詞の機能は、以下の3つが確認された。

- a) 疑問を表す機能
- b) 付属する品詞を強調する機能
- c) 副詞に後続して慣用表現を作る機能

ただし、これらは同時に存在しうるものである。他に、後置詞のような品詞の語にも疑問小詞が後続しうることも新たに確認された。

Irabu Phonology

Michinori Shimoji

(Department of Linguistics, the Australian National University)

Key words: Irabu, Ryukyuan, phonology, phonological word, clitic, rhythm

0. Introduction

This paper gives a comprehensive description of the phonological system of Irabu (with an exclusive focus on the Nagahama dialect), a sub-variety of Miyako Ryukyuan, a Southern Ryukyuan language of the Japonic language group¹.

1. Irabu phonology: overview

1.1. Typological summary

Irabu phonology is characterised by rather complex syllable structures which are dependent on their position in phonological words (Section 2, 3, 4, and 5), gemination and length contrasts sensitive to the notion mora (Section 6), a pitch accent system (Section 7), and foot-based phrase-level prosody (Section 8). Throughout these sections, especially in Sections 2, 7, and 8, we will note that Irabu is a language where a grammatically defined word and a phonologically defined word do not always define the same unit, in such a way that a clitic (an independent grammatical word) may form a single phonological word with another grammatical word, and polymoraic affixes are independent phonological words though they are internal components of a grammatical word. Section 9 deals with several phonological processes which are effectively described by referring to the underlying (morphemic/morphophonemic) and the surface ('classical' or taxonomic phonemic) levels of the phonological system.

This paper employs the following symbols for different representational levels:

- Square brackets '[]': phonetic representation
- Slashes '/ /': surface phonemic representation
- Double slashes '// //' underlying phonemic representation (where necessary)

¹ I am grateful to Malcolm Ross, Thomas Pellard, Yuka Hayashi, and Yukinori Takubo, for their helpful comments on earlier versions of this paper. Also my deep thanks go to those scholars present at the Second Workshop on Ryukyuan languages held at Kyoto University, especially to Masayuki Onishi, Shigehisa Karimata, Shinji Ogawa, and Shuntaro Chida, for their insightful comments on the notion word, which stimulated my discussion in Section 8 and in ADDENDA.

1.2. Classes of phonemes

Irabu phonemes can be divided into three classes based on their distribution in larger phonological structures and their behaviours in (morpho-)phonological processes: **Consonants**, **Glides**, and **Vowels**.

1.2.1. Consonants

Table 1 below shows the inventory of consonant phonemes. As is shown below, there are three phonemic places of articulation (labial, alveolar, velar(/glottal)) and three phonemic manners of articulation (stop, fricative, resonant).

Table 1. Inventory of consonant phonemes

		Labial	Alveolar	Velar (/Glottal)
Stops	vl	p	t	k
	vd	b	d	g
Fricatives	vl	f	s ts	(h)
	vd		dz	
Resonants (short/long)	nasal	m/m:	n/n:	
	approx	ʋ/v:	ʒ/ʒ:	
	lateral		l/l:	

- Stops and fricatives have voice opposition: (voiceless: vl) vs. (voiced: vd).
- /ts/ and /dz/ are phonemically classified as fricatives because of their phonotactic and morphophonemic behaviours, as noted in 5.2.3.
- Resonants may be syllabic mostly in a special type of syllable, or the presyllable (see 3.1), and may be short or long in this structural position.
- The phonetic symbol [ʒ], the major allophone of /ʒ/, is meant to represent a [z] with a less friction, or a [z]-like approximant.

1.2.2. Glides

Glide phonemes consist of /w/ and /j/. /j/ plays a major role in the syllable onset G slot. /w/ is peripheral in Irabu phonology, occurring syllable-initially only in the syllable /wa(V)/ (e.g. /wai.si/ [waiʃi] ‘onomatopaeic expression’, /ni.wa:/ [niwa:] ‘garden’), and only occasionally, between the stops /k/ and /g/ and a vowel, e.g. /kwa:.si/ [kʷa:si] ‘snack’. The complex onset CG (e.g. /pj/ as in /pja:/ (CGVV) [pʲa:] ‘early’) is phonetically realised as a single palatalised phone (e.g. [pʲ]) rather than a consonant plus glide phone ([pj]). The phonological justification for assuming a

complex onset CG rather than a single palatal consonant is noted in 5.3.

1.2.3. Vowels

The inventory of vowel phonemes of Irabu is given in **Table 2** below.

Table 2. Inventory of vowel phonemes (short/long)

i/i:	ī/ī:	u/u:
(e)/((e:))	(o)/((o:))	
	a/a:	

- short mid vowels are rare, and long mid vowels rarer still.
- /i/ and /ī:/ only combine with the fricative onset; short /ī/ is underlyingly absent, and is predictably inserted as an epenthetic segment to break up the prohibited phonotactic pattern of phonological word (e.g. //sta// > /sita/ [sita] ‘tongue’; //p̄s̄// > /p̄s̄i/ [p̄s̄i] ‘star’). See 9.2.

1.3. Minimal or quasi-minimal contrasts

Here I list minimal or quasi-minimal pairs to justify the setting of the phonemes. Long segments are collectively noted in 6.3.1.

1.3.1. Consonants (stops, fricatives, and resonants)

- /p/ vs. /t/ vs. /k/: /p̄s̄i/ [p̄s̄i] ‘star’, /t̄s̄i/ [t̄s̄i] ‘year’, /k̄s̄i/ [k̄s̄i] ‘belly’
- /p/ vs. /b/: /p̄v̄:/ [p̄v̄:] ‘spike’, /b̄v̄:/ [b̄v̄:] ‘thread’
- /t/ vs. /d/: /t̄s̄i/ [t̄s̄i] ‘year’, /d̄s̄i/ [d̄s̄i] ‘friend’
- /k/ vs. /g/: /k̄v̄:/ [k̄v̄:] ‘powder’, /ḡv̄:/ [ḡv̄:] ‘cave’
- /f/ vs. /s/ vs. /dz/: /f̄aʋ/ [f̄aʋ] ‘eat’, /s̄aʋ/ [s̄aʋ] ‘pole’, /dz̄aʋ/ [dz̄aʋ] ‘gate’
- /ts/ vs. /dz/: /t̄s̄i:/ [t̄s̄i:] ‘breast’, /dz̄i:/ [dz̄i:] ‘ground’
- /p/ vs. /h/: /pī|a/ [pī|a] ‘tailcutter’, /hī|a/ [çī|a] ‘hey’
- /m/ vs. /n/: /kam/ [kam] ‘god’, /kan/ [kaŋ] ‘crab’
- /v/ vs. /z̄/ vs. /ʃ̄/: /p̄aʋ/ [p̄aʋ] ‘snake’, /p̄aʃ̄/ [p̄aʃ̄] ‘fly’, /p̄a|/ [p̄a|] ‘needle’

1.3.2. Glides

- /j/ vs. /w/: /ja:/ [ja:] ‘house’, /wa:/ [wa:] ‘pig’

1.3.3. Vowels

- /a/ vs. /i/ vs. /u/: /pa|/ [pa|] ‘needle’, /pi|/ [pi|] ‘garlic’, /p̄v̄|/ [p̄v̄|] ‘dig’
- /i/ vs. /e/: /=i/ [i] (tag), /=e/ [e] (interrogative)
- /u/ vs. /o/: /k̄uma/ [k̄uma] ‘here’, /k̄oma/ [k̄oma] ‘spinning top’ (< Japanese)
- /a/ vs. /ī/: /sata/ [sata] ‘sugar’, /sita/ [sita] ‘tongue’

2. Segmentation

In describing Irabu phonology, packaging a string of phonemes into a phonologically defined unit, or a phonological word, is the most important procedure to present segmental and supersegmental phenomena. Also, it is very important in describing Irabu to recognise both phonological word and grammatical word (see below), since the two notions do not always define the same unit in Irabu, and the mismatch is sometimes conspicuous, as will be demonstrated in Section 8.

Phonological word is a word in terms of segmental and supersegmental delimitation. The segmental characterisation of the phonological word is dealt with in Sections 3 to 6, and the supersegmental characterisation in Sections 7 and 8.

Grammatical word is a word in terms of morphological delimitation. Grammatical words are units of parts-of-speech, and Irabu has such grammatical words as nominals, verbs, adverbs, post-nominal/post-verb particles, conjunctions, and interjections. Note that this study presents example sentences by inserting spaces between each grammatical word (abbreviations for inter-linear glosses in example sentences are listed at the end of this paper):

a. mata hi|a ma:sʊ-nagi =ʊ mai siti-simi-t-ta| do:i.
 and hey salt -DUB =ACC too throw -CAUS -NEG -PAST EMP
 CNJ INTJ Nominal Pn.PART Pn.PART Verb Pv.PART
 ‘And, what I tell you, (they) didn’t let us waste salt and so on.’

b. apa|agi-midom =nʊ =dʊ jʊ: ʊ-ta-i-ba =i,
 beautiful -woman =NOM =FOC very exist -PAST -STM -CVB:CSL =TAG
 Nominal Pn.PART Pn.PART Adverb Verb Pv.PART
 ‘Because there were many beautiful women, you know,’

Shimoji (*in.prep.*) lists the following criteria for defining grammatical word in Irabu, following Dixon and Aikhenvald’s (2002: 19) two criteria for grammatical word:

- A grammatical word consists of a number of grammatical elements which:
- (A) always occur together, rather than scattering through the clause.
 - (B) occur in a fixed order.

In Irabu a grammatical word must have an obligatory component, or *base* (nominal base: base_N, verb base: base_V, adverb base: base_{ADV}, conjunction base: base_{CNJ}, interjection base: base_{INTJ}, and particle base: base_{PART}). The base may be a single root or a class-changed stem, or a compound stem (as in the nominal

/apa]agi-midom/ ‘beautiful women’ in the **b** example above). The major word classes, nominals and verbs, can also carry various optional components unique to either base, or *postbase*². The postbase consists of various derivational/inflectional affixes (thus in the **a** example above, the verb consists of the base /siti/ ‘throw; waste’ and its postbase suffixes /-simi/ (causative), /-t/ (negative), and /-ta]/ (past)). On the other hand, the minor word classes such as adverbs and particles have base only, and syntactic criteria distinguish among them.

As defined in **(A)** and **(B)** above, a grammatical word must have a coherent and rigid internal structure if it is morphologically complex, where the order of the base and the postbase and of each postbase suffix is fixed, and cannot be changed otherwise. For example, a nominal word must consist of base_N and optionally the postbase suffixes (-DIMinutive)(-PLural)(-DUBiative), and no other elements than defined here can intervene (in the light of **(A)**), or no other ordering of components (relative order of base and postbase, or within postbase suffixes) is allowed (in the light of **(B)**).

All nominal roots, some verb stems (e.g. participle stems; 9.4.1), all adverb stems, all polymoraic particles (e.g. /mai/ ‘too’ and /do:i/ (emphasis) above), etc., are separate phonological words. As will be noted in 8.2 and in 9.4 below, Irabu is such a language where most polymoraic affixes (e.g. /-nagi/ (dubiative), /-simi/ (causative), and /-ta]/ (past) in the example above) or compound stems (/apa]agi/ ‘beautiful’ and /midom/ ‘woman’) commence phonological words by themselves. Thus a single grammatical word may consist of several phonological words.

3. The structure of the phonological word

In this section I give an overview of the structure of phonological word. Note that the generalisations here apply to monomorphemic phonological words, but mostly apply to morphologically complex phonological words as well. Some divergences are noted in Shimoji (*in.prep.*).

3.1. Word template

For the descriptive purposes it is effective to divide the structure of phonological words into three portions, i.e. presyllable, initial syllable, and non-initial syllable(s):

Phonological word template:

(presyllable +) initial syllable (+ non-initial syllable_{1...n})

² Irabu is a suffixing language, with virtually no prefixes. Thus it is safe to say that the internal structure of a grammatical word is schematised as base(+postbase).

Presyllable is meant to represent a special type of syllable in terms of phonotactics and structure, which deserves a different descriptive treatment than more regular syllables (**initial syllable** and **non-initial syllable**).

The following generalisations, followed by exceptions to them, obtain as to the structure of the phonological word:

(A) a presyllable is a syllabic resonant:

(R_i)R_i e.g. /m.ta/ [m̩ta] ‘mud’; /m̩.ta/ [m̩:ta] ‘k.o.tree’

Presyllables are mostly found in roots, and are found in a very limited number of particles (e.g. /n.kai/ (allative case)), but not found in affixes.

(B) an initial syllable has an optional onset and coda:

((C_i) C_i) (G) V₁ (V₂) (C_{coda}) e.g. /ssam/ [ssam] ‘lice’ (CCVC)

The CC cluster must be a geminate voiceless fricative or resonant.

(C) a non-initial syllable has an obligatory onset and optional coda:

C (G) V₁ (V₂) (C_{coda}) e.g. /jv̩:.lja/ [jv̩:r̩a] ‘season’ (GVV.CGV)

or **G V₁ (V₂) (C_{coda})** e.g. /majv̩/ [majv̩] ‘cat’ (CV.GV)

(D) a presyllable + initial syllable produces consonant clusters R.C (e.g. /n.dza/ [ŋdza] ‘where’), RR.C (e.g. /n̩:.di/ [ŋ̩:di] ‘Yes’), or in very rare cases R.CC (e.g. /v̩.tstsa/ [v̩ttsa] ‘squirrel’), but not RR.CC.

(E) in polysyllabic words, the structure of a final syllable is as for a non-initial syllable as in (C), i.e. with an obligatory onset and optional coda.

(F) the coda of a final syllable is always a single resonant, and all resonants are attested in this position:

e.g. /pa.sam/ [pasam] ‘sissors’ /sa.kv̩n/ [sakov̩ŋ] ‘soap’

/i|av/ [irav] ‘Irabu’ /paz̩/ [paz̩] ‘fly’

/ka.na.ma|/ [kanama|] ‘head’

(G) there are occasions when the nucleus of a regular syllable is filled by an alveolar non-nasal resonant /ɹ(:)/ or /l(:)/. The onset is always a bilabial stop or nasal /p/, /b/ and /m/, e.g. /pɹ̩:/ [pɹ̩:] ‘day’, /pɹ̩.tv̩/ [pɹ̩tv̩] ‘man’, /na.b|:/ [nab|:] ‘slippery’. See 3.2.

(H) Exceptions

- (H-1)** though an initial syllable is obligatory by definition, in rare cases presyllable-only words do exist (e.g. /m:/ [m:] ‘potato’).
- (H-2)** there are very rare instances of /V:.V/ in roots, i.e. the onset of the non-initial syllable is exceptionally missing, e.g. /a:i/ [a:i] ‘No’ and /jv:i/ [jv:i] ‘preparation’. Such instances always involve /a:i/ or /v:i/, and are mostly found in interjections and in loans.
- (H-3)** /t/ may be exceptionally geminated in initial clusters, though there are very few attested examples: /ttja:/ [ʔttʰa:] ‘then’; /ttiga:/ [ʔttiga:] ‘then’.

3.2. Consonant carrying onset

Alveolar non-nasal resonants /z(:)/ and /l(:)/ may appear in V slots of initial syllables and of non-initial syllables. The onset must be a labial, and mostly the labial stops /p/ and /b/, and only in rare cases the labial nasal /m/. This indicates that there is a tendency towards maximising the feature difference between the onset phoneme (labial and stop) and the nucleus phoneme (alveolar and resonant).

/z(:)/ Initial syllable

- /pʒ.tʊ/ [pʒtʊ] ‘man’ CV.CV
- /pʒ:/ [pʒ:] ‘day’ CVV
- /bʒ.da/ [bʒda] ‘low’ CV.CV
- /bʒ:/ [bʒ:] ‘sit’ CVV
- /mʒ:/ [mʒ:] ‘flesh’ CVV

Non-initial syllable

- /sʊ.kʊ.bʒ/ [sʊkʊbʒ] ‘belt’ CV.CV.CV
- /ka.bʒ:/ [kabʒ:] ‘paper’ CV.CVV

/l(:)/ Initial syllable

- /p]:.ma/ [p]:]ma] ‘daytime’ CVV.CV
- /b]b]:/ [b]b]:] ‘alocasia odora’ CV.CVV
- /m]:.na/ [m]:]na] ‘green chive’ CVV.CV

Non-initial syllable

- /na.b]:/ [nab]:] ‘slippery’ CV.CVV

The tendency towards maximising feature difference also holds in presyllable plus initial syllable non-geminate clusters (such as /m.ta/ [m̥ta] ‘mud’ R.CV), where the cluster involves labial nasal resonant plus alveolar non-resonant (see 4.5.3)

One strong motivation for analysing the /z(:)/ and /l(:)/ here as resonant consonants exceptionally filling V slots rather than as vowels is that they are morphophonemically treated as consonants, as will be noted in 9.1.

3.3. Heavy structures

Monosyllables of the structure $((C_i)C_i)(G)V_1V_2C_{coda}$ are rare in roots: among the attested words are /aʊ/ [aʊ] ‘still’, /sa:/ [sa:] ‘take’, /da:v/ [da:v] ‘tool’, etc. The ‘fully-loaded’ monosyllable $C_iC_iGV_1V_2C_{coda}$ is not attested in the monomorphemic phonological word. The codaless but otherwise fully-loaded monosyllable structure is attested though scarce: $C_iC_iGV_1V_2$ (e.g. /ttja:/ [ʔttja:] ‘then’).

3.4. Examples of word structures

In this section I give some illustrative examples of the word structure step by step. The focus is first on the initial syllable (3.4.1 and 3.4.2), then non-initial syllable (3.4.3), and finally the presyllable (3.4.4 and 3.4.5). The phonotactic details involved in each structural position will be covered in depth in Section 4.

3.4.1. Examples of words with an initial syllable only

Here, an onset consisting of a single C may be filled by a stop (**S**), fricative (**F**), or a resonant (**R**), while an onset of two consonants CC is filled by identical segments, either a fricative or a resonant (exceptionally stop /tt/). The coda is a resonant.

	#	((C _i)	C _i)	(G)	V ₁	(V ₂)	(C _{coda}) #
		R	R				R
		F	F				
		(S)	S				
/a:/ [a:] ‘foxtail millet’					a	a	
/ai/ [ai] ‘like that’					a	i	
/ja:/ [ja:] ‘house’				j	a	a	
/am/ [am] ‘net’					a		m
/jam/ [jam] ‘disease’				j	a		m
/kam/ [kam] ‘god’			k		a		m
/maz̥/ [maz̥] ‘rice’			m		a		z̥
/aʊ/ [aʊ] ‘still’					a	ʊ	l
/pja/ [pja] ‘leave’			p	j	a		l
/ffa/ [ffa] ‘child’	f	f			a		
/ssam/ [ssam] ‘lice’	s	s			a		m
/tstsi/ [ʔttʃi] ‘pipe’	ts	ts			i		l
/ttja:/ [ʔttja:] ‘then’	t	t		j	a	a	
/mmja/ [mmja] ‘well’	m	m		j	a		
/vva/ [vva] ‘you’	v	v			a		
/z̥za/ [z̥za] ‘father’	z̥	z̥			a		

/[[a/ [[[[a] ‘placenta’	l	l	a	
/pʒ:/ [pʒ:] ‘day’		p	ʒ	ʒ

3.4.2. Examples of words with an initial and a non-initial syllable, showing the structure of the initial syllable

Here, it is noted that the set of consonants which may fill the coda of the word medial position is larger than for the word final coda (cf. 3.4.1), allowing fricatives and stops in addition to resonants. However, a coda fricative or stop must be identical with the onset of the following syllable.

	#	((C _i)C _i)	(G)	V ₁	(V ₂)	(C _{coda})\$	C ₁ ...
		R	R			R	
		F	F			F	
		(S)	S			S	
/an.na/ [anna] ‘mother’				a		n	na
/av.va/ [avva] ‘oil’				a		v	va
/ja.ma/ [jama] ‘mountain’			j	a			ma
/ka.gi/ [kagi] ‘beautiful’		k		a			gi
/ka:.gi/ [ka:gi] ‘smell’		k		a	a		gi
/bat.ta/ [batta] ‘armpit’		b		a		t	ta
/bas.si/ [baʃʃi] ‘forget’		b		a		s	si
/pin.dza/ [pindza] ‘goat’		p		i		n	dza
/ki.v.si/ [kivsi] ‘haze’		k		i		v	si
/mja:.kʊ/ [mʲa:kʊ] ‘Miyako’		m	j	a	a		kʊ
/kjav.dai/ [kʲavdai] ‘brother’		k	j	a		v	dai
/nna.ma/ [nnama] ‘now’	n	n		a			ma
/pʒ.tʊ/ [pʒtʊ] ‘man’		p		ʒ			tʊ

3.4.3. Examples of words with an initial and a non-initial syllable, showing the structure of the non-initial syllable

Here the focus is on the non-initial syllable (of the word final position below). The onset of the non-initial syllable is obligatory (exceptions being mentioned in 3.1 (H-2)), and it must be a single consonant (plus glide) or a single glide.

	\$	C _i (G)	V ₁	(V ₂)	(C _{coda}) #
/mja:.kʊ/ [mʲa:kʊ] ‘Miyako’	mja:	k	ʊ		
/an.na/ [anna] ‘mother’	an	n	a		
/av.va/ [avva] ‘oil’	av	v	a		

/kjav.dai/ [kʲavdai] ‘brother’	kjav	d	a	i	
/jʊ:.lja/ [jʊ:.ɽja] ‘season’	jʊ:	ɭ	j	a	
/tɔn.bjan/ [tɔmbʲaŋ] ‘k.o. vegetable’	tɔn	b	j	a	n
/ta.ja/ [taja] ‘power’	ta		j	a	
/na.bɭ:/ [nabɭ:] ‘slippery’	na	b	ɭ	ɭ	

The /nb/ found in roots, such as /tɔn.bjan/ [tɔmbʲaŋ] ‘k.o. vegetable’ should not be analysed as /mb/, nor as a neutralisation of /n/ and /m/. The /nb/ analysis is preferable in terms of the phonotactic patterns of nasal consonant clusters (see 5.2.4).

3.4.4. Examples of words with a presyllable plus initial syllable

Here, the consonant clusters R.C, RR.C (where the RR is a long resonant phoneme), or in very rare cases R.CC, are attested.

	#	((R _i)	R _i)	\$(C _i)	C _i)	(G)	V ₁	(V ₂)	(C _{coda})#
		R	R	R	R				R
				F	F				
					S				
/m.ta/ [m̩ta] ‘mud’			m		t		a		
/m.sʊ/ [m̩sʊ] ‘miso’			m		s		ʊ		
/m.na/ [m̩na] ‘shellfish’			m		n		a		
/v.ta/ [v̩ta] ‘song’			v		t		a		
/v.tstsa/ [v̩ttsa] ‘squirrel’			v	ts	ts		a		
/n.gja/ [ŋgʲa] ‘spike’			ŋ		g	j	a		
/n.biɭ/ [m̩biɭ] ‘stretch’			n		b		i		ɭ
/n.fi/ [ŋfi] ‘warm’			n		f		i		
/n.kɔm/ [ŋkɔm] ‘strain’			n		k		ʊ		m
/m:ta/ [m̩:ta] ‘k.o. tree’		m	m		t		a		
/n:di/ [ŋ:di] ‘yes’		n	n		d		i		
/n:kʊ/ [ŋ:kʊ] ‘pus’		n	n		k		ʊ		

3.4.5. Examples of words consisting only of a presyllable (a syllabic resonant)

This structure involves a phonological rule where an underlyingly single resonant root is obligatorily lengthened to meet a minimal word requirement for phonological words (see 9.4).

	# R _i	R _i #
/m:/ [m:] ‘potato’ (//m// > /m:/)	m	m
/n:/ [ŋ:] ‘yes’ (//n// > /n:/)	n	n
/v:/ [v:] ‘sell’ (participle stem) (//v// > /v:/)	v	v
/z̄:/ [z̄:] ‘scold’ (participle stem) (//z̄// > /z̄:/)	z̄	z̄
/l̄:/ [l̄:] ‘(the sun) sets’ (participle stem) (//l̄// > /l̄:/)	l̄	l̄

4. Phonotactics

This section describes the phonotactics of monomorphemic phonological words. The phonotactics of morphologically complex phonological words mostly follows what is stated in this section. Some divergences are noted in Shimoji (*in prep.*).

The phonotactics of Irabu words are summarised as follows:

(A) Basic phonotactic schema (S: stops; F: fricatives; R: resonants)

#Presyllable	Initial syllable	Non-initial syllable _{1...n} #			
((R _i) R _i)	((C _i) C _i)(G)V ₁ (V ₂) (C _{coda})	C (G)V ₁ (V ₂)	(C _{coda})...	(C _{coda})	
R R	R R	R	R	R	R
	F F	F	F	F	
	(S) S	S	S	S	

(B) V₁V₂ may be a long vowel or a (mostly rising) diphthong. See 4.1.

(C) the single onset in an initial syllable can be filled by any consonant but /v/, /z̄/, and /l̄/. See 4.2.

(D) initial syllable onset clusters involve geminates only, of any resonants or of fricatives other than /dz/ and /h/ (also /t/ exceptionally). See 4.3.

(E) non-initial cluster, i.e. coda plus onset clusters are **a)** geminates, **b)** partial geminates (homorganic /n/ + C), or **c)** restricted non-geminates. See 4.4.

(F) presyllable plus initial syllable onset clusters are mostly of the type **b)** and **c)** above. See 4.5.

(G) Word initial geminates are more common than geminates across syllable boundaries. See 4.6.

As an initial approximation, it is noted that there is an overwhelming tendency for Irabu consonant clusters to be geminates or partial geminates (involving homorganic /n/ + C) in consonant clusters within/across syllables. This generalisation holds for Miyako Ryukyuan as a whole.

4.1. Long vowels and diphthongs

The table below shows the attested combinations of V₁ and V₂ in monomorphemic phonological words. Diphthongs are mostly rising diphthongs. In rare cases a falling diphthong /iʊ/ (phonetically [jʊ:]) occurs, as a result of what I call ‘v lenition’ (/v/ > /ʊ/; thus /iv/ VC > /iʊ/ VV; see also 4.5).

Table 3: Long vowels and diphthong

	V ₂	/a/	/ʊ/	/i/	/i/	(/e/)	(/o/)
V ₁							
/a/		a:	aʊ	ai			
/ʊ/			ʊ:	ʊi			
/i/			(iʊ)	i:			
/i/					i:		
(/e/)						(e:)	
(/o/)							(o:)

With onset

/ka:/ [ka:] ‘skin’
 /naʊ/ [naʊ] ‘what’
 /kai/ [kai] ‘like that’
 /mʊ:/ [mʊ:] ‘sea weed’
 /kʊi/ [kʊi] ‘voice’
 /kiʊsi/ [kʰʊ:si] ‘haze’ (< /kivsi/ [kivsi])
 /ki:/ [ki:] ‘tree’
 /si:/ [si:] ‘nest’
 Not attested
 /do:/ [do:] (emphatic)

Without onset (initial only)

/a:/ [a:] ‘foxtail millet’
 /aʊ/ [aʊ] ‘blue’
 /ai/ [ai] ‘like that’
 /ʊ:/ [ʊ:] ‘Hare’
 /ʊi/ [ʊi] ‘that’
 Not attested
 /i:/ [i:] ‘stomach’
 None by definition (see 5.1)
 /e:/ [e:] ‘Yest’ (informal)
 /o:/ [o:] ‘Yes’ (formal)

4.2. Single onset of initial and non-initial syllables

All consonants but /v/, /z/, /l/ may appear in the single onset of an initial syllable. All consonants but /v/ and /z/ may appear in the single onset of non-initial syllables.

4.3. Initial syllable onset cluster: geminate

All resonants and fricatives other than /dz/ and /h/ may be geminated. As noted in 3.1 (H-3), /tt/ is also found in a very limited number of roots.

Resonants	Fricatives	Stop: /t/ only; rare
/mmi/ [m̥mi] ‘crowd’	/ffa/ [ffa] ‘child’	/ttja:/ [ʔttʲa:] ‘then’
/nnotsi/ [n̥notsi] ‘life’	/ssø/ [ssø] ‘white’	/ttiga:/ [ʔttiga:] ‘then’
/vva/ [vva] ‘2SG’	/ttsi/ [ʔtʲsi] ‘pipe’	
/z̥z̥v/ [z̥z̥v] ‘fish’		
/[[a/ [[a] ‘placenta’		

4.4. Non-initial cluster

Non-initial clusters, i.e. clusters of coda plus onset across syllable boundaries, are geminates (of any consonant other than voiced stop, voiced fricative, or /h/), partial geminates involving a homorganic nasal, phonemically /n/, plus another consonant (other than resonants), or non-geminates (a resonant plus (mostly) alveolar consonant). Non-geminates are apparently rare in monomorphemic words.

4.4.1. Geminates

Resonants	Fricatives	Stops
/d̥m.ma/ [d̥omma] (onm.)	/maf.fa/ [maffa] ‘pillow’	/ip.pai/ [ippai] ‘many’
/an.na/ [anna] ‘mother’	/ømis.si/ [ømiʃʃi] ‘funny’	/bat.ta/ [batta] ‘armpit’
/av.va/ [avva] ‘oil’	/ats.tsa/ [attsa] ‘over there’	/øk.ka/ [økka] ‘debt’
/tḁz̥.zasi/ [tazzasi] ‘bind’	(/f̥dz.dza/ [fuuddza] ‘whale’)	
/j̥v̥.v/ [j̥v̥v] ‘k.o.fish’		

4.4.2. Partial geminates (homorganic /n/ + C of any place of articulation)

C: Labial	C: Alveolar	C: Velar/glottal
/j̥v̥.n.p̥v̥:/ [j̥v̥:mp̥v̥:] ‘firefly’	/pin.dza/ [pindza] ‘goat’	/min.kv̥/ [miŋkv̥] ‘deaf’

4.4.3. Non-geminates (rare)

/am.di/ [amdi] ‘a fish-carrying bag’ (< /am/ ‘net’ + /di/ ‘?’)
/ki.v.si/ [kivsi] ‘haze’ (~ /ki.v̥si/ [kʲv̥si])
/pḁz̥.gi/ [pḁz̥gi] ‘rash/swelling’
/a[fi/ [a[fiu] ‘walk’ (participle stem)
/v̥.dzi.n/ [v̥d̥ziŋ] ‘early summer season’

4.5. Presyllable plus initial syllable onset

This type of cluster basically follows non-initial clusters in 4.4, except that:

- 1) geminates are very rare, and
- 2) non-geminates are rather common.

With regard to **1)**, the only kind of geminate here is the initial syllable onset of the R.C_iC_i cluster (see 4.5.1. below), and geminates across presyllable and initial syllable (e.g. R_iR_i.C_iV) are not found in monomorphemic words. From the few attested examples of type **1)** a generalisation obtains that the R is a labial resonant, and a geminate CC is alveolar. This combination of labial resonant and alveolar is also true in **2)**: non-geminates here show a clear tendency towards labial (and in particular nasal) resonant plus alveolar consonant.

4.5.1. Geminate (rare): only of the structure R.C_iC_i

/v.tstsa/ [ʋttsa] ‘squirrel’

/m.ssi:/ [m̩ssi:] ‘miso soup’ (< a fossilised compound: //msʋ// ‘miso’ + //si:/ ‘soup’)

4.5.2. Partial geminates (homorganic /n(:)/ + C of any place of articulation)

C: Labial

C: Alveolar

C: Velar/glottal

/n.bi/ [m̩bi] ‘stretch’

/n.si/ [ʒ̥si] ‘north’

/n.kai/ [ŋkai] ‘welcome’

/n.bʋ/ [m̩bʋ] ‘navel’

/n.di/ [ŋ̩di] ‘yes’

/n.kʋ/ [ŋ̩kʋ] ‘pus’

4.5.3. Non-geminates (labial resonant plus alveolar consonant)

Labial: /m/

(/v/: lenition is pervasive)

/m.ta/ [m̩ta] ‘mud’

/v.ta/ [ʋta]~/ʋ.ta/ [ʋta] ‘song’

/m.sʋ/ [m̩sʋ] ‘miso’

/v.si/ [ʋsi]~/ʋ.si/ [ʋsi] ‘rice mortar’

/m.na/ [m̩na] ‘shellfish’

/v.da/ [ʋda]~/ʋ.da/ [ʋda] ‘thick; fat’

/m.ta/ [m̩:ta] ‘a kind of tree’

/m.sa/ [m̩:sa] ‘similar’

/m.na/ [m̩:na] ‘all’

The /v/ lenition (/v/ > /ʋ/) is pervasive in non-geminates here, especially among the middle-aged/younger speakers (age 50-60 or younger). The result is a substantial rearrangement of syllable structures: the cluster R.CV is broken down to V.CV (e.g. /v.ta/ R.CV > /ʋ.ta/ V.CV), where the presyllable R resolves into the initial syllable V. It is an emerging phonotactic pattern, then, that in the presyllable plus initial onset clusters, the presyllable must be a nasal (short /m/ and /n/ or long /m:/ and

/n:/), excluding the possibility of the other labial resonant, i.e. /v/.

4.6. Frequency-based account of root structures

Here it is helpful to give a statistical account of Irabu phonological word structure, showing that some structures are more frequently found than others. This allows us to have a basic idea of what is an unmarked/marked structure/phonotactic pattern in Irabu. The database here is of 600 native free roots (mostly nominal and adjectival, together with some participle stem forms (zero affix forms) of verb roots; 9.4.1).

The top ten list of most frequently occurring root structures is as follows.

Table 4. Top ten list of most frequently occurring root structures in 600 roots

Rank	Structure	Tokens	Example
1.	CV.CV	180	/pʊ.ni/ [pɔni] ‘bone’
2.	CVV	66	/ka:/ [ka:] ‘skin’; /kɔi/ [kɔi] ‘voice’
3.	CV.CV.CV	54	/ka.ta.na/ [katana] ‘knife’
4.	V.CV	40	/ʊ.tʊ/ [ʊtʊ] ‘sound’
5.	CVC	38	/paʒ/ [paʒ] ‘fly’
6.	R.CV	32	/n.dza/ [ɲdza] ‘where’; /m.sʊ/ [mʂʊ] ‘miso’
7.	CV.CVC	30	/pa.sam/ [pasam] ‘scissors’
8.	GV.CV	16	/jʊ.da/ [jɔda] ‘branch’
9.	CCV.CV	14	/nna.ma/ [ɲnama] ‘now’
10.	CVC.CV	12	/kʊv.va/ [kɔvva] ‘calf of leg’
	CCV	12	/mma/ [mma] ‘mother’

This list tells us much about the general tendency of root structures, of which the most important points to note are:

- 1) most frequently occurring roots are di- or trisyllabic. Next comes monosyllabic structures, of the Rank 2 (CVV), 5 (CVC), and 10 (CCV).
- 2) the most typical root structure is CV.CV with the open syllable CV.
- 3) Neither initial clusters nor medial clusters are popular in the most frequently occurring root structures. Initial clusters are more common than non-initial clusters in roots.

In association with 1), we will see in 6.2 that Irabu phonological words must have at least two moras. Thus the monosyllabic words in the Rank 2, 5, and 10 have heavy syllable structures. The definition of mora is given in 6.1.

With regard to 2), it is noted that the top 3 structure CV.CV.CV is also built

from the CV syllables. Thus in Irabu roots, CV syllables constitute the most basic structural type in terms of frequency, even though the possible structure of phonological words is much more complex (as defined in 3.1).

With regard to **3**), it is noted that the presyllable plus initial onset cluster R.CV (as found in the Rank 6; 32 tokens) is slightly more frequent than the initial syllable onset cluster CCV (as found in Rank 9 and 10, accounting for 26 tokens), and there is no R.CGV or CCGV in the most frequently occurring patterns. Also, the root structures containing non-initial clusters are fairly rare in the top ten list, only appearing at the Rank 10.

5. Distribution of phonemes

This section notes allophonic variation found in each phoneme as well as the phonotactic patterns in terms of each phoneme class. Here, a number of segmental issues, major and minor, will be addressed as listed below:

- Phonotactic patterns of high central vowels /i/ and /i:/: see 5.1.
- /ts/ and /dz/ as phonemic fricatives: see 5.2.3.
- Phonetic [m(:)] plus labial [p] or [b] as /n(:)p/ or /n(:)b/: see 5.2.4.
- Palatal(ised) phones as phonemically complex onsets (C plus G): see 5.3.

5.1. Vowel phonotactics: the phoneme /i/

The high central vowels /i/ and /i:/ cannot occur without a preceding onset and occurs only with fricative onsets, e.g. /fi.sa/ [fusa] ‘plant’, /tsi.na/ [tsina] ‘rope’, /dzi.mi.dzi/ [dzimidzi] ‘warm’, /o.si/ [osi] ‘cattle’. The short /i/ is underlyngly absent and is inserted at the surface level (see 9.2 for a detailed account).

5.2. Consonants

5.2.1. Allophonic variation of consonants

Now that we have a clear picture of the structure of phonological word, we can set out to describe allophonic variation of consonants, which is heavily dependent on syllable structures and the position of a syllable in a phonological word.

So far we have established the following word template with a basic phonotactic annotation (**R**: resonant; **F**: fricative; **S**: stop). For descriptive convenience, let us number segmental slots as follows, corresponding to the numbers in **Table 5**:

#Presyllable	Initial syllable				Non-initial syllable_{1...n}#
((R _i) R _i)	((C ₂)C ₁)	(G)V ₁ (V ₂)	(C ₃)		C ₄ (G)V ₁ (V ₂) (C ₃)... (C ₅)
	<i>onset</i>		<i>coda</i>		<i>onset</i> <i>coda</i> <i>coda</i>
R	R	R	R	R	R R R
		F	F	F	F F
		(S)	S	S	S S

Table 5. Consonant allophony (S: stops; F: fricatives; R: resonants)

		#RR#	#(R)R	#C ₂ C ₁	#C ₁	C ₃ C ₄	C ₄	C ₅
S	/p/	*	*	*	[p]	[pp]	[p]	*
	/t/	*	*	([² tt])	[t]	[tt]	[t]	*
	/k/	*	*	*	[k]	[kk]	[k]	*
	/b/	*	*	*	[b]	*	[b]	*
	/d/	*	*	*	[d]	*	[d]	*
	/g/	*	*	*	[g]	*	[g]	*
F	/f/	*	*	[ff]	[f]	[ff]	[f]	*
	/s/	*	*	[ss]	[ʃ/s]	[ʃʃ/ss]	[ʃ/s]	*
	/ts/	*	*	([² tts])	[tʃ/ts]	[ttʃ/tts]	[tʃ/ts]	*
	/dz/	*	*	*	[dʒ/dz]	([ddʒ/ddz])	[dʒ/dz]	*
	(/h/)	*	*	*	([ç/h])	*	([ç/h])	*
R	/m/	[m̩:]	[m̩(:)]	[mm]	[m]	[mm] _{gem} [mC] _{non.gem}	[m]	[m]
	/n/	[ŋ:]	[N(:)]	[nn]	[ŋ/n]	[ŋŋ/nn] _{gem} [NC] _{p.gem}	[ŋ/n]	[ŋ]
	/v/	[v̩:]	[v̩(:)]	[vv]	*	[vv] _{gem} [vC] _{non.gem}	*	[v]
	/z/	[z̩:]	[z̩(:)]	[zz]	*	[zz/z̩] _{gem} [z̩C] _{non.gem}	*	[z̩]
	/ʀ/	[ʀ̩:]	[ʀ̩(:)]	[ʀʀ]	*	[ʀʀ] _{gem} [ʀC] _{non.gem}	[r]	[ʀ]

NOTE: [N]: homorganic nasal; [x/y]: [x] before i / [y] elsewhere

(x): x is rare in roots; **gem**: geminates; **non.gem**: non-geminates

p.gem: partial geminates (homorganic /n/ plus a consonant)

[xC]: x followed by a non-x consonant

*: non applicable (the phoneme cannot fill the slot marked by *)

5.2.2. Stops

Voiced stops cannot form geminates in any position in phonological word. Voiceless stops may form geminates unless in the initial syllable onset; exceptionally, however, /t/ may form a geminate in the initial syllable.

5.2.3. Fricatives

The voiceless /h/ cannot form a geminate in any position in phonological word, and its lexical distribution is mostly restricted to non-native words (note also that it is the only phoneme whose place of articulation does not form a natural class with other phonemes). Thus /h/ is not systemic in Irabu phonology. The other ‘regular’ fricatives, /f/, /s/, /ts/, and /dz/, share the phonotactic patterns summarised below, which justifies classifying the phonetic affricates phonemically as fricatives, except that /dz/ cannot form geminate initially.

- fricatives can form geminates in initial syllable onset and across syllables.
- fricatives can serve as the onset of /i/ and /i:/
- fricatives involve a shared morphophonemic process called Lengthening rule (see 9.4; Strategy 2)

The geminate /dz.dz/ in non-initial syllables (i.e. coda plus onset) seems to be on a diachronic way towards /ts.ts/ (cf. initial /dzdz/ is absent in Irabu). For example, while some very old speakers do distinguish /fɪdz.dza/ [fuɸdzza] ‘whale’ and /fɪts.tsa/ [fuɸttsa] ‘mouth’ (topic),³ many others do not distinguish them, pronouncing both as [fuɸttsa]. This and the strong ban on voiced stop geminates indicate that there is a clear tendency in Irabu to disfavour phonemically voiced (i.e. non-resonant /b, d, g, dz/) geminate. In association with this, /dzdz/ in morpheme boundaries, as in /adz=dza/ (//adz// ‘taste’ plus //a// topic marker), involves neutralisation with /tsts/ [tts] in many speakers’ speech, where the phonetic realisation of /dzdz/ as well as /tsts/ is [tts], as in /adz=dza/ [attsa] (~[addza]).

5.2.4. Nasal resonants

Of all the consonants, nasal resonants have the widest distributional range in a phonological word. They may appear in presyllables (short or long) and in initial and non-initial syllables (short only). In the latter syllable type, nasals may be a

³ Nakama (1983) also reports that his consultant (female; born in 1922) had a phonetic [ddz] in /fɪdzdza/ ‘whale’. My consultants who do have this voiced geminate, and who do distinguish it phonemically from voiceless [tts], were all over 80 years old at the time of research, i.e. in 2007 (thus they were born before 1927).

single onset, a coda (non-final or final), or a geminate in the initial syllable onset or across syllables.

The phonemic treatment of phonetic partial geminates [m(:)p] and [m(:)b] occurring in monomorphemic phonological words requires careful discussion. Irabu has both nasal /m(:)/ and /n(:)/, both of which may form a nasal plus consonant cluster. Note that /n(:)C/ clusters are phonetically partial geminates, where the place of articulation of homorganic /n/ assimilates to that of the following C. Thus there emerge three analytical possibilities for [m(:)p] and [m(:)b], of which the first is my current analysis: **1)** the phonetic partial geminates are analysed as /n(:)p/ and /n(:)b/, where the homorganic /n(:)/ is realised as [m(:)]; **2)** the phonetic partial geminates are analysed as /m(:)p/ and /m(:)b/; and **3)** there is a neutralisation of /n(:)/ and /m(:)/ before [p]/[b].

The Analysis **1)** allows us to have the systematic phonotactic pattern in 4.4 (non-initial cluster C.C) and in 4.5 (presyllable plus initial onset (R)R.C). First, aside from phonetic [m(:)p] and [m(:)b], two generalisations obtain with regard to the above mentioned clusters:

Generalisation 1. /n(:)C/ partial geminate involves all places of articulation *but bilabial*.

Generalisation 2. /m(:)C/ involves /m(:)/ + *alveolar* consonant.

Now, if we take Analysis **1)**, i.e. if we assume [m(:)p] and [m(:)b] as /n(:)p/ and /n(:)b/, we can have a full set of places of articulation in /n(:)C/ partial geminates, making **Generalisation 1** complete. Also, we do not harm **Generalisation 2** for non-geminates.

If we alternatively take Analysis **2)**, i.e. if we assume that [m(:)p] and [m(:)b] are /m(:)p/ and /m(:)b/ respectively, then the odd gap still occurs in **Generalisation 1**, and we even harm **Generalisation 2**, where the odd exception appears in the combinations of /m(:)C/, where /m(:)/ combines with a labial, but otherwise it only combines with alveolar consonants.

Finally, Analysis **3)** just keeps the status quo, with no positive effect on either Generalisation, since this analysis only says that [m(:)p] and [m(:)b] are phonemically ambiguous. Thus it is best to take Analysis **1)** (resulting in positive effects on Generalisations 1 and 2), as opposed to **2)** (resulting in negative effects on Generalisations 1 and 2) and **3)** (with no positive effect on either).

5.2.5. Non-nasal resonants

Non-nasal resonants, i.e. approximants /v(:)/ and /z(:)/ and lateral /l(:)/, show a

narrower distributional range than nasal resonants.

- In presyllables, long /v:/, /z:/, and /l:/ do occur, but they are not underlying. That is, they are morphophonemically lengthened stem forms of the underlyingly monoconsonant roots (/v/, /z/, and /l/; see 9.3.1).
- In presyllables, the short resonant /v/ may appear if it is followed by an initial syllable, as in /vtsi/ [vtsi] (R.CV) ‘inside’, but short /z/ and /l/ cannot fill the presyllable slot. Note also that the short /v/ in the presyllable shows instability, frequently involving lenition (e.g. /vtsi/ R.CV > /vtsi/ V.CV: see 4.5.3). Thus, the presyllable slot is not easily accessible to short resonants.
- In the onset, /v/ and /z/ only appear as geminates, as a result of a predictable rule, Geminate copy insertion rule (see 9.1).

5.3. Glides

5.3.1. General remarks

As is shown below, I treat glide phones, i.e. [C^w] (e.g. [k^w]) and [C^j] (e.g. [p^j] and [ʃ]), as two phoneme sequences (non-glide consonant plus /w/ or /j/), rather than single consonant unit-phonemes. Thus [k^w] is treated as /k/ plus /w/, while [p^j] and [ʃ] are treated as /p/ plus /j/ and /s/ plus /j/ respectively.

Glides and their phonemic treatment

General treatment	Example		
[C ^w] --> /C/ + /w/	[k ^w a:si] ‘snack’	-->	/kwa:si/ CGVV.CV
[C ^j] --> /C/ + /j/	[ʃa:ka] ‘late midnight’	-->	/sja:ka/ CGVV.CV

The main reasons for assuming the complex onset CG are twofold. First, it allows a straightforward description of such morphological processes where a sequence of C and G produces a phonetic [C^w] or [C^j] (e.g. stem-final C plus suffix initial -G > C-G; as in /kak-/ [kak] ‘write’ + /-ja/ (agent nominal suffix) > /kakja/ [kakja] (CV.CGV) ‘writer’). Second, it minimises the consonant phoneme inventory. These are addressed in the following sections.

It must be noted that the labio-velar glide /Cw/ is very restricted and peripheral in Irabu. It is only found in a handful of words and affixes, and the /C/ must be /k/ or /g/. Attested examples are:

- a. /kwa:si/ [k^wa:si] ‘snack’
- b. /kwa:ja/ [k^wa:rja] (Place name)
- c. /ʊkwa:sa/ [ʊk^wa:sa] ‘many’
- d. /jakkwan/ [jakk^waŋ] ‘kettle’
- e. /jɔkwa:ja/ [jɔk^wa:ra] ‘side’
- f. /jɔkwaija/ [jɔk^waira] ‘four times’
- g. /gwatsi/ [g^watsi] ‘month’ (a suffix as in /sitsi-gwatsi/ [ʃitʃig^watsi] ‘July (lit. seventh-month)’).

In **c** and **e** /kw/ is suspected to reflect //ʊ// + //a// (**c** < //ʊkʊ// ‘big’ + //asa// ‘?’; **e** < //jɔkʊ// ‘side’ + //a|a// ‘left-over’). Furthermore, according to many speakers, **c**, **d**, **e**, **f**, and **g** are in free variation with /ʊka:sa/, /jakkan/, /jɔka:ja/, /jɔkaija/ and /gatsi/ respectively, where /w/ is dropped. Thus the /Cw/ is lexicalised and unstable, and at best peripheral in Irabu phonology.

Hence the discussion that follows focuses on /Cj/, which is well attested in Irabu phonology.

5.3.2. Advantages in assuming a complex onset CG

At the phonetic level, Irabu has the full set of palatal(ised) phones corresponding to non-palatal(ised) phones which are the major allophones of the consonant phonemes. That is, a given non-palatal [C] (/C/) has its palatal counterpart [C^j]. The non-palatal and palatal phones contrast phonemically. Examples are listed below:

(1) Palatals in Irabu: some examples

a. Root-internal ((quasi) minimal contrasts are given)

/pa:/ [pa:] ‘teeth’	vs.	/pja:/ [pja:] ‘old days’
/ʊnta/ [ʊnta] ‘frog’	vs.	/ʊntja/ [ʊntja] ‘3PL’
/ʊkɔgan/ [ʊkɔgaŋ] ‘big crab’	vs.	/ʊkɔgjam/ [ʊkɔgjam] ‘millet’
/sabi/ [sabi] ‘rust’	vs.	/sjabi/ [ʃabi] ‘Shabi (name)’
/itsa/ [itsa] ‘board’	vs.	/itsjaga a/ [itʃagara] ‘somehow’
/ma:kʊ/ [ma:kʊ] ‘round’	vs.	/mja:kʊ/ [mja:kʊ] ‘Miyako Island’
/na:/ [na:] ‘name’	vs.	/nja:n/ [nja:n] ‘not exist’

b. Root-final //Ci// plus clitic-initial //a// or //ʊ// > /Cia/ [Cja] or /Ciʊ/ [Cjʊ]

//kʊ j// ‘this’ + //a// (topic) > /kʊ ja/ [kʊja:] ‘this’ (topic)
//nabi// ‘pot’ + //ʊ// (accusative) > /nabi=ʊ/ [nabjʊ:] ‘pot’ (accusative)

introduce an irregular morphophonological rule for such examples as **(2b)**: the root-final consonant //C// is replaced by the surface /Cj/.

There is another obvious advantage in terms of the economy of phoneme inventory. If we analysed each [Cj] as a single phoneme /Cj/, we would double the consonant inventory, by having /Cj/ corresponding to each /C/. Given that there are 16 non-glide (short segment) consonant phonemes in Irabu, we would add another 16 phonemes to our existing inventory.

6. Mora

This section introduces the phonological unit mora, which is important in describing segmental and supersegmental phenomena in Irabu. In 6.1 I define mora in association with the established syllable structures. In 6.2 minimal word structures (which must have two moras) are described. In 6.3 I note phonemic length contrasts in terms of short segments (e.g. /kagi/ [kagi] ‘beautiful’) vs. long segments (e.g. /ka:gi/ [ka:gi] ‘smell’), and of non-geminates (e.g. /nama/ [nama] ‘raw’) vs. geminates (e.g. /nnama/ [nnama] ‘now’).

6.1. Definition

Moras are counted as follows:

In a syllable

C_i	C_i	G	V_1	V_2	C_{coda}
μ	—	—	μ	μ	μ

In a presyllable

R_i	R_i
μ	μ

6.2. Minimal word

A phonological word is minimally bimoraic. Thus we have the following set of minimal words in terms of syllable structure:

Presyllable only

RR: /m:/ [m:] ‘potato’

Initial syllable only

(C)(G)VV: /pja:/ [pja:] ‘early; fast’	/pa:/ [pa:] ‘tooth’
/ja:/ [ja:] ‘home’	/a:/ [a:] ‘foxtail millet’
(C)(G)VC: /pja/ [pja] ‘leave’	/pa/ [pa] ‘needle’
/ja/ [ja] ‘spear’	/a/ [a] ‘exist’
CC(G)V: /mmja/ [mmja] (emphasis)	/mma/ [mma] ‘mother’

Initial syllable plus non-initial syllable

(C)(G)V.C(G)V: /ma.tsja/ [matʃa] ‘bird’ /ma.ta/ [mata] ‘and’
/ma.jʊ/ [majʊ] ‘cat’

Presyllable plus initial syllable

R.C(G)V: /m.tsi/ [m̩tsi] ‘road’
/n.gja/ [ŋgja] ‘person name’

6.3. Length (quantity) contrast

6.3.1. Short vs. long

As is illustrated below (minimal contrasts and quasi-minimal contrasts), there are both phonemically contrastive long vowels and consonants in roots. Long consonants are all resonants, and in principle occur in presyllables (see 3.2, however, for cases where /z:/ and /l:/ do appear in V slots in regular syllables).

Short vowel

/kagi/ [kagi] ‘beautiful’
/kasi/ [kafi] ‘a kind of local tree’
/tʊ/ [tʊ] ‘bird’
/sisi/ [sisi] ‘coal’

Long vowel

/ka:gi/ [ka:gi] ‘smell’
/kasi:/ [kafi:] ‘help’
/tʊ:/ [tʊ:] ‘cross’
/si:si/ [si:si] ‘meat’

Short consonant

/m.na/ [m̩na] ‘shellfish’
/n.si/ [ŋsi] ‘north’

Long consonant

/m:na/ [m̩:na] ‘all’
/n:sa/ [ŋ:sa] ‘dumb’

I have not found minimal or quasi-minimal contrasts of /e/ vs. /e:/ or /o/ vs. /o:/ in roots. In fact it is difficult to find /e/ and /o/ in Irabu in the first place. This is simply because the Proto-Ryukyuan */e/ and */o/ are reflected as /i/ and /ʊ/ in Irabu, and so the mid vowels are scarce in the Irabu lexicon.

Nasal resonants /m/ and /n/ show a length contrast in roots as demonstrated above. On the other hand, non-nasal resonants in roots do not show a length contrast, except in the cases where alveolar non-nasal resonants appear in the regular syllable V slots (3.2). In roots, long /v:/, /z:/, and /l:/ in presyllables are not underlyingly long, but result from an obligatory lengthening of underlyingly monomoraic roots (Lengthening rule: //v// ‘sell’ > /v:/, //z// ‘scold’ > /z:/, and //l// ‘(the sun) sets’ > /l:/). As will be noted in 9.4.1, the long /v:/, /z:/, and /l:/ in presyllables mostly appear as participle stems, which are independent phonological words and therefore must have two moras.

6.3.2. Non-geminate vs. geminate

Irabu has geminate /C_iC_i(G)V/ in initial syllable onset and across syllable boundaries. Non-geminate monomoraic /C(G)V/ and geminate bimoraic /C_iC_i(G)V/ are phonemically contrastive. Thus initially /na.ma/ [nama] ‘raw’ and /nna.ma/ [nnama] ‘now’ are distinguished; likewise medially /ba.si/ [bafi] ‘in between’ and /bas.si/ [baffi] ‘forget’ are distinguished. Further examples of contrasts include:

Non-geminate	Geminate
/faʋ/ [faʋ] ‘eat’ CV	/ffaʋ/ [ffaʋ] ‘child’ (accusative) CCVV
/sa.gi/ [sagi] ‘k.o.bird’ CV.CV	/ssa.gi/ [ssagi] ‘bridal’ CCV.CV
/tsi.bi/ [tʃibi] ‘hip’ CV.CV	/tstsi/ [ʔtʃi] ‘pipe’ CCVC
/ma:.sɔ/ [ma:sɔ] ‘salt’ CVV.CV	/mma:/ [mma:] ‘No’ CCVV
/na.ma/ [nama] ‘raw’ CV.CV	/nna.ma/ [nnama] ‘now’ CCV.CV
/ba.ta/ [bata] ‘stomach’ CV.CV	/bat.ta/ [batta] ‘armpit’ CVC.CV
/ba.si/ [bafi] ‘edge’ CV.CV	/bas.si/ [baffi] ‘forget’ CVC.CVC
/a.tsa/ [atsa] ‘tomorrow’ V.CV	/ats.tsa/ [attsa] ‘over there’ VC.CV
/ga.ma/ [gama] ‘cave’ CV.CV	/gam.ma/ [gamma] (onom.) CVC.CV
/a.na/ [ana] ‘hole’ V.CV	/an.na/ [anna] ‘mother’ VC.CV

It is noted that two non-nasal resonants, /v/ and /ẓ/, must be geminated in the surface syllable onsets (as in /vva/ [vva] ‘2SG’ and /ẓẓa/ [ẓẓa] ‘father’), and so do not show the contrast in gemination at the surface level. As will be noted in 9.1, these surface geminates are analysed underlyingly as single moraic //C//, and a predictable rule operates to produce the surface /vv/ and /ẓẓ/ from underlyingly moraic //v// and //ẓ// respectively (thus //va// > /vva/, //za// > /ẓẓa/ above).

7. Prosody

The prosodic phenomena in Irabu are correctly described by recognising two distinct levels: word-level and phrase-level:

Word-level prosody: see this section

The citation form of a single phonological word reveals the word-level prosody, characterised as the pitch accent per word.

Phrase-level prosody: see Section 8

- in sentential utterance, there occurs a string of phonological words, where two adjacent phonological words form a foot.
- a foot must contain one and only one pivot, or an accented phonological

word (which means that there is a phonological word that loses accent by rule in the foot)

7.1. General remarks

Word-level prosody in Irabu is of pitch accent system characterised as follows:

(3) Irabu accent system

- a. The citation form of a phonological word is accented.
- b. Accent is lexically non-contrastive, and is completely predictable from the mora length of a phonological word.
- c. The accent is marked on a certain mora of a given phonological word, which is phonetically realised as an abrupt falling pitch after that mora.

(4) Accentuation rule: accent is positioned as follows, depending on the number of moras of a given phonological word.

No of moras:	2	3	4 \geq
Accented mora:	1st or 2nd	2nd or 3rd	2nd
Example:	(5a)	(5b)	(5c)

The examples of bimoraic, trimoraic, and quadromoraic words, each in citation form, are given below. (*) indicates either accented mora must be present, but not both. The alternate possibilities with bi- and trimoraic words are explained below.

(5a) Bimoraic: 1st or 2nd mora

/na(*)da(*)/	/ka(*)n(*)/	/ka(*):(*)/	/pa(*)i(*)/
CV(*)CV(*)	CV(*)C(*)	CV(*)V(*)	CV(*)V(*)
‘tears’	‘crab’	‘skin’	‘field’

(5b) Trimoraic: 2nd or 3rd mora

/uma(*)tsi(*)/	/av(*)va(*)/	/ju:(*)z(*)/	/kai(*)na(*)/
V.CV(*)C(*)	VC(*)CV(*)	GVV(*)C(*)	CVV(*)CV(*)
‘fire’	‘oil’	‘ceremony’	‘arm’

(5c) Four moras: 2nd mora

/kana*ma /	/pam*mai/	/akja*:da/	/basa*udzi/
CV.CV*.CVC	CVC*.CVV	V.CGV*.V.CV	CV.CV*.V.CV
‘head’	‘food’	‘merchant’	‘amulet’

The accentuation rule can be stated more simply by using the term **word medial accent (M)** for the first mora accentuation in bimoraic words or the second mora accentuation in trimoraic or longer words. The term **word final accent (F)** refers to the final mora accentuation in bi-/trimoraic words. Thus the accentuation rule (4) is simply restated as follows:

(4') Accentuation rule (simpler): M: word medial; F: word final

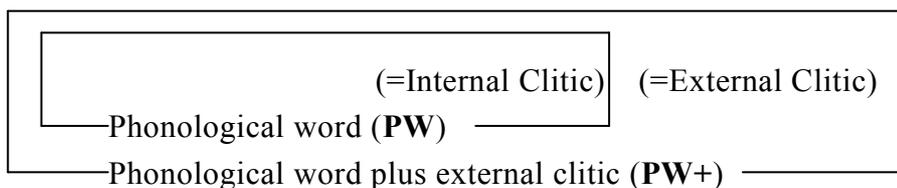
No of moras:	2	3	≥4
Position:	M or F	M or F	M
Example:	(5a)	(5b)	(5c)

There are a couple of minor comments on the above general rules. First, although bi-/trimoraic words have either word medial or word final accent, the word final accent is more pervasive. However, a slight tendency obtains for bi-/trimoraic words to bear word medial accent if the final syllable ends in a coda C. Thus /kan/ ‘crab’ and /jɔːz/ ‘celebration’ in the above examples tend to have word medial accent, as in /ka*n/ and /jɔː*z/.

Second, there is some instability among and within speakers as to where they put the accent on words of more than three moras if **1)** the accented mora happens to come within a long vowel, *and* **2)** the long vowel is not in the final syllable, as in /akja*:da/ above. In such examples, many prefer to put accent on the second mora as expected, while some prefer to put accent on the third mora, i.e. on the syllable boundary (/akja:*da/). This is an exception to the accentuation rule. On the other hand, if the accented mora happens to be the second mora of a diphthong as in /ba.sa*ʊ.dzi/ above, the accented mora is invariably the second mora as expected.

7.2. Clitics

For a clear description of accentuation at the word-level, it is necessary here to introduce the notion *clitic*, which is defined as a monomoraic grammatical word (see Section 2 for the definition of grammatical word) and therefore cannot serve as an independent phonological word because it fails to satisfy the minimal word requirement (6.2). Some clitics (*internal clitic* below) become part of the host phonological word, while others (*external clitic* below) do not. Thus Irabu phonological words have the following structure in terms of clitic attachment:



Henceforth, I use the symbol **PW** for a phonological word optionally with internal clitics, and **PW+** for a phonological word plus external clitics. **PW(+)** indicates either domain. Besides supersegmental phenomena, there are several phonological processes which refer to these domains (Section 9).

(6) Clitic and accentuation

- a. *An internal clitic* becomes part of the host PW for accentuation purposes, and a PW containing internal clitics follows the accentuation rule (defined in (4') in 7.1).
- b. *An external clitic* does not become part of the host PW for accentuation purposes. If it attaches to a bimoraic or trimoraic host PW to form a PW+, the host PW (which has two possible accents, i.e. word medial or word final), always has word medial accent.

7.2.1. Internal clitics and accentuation

Internal clitics are grammatically all post-nominal particles (case markers, topic markers, and focus markers, which come post-nominally to mark case relation or information status). In the example below, the nominative case *//=ga//* and the focus marker *//=[σ//* are internal clitics.

vva	=ga	=[σ	az-ta]?
2SG	=NOM	=FOC	say -PAST

‘(Was it) you (who) said (that)?’

Since the PW containing internal clitic(s) exactly follows the accentuation rule as noted above, we can effectively say that a PW is extended by internal clitics. In the examples below, the whole domain containing the internal clitic */=nσ/* (nominative/genitive case) is treated as a trimoraic PW (in (7a)) for accentuation, whereas in (7b) the whole domain containing the clitic is treated as a quadromoraic PW for accentuation. Note that the accentuation in both examples exactly follows the rules we established.

(7) Internal clitic /=nσ/ (nominative/genitive case) and accentuation

a. Trimoraic PW (bimoraic PW + monomoraic /=nσ/): M or F

/nada(*)=nσ(/	/kan(*)=nσ(/	/ka:(*)=nσ(/	/pai(*)=nσ(/
CV.CV(*)=CV(*)	CVC(*)=CV(*)	CVV(*)=CV(*)	CVV(*)=CV(*)
‘tears’	‘crab’	‘skin’	‘field’

b. Quadromoraic PW (trimoraic PW + monomoraic /=nσ/): M

/oma*tsi=nσ/	/av*va=nσ/	/jσ:*z=nσ/	/kai*na=nσ/
V.CV*.CV.=CV	VC*.CV.=CV	GVV*C.=CV	CVV*.CV.=CV
‘fire’	‘oil’	‘ceremony’	‘arm’

The following list is a list of internal clitics that I identified.

Table 6. Internal clitics: the list

Parts of speech	Form (in underlying (i.e. morphemic) representation)
Post-nominal particles	
Case marker	//=ga// (nominative/genitive: more topic worthy)
	//=nσ// (nominative/genitive: less topic worthy)
	//=σ// (accusative)
	//=n// (dative/locative)
Topic marker	//=a// (topic/contrastive)
	//=da// (what about...?)
	//=ba// (object topic; contrastive) (~ PW //ba://: see 8.3.3)
	//=m// (additive ‘too’) (~ PW //mai://: see 8.3.3)
Focus marker	//=dσ// (focus in declarative)
	//=[σ// (focus in yes-no question)
	//=ga// (focus in wh-question)

As is indicated in the table above, two post-nominal particles have alternative forms, an internal clitic form (e.g. //ba//) and an independent PW form (//ba://), the latter of which has two moras. This alternation is phonologically significant, changing the phonological structure of the host-clitic combination into that of PW-PW combination, or vice versa. These will be noted in 8.3.3.

7.2.2. External clitics and accentuation

External clitics are post-verb particles (i.e. particles that follow verbs (or predicate nominals) to mark modal and discourse information), and they tend to come at the

right edge of the main clause, most typically sentence-finally (e.g. //t͡sa// below).

mja:kʊ-pz̥tʊ ʊkka =ʊ mai tʊ| -a-da pa| -ta| =t͡sa.
 Miyako - man debt =ACC too take -STM -CVB:NEG leave -PAST=HS
 ‘The man from Miyako Island, (he) left without getting the debt back.’

External clitics come outside the PW domain, as an extra element attaching to the completed PW, giving rise to a domain PW+. Though outside the PW domain, external clitics still affect the accentuation of the host PW. This becomes apparent when an external clitic attaches to a bi-/trimoraic PW, which has been shown to have either word final or word medial accent (7.1). Here, all external clitics cause the host PW’s to have word medial accent. In other words, external clitics ‘fix’ the otherwise instable accentuation of bi-/trimoraic PW’s to which they attach.

(8) External clitic and accentuation (M: word medial; F: word final)

	Bimoraic	Trimoraic
PW: M or F	/a(*).t͡sa(*/	/tʊ.nʊ(*).ka(*/
	‘tomorrow’	‘egg’
PW+: M only	/a.*t͡sa.=t͡sa/	/tʊ.nʊ*.ka.=t͡sa/
	‘tomorrow’ (hearsay)	‘egg’ (hearsay)
	/a.*t͡sa.=jʊ/	/tʊ.nʊ*.ka.=jʊ/
	‘tomorrow’ (corrective)	‘egg’ (corrective)

The tag question marker //i// deserves a comment here. It cannot be neatly classified as either an internal clitic or an external clitic on the basis of its accentual behaviour, as illustrated in (9d) below, where the accentuation behaviour of //i// does not really follow that of either type of clitic: //i// causes the host bi-/trimoraic PW to lose the accent altogether. However, there is indirect, morphophonemic evidence that it is not an internal clitic but an external clitic (9.3.2).

(9) Tag question marker /i/ and other clitics

	Bimoraic	Trimoraic
a. PW (in citation)	/a(*).t͡sa(*/	/tʊ.nʊ(*).ka(*/
	‘tomorrow’	‘egg’
b. PW (with //dʊ//):	/a.t͡sa(*).=dʊ(*/	/tʊ.nʊ*.ka.=dʊ/
	‘tomorrow’ (quotative)	‘egg’ (quotative)
c. PW+ (with //jʊ//)	/a.*t͡sa.=t͡sa/	/tʊ.nʊ*.ka.=t͡sa/
	‘tomorrow’ (hearsay)	‘egg’ (hearsay)

to pause between phonological phrases if they need to. For example, in doing text transcriptions with native speakers, they tend to pause between each phonological phrase, but much less so within it. Significantly, the phonological phrase turns out to be a grammatically well defined and important unit: either a nominal complex or a verb complex. As defined in **Figure 2** below, a nominal complex is minimally a single noun, and a verb complex is minimally a single verb. Maximally, a nominal complex may consist of an NP (modifier NP plus head NP) followed by post-nominal particles, and a verb complex may consist of a VP (main plus auxiliary) followed by post-verb particles.

Nominal complex (NP plus particle) Verb complex (VP plus particle)

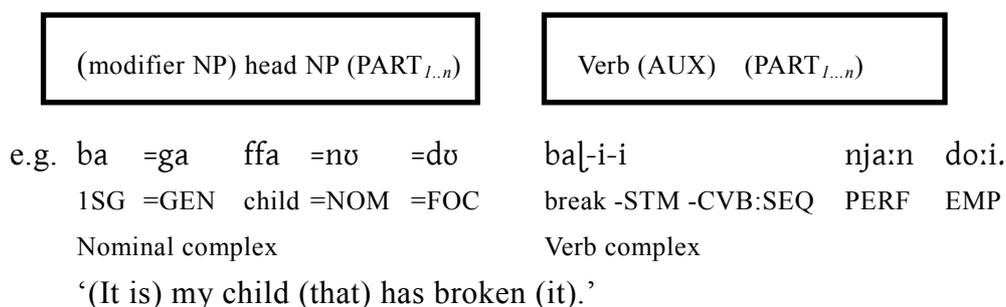


Figure 2: phonological phrase and grammatical structure

Nominal complexes and verb complexes are phrases of grammatical words. As noted in Section 2, a grammatical word as well as a phrase of grammatical words may consist of several PW’s. Adjacent PW’s in a phonological phrase (i.e. a nominal/verb complex) bear a definite prosodic pattern as will be described below.

8.1. Phonological phrase: structure

The phonological phrase structure can be schematically shown as follows.

$$PW_1 PW_2 \dots PW_n(+)$$

As noted in Section 7, internal clitics are counted as an internal member of PW here; external clitics mostly appear sentence-finally. Thus in the phrase structure, the PW+ is irrelevant except in the phrase-final position. For the moment, we will not be bothered by PW+ in the phrase prosody rule (we get back to PW+ in 8.3).

8.2. Phonological phrase: phrase prosody rules

The **Phrasal prosody rule** is summarised as follows.

(A) PW's in a phrase are classified into:

PW₂₋₃ (bi-/trimoraic PW) or

PW_{≥4} (longer PW)

(B) Two adjacent PW's form a unit of accent, or a foot (enclosed by brackets below), where the odd numbered PW bears accent (let us call the accented PW the *pivot*; indicated by underline below) and the even numbered PW loses accent. Footing goes from left to right:

(PW1 PW2) (PW3 PW4)... See (10) below.

(C) The **pivot PW in a foot** is accented as follows:

PW₂₋₃: word final accent; **PW_{≥4}: word medial** accent

(D) If an odd numbered PW is left alone at the phrase edge (e.g. **PW5** below), it fails to be footed, and does not receive accent (since accent must be per foot in a phrase).

(PW1 PW2) (PW3 PW4)PW5 See (11) below.

(E) An odd numbered PW_{≥4} forms a foot by itself (unitary footing), and serves as the pivot. Thus if a **PW5** in (D) is a PW_{4≥}, then it is successfully footed, and therefore bears accent:

(PW1 PW2) (PW3 PW4)(PW5) See (12) below.

(F) After a unitary footing applies, the footing is reset and resumes. Thus if **PW1** of (B) is a PW_{4≥} and forms a unitary foot, the footing goes like:

(PW1) (PW1 PW2) PW3... Compare (10) and (13).

<p>(10) (<u>PW1</u>-PW2)(-PW3-PW4) (HH* -LL) (-HH* -LL) ffa*-gama-mmi*-nagi child -DIM -PL -DUB 'lovely children or suchlike'</p>	<p>(11) (<u>PW1</u>-PW2)(-PW3-PW4) PW5 (HH* -LL) (-HH*-LL) LL ffa-gama-mmi-nagi mai child -DIM -PL -DUB too 'lovely children or suchlike, too'</p>
--	---

<p>(12) (<u>PW1</u>-PW2)(-PW3-PW4) (<u>PW5</u>) (HH* -LL) (-HH*-LL) (HH*LL) ffa*-gama-mmi*-nagi jal*[ʋ: child -DIM -PL -DUB CMPR 'than lovely children or suchlike'</p>	<p>(13) (<u>PW1</u>) (<u>PW1</u> -PW2) -PW3 (HH*LL) (-HH*-LL) -LL akja*:da-gama*-mmi-nagi merchant -DIM -PL -DUB 'little merchants or suchlike'</p>
--	--

As is shown in (10-13) above, polymoraic affixes (e.g. /-gama/ (diminutive suffix), /-mimi/ (plural suffix), /-nagi/ (dubiative suffix)) are PW's by themselves. Thus they bear accent when they serve as the pivot in a foot, just as roots do, exactly following the accentuation rules depending on their mora length. Also, they satisfy all the other requirements for PW's (phonotactics and minimal word requirement).

8.3. Clitics and phrase prosody

8.3.1. Internal clitics

As has been noted in 7.2, internal clitics simply extend a PW. Thus there is no special statement required for a PW containing internal clitics in phrase prosody phenomena. As is shown below, there is no difference in phrase prosody between **a** examples and **b** examples, where **a** examples and **b** examples are minimally contrastive in internal clitic attachment.

- (14a) (PW1-PW2)-PW3
 ffa*-gama-mmi
 child -DIM -PL
 'lovely children'
- (14b) (PW1-PW2)-PW3
 ffa*-gama-mmi =σ
 child -DIM -PL =ACC
 'lovely children' (accusative)
- (15a) (PW1-PW2)(-PW3-PW4)
 ffa*-gama-mmi*-nagi
 child -DIM -PL -DUB
 'lovely children or like'
- (15b) (PW1-PW2)(-PW3-PW4)
 ffa*-gama-mmi*-nagi =σ
 child -DIM -PL -DUB =ACC
 'lovely children or like' (accusative)

(16a) (PW1-PW2)-(PW3 PW4)
 ffa*-gama-mmi* mai
 child -DIM -PL too
 ‘lovely children, too’

(16b) (PW1-PW2)-(PW3 PW4)
 ffa*-gama-mmi =o* mai
 child -DIM -PL =ACC too
 ‘lovely children, too’ (accusative)

8.3.2. External clitics

In describing the phrase prosody phenomena in Irabu, external clitics require a special statement. External clitics come phrase finally, or more specifically, sentence finally (as in (17b) below), forming a PW+ at the phrase edge. On the other hand, as was noted in 8.2, the phrase final PW as in (17a) below has one of the following three prosodic possibilities:

- 1) an even-numbered non-pivot PW in a foot (which may be a PW₂₋₃ or a PW_{≥4}; as in (10))
- 2) an unfooted odd-numbered PW (which must be a PW₂₋₃; as in (11)), or
- 3) an odd-numbered unitary foot (which must be a PW_{≥4}; as in (12) above and (17a) below).

A phrase-final PW+ of any length is treated prosodically as either 1) or 3). That is, a PW+ behaves like a PW_{≥4} in terms of phrase prosody.

(17a) Phrase-final odd-number PW_{≥4}		(17b) Phrase-final odd-number PW+	
(PW1-PW2)(-PW3-PW4)	(PW5)	(PW1-PW2)(-PW3-PW4)	(PW+)
(HH* -LL) (-HH*-LL)	(HH*LL)	(HH*-LL)(-HH*-LL)	(H*L=L)
ffa*-gama-mmi*-nagi	jaɭ*ɭɔ:	ffa*-gama-mmi*-nagi	ma*i=tsa
child -DIM -PL -DUB	CMPR	child -DIM -PL -DUB	too =HS
‘than lovely children or suchlike’		‘lovely children or like, too (hearsay)’	

8.3.3. From a clitic to an independent PW: Clitic promotion

As was noted in 7.2.1, some post-nominal particles have either monomoraic internal clitic forms or bimoraic PW forms. When they appear as PW forms, the host-clitic combination is rearranged prosodically as a PW-PW combination, i.e. a phonological phrase. Thus in the following sets of examples, a examples involve a

with at least two moras kept L pitch (HH*LL(...)); likewise a pivot PW+ is accented word medially, having at least two moras left low pitch (see also 7.2.2):

Bimoraic PW plus external clitic	> H* <u>L=L</u>	e.g. /pa*v=vjʊ/ snake =COR '(I said it's a) snake'
Trimoraic PW plus external clitic	> HH* <u>L=L</u>	/av*va=njʊ/ oil =COR '(I said it's) oil'
Longer PW plus external clitic	> HH* <u>LL(...)=L</u>	/kana*ma =ljʊ/ head =COR '(I said it's a) head'

9. Phonological alternations

There are a number of phonological processes which involve alternations of phonemes. These are general or limited to specific morphological environments. Here I note the former type, where we see a set of general phonological processes which apply to a wide range of phonological structures. The full set of morpheme-specific morphophonemic alternations is listed in Shimoji (*in.prep.*).

9.1. Geminate copy insertion

The **Geminate copy insertion** is sensitive to moraicity. There is a strict constraint in the domain of PW(+) that a moraic /C/ cannot directly precede a /(G)V/ at the surface level. If a situation emerges (e.g. in morphological processes) where an underlyingly moraic //C// is directly followed by //(G)V//, then the following phonological rule produces a surface /C_iC_i(G)V/:

Geminate copy insertion rule: if underlyingly moraic //C// and //(G)V// are adjacent in PW(+), then a geminate copy of //C// is inserted to produce a surface /C_iC_i(G)V/.

(21)

- a. //va// '2SG' > /vva/ [vva] '2SG'
- b. //za// 'father' > /ẓza/ [ẓza] 'father'
- c. //pav// 'creep' + //-i// (stem suffix) > /pav-vi/ [pavvi] 'creep' (imperative)
- d. //s// 'know' + //-ja// (agent nominal) > /s-sja/ [ʃʃa] 'one who knows a lot'
- e. //kam// 'god' + //=a// (topic) > /kam=ma/ [kamma] 'god' (topic)
- f. //sukʊbẓ// 'belt' + //=a// (topic) > /sukʊbẓẓa/ [sukʊbẓza] 'belt' (topic)

(21a) and (21b) are roots, whose underlying forms contain an initial moraic //C// directly followed by //V//. As has been noted in 6.3.2, the surface /v/ and /z/ in the onset position are always geminated. Given this and the phonotactic constraint in Irabu that a moraic //C// cannot directly precedes //(G)V//, it is a reasonable assumption that an underlying structure //va// and //za// (moraic //C// plus //V//) become /vva/ and /zza/ at the surface level, with an obligatory application of the Geminate copy insertion rule.

(21c) to (21f) involve morphophonemics. Note that in (21f), an exceptional resonant consonant /z/ filling V slots (3.2) is sensitive to this rule, thus demonstrating that /z/ belongs to the phoneme class consonant. We can assume that this rule is applicable to consonants as a phoneme class, which has been defined in the Table 1 (2.2.1), rather than to the particular syllable position (coda and onset).

As defined above, the Geminate copy insertion rule operates within PW(+), but never occurs across PW's. Thus (22) and (23) below involve the Geminate copy insertion rule, while in (24), where two PW's are adjacent, the rule does not operate.

(22) PW containing an internal clitic //a// (topic)

- | | |
|-------------|--------------|
| a. /kam=ma/ | b. /tʊl=a/ |
| //kam =a// | //tʊl =a// |
| god =TOP | bird =TOP |
| 'god is...' | 'bird is...' |

(23) PW+: a PW followed by an external clitic //jʊ// (corrective)

- | | |
|-------------------|----------------------|
| a. /kan=njʊ/ | b. /tʊl=jʊ/ |
| //kan =jʊ// | //tʊl =jʊ// |
| crab =COR | bird =COR |
| '(no, it's) god.' | '(no, it's) a bird.' |

(24) Two phonological words /kan/ 'crab' and /ata/ (copular)

- | | | | |
|-----------------|------|------------------------|------------------|
| /ʊ i=a | kan | a-ta/ | (NOT /kan nata/) |
| //ʊ i =a | kan | aR -taR// ⁴ | |
| 3SG =TOP | crab | COP-PAST | |
| 'It was a crab' | | | |

⁴ The morphophoneme //R// is found in a certain set of verb roots and affixes, and is realised as /r/ verb-finally, or is deleted elsewhere.

9.2. /i/ insertion

9.2.1. General remarks

One important characteristic of Irabu phonology is the phonemic status of /i/. As has been noted in 5.2.3, this phoneme is preceded only by fricatives /f, s, ts, dz/. The peculiar characteristic of /i/ is that it is *not* underlyingly present, and the surface phonemic /i/ is inserted by the following **/i/ insertion rule**:

/i/ insertion rule: If a fricative occurs other than as an underlyingly onset, then insert /i/ into a fricative onset.

e.g. //kaf// > /kafi/ ‘write’
 //sta// > /sita/ ‘tongue’
 //tsts// > /tsitsi/ ‘moon’
 //padz// > /padzi/ ‘leg’

The /i/ is thus characterised as an epenthetic segment which functions to keep intact the phonotactics of PW (as established in Section 4). In such an underlying form //ssam// ‘lice’ (//C_iC_iVC//), which is already well formed without the epenthesis, the /i/ insertion rule does not occur, and we get 1) //ssam// > /ssam/, rather than 2) //ssam// > /i/ insertion rule > /sisam/.

9.2.2. Morphophonemics and /i/ insertion

There are many pieces of evidence for the analysis that /i/ is best treated as being underlyingly absent, where the surface /Ci/ is underlyingly //C//. In what follows I note one major process which clearly depicts this. This process involves vowel-initial suffixes and clitics, such as the accusative case //=ʊ//:

The morphophonemic rule of the accusative case // =ʊ//

(25a) If a nominal stem ends in a V₁V₂ other than a //Ci:// (C: s, ts, dz),

// =ʊ// is realised as /=jʊ/:

//ka:// ‘skin’	+	// =ʊ//	>	/ka:=jʊ/
//ki:// ‘tree’	+	// =ʊ//	>	/ki:=jʊ/
//kʊ:// ‘powder’	+	// =ʊ//	>	/kʊ:=jʊ/
//kʊi// ‘voice’	+	// =ʊ//	>	/kʊi=jʊ/
//fi:// ‘coming’	+	// =ʊ//	>	/fi:=jʊ/

(25b) If a nominal stem ends in a consonant C, //v// is realised as /=Cv/:

//kam// ‘god’ + //v// > /kam=mv/
 //kan// ‘crab’ + //v// > kan=nv/
 //pav// ‘snake’ + //v// > /pav=vv/
 //paʒ// ‘fly’ + //v// > /paʒ=ʒv/
 //pa|// ‘needle’ + //v// > /pa|=|v/

(25c) Otherwise //v// is realised as /=v/:

//pana// ‘flower’ + //v// > /pana=v/
 //si:// ‘nest’ + //v// > /si:=v/

Our attention now turns to such nominal stems as /taʊfi/ [taʊfu] ‘tofu’, /pʊsi/ [pʊsi] ‘star’, /ʊmatsi/ [ʊmatsi] ‘fire’, and /mʊdzi/ [mʊdzi] ‘barley’, all of which end in surface /i/. If the /i/ were underlyingly present, i.e. the nominal stems were underlyingly vowel-final (//CV//#), then **(25c)** would apply and we get something like /taʊfi=v/ [taʊfiʊ], /pʊsi=v/ [pʊsiʊ], and so on. However, what happens is that we get the surface /taʊf=fv/ [taʊffv], /pʊs=sv/ [pʊssv], /ʊmats=tsv/ [ʊmattsv], and /mʊdz=dzv/ [muddzv](~[mʊttsv]; cf. 5.2.3), indicating that the underlying forms of the above nominal stems are //taʊf//, //pʊs//, //ʊmats//, and //mʊdz//, and that **(25b)** applies. The short vowel /i/ at the surface is underlyingly absent and the nominal stems listed here are underlyingly consonant-final (//C//#).

Thus, as illustrated below /taʊfi/ is underlyingly //taʊf//, and if it surfaces with //v// the surface form is /taʊf=fv/, with the rule **(25b)** above; if //taʊf// surfaces with no cliticisation/affixation, then the /i/ is added word finally, producing /taʊfi/:

Underlying		/i/ insertion		Surface	Phonetic
//taʊf// ‘tofu’	+ //v//	>	N/A	>	/taʊffv/ [taʊffv]
	+ no clitic	>	applied	>	/taʊfi/ [taʊfi]

9.3. The /i/ insertion and Geminate copy insertion rule: inter-relationship

9.3.1. Relative orders

The Geminate copy insertion rule operates at the final stage of word formation applying to the largest domain PW(+), i.e. after both internal and external clitics are attached. Thus in both **a** and **b** examples below, the combination of the root //tʊ// ‘bird’ and the internal clitic //a// (topic) or the external clitic //jv// (corrective), which results in the adjacency of a moraic //C// and a //(G)V//, induces the application of the Geminate copy insertion rule.

On the other hand, the /i/ insertion rule operates within the PW domain, i.e.

before external clitics attach. This is evidenced in **a'** and **b'** examples below, where a consonant-final root //pʊs// ‘star’ involves different phonological processes in terms of the Geminate copy insertion rule, due to the presence or absence of the application of /i/ insertion rule. Thus in **a'** example, the internal clitic //a// attaches before the /i/ insertion, giving rise to a morpheme sequence //pʊs// + //a//. This requires the Geminate copy insertion rule, producing an appropriate surface form /pʊs=sa/. In **b'** example, the external clitic //jʊ// attaches after the /i/ insertion rule applies, which is evidenced in the fact that the morpheme sequence does not induce the Geminate copy insertion rule: the root here is already vowel-final //pʊsi//, i.e. the form after the /i/ insertion applies, thus //pʊsi// + //jʊ// does not require the Geminate copy insertion.

PW			PW+	Surface
Underlying > Internal clitic > i insertion			External clitic	(±Gem.copy)
a. //tʊ// ‘bird’	+ //a// (topic)	N/A	N/A	/tʊ =a/
b. //tʊ// ‘bird’	N/A	N/A	+ //jʊ//	/tʊ =jʊ/
a'. //pʊs// ‘star’	+ //a//	N/A	N/A	/pʊs=sa/
b'. //pʊs// ‘star’	N/A	//pʊsi//	+ //jʊ//	/pʊsi=jʊ/

9.3.2. Revisiting the clitic //i//

The fact that the /i/ insertion rule operates before external clitics are attached serves as an effective morphophonemic test for the correct analysis on the problematic clitic //i// (tag) (see 7.2.2 for discussion), which cannot be classified either as an internal clitic or an external clitic in the light of accentuation criteria.

In terms of the /i/ insertion, this clitic shows an identical behaviour with external clitics (see **b**). That is, //i// attaches to a PW which has undergone the /i/ insertion. This is evidenced by the fact that in **c** below, the combination of the root and the //i// does not involve the Geminate copy insertion rule, just as the external clitic //jʊ// does not. That is, the root here is already vowel-final //pʊsi//, i.e. the form after the /i/ insertion applies. On the other hand, //i// involves the Geminate copy insertion rule if it attaches to a consonant-final PW, e.g. //tʊ// ‘bird’ (see **c'** below), thus it is safe to say that //i// is really a clitic rather than an independent PW, since the Geminate copy insertion rule does not apply across PW’s (9.1). Thus, //i// is analysed as an external clitic with a marked accentual behaviour.

Phonological word formation			>	External clitic	>	Surface
Underlying > Internal clitic > i insertion						(±Gem.copy)
a.	//pʊs// ‘star’	+ //a//	N/A	N/A		/pʊs=sa/
b.	//pʊs// ‘star’	N/A	//pʊsi//	+ //jʊ//		/pʊsi=jʊ/
c.	//pʊs// ‘star’	N/A	//pʊsi//	+ //i//		/pʊsi=i/
a’.	//tʊ// ‘bird’	+ //a// (topic)	N/A	N/A		/tʊ =a/
b’.	//tʊ// ‘bird’	N/A	N/A	+ //jʊ//		/tʊ =jʊ/
c’.	//tʊ// ‘bird’	N/A	N/A	+ //i//		/tʊ =i/

9.4. Lengthening rule

To satisfy the minimal word requirement (6.2), which says that a PW must be minimally bimoraic, monomoraic roots must undergo an obligatory lengthening or a vowel insertion to appear as a PW.

Lengthening rule: a monomoraic root must be lengthened to appear as a PW, with one of the following three strategies:

Strategy 1. Moraic resonants are lengthened ($//C// > /C:/$)

e.g. //v// ‘sell’ > /v:/ ‘sell’ (participle stem)

Strategy 2. Moraic fricatives involve re-syllabification, where /i:/ is inserted to be a nucleus ($//C// > /CV:/$)

e.g. //s// ‘know’ > /si:/ ‘know’ (participle stem)

Strategy 3. //CV// is lengthened ($//CV// > /CV:/$)

e.g. //jʊ// ‘four’ > /jʊ:/ ‘four’ (when counting isolately)

(cf. /jʊ-ta:|/ ‘four persons’ where the numeral root //jʊ// ‘four’ does not undergo lengthening)

This rule typically operates in certain stem formation processes noted in 9.4.1 and 9.4.2, where a stem must be an independent PW, and the stem formation does not involve overt affixation thus requiring the Lengthening rule:

Participle stem formation (**Strategies 1** or **2**): see 9.4.1

Compound stem formation (**Strategies 1, 2, or 3**): see 9.4.2

9.4.1. Participle stem formation

Participle stems are independent PW’s, and the inflectional affixes that follow them, if they have two moras or more, are independent PW’s (e.g. past suffix /-ta|/; thus a

verb /jʊm-ta/ in **a** below is a phonological phrase PW1-PW2). A participle stem formation does not involve any overt affixation, with a root directly functioning as a participle stem. This is illustrated in **a** and **b** below. If a monomoraic root as in **c-h** is to appear as a participle stem, the Lengthening rule **Strategy 1 (c-e)** or **2 (f-h)** applies to produce a bimoraic stem, which satisfies the minimal word requirement.

Root	Participle stem	Non-past inflection ⁵	Past inflection
a. //jʊm// ‘read’	/jʊm/	/jʊm/	/jʊm-ta/
b. //m:// ‘ripe’	/m:/	/m:/	/m:-ta/
c. //v// ‘sell’	/v:/	/v:/	/v:-ta/
d. //ẓ:// ‘scold’	/ẓ:/	/ẓ:/	/ẓ:-ta/
e. //ḷ// ‘(the sun) sets’	/ḷ:/	/ḷ:/	/ḷ:-ta/
f. //f// ‘bite’	/fi:/	/fi:/	/fi:-ta/
g. //s// ‘know’	/si:/	/si:/	/si:-ta/
h. //ts// ‘put on’	/tsi:/	/tsi:/	/tsi:-ta/

The Lengthening rule **Strategy 2** could be dispensed with by assuming long fricative phonemes /f:/ [fu:], /s:/ [si:], /ts:/ [tsi:], rather than fricative onset plus a long vowel /i:/. By this we can replace **Strategy 2** by **Strategy 1** in such a way that in **f-h** above, for example, the underlyingly single fricative phoneme is lengthened.

However, this is not without its cost, and I do not take this solution. The critical disadvantage is that this alternative solution breaches several phonotactic generalisations. For example, such a PW as ‘bridge’ must be analysed as /pas:/ [pasi:] (cf. our current analysis is /pasi:/), which has the structure /CV.C:/, where the long syllabic /C:/ comes word finally, which is impermissible otherwise (see Section 4). Also, this solution adds three long consonant phonemes to the current inventory. Finally, there is one independent piece of evidence whereby the Lengthening rule **Strategy 2** is supported: the participle stem /fi:/ ‘bite’, for example, must be analysed as CV:, given that if it is followed by the accusative //v//, the latter appears as /=jv/, following the general pattern of VV-final stem (see **(25a)**).

⁵ With zero affixation of non-past affix: /jʊm/ ‘read:NPST’, for example, is morphologically analysed as the stem /jʊm/ + -∅ (non-past affix).

9.4.2. Compounding stem formation

In Irabu, compound stems can be (in fact are mostly) independent phonological words. If a stem is monomoraic underlyingly, it undergoes one of the three strategies:

Stem 1 (PW)	Stem 2 (PW)		Surface compound form
//mɔnɔ// 'thing'	//v// > //v:// (ST1) 'sell'	>	/mɔnɔ-v:/ 'merchant'
//mɔnɔ// 'thing'	//s// > //si:// (ST2) 'know'	>	/mɔnɔ-si:/ 'shaman'
//mi// > //mi://(ST3) 'child'	//ɔtstsa// 'squirrel'	>	/mi:-ɔtstsa/ 'female squirrel'

NOTE: ST1: Strategy 1; ST2: Strategy 2; ST3: Strategy 3

10. Synchronic and diachronic notes on /i/

As was noted in 9.2, the synchronic peculiarity of /i/ is that it is underlyingly absent. This means that we have two synchronic systems coexistent in Irabu, i.e. the underlying system where /i/ is absent, and the surface system where /i/ is existent. We must assume these two systems in describing Irabu phonology because some phonological processes such as Geminate copy insertion do distinguish, for example, the underlying //s// and the surface /si/, as noted in 9.3.1.

On the other hand, diachronically speaking, this synchronic peculiarity of /i/ is reflected in the fact that a syncope (/i/ > ø), or a fusion of /i/ and the fricative onset (giving rise to single segments /f/ (<*/fi/), /s/ (<*/si/), /ts/ (<*/tsi/), /dz/ (<*/dzi/)) seems to be in progress. There are considerably unstable phonetic realisations of /i/, so that /fisa/ 'grass' can be realised as [fusa] or [f^hsa] (with the [v] being a resonant release), or even [f_sa], /ɔsi/ 'cattle' can be realised as [ɔsi] or [ɔs^z] (with the [z] being a resonant release), or even [ɔs̄], and so on.

11. Conclusions

This study has offered a comprehensive description of Irabu phonology. By employing an approach which is independent of the traditional approach in Ryukyuan linguistics, with descriptive tools and concepts accepted in general linguistics, this study has offered a new descriptive model for Miyako Ryukyuan phonology, which is summarised as follows.

I have proposed a new description of syllable structure of Miyako Ryukyuan (of which Irabu exemplifies a typical, a highly complex syllable structure), with one new descriptive tool which are not present in the Ryukyuan literature but are highly useful in describing syllable structures of Miyako Ryukyuan: the presyllable.

I also demonstrated that in dealing with the word-level prosody of Miyako Ryukyuan one must refer to the notion clitic, and to the domain PW (optionally with internal clitics) and the PW+ (with external clitics).

Furthermore, this study has shown that one must recognise, if he describes Miyako Ryukyuan phonology, a larger phonological structure, or a phonological phrase, which has been shown to exhibit a foot-based rhythm structure.

The description of prosodic phenomena has revealed that Irabu is a typologically quite interesting language in that a phonological word and a grammatical word show a conspicuous mismatch, in such a way that polymoraic affixes and compound stems are independent phonological words by themselves, though they are internal components of a grammatical word (cf. this type of languages do exist cross-linguistically, such as Yidiny (Dixon 1977)).

Finally, I have shown that it is effective in phonological processes of Miyako Ryukyuan to assume the underlying level and the surface level of phonological systems. Here, the problematic phoneme /i/ can be described consistently by assuming the two distinct levels.

Though there have been excellent phonetic/phonological studies done in the area of Miyako Ryukyuan (Sakiyama 1963; Sawaki 2000; Karimata 2005; Pellard 2007) they were not comprehensive, or took a bottom-up approach, focusing on specific topics (e.g. syllable structure; phonetic characterisation of segments) of the entire phonological system. Also, prosodic aspects of Miyako Ryukyuan were, though they are highly controversial and typologically of significance, largely beyond the horizon (though Hirayama, Oshima, and Nakamoto (1967) did give a dialectological comparison of accents in each variety of Miyako Ryukyuan). It was the comprehensive or top-down approach, with a detailed description of prosody, that was yet to be done in Miyako Ryukyuan phonology. Thus this study is the first such study which has shown a whole picture of Miyako Ryukyuan segmental and supersegmental phonology, if not in its full detail. Further discussions, elaborations, and criticisms on this study are all future research topics.

ADDENDA: some notes on the notion *word* in Irabu

(a) Two views on the definition of word: dualistic and unitaristic

Here I briefly note some controversial issue whose deeper discussion is open for future researches. This is concerning how we define the word in Irabu, and it turns out to be an important research topic in general linguistics.

So far we have assumed a *dualistic* definition of word, where phonological words and grammatical words are independently defined in Section 2. Here, no serious problem emerges as to the mismatch between the two kinds of words, or such a mismatch is even expected. And the mismatch does occur in Irabu, in such a way that polymoraic affixes are independent phonological words, though they are internal components of a grammatical word. Thus in **(26a)** below, a single grammatical word, a noun, consists of four phonological words.

- (26a)** {PW -PW -PW -PW} *PPhr*
 ffa*-gama-mmi*-nagi
 child -DIM -PL -DUB
 ‘Lovely children or suchlike’

On the other hand, there can also be a *unitaristic* definition of word, where a single unit is defined as a word both in terms of phonology and grammar. Here, the word must be both a phonologically well defined unit and a grammatically well defined unit. The only candidate for such a unitaristically defined word is the nominal/verb complex: it is phonologically well defined in that it is the domain of the foot-based prosody (remember also that it is phonetically a unit of utterance; see Anderson 1985 for the significance of this phonetic evidence for the notion word); it is grammatically well defined in that it has a definite structure, as schematised in **Figure 2** above. It is also noteworthy that the foot-based prosody in Irabu (as summarised in (20a-c)) is parallel to that found in some polysynthetic languages, such as Cup’ik (Woodbury 2002; see Shimoji 2007 for some detail), and the word in these languages is prosodically defined as the unit of this foot-based rhythm.

(b) Nominal/verb complex revisited: is it a word?

The new analysis, which claims that a word in Irabu is a nominal/verb complex, says that **(26a)** above is analysed as a word, both phonologically and grammatically. This is not controversial: let us consider that each PW in **(26a)** is something smaller than a word, say, an ‘accent-bearer’ (AB in **(26b)** below), and that the accent-bearer is a lower-level unit clustering to build a higher prosodic domain, or a word, which is also a grammatically defined word, i.e. the smallest nominal complex (a head

nominal). In (26b), then, a word is analysed as having two accents, just as a word can have a secondary or multiple primary stress in stress languages (e.g. Boumaa Fijian (Dixon 1988), Diyari (Austin 1981), and Cup'ik (Woodbury 2002)).

- (26b) {AB-AB-AB-AB} *Word*
 {ffa*-gama-mmi*-nagi} *Word*
 child -DIM -PL -DUB
 'Lovely children or suchlike'

This apparently means that Irabu exhibits a cross-linguistically highly common pattern that a phonologically defined word and a grammatically defined word equate in principle (Anderson 1985: 153; empirical support of which is found in Woodbury 2002 and many other studies listed in Dixon and Aikhenvald eds. 2002).

The obvious challenge encountered in the unitaristic definition of word is, however, that the word so defined can be a whole nominal or verb complex containing bits of smaller units, as shown in (27).

- (27) {uva =ga* pata|atsi =nʊ =dʊ} *Word* {ʊ:*-ka| da|a* ssʊ} *Word*.
 2SG =GEN work =NOM =FOC big -VLZ EMP DSC
 'Your work is (more) significant, I tell you.'

The most controversial point to note is that the word here allows some flexibility of change in order of internal components (e.g. post-verb particles), which is not typical in the unit word especially in terms of grammatical criteria: for example, Dixon and Aikhenvald's (2002) list the 'universal criteria' for grammatical wordhood, which include the fixed order of elements (see Section 2 above).

With the empirical data from Irabu, however, we are induced to ask whether *all* languages necessarily have a grammatically defined word satisfying the 'universal' criteria suggested by Dixon and Aikhenvald (2002). Looking to Irabu, phonological evidence (as the foot-based prosody) and phonetic evidence (as a unit of utterance; a target of pause) unambiguously specify a certain unit, which is also a grammatically well defined unit, a nominal/verb complex. It is one reasonable assumption, then, to assume this unit as a primary unit in Irabu phonology and grammar, or a word in Irabu.

At this stage of description, this study sticks to the current, dualistic definition of word, i.e. there are phonological words and grammatical words in Irabu, as shown in Section 2. I describe that a nominal/verb complex is a phrase of grammatical words, and that a phonological word is as defined in Sections 3 to 7

throughout, which may be a great deal smaller than a grammatical word (e.g. polymoraic affixes). However, it also seems fruitful, and is an important future research topic, to examine the unitaristic definition of word as briefly noted in this section, according to which one identifies a word with a nominal/verb complex. In line with this, it is also an important research topic open for future typological research to reexamine the applicability and validity of grammatical definition of word in various languages as suggested in the typological literature.

Abbreviations

ACC: accusative	CAUS: causative	CNJ: conjunction
COP: copular	COR: corrective	CSL: causal converb
CVB:SEQ: sequential converb	DAT: dative	DIM: diminutive
DSC: discourse marker	DUB: dubiative	EMP: emphatic
FOC: focus	GEN: genitive	HS: hearsay
INTJ: interjection	NEG: negative	NOM: nominative
NPST: non-past	PAST: past	PERF: perfect
Pn.PART: post-nominal particle	PL: plural	PROG: progressive
Pv.PART: post-verb particle	QT: quotative	RLS: realis
STM: stem expander	TAG: tag question	TOP: topic
VLZ: verbaliser		

References

- Anderson, Stephen R. 1985. Inflectional morphology. In Shopen, Timothy, ed. *Language typology and syntactic description (III)*, 150-201, Cambridge: Cambridge University Press.
- Austin, Peter K. 1981. *A grammar of Diyari*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dixon, R.M.W. 1977. *A grammar of Yidiny*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dixon, R.M.W. 1988. *A grammar of Boumaa Fijian*. Chicago: University of Chicago Press.
- Dixon, R.M.W., and Alexandra Y. Aikhenvald. eds. 2002. *Word: a cross-linguistic typology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dixon, R.M.W., and Alexandra Y. Aikhenvald. 2002. Word: a typological framework. In Dixon, R.M.W., and A.Y.Aikhenvald, eds., *Word: a cross-linguistic typology*, 1-41, Cambridge: Cambridge University Press.

- Hirayama, Teruo, Ichiro Oshima, and Masachie Nakamoto. 1967. *Ryukyu Sakishima hoogen no soogooteki kenkyuu*. Tokyo: Meiji Shoin.
- Karimata, Shigehisa. 2005. Okinawaken Miyakojima Hirarahoogen no phoneme. *Nihon toyoobunka ronsyuu* 11: 67-113.
- Nakama, Mitsunari. 1983. Ryukyu Miyako Nagahama hoogen no onin. *Ryuudai kokugo* 2: 198-218.
- Pellard, Thomas. 2007. Miyako syohoogen no onin no mondaiten. Paper read at the second workshop on Ryukyuan languages, held at Kyoto University (available on-line at the author's website):
<http://thomaspellard.ryukyu.googlepages.com/Miyakoonin20070909.pdf>
- Sakiyama, Osamu. 1963. Ryuukyuu miyako syotoo hoogen hikaku oninron. *Kokugogaku* 54.
- Sawaki, Motoei. 2000. Controversial topics on Miyako dialect. *Journal of phonetic society of Japan* 4 (1): 36-41.
- Shimoji, Michinori. 2007. Irabujima hoogen no phonological word. Paper read at the second workshop on Ryukyuan languages, held at Kyoto University (available on-line at the author's website):
http://www.geocities.jp/skippingbird76/workshop_2nd_phonologicalword.pdf
- Shimoji, Michinori. *in.prep.* A grammar of Irabu, a sub-variety of Miyako Ryukyuan, a Southern Ryukyuan language. A PhD thesis in progress at the Department of Linguistics, the Australian National University.
- Woodbury, Anthony C. 2002. The word in Cup'ik. In Dixon, R.M.W., and A.Y.Aikhenvald, eds., *Word: a cross-linguistic typology*, 79-99, Cambridge: Cambridge University Press.

伊良部島方言の音韻論

下地理則

オーストラリア国立大学大学院太平洋アジア研究所

要旨

本研究の目的は、南琉球語に属する宮古琉球語のうち、伊良部島方言（特に長浜地域の方言）の音韻論を記述することである。これまでの宮古琉球語の研究史においては、特定の音素の音声実質の研究など、ボトムアップ的な研究が中心であったが、本稿では、音素目録、音韻語の音節構造、モーラ構造、韻律構造、クリティック、形態音韻論までを視野に入れた包括的な音韻記述を行う。

ブルシャスキー語における特定性標示

吉岡 乾

(東京外国語大学大学院博士後期課程)

キーワード：定性、特定性、指示詞、数詞、ブルシャスキー語

1. はじめに

本稿では、吉岡 (2007)で記述したブルシャスキー語^{†1}の特定性 *specificity* の標示方法に関しての考察・検証を、追調査する。

これまでのブルシャスキー語研究では、定性に関しては曲用のうちで記述されてきているものの、特定性に関しての言及がなされてきていない。それは、前者が或る接尾辞の付加によって示されているのに対して、後者が形態論的に明示されていないとされているためであるだろう。

なお、本稿では資料の都合から、フンザ方言を対象として扱った。以下、特記の無い限りブルシャスキー語とはフンザ方言を指すこととする。

本稿では、まず§2で、テーマにある、特定性という用語と、その指示する概念に関しての簡潔な解説をし、§3でブルシャスキー語の纏わる先行研究について述べる。それから§4にて、吉岡 (2007)においての、特定性標示に関する記述を纏める。更に§5では、別のコーパスを用いての再検証を行い、そして§6で結論付け、§7で今後の展望を認識することとする。§8は最近行った簡単な調査の結果である。これは別の調査の傍らで実施したブリーフな訊き出しに過ぎないため、本論文では補足の扱いで提示するに留めておく。

2. 用語の定義

特定性という用語の指す概念は、Ioup (1977)によれば、2つの観点から定義されてきているという。その1つは意味論的であり、もう1つは語用論的である。そのIoupを受けつつ、Kagan (2006a)は、前者の定義での特定性の機能を作用域 *scope*、後者を話者同定可能性 *speaker identifiability* と言い換えている。

これらの定義を考えるに当たっては、次の(1)のような、特定性に纏わって二義的に

^{†1} 話者は約5~7万人。言語系統は不明。基本語順SOVでHead-finalの膠着語であり、分裂能格言語である。概して4つの、名詞クラスを持っている：HM(ヒト男性)・HF(ヒト女性)・X(動物・具象物)・Y(抽象物)。方言はフンザ方言・ナガル方言・ヤスン方言に大きく分けられ、特に前2者と後者との差異は大きい。母音は各方言共通でi, e, a, o, uの5つ、それぞれ長短の区別がある。フンザ方言の子音音素は以下の通り：p, b, ph[p^h], t[t̪], d[d̪], th, t̪[], d̪[], t̪, k, g, kh, q, qh, m, n, ŋ, (f), s, z, s̪[], š̪[], γ[], h, c[ts], ch, c̪[], j̪[], č̪, č̪[], j̪[d̪], č̪, l, r[], w, y[], y[j̪]。アクセントはピッチ・アクセント(高アクセントを「V̇」で表記)を持つ。実質的に無文字言語であり、本稿での表記はTiffou (1999)に概ね随った。但し先行研究からの引用においては、各研究者の表記法をそのまま用いた。音素表記において本稿と異なった表記をしているものは、以下のような対応をしている。左から順に、「本稿・Tiffou : Berger・Tikkanen : Lorimer」での表記である。

c : ċ : ts ch : č̪ : tsh č̪ : ċ : ch č̪h : č̪h : chh š̪ : š̪ : sh γ : ġ : g ŋ : ñ : ŋ

なる例文を考えると、説明に易い：

(1) *Melinda wants to buy a motorcycle.* (Ioup 1977: 233)

この場合、特定性の相違から、以下の2通りの読みが可能であるという。

(2) a. $\exists x (\text{motorcycle}(x) \wedge \text{want}(\text{Melinda}, (\text{buy}(\text{Melinda}, x))))$ (Kagan 2006b: 1)

b. $\text{want}(\text{Melinda}, \exists x (\text{motorcycle}(x) \wedge (\text{buy}(\text{Melinda}, x))))$ (Kagan 2006b: 1)

(2a)はNP : *a motorcycle* の作用域が広く、一方で(2b)では1回狭い。また、(2a)ではその *a motorcycle* に対し、既に *Melinda* が当たりを付けているのとは反対に、(2b)では何も想定が無いものとなっている。言い換えると、前者の場合の *a motorcycle* は指示的 referential であり、可能な後続文で *it* で置き換えられ得るが：(3a)、後者は帰属的 attributive であって、*it* にはできず、*one* としかできない：(3b)。

(3) a. *She will buy it tomorrow.* (Ioup 1977: 233 ; 下線は筆者による)

b. *She will buy one tomorrow.* (Ioup 1977: 233 ; 下線は筆者による)

或いは、次の(4)のような(1)の後続文では、いずれも *it* で *a motorcycle* を受けうるものの、不特定の(4b)ではモダリティ制限が掛かる。

(4) a. *It is blue.*

b. *It must be blue.*

但し、必ずしもこの2分類はコンセンサスではなく、例えば Enç (1991)がこれらの他に更に、部分特定性 partitive-s.や、関係特定性 relative-s.などを提唱していることを補足しておく。

例えばトルコ語の例文(5)は部分特定性に関する対立を示しているものであり、(5b)の目的語 NP : *iki kız* が不特定のであるのに対し、明示的な部分特定の NP : *kızlardan ikisini* を目的語としている文(6)と同義の(5a)で、目的語 NP : *iki kız* は部分特定のである。

(5) a. *İki kız taniyordum.*

two girl-ACC know-PROG-DI.PAST-1SG

「私は(その内の)2人の女の子を知っていた。」

(Enç 1991: 6 ; 正書法への表記改正・形態素分析は筆者による、以下同様)

b. *İki kız taniyordum.*

two girl-NOM know-PROG-DI.PAST-1SG

「私は2人の女の子を知っていた。」

(Enç 1991: 6)

- (6) *Kızlardan ikisini tanıyordum.*
 girl-PL-ABL two-POSS.3SG-ACC know-PROG-DI.PAST-1SG
 「私はその内の2人の女の子を知っていた。」 (Enç 1991: 6)

このように、「トルコ語の対格目的語は、特定のであり、意味的に部分的なものと解釈される」(Enç 1991: 7)。^{†2} また、全化量子 *her* を伴った場合にも必ず対格が用いられる、即ち特定のであることを、例文(7)を交えて、部分特定性の考えから次のように述べている：

- (7) a. *Ali her kitabı okudu.*
 Ali-NOM every book-ACC read-DI.PAST-3SG
 「アリはどの本も読んだ。」 (Enç 1991: 10)
 b. **Ali her kitap okudu.*
 Ali-NOM every book-NOM read-DI.PAST-3SG (Enç 1991: 10)

全化量子は文脈的に関連している個体の集合 *contextually relevant set of individuals* について、その特定のな集合に関して「全てである」と標示する標識である。従って、英語で言えば、*every book* 「全ての本」は、*every one of the books* 「その内の全ての本」と同等であり、構造的に同一である *two of the girls* 「その内の2人の女の子」に関しての解釈と同様に、部分特定の表現であると見做される。

関係特定性に関して Enç は具体的に例示していないが、その旨は以下の通りであるだろう。例えば次の(8)にある NP：或る学生 は、先に述べた話者同定可能性に相当する機能を果たす特定の NP であるが、それを伝聞している(9)での NP：或る学生 は、特定のではあるものの、作用域的にも同定可能性的にも特定のとは言えず、更に加えて部分特定のでもなく、但し関係的特定性を持つものである。

- (8) 私は毎週、私のゼミの或る学生と飲んでいる。
 (9) あの先生は毎週、彼のゼミの或る学生と飲んでいるらしい。

この NP に関して、(9)の話者は同定不可能である。但し(8)の話者の同定可能性が間接

^{†2} トルコ語での絶対格目的語 NP は、フィンランド語では概ね分格 *partitive* となる：(分) *Onko teillä kirjoja?* 「本(不特定:PL)を持っていますか?」；(対) *Onko teillä kirjat?* 「本(特定:PL)を持っていますか?」。分格は不特定の表現に使われ、単に不特定の NP 目的語のために用いられる他に、進行相・否定・感情動詞・不可算名詞などとも関連して現れる。名詞ではなく、動詞の特定性——完結性 *telicity*(延いては他動性)とも繋がりが指摘でき、これは§7で述べる、Hopper and Thompson (1980)の主張に直接的に絡んで行く問題である。

また、特定性ではなく定性と格とが関係する言語もある。ウルドゥー語では、不定有生目的語 NP は絶対格を、定有生目的語 NP は対格を取る：(絶) *mā-ne mačhliyā-Ø pakriyā*. 「私は魚(不定:PL)を獲った」；(対) *mā-ne mačhliyō-ko pakrā*. 「私は魚(定:PL)を獲った」。特に後者の文は、能格(-*ne*)と対格(-*ko*)とが共起するという、通言語的に特異な構文となっている。これはこの構文が、能格構造と対格構造との合流点にあるためであろう。

的に受け継がれて、(9)でも当該の NP は特定のである。^{†3}

特定の NP は、定的 NP とは異なり、予め談話内で確立しているわけではない。定性・特定性と現実態／非現実態との相同・相異を述べている Rijkhoff and Seibt (2005) は、確立性 grounding の面から定性・特定性を次のように纏めている。

- ・ 定的 NP は談話世界に「確立している grounded」
- ・ 不定的特定の NP は談話世界に「自ら確立する grounds itself」
- ・ 不定的不特定の NP は談話世界に「確立されていない not grounded」

以下の論考に先駆けて、特定性を、不定的 NP において問題となる概念であり、その NP が何らかの要因によって特定の個体に絞られているか否かを表す二項的素性 binary feature であるとして、理解しておく。

3. 先行研究

Lorimer (1935-8)・Berger (1998)といった、ブルシャスキー語に関する先行研究によると、この言語には定性のみを表すための標識が存在せず、定性はつねに数性と融合した概念として2種類の接尾辞(不定+単数：-an、定+複数：-ik)で示されるものである。

これらの接尾辞の記述は、数性のみを表す複数接尾辞とは別枠で扱われている。その記述はいずれの研究でも大差無く、-an は単数で不定の個体を表す標識、-ik は複数の要素から成る定の集団を表す標識といった述べ方をしている：qq.v. Lorimer (1935a: 46-53)、Berger (1998a: 39-41, 43-4)。

その、定性+数性を表す接尾辞は、以下の表1に示す通り、非対称的な分布をしている。

表1：定性+数性の接尾辞

	数	単数	複数
定性			
定			-ik
不定	-an		

ブルシャスキー語における特定性に関する記述は、管見の及ぶ限りではまだ無いようである。

4. 吉岡 (2007)の要約

特定性が定性の下位特性である点に注目し、吉岡 (2007: 125-35)においては、特定性の標示方法の考察を以下の手順で進めた：

^{†3} von Heusinger (2002: 263)によれば、関係特定性の場合、主語は全化量子や固有名詞などといった言語的実体に限られるという。ここでの(9)の主語：あの先生 は、von Heusinger の挙げている固有名詞に相当するものであるのか。それとも、定的主語であればその限りではないのであろうか。

1. -an に関して、フンザ方言のテキスト 41 篇(Berger 1998b: 2-175 ; 2 万語強)をコーパスとし^{†4}、当該接尾辞を検索して、テキスト中での分布を調査
2. その分布から、異なった表現方法の間の機能差を考察し、それぞれの実例と照合して検証
3. 更に、その表現方法を複数形の事例に当てはめ、同一の理窟が通用するかを検証

以下、2つの節に分け、まずは§4.1にて接尾辞-anの考察(1・2.)を示す。更に次の§4.2にて、接尾辞-ikの有無に絡んだ、複数形の形式での検証(3.)の顛末を述べる。^{†5}

4.1. 不定+単数 : -an

先行研究での記述では、-anは[*-definite, -plural*]を標示する接尾辞である。相補分布的に、程度形容詞／副詞の強意を表す同形の接尾辞も存在するが、対立すると考えられる形態素-ik (§4.2)が存在する以上、第1の機能は前者であると考えられる。無標の数が単数であるため、-anが用いられるのは基本的に、不定的であることを示すためであると考えられる。^{†6}

一方で、指示形容詞^{†7}は、「指示的 demonstrative → 定的」^{†8}であるため、必ず定的である。

従って、意味合い上での競合から、-anが付加された名詞を指示形容詞が修飾することは、基本的には無いと考えられる。

以下の表2が、コーパスから割り出した指示形容詞と接尾辞-anとの共起率である。この表は、指示形容詞を、その修飾している顕在的な名詞のスロットに-anが存在するか否かで分けてカウントし、各数値を左列と右列とに振り分けたものである^{†9}。遠称の指示形容詞の使用例が近称の指示形容詞と比較して圧倒的に多いのは、ブルシャスキー語が文脈指示に、基本的に遠称を用いるからである。

^{†4} これらのコーパスに関しては、筆者がテキストを電子化し、形態素分析・和訳を行ったものを用いた。

^{†5} 猶、吉岡 (2007)での考察も先行研究の一端として扱い、本稿での考察とは連続していないものとする。これを銘記しておきたい。様々な先行研究を土台としての吉岡 (2007)には、本稿での結論とは食い違う主張が含まれている。

^{†6} 普通、積極的に単数性を表すのは、単複同形の名詞に付加される場合にのみである。

^{†7} *khiné/gusé/guté*「この」; *iné/isé/ité*「その」; *khué/gucé/guké*「これらの」; *ué/icé/iké*「それらの」; それぞれ、順にH類/X類/Y類。(特に話者によっては)次に列挙した指示代名詞も、形容詞的に用いられる場合があるが、吉岡 (2007)での調査、並びに、本稿の調査では、これらの代名詞による修飾は数に含めていない: *khin/khos/khot*「これ」; *in/es/et*「それ」; *khu/khoc/khok*「これら」; *u/ec/ek*「それら」。

^{†8} 「典型的に指示詞で表現される直示的な特性は、指示対象へ聞き手の注意を向かわせ、導くのと類似した役割を果たす。これは、[+demonstrative]-[+definite]の間の必然的関連——前者が後者を暗示することを、示唆する。ゆえに、指示詞は必ず定的であると見做す。」(Lyons 1999: 21 ; 下波線は筆者による)

^{†9} コーパスから単数の指示形容詞を抽出し、それぞれの用例に関して、後続する要素との修飾関係の有無を調べ、修飾関係にあると判断できる場合に、被修飾語(主要部)名詞類に-anが付加されているか否かを調べた。主要部が省略されている事例や、指示形容詞自体が項主要部である(名詞的に用いられている)場合は、対象としなかった。対象例に関しては、本稿(22)・(23)も参照のこと。

表 2 : Berger (1998b)における指示形容詞と接尾辞-an との共起数(共起率)

指示形容詞		被修飾名詞 ^[+1]	-Ø	-an	計
近称	<i>khiné</i>	H	20 (87%)	3 (13%)	23
	<i>gusé</i>	X	17 (100%)	0 (0%)	17
	<i>guté</i>	YZ	70 (99%)	1 (1%)	71
遠称	<i>iné</i>	H	144 (99%)	2 (1%)	146
	<i>isé</i>	X	117 (98%)	3 (3%)	120
	<i>ité</i>	YZ	235 (97%)	8 (3%)	243
計			603 (97%)	17 (3%)	620

(吉岡 2007: 126)

けれどもしかし、共起している実例も皆無というわけではない：(10)。

- (10) *toólum asmáanćum bíćuṣiñ duwásami, bijilí*
 toól-um asmáan-c-um bíćuṣ-iñ-Ø d-√gús-ya-Ø-m-i bijilí-Ø
 there-ABL sky-ADE-ABL bolt-PL-ABS TEL-go.out-PL.θ-PF-AOR-3PL.Y lightning-ABS
- lam maními, asmáanulo qaráo maními,*
 lám √man-Ø-m-i asmáan-ul-e qaráo-Ø √man-Ø-m-i
 lightening become-PF-AOR-3SG.Y sky-LOC-POS thunder-ABS become-PF-AOR-3SG.Y
- toóruman yaaní qhaufnáak árkuṣe ité nazaaráan*
 toórum-an yaaní qhaufnáak ár-kuṣ-e ité nazaará-an-Ø
 that.much-EMP FIL frightful fearful-NLZ-GEN that:Y scene-AN-ABS
- maními ke in hairáan imái báí.*
 √man-Ø-m-i ké ín-Ø hairáan i-√man-č √bá-i-Ø
 become-PF-AOR-3SG.Y and he:REM-ABS surprised 3SG.HM-become-IMP COP:H-3SG.HM-RE
- 「空に稲妻が現れ、稲光が光り、雷鳴が起こって、そんなにも恐ろしいその光景
 になって、彼は驚いている。」 (Berger 1998b: #7-16)

この例で問題となっている項：*nazaaráan* (*nazaará* 「光景」+*-an*)は、初出の名詞ではあるのだが、しかし直前に指示形容詞 *ité* 「その」を取っている点で、*-an* に[-definite]という機能を想定することへの不具合が生じている。これに関しては事例も少なく、深い考察は現段階ではできないが、単数性のみを標示／強調しているのではないかと推測される。

猶、*-an* を付加することで[-definite]を表せるが、反対に[+definite]を明示する標識は存在せず、ただ単に裸の単数形を用いることで以て示されている。即ち、ブルシャスキー語では、単数形はデフォルトで[+definite]であると考えられる。

また、指示代名詞とは逆に、*hin/han/hik* 「1つの」(以後、*HIK* として纏める)という数詞と接尾辞*-an* とは、共起度が高い。表 3 は、その共起度合の高さを裏付ける、実例からの数値である。

表 3: Berger (1998b)の内の 39 テキスト^{†10}中での HIK と接尾辞-an との共起数(共起率)

被修飾名詞 ^[†1]		-∅	-an	計
HIK				
<i>hin</i>	H	7 (11%)	54 (89%)	61
<i>han</i>	XY	10 (7%)	133 (93%)	143
<i>hik</i>	Z	1 (14%)	6 (86%)	7
計		18 (9%)	193 (91%)	211

(吉岡 2007: 129)

ここからは、指示形容詞+*-an* の組み合わせ程の比率には及んでいないものの、HIK +*-an* が、ほぼ、その逆の傾向を示していることが判る。

HIK「1 つの」という数詞は、*-an* を伴わずに用いた際に、擬似不定^{†11}標識 *quasi-indefinite marker* として働き得る。(11)では、*-an* を伴っている HIK には囲み線・主要部名詞には下線を、*-an* を伴っていない HIK には二重囲み線・主要部名詞には同じく下線を施した。

(11)

<u>han</u>	<u>šaám</u> mo	<u>han</u>	<u>wáqt</u> anulo	un	gúimo		
<u>hán</u>	šaám-mo	<u>hán</u>	wáqt-an-ul-e	ún-∅	gu-í-mo		
<u>one:Y</u>	evening-POS:HF	<u>one:Y</u>	time-AN-LOC-POS	thou-ABS	2SG-EMP.PRN-GEN:HF		
<u>girámar</u>	<u>nukóonin</u>	<u>girám</u> cum	<u>júasulo</u>	<u>han</u>			
girám-ar	n-ku-μ-n-n	girám-c-um	√jú-as-ul-e	<u>hán</u>			
relative-DAT	go:SEQ-2SG-SEQ.PP-SEQ.PP	relative-ADE-ABL	come-INF-LOC-POS	<u>one:Y</u>			
<u>díšanulo</u>	<u>han</u>	<u>jakúne</u>	<u>báṭar</u>	<u>nikín,</u>	<u>yaaní</u>	<u>úne</u>	
díš-an-ul-e	<u>hán</u>	jakún-e	báṭ-ar	n-√gíy-∅-n	yaaní	ún-e	
<u>ground-AN-LOC-POS</u>	<u>one:X</u>	donkey-GEN	skin-DAT	SEQ-enter-PF-SEQ.PP	FIL	thou-ERG	
<u>han</u>	<u>bilásan</u>	<u>yeécóm</u> ^{†12}	<u>isé</u>	<u>yaaní</u>	<u>qaán</u>	<u>jakún</u>	
<u>hán</u>	bilás-an-∅	i-√yoóc-∅=√bá-a-m	isé-∅	yaaní	qaán	jakún-∅	
<u>one:X</u>	witch-AN-ABS	3SG.X-see-PF=COP:H-2SG-AOR	that:X-ABS	FIL	braying	donkey-ABS	

^{†10} 極めて特異な分布を示していると判断できる 2 つのテキスト(#36・41)を省いた。その特異性に関しては以下の表 A、および吉岡(2007: 128)参照のこと。

表 A: 偏りを見せるテキストでの HIK と不定接尾辞との共起数 (偏差値)

テキスト No.		36		41	
被修飾名詞 ^[†1]		-∅	-an	-∅	-an
HIK					
<i>hin</i>	H	0 (44.3)	1 (47.1)	1 (73.4)	0 (38.5)
<i>han</i>	XY	4 (132.1)	2 (43.9)	1 (64.3)	1 (39.3)
<i>hik</i>	Z	1 (132.8)	0 (45.0)	3 (321.4)	0 (45.0)
計		5 (124.7)	3 (43.5)	5 (124.7)	1 (36.4)

(吉岡 2007: 128)

これらの形式の分布は決して正規分布ではないが、この 2 つのテキストが、例外的である「HIK +不定」の実例数を増やしていることは、極端な偏差値から窺える。猶、この 2 つのテキストは同一インフォーマントから収集されたものである。

^{†11} この用語は Lyons(1999)に随った：「これ【間接的に不定性を示すこと】をするが、それ自体は[*-definite*]をコード化しない冠詞を、別の、『擬似不定冠詞 *quasi-indefinite article*』というラベルで記述する」(Lyons 1999: 36、【 】は筆者註)。

^{†12} ムルタザバード方言形：bám【COP-2SG-AOR】> =óm。

bim.

√b-i-m

COP-3SG.X-AOR

「或る晩の或る時間に、あなたが親戚の処へ行き、そこから戻って来ると、或る場所で、1頭の驢馬の皮膚【の下】に潜り込んだ1人の魔女を、あなたは見た。それは、『嘶く驢馬』(魔物の種)だった。」 (Berger 1998b: #13-11)

恐らく、-anのみを用いたのと HIK をも用いたのとでは、特定性の面で異なりを示すと考えられる。詰まり、-an が単独では、特定性に関して明示的には示唆していない([0 specific])のに対し、HIK は、特定である([+specific])ということを含意していると考えられる。よって、HIK と -an とが同時に用いられた時には、その名詞句の持つ定性・特定性の性質は、[-definite, +specific]ということになる。この機能差から、より意味を限定する機能を持つ HIK が用いられた際の -an の出現率が非常に高いのに比べて、より広汎な——上位概念に関する——機能を持つ -an が用いられていて HIK が用いられていない事例も多くあるといった、非対称的な分布が起こっているのであろう。

(12) <i>jáa</i>	<i>mimíi</i>	<i>milćine</i>	<i>káa</i>	<i>yeécum</i>	<u>han</u> _____
jé-e	RDP-mi-í-Ø	mi-lćin-e	káa	i-√yoóc-Ø-um	<u>hán</u> _____
I-ERG	EMP-1PL-EMP.PRN-ABS	1PL-eye-GEN	together	3SG.Y-see-PF-PP	<u>one:Y</u> _____
<u>waaqíáan</u>	<i>máar</i>	<i>bayáan</i>	<i>écam,</i>	<i>khóle</i>	
<u>waaqíá-an-Ø</u>	ma-ár	bayáan-Ø	i-√t-č-a-m	khól-e	
<u>event-AN-ABS</u>	2PL-DAT	explanation-ABS	3SG.Y-do-IMP-1SG-AOR	this.place-POS	
<i>bésan</i>	<i>miúmušo</i>	<i>ótase</i>	<i>qháas</i>	<u>zaruurátan</u>	
bés-an-Ø	mi-umús-ɔ-Ø	u-√t-as-e	qháas	<u>zaruurát-an-Ø</u>	
what-AN-ABS	1PL-tongue-PL-ABS	3PL.X-do-INF-GEN	special	<u>necessity-AN-ABS</u>	

apí.

a-√b-i-Ø

NEG-COP-3SG.Y-RE

「私達がこの目で見た或る出来事を、私があなた方に解説しましょう；ここには何ら、嘘を吐く特別な必要性はありません。」 (Berger 1998b: #1-1)

上の例文(12)では、下線を施した先行している -an 名詞句：*han waaqíáan* は[-definite, +specific]——《私達がこの目で見た出来事》という「特定(話者同定可能)」のもの集合の中の1つの(「不定(対者同定不可能)」)要素——であり、一方で下波線を施した -an 名詞句：*zaruurátan* は[-definite, -specific]——《可能性》という「不特定」の概念の集合の中の1つの要素——である。

この他に組み合わせとしては、[+definite, +specific]における HIK の使用も考えられる。但し、テキストを一覧した限りでは、既に定(既知)と成っている情報に HIK 「1つの」という数詞による修飾をする事例は少数である：qq.v. (20)・(21)。これは、その特性値を具えた概念をただ単純に、HIK や -an の付加された形式ではない、無標の単

数形を用いるだけで表せるからであろう。HIK が[+specific]を表すのだとしても、無標の単数は既に[+definite]をデフォルトで表しており、[+definite] → [+specific]であるため、特定性を表すために敢えて HIK を付加する必要性は、論理的に、無い。

猶、特定性が定性の下位に属しているため、当然のことながら、[+definite, -specific]という特性束は成立しない。

従って、定性・特定性に関する単数名詞の(端的な)形式を纏めると、以下表 4 の様になる。

表 4 : 定性・特定性の交点の単数名詞形式

	特定	不特定
定	(iné (/) hín) hír	
不定	hín híran	híran

hír 「男」; hín 「1つの」; iné 「その」

(吉岡 2007: 131)

4.2. 定+複数: -ik

定+複数は、-ik で標示される。

この標識の機能は先行研究によれば、[+definite, +plural]の標示である。^{†13}

- (13) *ámit*.....*wáqtulo* *jáa* *şapík* *şıca* *báa* *ke*
ámit.....*wáqt-ul-e* *jé-e* *şapík-Ø* $\sqrt{\text{şı}}\text{-}\check{\text{c}}\text{-a}$ $\sqrt{\text{bá}}\text{-a-}\emptyset$ *ké*
 which:Y time-LOC-POS I-ERG food-ABS eat:SG.X.OBJ-IMPF-1SG COP:H-1SG-RE REL
hikum *jótiñ-jótiñ* *burúmiñ* *uriñçin* $\overline{\text{ik}}$ *e* *hamiişá jáa*
hík-kum RDP+*jót-iñ* *burúm-iñ* *u-riiñ-çin-ik* $\overline{\text{ik}}$ *e* *hamiişá jé-e*
 one:Z-time EMP+small-PL.Y white-PL.Y 3PL.H-hand-PL- $\overline{\text{ik}}$ -ERG always I-GEN
káa *şaa míl* *numá* *áa* *káa* *şapík* *şıçién*.
káa *şaa míl* *n-√man-Ø* *a-é* *káa* *şapík-Ø* $\sqrt{\text{şı}}\text{-}\check{\text{c}}=\sqrt{\text{b}}\text{-}\check{\text{c}}\text{-ién-}\emptyset$
 together gathered SEQ-become-PF 1SG-GEN together food-ABS eat:SG.X.OBJ-IMPF=COP-3PL.X-RE
 「私が食事をする時はいつでも、小さくて白い手が一纏まりになって常に私を囲み、私と一緒に食事をする。」
 (Berger 1998b: #1-8)

ここで発話者は、*ámit wáqtulo* 「いつでも」という表現を伴って、-ik の付加されている対象: *uriñçinik* 「手」のことを語っており、これは既知情報が前提となっていることがはっきり読み取れる。但しこれは逆説的であって、この「手」が定([+definite])であるからこそ、複数接尾辞の他に -ik もが用いられているのであると説明されるべきであろう。^{†14}

但し複数の場合、単数とは違って、-ik の用いられていない形式が不定([-definite])であると断定することはできない。先に §4.1 で用いた論法を適用させると、非-ik の複

^{†13} 疑問代名詞に付加した場合は、例外的に[+definite]を表せない。

^{†14} cf. §5.2. 吉岡(2007: 133)にあるこの論理は、成立していない。ここで *ámit wáqtulo* 「いつでも」は、精々、話者同定可能性程度しか保証していない。

数形は、定である場合もあるということが言える。例えば：

- (14) *máa* *khué* *sis* *bélate* *ušúćoon*
má-e *khué* *sis-Ø* *bélate* *u-√šú-č=√bá-an-Ø*
 you-ERG these:H *people-ABS* how 3PL.H-eat:PL.H.OBJ-IMPF=COP:H-2PL-RE
 「あなた達はこの人達をどの様にして食べるのか」 (Berger 1998b: #5-28)

この(14)では、定である指示形容詞と非-ikの複数形が共起している。これらの例は枚挙に遑が無く、極めて一般的に用いられる表現である。詰まり、-ikを用いた複数形が定であるからと言って、即座に-ikを用いていない形式が不定であるとはならず、-anを用いた単数形の特定性が無記であったのと同様に、-ikを用いない複数形は、定性に関して何も述べていないもの([0 definite])であると考えられる。即ち、(14)のこの用例では、*khué* [+definite] + *sis* [0 definite] ⇒ *khué sis* [+definite]となっている。

一方、(15)が数詞(この場合、特定([+specific])であることを示している)と共起しているのに対し、テキストの導入部分である(16)の事例では、明らかに不特定([-specific])の複数であるだろう。言い換えれば、(15)では実体として眼前に特定のである7つの個体を指して言述しているのに対し、(16)では一般論であり、特定の何らかの「人」・「妖精」・「物」を想定しての叙述ではないと考えられる。ここから、複数性自体は特定性に関するデフォルトでは無記([0 specific])であるということの現れであると捉えられる。

- (15) *toóle nuúruṭinín sújo punárinē* *thaló* *bátumuč* *ke*
toól-e n-√h₂urúṭ-Ø-n-n sújo punár-iṅ-e *thaló* *bátu-muč-Ø* *ké*
 there-POS SEQ-sit-PF-SEQ.PP-SEQ.PP holy bloom-PL-GEN seven:X *bundle-PL-ABS* and
óćuman, *dáa gulgúl dáa gal ke súćuman.*
u-√t-č-Ø-m-an dáa gulgúl-Ø dáa gál-Ø ké √sú-č-m-an
 3PL.X-do-IMPF-AOR-2PL again gulgul-ABS again gal-ABS and bring-IMPF-AOR-2PL
 「そこに座って、聖なる花(青色をした電艇の一種)の7つもの花束を作り、更にグルグル(良い香りのする苔の一種)
 やガル(良い香りのする枳椇の一種)も持って来た。」 (Berger 1998b: #11-6)

- (16) *gaalibán but síse parítinće ke guté qísime*
yaalibán búṭ sís-e parí-tiṅ-c-e ké guté qísum-e
 certainly much *people-GEN* *faily-PL-ADE-POS* and this:Y sort-GEN
číziniće itibáar apí.
číiz-iṅ-c-e itibáar-Ø a-√b-ilá-Ø
thing-PL-ADE-POS trust-ABS NEG-COP-3SG.Y-RE
 「<語り出し> 恐らく殆どの人が、妖精を、またはその手の存在を、信じていないだろう。」 (Berger 1998b: #1-1)

定性・特定性に関する複数名詞の(端的)形式を纏めると、以下表5の様になる。

表 5 : 定性・特定性の交点の複数名詞形式

	特定	不特定
定	(<i>ué (/) altán</i>) <i>hírik</i> (<i>ué (/) altán</i>) <i>hirí</i>	
不定	<i>altán hirí</i>	<i>hirí</i>

hirí 「男達」; *altán* 「2つの」; *ué* 「それらの」
(吉岡 2007: 134)

5. 再検証

本章では、Tikkanen (1991)をコーパスとし、§4 に示した吉岡 (2007)での仮説を再検証する。

Tikkanen (1991)はフンザ方言(ハイダラバード方言)の物語であり、1989年に収集された全 506 文^{†15}(約 5 千語)の中篇お伽噺:「蛙の花嫁」(或いは、「3人の王子と妖精のサラースィル姫」)である。本検証に際しても、この物語資料を筆者が電子化・形態素分析・和訳したものをを用いた。

5.1. -an

Tikkanen (1991)からの次の例(17)を見ただけでも、接尾辞-an が定性・特定性や単数性と関係していることに関しては、まず疑いが無いであろう。

(17) *hin baadśáan bam. iné baadśáa iskén yúa*
hín baadśá-an-Ø √bá-i-m iné baadśá-e iskén i-i-úa-Ø
 one:H king-4N-ABS COP:H-3SG.HM-AOR that:H king-GEN three:H 3SG.HM-son-PL-ABS
bam.
 $\sqrt{bá}$ -an-m
 COP:H-3PL.H-AOR

「1人の王が居た。その王には3人の息子が居た。」 (Tikkanen 1991: #1-2)

物語の冒頭であるこの場面で、初出の *baadśáa* 「王:SG」は数詞 *HIK*・-an を伴い、次の文では指示形容詞を伴って-an を伴っていないこと、また、初出の *yúa* 「彼の息子:PL」も数詞を伴っていて、-an を伴っていないことを確認されたい。

まずは§4.1にて行った統計に倣って、Tikkanen (1991)での-an を数量的に、共起要素の面から調査する。その結果は、以下の表 6 のようになった。^{†16}

^{†15} 通し番号は 507 までであるが、途中、#337 が抜けているため、合計 506 文である。

^{†16} また、(i)の様に、*hár*「各」と併用される *HIK* に関しては、吉岡 (2007)では主要部(ここでは *qisume*)に-an を必要としないことを指摘しながらも、数に入れていた。

(i) *hólum bilásue akhí éción ke u uyeésar*
hól-um bilás-ɔo-e akhí i-√t-č=√bá-an-Ø ké ú-Ø u-√yoóc-č-ar
 outside-ADJ witch-PL-ERG in.that.way 3SG.Y-do-IMPF=COP:H-3PL.H-RE REL they:REM-ABS 3PL.H-see-IMPF-DAT

表 6 : Tikkanen (1991)における指示形容詞と接尾辞-an との共起数(共起率)

指示形容詞		被修飾名詞 ^[+I]		-Ø	-an	計
近称	<i>khiné</i>	H		0	0	0
	<i>gusé</i>	X		3 (75%)	1 (25%)	4
	<i>guté</i>	YZ		5 (100%)	0 (0%)	5
遠称	<i>iné</i>	H		38 (100%)	0 (0%)	38
	<i>isé</i>	X		39 (95%)	2 (5%)	41
	<i>ité</i>	YZ		34 (97%)	1 (3%)	35
計				119 (97%)	4 (3%)	123

ここでは、表 2 での数値や§4.1 での結論と概ね合致した——即ち、「指示形容詞と接尾辞-an とが共起し難い」という——結果が見受けられる。下の(18)は、非共起の例文である。

- (18) *isé* *ašdàre* *téelum* *yaaní* *qhat* *a* *n*,
isé *ašdár-e* *téel-um* *yaaní* *i-qhat-Ø* *á* *n-i-√t-Ø*
 that:X dragon-ERG there-ABL FIL 3SG.X-mouth-ABS ONO SEQ-3SG.X-do-PF
inaṭar *hamalá* *écar* *díimi*.
ín-aṭ-ar *hamalá-Ø* *i-√t-č-ar* *d-i-μ-m-i*
 he:REM-INS-DAT attack-ABS 3SG.Y-do-IMPF-DAT come:PF-3SG.X-AOR-3SG.X

「その竜はそれから口を開き、彼に向かって攻撃して来た。」 (Tikkanen 1991: #97)

uyeésoón *leekin* *u* *har* *han* *qisume* *jaanwàre*
u-√yoóc-č=√bá-an-Ø *leekin* *ú-Ø* *hár* *hán* *qisum-e* *jaanwár-e*
 3PL.H-see-IMPF=COP:H-3PL.H-RE but they:REM-ABS every one:Y sort-GEN animal-GEN
báṭar *giácóon*.
báṭ-ar *√giy-ya-č=√bá-an-Ø*
 skin-DAT enter-PL.Ø-IMPF=COP:H-3PL.H-RE

「『外の魔女(妖精の一種で、火から誕生する)』達は、人々が確かに目撃した通りにするのだが、一種種の動物の皮膚の下に潜り込むのである。」 (Berger 1998b: #10-1)

けれども、Enç (1991: 11)が「もしも文脈的に関連した個体の集合全体に全化がかかっているならば、その全化 NP は定的である」としていることから、*hár*「各」が修飾している NP は特定のであることが明らかであり、分布上揺れないものであるため、本稿での追調査に際しては、表中に含めなかった。Tikkanen (1991)にあった具体的な例は、次の(ii)のようなものである。

- (ii) *šurúu* *numá*, *čhindikuč* *mišijuč* *tayáar* *har* *han* *uyóon* *číz*
šurúu *n-√man-Ø* *chindí-kuc* *mišindí-kuc* *tayáar* *hár* *hán* *u+yoon* *číz-Ø*
 beginning SEQ-become-PF five:Z-day six:Z-day ready every one:Y all thing-ABS
u *juš* *qháa* *tayaarí* *étuman*.
ú-Ø *√jú-š* *qháa* *tayáar-i-Ø* *i-√t-Ø-m-an*
 they:REM-ABS come-OPT until ready-NLZ-ABS 3SG.Y-do-PF-AOR-3PL.H

「【料理が】始められ、5、6日間で全ての準備が、彼らの到着までになされた。」

(Tikkanen 1991: #178)

これらの例で HIK は、個別性 individuality を示唆している可能性が推測される。

次に示す表 7 は、表 3 と対応する位置を占めるべき、数詞 HIK と接尾辞-an との共起数を単純に調査した結果である。

表 7 : Tikkanen (1991)における HIK と接尾辞-an との共起数(共起率)

被修飾名詞 ^[+1]		-Ø	-an	計
HIK				
<i>hin</i>	H	1 (17%)	5 (83%)	6
<i>han</i>	XY	2 (9%)	21 (91%)	23
<i>hik</i>	Z	0	0	0
計		3 (10%)	26 (90%)	29

今度も、先の結論と同様の——「HIK が用いられている際に接尾辞-an が出現し易い」という——結果が現れている。共起例として、(19)を挙げる。物語のヒロインである蛙の登場シーンである。

- (19) *isé húnčace cí han yúrquan, mendák,*
isé hunc'c-e i'ci hán yúrquan-an-Ø mendák-Ø
 that:X arrow-ADE-POS 3SG.X-behind one:X frog-AN-ABS frog-ABS
yúrquan han isé nizáate akhil ne
yúrquan-an-Ø hán isé nizá-aṭ-e akhil n'i-√t'Ø
 frog-AN-ABS one:X that:X spear-INS-POS in.this.way SEQ-3SG.Y-do-PF
duún phat ayétum káa díimi.
d'√gún-Ø phát a'i-√t'Ø-um káa d-i'μ-m-i
 TEL:SEQ-pack-PF quitting NEG-3SG.Y-do-PF-PP together come:PF-3SG.X-AOR-3SG.X

「その矢の後ろ、1 匹の蛙が、その鏃に掴まって放さない儘に現れた。」

(Tikkanen 1991: #220)

更に、表 7 での例外的なものの中の 2 例に関しても、出現の法則が窺えた。結論を先に言えば、これらの例は悉く、指示形容詞と数詞 HIK とが共起している事例である。

以下の例文(20)・(21)を参照されたい：

- (20) *tórimuč no barénasar, isé han yátis*
tóri-muč-Ø n'u-√t'Ø √barén-as-ar isé hán i-yátis-Ø
 fragment-PL-ABS SEQ-3PL.X-do-PF look-INF-DAT that:X one:X 3SG.X-head-ABS
isé buṭ dayánum bim.
isé-Ø búṭ dayánum √b'i-m
 that:X-ABS much thick COP-3SG.X-AOR

「細切れにしてから見ると、その頭は非常に厚かった。」 (Tikkanen 1991: #100)

- (21) *ámit díšulo isé nizá ya bim ke, ité*
ámit díš-ul-e isé nizá-Ø i'√ya-Ø √b'i-m ké ité
 which:Y ground-LOC-POS that:X spear-ABS 3SG.X-obtain-PF COP-3SG.X-AOR REL that:Y
han *díšulo yaani akhúrut darían balilúm,*

hán	díš-ul-e	yaaní	akhúrut	darí-an-Ø	√bal'Ø=√b'ilá-m
one:Y	ground-LOC-POS	FIL	this.weight:Y	window-AN-ABS	fall-PF=COP-3SG.Y-AOR
<i>yumór,</i>	<i>yumór</i>	<i>balilúm.</i>			
<i>yumór-Ø</i>	<i>yumór-Ø</i>	√bal'Ø=√b'ilá-m			
small.hole-ABS	small.hole-ABS	fall-PF=COP-3SG.Y-AOR			

「その鑿の刺さったその場所には、1つの小さな穴が開いていた。」

(Tikkanen 1991: #392)

これらの例では、数詞 HIK が用いられているのに、主要部の名詞に -an が用いられていないのが窺える。それでもこの場合、特定性に関して矛盾は起こっておらず、ひたすらに定的であり、特定の NP が構成されていることになる。

従って、例外的な数詞 HIK と接尾辞 -an との非共起の実例は、Tikkanen (1991) の場合に、(指示形容詞によって示されている) 定性に基づいてその全てが片付くこととなる。即ち、より妥当な数詞 HIK と接尾辞 -an との共起度の表は、次の表 8 のようになる。

表 8 : Tikkanen (1991) におけるしかるべき HIK と接尾辞 -an との共起数(共起率)

HIK \ 被修飾名詞 ^[+1]		-Ø	-an	計
		<i>hin</i>	H	1 (17%)
<i>han</i>	XY	0 (0%)	21 (100%)	21
<i>hik</i>	Z	0	0	0
計		1 (4%)	26 (96%)	27

この表は見た通り、殆ど揺れの無い、実に整然とした結果を示している。唯一の例外である H 類の事例に関しても、例文(22)で、以下に説明する。

例文(22)は、例外的振舞いを示した文である。このように、数詞 HIK があって接尾辞 -an が共起していない場合であっても、文脈的にその NP が定的である場合には当然、数詞 HIK は擬似不定標識(q.v. §4.1)として働き得ない。これは吉岡 (2007) で記述できていなかった部分である。

(22) <i>ine</i>	<i>sénimi:</i>	<i>ye</i>	<i>khiné</i>	hin	<i>ái</i>
ín-e	√sén-Ø-m-i	yé	khiné-Ø	hín	a-i-Ø
he:REM-ERG	say-PF-AOR-3SG.HM	INTERJ	this:H-ABS	one:H	1SG-daughter-ABS
<i>bom.</i>					
√bá-o-m					
COP:H-3SG.HF-AOR					

「彼は言った：『さあ、この者は私の一人娘^{†17}だった』。」 (Tikkanen 1991: #471)

hín a-i [one:H 1SG-daughter] という名詞句は、「[∃x ∧ 私の娘(x)] という性質を満たす x が、1つ」ということを意味しているが、ここでは「x ∈ X、1つの x」——「私の娘(達)

^{†17} 日本語でも、「1人」が単数的意味合いを表す分析的表現：「1人の娘」ではなく、複合語による唯一の unique 意味合いの表現：「一人娘」が、より妥当となる。

の1人」という意味合いではなく、「 $x \in X \wedge x \Leftrightarrow X (\because 1つのx)$ 」——「1人(だけ)の私の娘」といった表現を担っている。これは、数詞 HIK が、Schwarzschild (2002)の言う「単独不定物 singleton indefinite」の標識として用いられている例であり、この場合の HIK が担っている最大限の機能は、「指示的 indexical/referential」なものではなく、「量化的 quantificational」なものとして解釈されるべきである。それは、帰属的 NP であり、特定性の概念を構築する属性の内の1つである、唯一性 uniqueness を示しているものである^{†18}。

従って表8には含めているが、HIKの機能の、他の例との相違を考慮に入れると、(22)、或いは(22)のような例も、除外されるべきであろう。その場合、トートロジカルに疑似不定標識 HIK と共起するのは -an を伴った形式のみということになり、そして同時に、名詞を修飾する HIK が概ね疑似不定標識として用いられるものである——ということが数字上から明確に窺える。

また、(23)のような例文は、数詞 HIK が名詞的に用いられており、主要部名詞が存在しないため、数に含めていない。

- (23) *nimćum* *ićiate,* *ité*

<i>iné</i>	<i>hine</i>
<i>iné</i>	<i>hín-e</i>
<i>that:H</i>	<i>one:H-GEN</i>

gáre
- √ní-Ø-um-c-um i'ci-aṭ-e ité

<i>iné</i>	<i>hín-e</i>
<i>that:H</i>	<i>one:H-GEN</i>

gár-e
- go-PF-PP-ADE-ABL 3SG.Y-behind-INS-POS that:Y

<i>that:H</i>	<i>one:H-GEN</i>
---------------	------------------

 marriage-GEN
- bandobást* *basími.*
- band+o+bást-Ø √bas-Ø-m-i
- preparation-ABS be.down-PF-AOR-3SG.Y
- 「行ってから後、その者のその結婚の準備は整った。」 (Tikkanen 1991: #83)

このように、定性を標示できる指示形容詞と -an とは共起せず、特定性を標示できる数詞 HIK が用いられた際に -an が用いられるという点を考えると、やはり -an は不定性の標識であると見做せる。吉岡 (2007)での主張に沿う結果となった。

5.2. -ik

一方、接尾辞 -ik は 4 箇所でのみ窺えた。以下にその全例を示す。

- (24) *muú khúe* *gáne* *huncéncíike* *káa* *jamén* *dusú,*
- muú khú-e gán-e hunc'inc-ik-e káa jamé-an-Ø d'√sú-Ø
- now they:PRO-GEN way-POS arrow-PL-ik-GEN together bow-AN-ABS TEL-bring-IMP:SG
- sénimi.*
- √sén-Ø-m-i
- say-PF-AOR-3SG.HM

^{†18} §2 に名前の挙げた指示性 referentiality や話者同定可能性 speaker identifiability も、唯一性と同様、構成属性の1つであると言える。それぞれの属性を単一で十全な構成要素と見做したり、或いは組み合わせで構成しているとしたり、研究者によっても意見は同一でない。猶、先述の通り、作用域は異なった側面からの把握である。

『今直ぐ、彼らのために矢を数本と弓を1張、持って来い』と言った。」

(Tikkanen 1991: #9)

- (25) *huncénc^{ik}e* *káa* *jamén* *su,* *sénimi.*
hunc-inc-ik-e *káa* *jamé-an-Ø* $\sqrt{sú-Ø}$ $\sqrt{sén-Ø-m-i}$
 arrow-PL-^{ik}-GEN together bow-AN-ABS bring-IMP:SG say-PF-AOR-3SG.HM
 「『数本の矢と1張の弓を持って』と彼は言った。」 (Tikkanen 1991: #10)

- (26) *huncénc^{ik}e* *káa* *jamén* *íne* *dusúmi,*
hunc-inc-ik-e *káa* *jamé-an-Ø* *ín-e* *d'√sú-Ø-m-i*
 arrow-PL-^{ik}-GEN together bow-AN-ABS he:REM-ERG TEL-bring-PF-AOR-3SG.HM
dusún, *uu* *yáte* *tháaje* *tésatar*
d'√sú-Ø-n *ué-Ø* *i'yát-e* *tháañ-e* *téš-aṭ-ar*
 TEL:SEQ-bring-PF-SEQ.PP those:H-ABS 3SG.Y-upwards-POS palace-GEN roof-INS-DAT
níman.
 $\sqrt{ní-Ø-m-an}$
 go-PF-AOR-3PL.H
 「数本の矢と1張の弓とを彼が持って来てから、彼らは王宮の屋根の上に行った。」 (Tikkanen 1991: #11)

例文(25)・(26)での-ikを伴った表現は、(24)を受けて同一の使用を続けているものだと考えられる。(24)の前に *huncénc* 「矢:PL」は登場しておらず、また、統語論的に並置関係にあって、文脈的にも価値の等しい *jamé* 「弓」が、接尾辞-anを伴って *jamén* という形式で現れている点から、この *huncéncik* を定的であると読むことは難しい。そして或いは特定性を標示しているとも、何か特殊な矢が用いられているなどといった(後方照応的機能を思わせる)補足説明も上って来ないために考え難く、寧ろ、積極的な複数性標示であると読むのが精々ではないだろうか。

- (27) *díwas,* *téelum* *yar* *ne*
d'i-√bás-Ø *téel-um* *i-yar* *n'i-√t-Ø*
 TEL:SEQ-3SG.HM-remain-PF there-ABL 3SG.HM-before SEQ-3SG.Y-do-PF
niininin *barénasar,* *hitháane* *hikum*
n-i-μ-n-n-n $\sqrt{barén-as-ar}$ *hík-tháan-e* *hík-kum*
 go:SEQ-3SG.HM-SEQ.PP-SEQ.PP-SEQ.PP look-INF-DAT one:Z-place-POS one:Z-time
sís^{ik}e *buáate* *šabárane* *bulá* *déljám,*
sís-ik-e *buá-aṭ-e* *šabár-an-e* *bulá-Ø* *d'i-√l'č=√bá-an-m*
 people-^{ik}-ERG cow-INS-POS pologround-POS polo-ABS TEL-3SG.Y-hit-IMPF=COP:H-3PL.H-AOR
buáate *bulá* *déljám.*
buá-aṭ-e *bulá-Ø* *d'i-√l'č=√bá-an-m*
 cow-INS-POS polo-ABS TEL-3SG.Y-hit-IMPF=COP:H-3PL.H-AOR
 「残されて、それから前に進んで見ると、或る場所で人々が牝牛に乗ってポロに興じていた。」 (Tikkanen 1991: #406)

(27)は殊更に、複数性標示としての機能が推測される事例である。と言うのも、sis「人、人々」という名詞が単複同形であり、その数的区別をせんとした場合には、所謂「定性+数性を標示する接尾辞」を用いるのが規則的であるためである(§4.2)。この(27)で、当該の名詞 sisik は初出の対象を指示しており、定的であるとは考えられない。

6. 結論

Tikkanen (1991)をコーパスとして用いた本稿での考察から判る範囲での、これら 2 つの接尾辞に関する結論は、先行研究・修士論文(吉岡 2007)とは若干異なり、次の 2 点に纏められる。

- 接尾辞-an は、不定+単数標識である
- 接尾辞-ik は、複数標識である

これは、非対称的であった-an-ik の機能が、これまでの記述よりも更に懸け離れているものである——という結論となっている。今までの研究との相異点・相同点は、次のように示せる。

表 9：先行研究と本稿との主張の相異点(□)・相同点(○)

	先行研究	本稿
-an	○ 単数 ○ 不定	○ 単数 ○ 不定
-ik	○ 複数 □ 定	○ 複数 □ (非定)

従って、表題にある「特定性」という観点にシフトさせて結論付けると、以下のよう可以说ができるであろう。ブルジャスキー語における特定性標示は、α) 特定のことは、指示形容詞・数詞によって任意に示される;β) 不特定のことは、単数 NP の場合には、接尾辞-an の使用・数詞の不使用の組み合わせで間接的に標示され、複数 NP の場合には明示されない。

表 4・表 5 を基に、今回の考察の結論を含めて図示すると、以下の図 1 のようになる。

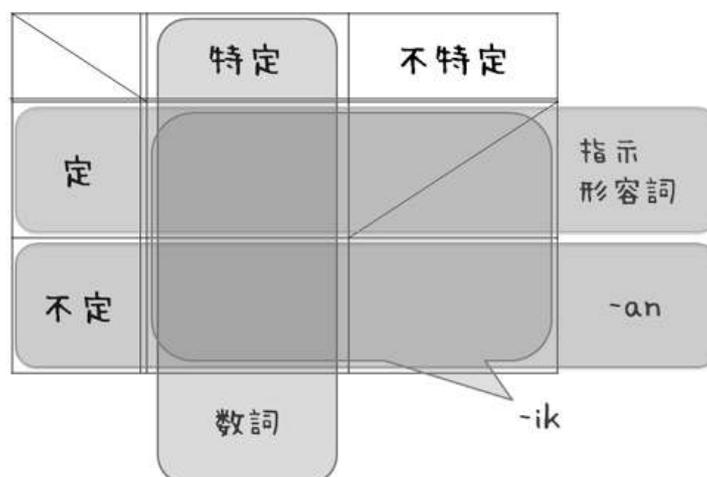


図 1：定性・特定性に関わる各要素の縄張り

7. おわりに

対称性を考えると、そもそもは接尾辞-ikも(例えば)特定性を示していた可能性が高いであろう。但し複数形がそれ自体、定不定・特定不特定にさほどの関心を寄せていないようにも見受けられ、ともすればその無関心さからの影響で、-ikの機能もが減退してしまったことが考えられる。即ち、-ikが特定性を標示していたのだとしても、それは冗長な標示であり、有効性が(例えば-anに対しても)低い、情報量の少ない標識でしかない。一方で、接尾辞-anが不定性を標示するのであるならば、まず「定ではない」ということも示し、更に「[-definite] → [0 specific]」であるということも示すこととなって、情報量は断然多い。所謂「量の公理 the Maxim of Quantity」から-ikが次第に不要となって来ている可能性を考慮に入れれば、Berger (1998b)・Tikkanen (1991)といったテキストにおいての、-anと-ikとの出現数の大差も道理であるのではないだろうか。

今回扱ったコーパスは、1989年収集という、比較的新しいものであった。僅かながら先行研究の記述とは異なった機能が導き出されたため、今後は、更に多くの、そして更に古い年代(最古のテキストは20世紀初頭)の物語資料をも対象として、これらの接尾辞の当時の用法・機能を調査して行くことが必要であろう。

また、確立性に関して考えれば、Hopper and Thompson (1980)に、他動性(など)と前景/背景との関連性が説かれている。Tikkanen (1991)で目算した限りでは極端な傾向が見受けられなかったが、これから、こういったアプローチでも特定性との関係性を調べて行けるかも知れない。例えば完結動詞・人称動詞とNPとの相互分布を探るのも有意な偏差が現れる可能性があるであろう。

8. 確認調査

2007年8月18日に-an・-ikに関しての簡単な聞き取り調査を行った。以下の表10が調査情報である。出身地のアミナバード、調査地のバルティットは、いずれもフン

ザの集落名である。

表 10 : 調査インフォーマント

略称	性別	年齢	出身地	教育	職業	調査地	媒介言語
E. K.	男	31	Aminabad	B.A.	城内ガイド	Baltit	ウルドゥー語

調査で用いた最小対の文章と、それに対する訳とを以下に挙げる。

- (28) a. *jáa huk bi.*
jé-e húk-Ø √b-í-Ø
 I-GEN dog-ABS COP-3SG.X-RE
 「私は犬(SG)を飼っている。[mērā kuttā hai.]」 (調査 2007E.K.)
- b. *jáa húkan bi.*
jé-e húk-an-Ø √b-í-Ø
 I-GEN dog-AN-ABS COP-3SG.X-RE
 「私は犬(SG)を飼っている。[mērā kuttā hai.]」 (調査 2007E.K.)
- (29) a. *jáa hukái bié.*
jé-e húk-ái-Ø √b-íé-Ø
 I-GEN dog-PL-ABS COP-3PL.X-RE
 「私は犬(PL)を飼っている。[mērē kuttē hāi.]」 (調査 2007E.K.)
- b. *jáa hukáik bié.*
jé-e húk-ái-ik-Ø √b-íé-Ø
 I-GEN dog-PL-IK-ABS COP-3PL.X-RE
 「私は犬(PL)を飼っている。[mērē kuttē hāi.]」 (調査 2007E.K.)

(28)は単数の例で、(29)は複数の例である。また、それぞれ a.が無標の例で、b.が-an・-ik を伴っている例である。

上の例文対の訳出上では差異は無い。但し、インフォーマントは(28a・b)の間の異なりを、次のように説明した：前者は、話題にしている犬が現前に居るか、或いは(例えば家など)といった遠隔地に居るけれども、聞き手がその犬を以前に見ている場合に用いられる文である；後者は、話題にしている犬が遠隔地に居て、聞き手はその犬を未だ見知っていない場合に用いられる。それ以上の異なりに関しては内省ができなかったようであるが、この意見は少なくとも本論文の結論からは外れていない。

但し、(28)に続いて訊ねた(29a・b)についての回答も、前者は現前／聞き手同定可能であり、後者は聞き手同定不可能であるのだというものであった。念のために再考を促したが、見解は変更されなかった。これは先行研究や本論文の結論とは相反する見解である。先行した(28)との間で混乱が生じている可能性も考えられるため、再調査の必要性があるだろうが、現段階ではネイティブによる異論も存在したという事実を報告しておく。

猶、(28)に関連した、数詞を加えた2文の成否判断の結果を以下に(28c・d)として示す。

- (28) c. **jáa han huk bi.*
jé-e hán húk-Ø √b-í-Ø
 I-GEN one:X dog-ABS COP-3SG.X-RE
 (非文) (調査 2007E.K.)
- d. *jáa han húkan bi.*
jé-e hán húk-an-Ø √b-í-Ø
 I-GEN one:X dog-AN-ABS COP-3SG.X-RE
 「私は 1 匹の犬を飼っている。[mērā ēk kuttā hai.]」 (調査 2007E.K.)

この単純な文での判断結果は、表 8 とも合致しており、幾らかの裏付けと見做せるかも知れない。

【略号】

ABS	absolutive	INTERJ	interjection	REM	remote
ADE	adessive	NEG	negative	SEQ	sequential
AOR	aorist	NLZ	nominalizer	TEL	telic
APPL	applicative	NOM	nominative	X	X class
COP	copula	OBJ	object	Y	Y class
DAT	dative	ONO	onomatopoeia	Z	Z class
DI.PAST	direct past	PF	perfect	1	1 st person
EMP	emphatic	PL	plural	2	2 nd person
ERG	ergative	POS	positional	3	3 rd person
FIL	filler	POSS	possesive	=	clitic boundary
GEN	genitive	PP	participle	+	compound boundary
H	H class	PRN	pronominal	´	high pitch accent
HF	HF class	PRO	proximal	ː	guna-like vowel slot
HM	HM class	PROG	progressive	θ	oriented theme
IMP	imperative	RDP	reduplication	ь	palatalizer
IMPF	imperfect	RE	real	μ	mora element
INF	infinitive	REL	relative	√	(verbal) root

【参考文献】

- Berger, Hermann (1998) *Die Burushaski-Sprache von Hunza und Nager. Teil I: Grammatik* (1998a); *Teil II: Texte mit Übersetzungen* (1998b); *Teil III: Wörterbuch* (1998c). Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- Enç, Mürvet (1991) The Semantics of Specificity. *Linguistic Inquiry* 22: 1-25.
- von Heusinger, Klaus (2002) Specificity and Definiteness in Sentence and Discourse Structure. *Journal of Semantics*, 19: 245-74.
- Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson (1980) Transitivity in Grammar and Discourse. *Language*, 56/2: 251-99.
- Ioup, Georgette (1977) Specificity and the Interpretation of Quantifiers. *Linguistics and Philosophy*, 1/2: 233-45.
- Kagan, Olga (2006a) Specificity as Speaker Identifiability. In: Beáta Gyuris, László Kálmán Chris Piñón and Károly Varasdi (eds.), *Proceedings of the Ninth Symposium on Logic and Language*: 82-9. Budapest: Research Institute for Linguistics, Hungarian Academy of Sciences Theoretical Linguistics Programme, Eötvös Loránd University.
- _____ (2006b) *Specificity as Speaker Identifiability*. Handout for the Ninth Symposium on Logic and Language.
- Lorimer, D. L. R. (1935-8) *The Burushaski Language. vol.I: Introduction and Grammar* (1935a); *vol.II: Texts and Translations* (1935b); *vol.III: Vocabularies and Index* (1938). Oslo: H. Aschehoug & Co. (W. Nygaard).
- Lyons, Christopher (1999) *Definiteness (Cambridge Textbooks in Linguistics)*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rijkhoff, Jan and Johanna Seibt (2005) Mood, Definiteness and Specificity: a Linguistic and a Philosophical Account of their Similarities and Differences. *Tidsskrift for Sprogforskning*, 3/2: 85-132.
- Schwarzschild, Roger (2002) Singleton Indefinites. *Journal of Semantics*, 19: 289-314.
- Tiffou, Étienne (1999) *Parlons Bourouchaski*. Paris: L'Harmattan.
- Tikkanen, Bertil (1991) A Burushaski Folktale, Transcribed and Translated: The Frog as a Bridge, or, The Three Princes and the Fairy Princess Salaasír. *Studia Orientalia*, 67: 65-125.
- 吉岡乾 (2007) 「ブルシャスキー語フンザ方言形態論」 修士論文, 東京外国語大学大学院 地域文化研究科.

2007 年度
修士論文 要旨

モンゴル語の一人称代名詞 MAN について

チュルーンバートル セレンゲ
(言語文化コース アジア第一専攻)

本論文では、MAN という形式が用いられる全用法について論じた。具体的には、従来の研究書で「一人称複数代名詞の斜格語幹」と考えられてきた、MAN について通時的・共時的に考察した。通時的な研究では、一人称代名詞 MAN の用法を明らかにするために、属格形を中心に通時的に考察を行った。現代語については、特にハルハ方言に限って、MAN という形式が用いられた様々な用法を検証することを本研究の目的とした。現代語の一人称複数代名詞に man' と bid の 2 種類があり、通時的に man と bida/ bidan という形式で見られる。共時的に見られる様々な用法での man' 形式と通時的に見られる man 形式を MAN で統一し、また bida/ bidan/ bid という形式を BID で統一して、簡略化した。

以下に論文の概要を具体的に述べる。

まず第 1 章では、MAN についての先行研究を取り上げた。モンゴル語の一人称複数代名詞 BID と MAN の包括形と除外形の区別については、研究者により指摘が一致しないことが分かった。

第 2 章では、一人称代名詞 MAN の通時的な研究を行った。まず、MAN と BID の形式の変遷を検証した。次に、頻度の変遷を格助詞の付いた形式ごとに調べた。そして、MAN と BID の語幹が除外形で使われる割合と包括形で使われる割合を検証した。これらを研究するために、分析資料として『元朝秘史』をはじめ、17 世紀、19 世紀、1987 年、2003 年の作品を扱った。最後に、各文献での MAN と BID の属格形の意味の差異を検証した。まず、現代語での属格形の用法を明らかにし、その基準を定めた。さらに、現代語から遡って、各時代での意味の差異を調べた。現代語の属格形を詳細に検証するために、合計 8 冊の本を分析資料として扱った。結果として以下のことが分かった。

現代語の MAN の属格形は包括形にも除外形にも用いられるが、その基本的な意味は、話し手が属する集団と別の集団を区別し、話し手の側を指し示すことである。BID は集団を区別しない一人称複数を表す。この意味の差異で使い分けられるようになったのは 19 世紀からである。それ以前の時代では、MAN は話し手の側を指す用法に限られたが、BID は話し手の側を指す用法としても、ある種の区別のない一人称複数の用法としても用いられていた。

第 3 章では、MAN の共時的な研究を行った。文学作品とインターネット公開チャットサイトの用例により MAN が使われる様々な形式を検証し、その用法を明らかにした。さらに、各形式の世代差と男女差を明らかにするために、ウランバートル市内でアンケート調査を行った。また、各形式の地域差を明らかにするために、モンゴル国内の中心部と西部と東部の 3 地域でアンケート調査を行った。

現代語では、6つのタイプが見られた。以下に、MAN が用いられた各形式とその特徴を示す。

まず、「MAN-格助詞」形式は、話し手が属するある集団と別の集団を区別し、話し手側の集団を指し示すために用いられる。また、一人称単数を表す場合がある。このように、単数を表す用法は、現代語前期では見られないが現代語後期ではかなり頻繁に用いられるようになっている。

次に、「MAN+後置詞 met+格助詞」形式は、話し手は自分があるレベルより低いと判断した場合に現れる一人称代名詞である。一人称単数にも、一人称複数にも用いられる。一人称複数の場合は、話し手がその指示対象となる人々が自分と同じレベルであることを想定した上で、用いる。

また、「MAN+格助詞+所属小辞」という形式がある。これは、俗語的用法で、男性の友人同士にのみ用いられる一人称単数形である。一人称複数を表す場合は「MAN+疑問詞 xed」という形式を使う。

「MAN+人間名詞」という形式がある。それは一人称代名詞の用法ではなく、指示代名詞的な用法である。MAN が指示代名詞として使われた場合は、話題にしている人(々)のことを話し手と聞き手の両方とも分かっていて、さらに、その話題にしている人(々)を強調する意味が表される。つまり、この形式の特徴は、話し手と聞き手が話題にしている人を強調することである。

「MAN-複数接尾辞 uus」という形式がある。この形式は、出現回数は少ないが、現れたすべての用例が一人称複数を表した。しかし、非常に口語的な用法であることがわかった。

最後に、「ma+複数接尾辞 nar」という一人称複数を表す形式は分析資料には現れない。この用法について、国内アンケート調査を行う際、地元の人にはじめて聞いた。そのため、この用法について、文献から検証することはできない。

そして、アンケート調査により、モンゴル国内の特徴を示した。

先行研究では、形式の変遷と起源についての記述が多く見られるが、本研究では実際の用例を用法の面から分析する方法をとった。そうすることで、これまでになかった、新しい側面からの検証・考察ができた。

福島方言の記述的研究—動詞を中心に—

幡 早夏

(言語文化コース 日本専攻)

本稿では福島方言の動詞体系について、質問調査及び筆者が作成したコーパスをもとに、その形態、用法について取り上げた。

第1章では、福島方言の使用地域や人口、方言区画など、本稿の前提条件となる福島方言の背景を述べた。第2章では、福島方言の先行研究をまとめた。福島方言に関する研究は、時代の古い文法記述のみで、現時点の福島方言の体系を記述したものはないこと、それらは、言語学的、日本語学的な観察に乏しいことを指摘した。さらに、近年の福島方言研究においては、方言の伝播に着目した研究は比較的多くなされているが、個々の事象を掘り下げて言及している研究は見当たらないこと、近年日本語学や近隣方言の研究は進んでいるが、福島方言については不十分であること、質問調査のみで研究を行っているものが多く、自然談話資料からデータを集めて実証的に観察した研究はほとんどないことを指摘した。これらをふまえて、第3章では、質問調査の結果から動詞形態論をまとめ、第4章以降では、コーパスからの用例を基に詳細な分析を行った。

第4章から第7章までの概要を述べる。

第4章では、ヴォイスについて記述した。使役表現、受身表現、可能表現を扱った。ここでは、使役表現と受身表現について述べる。

使役表現は、動詞語幹に接辞「サセ」と「ラセ」を後接させて表す。南会津東方言では「ラセ」が優勢である。使役の被使役者は助詞「 ϕ ・サ・ントコ」によって表される。標準語で被使役者が「を」で表される使役文では、「 ϕ 、ントコ」が用いられ、「に」で表される使役文では「ニ、サ」が用いられることをまとめた。受身表現は、動詞語幹に「ラレ」を後接させて表す。受身の相手(当該動作の動作主)は、「ニ」によって表される。

第5章では、テンス・アスペクトについて記述した。ここでは主に、完成相過去の「ッタ」と東北方言に特有のテンス形式「タッタ」を扱った。「タッタ」についてまとめる。

東北方言特有のテンス形式「タッタ」は、福島方言も同様に発話時現在において出来事がすでに完成していることを明示する場合に用いられる。さらに詳しくは、①現在パーフェクトでは使用できない、②体験(目撃)したことのみ使用できる、③結果が残存していない場合にのみ用いられる、という特徴がある。

第6章では、否定表現について記述した。ここでは、否定形式の確認と、否定形式を用いる否定疑問文及び義務表現も取り上げた。ここでは否定疑問文について述べる。

否定疑問形式には、標準語の「ではないか」に訳されている「デナイ・チャナイ・ベシタ・ベ」、「のではない」に訳されている「ンデナイ・ンチャナイ」がある。

第7章では、モダリティについて記述した。各節では、推量・意志表現、条件表現、終助詞を扱った。ここでは、推量・意志表現と条件表現についてまとめる。

まず、推量・意志表現について述べる。推量・意志表現は「べ」によって表される。「べ」は活用語終止形に接続する。その際、地理的な差異として、信達方言は促音化を起し、南会津東方言では撥音化を起す。「べ」の用法には、①意志系用法と②推量系用法がある。これらを下位分類すると、意志系用法は、意志と勧誘、推量系用法は、推量、確認、確認要求に分けられる。

次に、条件表現についてまとめる。順接の仮定条件には「バ」「タラ」「タツケ(カ°)」「ト」「ダラ／ナラ」が使用される。「バ」は「一般的因果関係」の表現であり、真偽判断のモードのみ共起可である。「タラ」「タツケ(カ°)」は「時空間に実現する個別的事態」の表現であり、既実現の事態を表す場合にのみ「タツケ(カ°)」を用いることができる。「ダラ」「ナラ」はある事態を真であると仮定して提示する表現である。「ダラ」と「ナラ」の使い分けはない。「ト」は「現実に観察される継起的な事態」の表現であり、前件の事態に伴って起こるもう一つの事態を表す。なお、「バ」が使用できる文でも、事態の実現の確実性をはっきりしない場合には「タラ」が用いられる。「ト」で表せる文でも、事態を一般化して捉える場合には「バ」が用いられる。

以上が本論文で述べたことである。福島方言の動詞の文法事項について、体系的に記述を行った。質問調査と実際の談話の中での使用例を分析し、質問調査ではうまく採集できなかった事象をコーパスで補い、逆にコーパスにはあまり現れなかった事象を質問調査で補うことによって、より正確なデータを集めることができたと考える。先行研究における近隣方言の詳細な分析を踏まえ、研究の進んでいる日本語学の理論を用いて福島方言の動詞活用や接辞について、形態、意味・用法について記述した。その結果、福島方言には、テンス・アスペクトや推量・意志表現などには東北方言的な性格がみられるが、ヴォイスに自発表現が見られないことや否定表現については関東方言的な性格もみられることが明らかになった。すなわち、福島方言が地理的にも東北地方と関東地方の中間にあり、それゆえに方言も同様に両方の性格を併せ持っていることは予想されるが、実証的な方法による観察からそのことを明確に示した。今後は、そのような福島方言をより詳細に研究することによって、東北及び関東方言全体の特徴と変遷をさらに明らかにすることができるだろう。

日中オノマトペの対照研究 —マンガを資料とした対照研究—

黄 慧

マンガを扱った日中対照研究はこれまであまりなされていなかった。本稿ではオノマトペが多用されるマンガを資料として扱い、日本語のマンガおよびその中国語訳本を用いてオノマトペのデータを収集し、考察を行った。本稿は日中両言語におけるオノマトペの音韻形態的特徴を踏まえたうえで、オノマトペの翻訳問題について述べた。

本稿の構成

第1章では、本稿執筆の動機、研究背景に加え、本稿における表記について述べた。第2章では、日本語、中国語の順に先行研究におけるオノマトペの定義、分類について述べた後、オノマトペの音韻形態的特徴および翻訳問題を扱った先行研究をまとめた。第3章では、研究方法について述べ、第4章では、本稿で収集したマンガにおけるオノマトペの形態的特徴および類型についての考察を行った。第5章では日本語から中国語に翻訳する際の傾向、問題点等について考察を行った。最後に第6章では、本稿で考察した結果をまとめた。

本稿では、日本語のマンガから3550語のオノマトペおよびその中国語訳2763語を収集することができた。日本語のオノマトペに対し、中国語に翻訳する際、787語のオノマトペが翻訳されていない。さらに中国語のオノマトペに翻訳されたものが1934語、オノマトペ以外に翻訳されたものが278語、判断不能だと思われるものが21語見られた。

本稿では類型を考察するにあたり、①辞書型、②同類型、③変異型、④造語型に分類し、分類基準を設けた。本稿での分類基準に従い、日本語のマンガにおけるオノマトペを分類したところ、辞書型と同類型を含む習慣的オノマトペが83%を占めることが分かった。先行研究では、日本語のオノマトペは、豊富な造語力を持ち、このように造語されたものを他の言語に翻訳するのは非常に難しいと述べているが、日本語の造語と翻訳の難しさは直接関係していないことが明らかになった。

オノマトペの形態を見る際に、本稿ではまず単純に繰り返されるものを①単純反復形、一部のみが反復されるものを②修正反復形、二つ以上のオノマトペが組み合わさったものを③合成形、反復しないものを④単一形と4つに分類し、データからは反復形が日中両言語において、全て半数以上を占めることが分かった。日本語のオノマトペにおいて、「A形」や「AB形」は小説などの文脈には現れにくく稀であると指摘している先行研究と、本稿での考察は違う結果になった。本稿で扱ったデータでは、829語の単一形「A形」と「AB形」の用例が観察された。

次に、日本語のオノマトペが中国語に翻訳されたものについて考察を行った。これは次のように分類できる。①オノマトペに翻訳されるもの、②動詞に翻訳されるもの、③形容詞に翻訳されるもの、④副詞に翻訳されるもの、⑤数量詞を含むものに翻訳されるもの、

⑥解釈文に翻訳されるもの、⑦成語や熟語に翻訳されるもの、⑧感嘆詞に翻訳されるもの、⑨応答詞に翻訳されるもの、⑩疑問文に翻訳されるもの、⑪名詞、人称代名詞に翻訳されるもの、⑫記号などがある。

日本語のオノマトペから中国語のオノマトペに翻訳されたものには、主に三つのパターンがある。1つ目は、日本語の習慣的なオノマトペを中国語も対応する習慣的オノマトペに翻訳するもの、2つ目は、日本語の臨時的オノマトペを中国語の習慣的オノマトペに翻訳するもの、3つ目は日本語のオノマトペの音を中国語の漢字で当てたものである。中国語のオノマトペは日本語ほど造語力を持たないことが明らかになった。

マンガ以外の小説等、文脈の影響を受ける文レベルでの考察を行った先行研究では、①～⑦までの翻訳例しか現れていなかった。しかし、マンガを扱った本研究では、今までの先行研究で現れていなかったいくつかの翻訳例を見ることができた。⑧～⑫までの翻訳例は、文脈の影響を受ける小説などの翻訳には現れる可能性が低いように思われる。しかし、独立して用いられ、文脈の影響を受けないマンガのオノマトペは、絵によってもたらされる印象が強いため、⑧～⑫のように翻訳しても、その場の雰囲気や日本語のオノマトペのニュアンスをうまく表わすことができる。これはマンガの読者に分かりやすくするための手段として用いられたと考えられる。さらに、本稿で扱ったオノマトペの下位分類にある擬音語、擬声語、擬容語、擬態語、擬情語、擬感語に加えて、これらが重なり合う部分の翻訳からは異なった翻訳傾向が見られた。

以上のように本稿では、マンガの音韻形態的特徴を踏まえたうえで、マンガのオノマトペが中国語にいかにかに翻訳されるのか、もしくは翻訳されないのかをデータベースに基づいて詳細且つ網羅的に研究を行った。その結果、特に先行研究で考察されていなかった感嘆詞、応答詞、疑問文、名詞、人称代名詞、記号などの翻訳例を見ることができた。日本語のオノマトペを中国語に翻訳する際には、オノマトペに翻訳されるものやオノマトペ以外のものに翻訳されるものがあり、さらに意味拡張や意味縮小されたものを含め、翻訳パターンはバリエーションに富んでいることがわかった。

但し、本稿では、マンガのみに関する考察であるため、オノマトペ全般についての考察を行うことができなかった。今後はさらに様々なジャンルにおけるオノマトペについて研究していく必要があると考えられる。

モンゴル語の終助詞に関する記述的研究

ジンガン
(アジア第一専攻)

本研究では、モンゴル語の終助詞 *mön, yum, siü, de* を対象とし、その機能を明らかにすることを目的とした。これらの終助詞の機能を明らかにするため、補助的に、*bisi, bije, bile* の機能についても記述した。さらに、*mön, yum, siü, de* の四形式を日本語の「だ」、「のだ」、「ものだ」、「よ」、「ね」と対照させ、その類似点と相違点を明らかにすることを試みた。従来の研究では、これらの四形式をほとんど「断定」を表す虚辞と解釈し、その相違を十分に明らかにしてこなかった。方法論上も、「言語形式の機能」、「文機能」、「語用論的效果」といった三つのレベルの混同が見られ、不適切な記述が見られる。これに対して、本研究では、上記の三つのレベルを明確に分けることを提案し、終助詞の多様な振る舞いの根本的な部分、つまり、終助詞の機能の中核は「言語形式の機能」であるということを主張した。よって、本論文では、終助詞の「形式の機能」を中心に記述した。また、先行研究は、言語実態に基づいておらず、経験的に記述している点も多くあったため、本研究は、電子コーパスを用いて例文を収集し、数量的分析を行った。そのコーパスは、内モンゴル大学で構築された“100 tümen üge-tei odo üy_e-yin monggol xele bičig-ün déyita xömörge (100万語現代モンゴル語コーパス、(約 8.69MB)”という電子コーパス、および自作のコーパス、KHMC50 (約 1.26MB) である。

結果としては、上記の終助詞は以下の表のような体系をなしていることが明らかになった。

	対事的	対事的かつ対人的		対人的
	真偽判断	説明	情報処理	妥当化
承接位置	真 <i>mön</i>	<i>yum</i>	確実 <i>siü</i>	<i>de</i>
	偽 <i>bisi</i>		情報再利用 <i>bile</i>	
			不確実・処理中 <i>bije</i>	

※ 二重線：承接関係 三重線：対立関係 点線：連続的

まず、承接位置から見れば、文の述語に *mön, yum, siü, de* の順で次々と後続する。*bisi* は *mön* と対立し、両者は相補的に出現する。*bije, bile* は *siü* と対立し、相補的に出現する。

次に、機能の面において、以下のようなことを主張した。

- *mön* は二つの要素の帰属関係や同定関係の成立を示す標識である。
- *bisi* は *mön* と対立関係にあり、二つの要素の帰属関係や同定関係の不成立を示す標識である。(論理学では、「Xである/Xではない」というように、二値だけがあり、中間段階がない場合を真偽値と呼ぶ。それに従い、上記の表では、*mön* と

bisi の関係を真偽判断と名づけた。)

- *yum* は、当該命題は述べられている事柄・行為の成り行きの説明であること、あるいは当該命題は先行文脈の説明であることを示す標識である。
- *siü* は、当該命題は確実であり、それを認識せよという命令的標識である。
- *bije* は、当該命題は不確実であり、処理中であることを示す標識である。
- *bile* は既処理の情報を再利用するということを示す標識である。
- *de* は発話そのものの妥当性を提示、相手に話し手自身と同じ認識をつくらうとすること表す標識である。

さらに、これらの終助詞の働きの中心が命題の性質をマークする点にあるか、聞き手に何かを伝達している点にあるかによって、「対事的／対人的」に分類することができる。ただし、この部分は連続的に推移するものである。

また、*mön, yum, siü, de* の四形式を日本語の「だ」、「のだ」、「ものだ」、「よ」、「ね」と対照させた結果、以下のようなことが明らかになった。

- *mön* と「だ」は名詞文の述語に後続し、しばしば「判定詞」、「コピュラ」などと解釈されるが、モンゴル語の *mön* が形成する名詞文の主語と述語は、必ず異なる性質の要素であるのに対して、日本語の「だ」にはこのような制限はない。また、モンゴル語の *mön* は、質問に対する答えとして、一語文を形成することができるが、日本語の「だ」は「そう」という指示語を介さなければならない。さらに、日本語の「だ」は「うなぎ文」を形成するのに不可欠な要素であるが、モンゴル語には、「うなぎ文」は存在しない。
- モンゴル語の *yum* と日本語の「のだ」、および「ものだ」とは、何かを聞き手に「説明する」という点において類似しているが、「のだ」、「ものだ」のような「当為」を表す性質はない。つまり、日本語の「のだ」、「ものだ」には、命令的性質もあるが、モンゴル語の *yum* はあくまでも聞き手に事柄・行為の成り行きについて把握、説明するものであり、聞き手に働きかけるものではない。
- モンゴル語の *siü* と「よ」とは「聞き手の認識を促す」点で類似しているが、*siü* は必ず話し手自身にとって確定できる情報ではなければならないという点で、日本語の「よ」と異なる。
- モンゴル語の *de* は「聞き手と共同の認識をつくる」ことを目指す点で日本語の「ね」と類似しているが、「認識の一致に関する問いかけ（確認要求）をしない」という点で日本語の「ね」と異なる。

以上のように、モンゴル語の終助詞の機能、および体系について、従来の研究では極めて不十分な記述であった部分を明らかにすることができた。終助詞の体系を明らかにすることは、モダリティの体系を明らかにすることの不可欠な一部分であり、モンゴル語のモダリティの体系全体を明らかにするための第一歩とも言える。

可能表現における日本語と中国語の対照

李 京玉

本稿は、日本語と中国語の可能表現を対照し、その相違点を明らかにすることを目的とする。従来の可能表現の研究では、確かに、日中の可能表現に触れている論文はあるが、記述は短く、データを用いた具体的な分析はなされていない。例えば可能表現の詳細な意味分類、人称と可能表現の関係などに触れたものは見当たらない。本稿では、コーパスよりデータを集め、実際の使用頻度を確かめたうえで、分析を行う。但し、日本語をより詳しく見ていく。主に、意味、意志動詞/無意志動詞、否定形式、人称の項目を中心に日本語と中国語の可能表現を詳しく考察する。

まず、第1章で可能表現の定義と主な形式の範囲を定めた。日本語の可能表現の形式による分類についての研究は多数あるが、本稿では、意味・用法の両面から、主として渋谷(1993)による以下の4つの分類(A:可能動詞、B:動詞未然形+助動詞(レル)・ラレル、C:～ガデキル、D:動詞連用形+ウル・エル)に従うことにした。

他方、中国語の可能表現には基本的に二つの形式があるとされている。一つは助動詞を用いる形式であり、もう一つは可能補語を用いる形式である。本稿では、刘(1991)に従い、可能を表わす助動詞は「能」・「会」・「可以」を扱い、可能補語は「得」を扱い、計4形式を分析の対象とする。

日本語は『新潮文庫100冊CD-ROM』から戦後(1945年以後)の現代日本語の文学作品5作品、中国語はインターネット上に公開されている「亦凡公益图书馆」から、同じく戦後1945年以降の文学作品5作品を選び、対象とする形式をすべて抜き出して考察した。第4章の4.4.「認識可能」に限っては、両言語での「認識可能」がそれぞれの言語でどう訳されているのかを調べるため、日本語の可能表現の例文は主に中国語の訳が付いているグループ・ジャマシイ(2003[2002])の『日本語句型词典』より、中国語に関しては、日本語の訳がある呂(2004[1992])の『中国語文法用例辞典<現代漢語八百詞増訂本>』から抽出して、その対応をみた。

第4章から第8章が本稿の中心となっているが、本稿では、以下のような事を明らかにした。

まず、第4章で、日本語の可能表現の枠組みを以下のように整理した。主に、渋谷(1986:108)と朱(1982)の分類を参考に、共に3種類、A:能力可能、B:条件可能、C:認識可能に分類した。考察の結果、日本語、中国語ともに「能力可能」が多く使われていた。日本語の場合は、「能力可能」は可能動詞に、「状況可能」は可能の助動詞「レル」に多くみられる傾向があり、中国語の場合は、「能力可能」も「状況可能」も可能補語より助動詞に多く見られた。「認識可能」は、日本語では、「動詞連用形+ウル・エル」で現されるもののあまり使われていない。中国語の場合は、頻繁に使われ、更に、「会」の方が「能」より多く表れることが分かった。

第5章では、可能表現に用いられる日本語と中国語の意志動詞と無意志動詞について考

察した。日本語の場合、無意志動詞の可能表現は少ない。中国語は、意志動詞も無意志動詞も可能表現に使われている。

第6章では、日本語と中国語の可能表現と使役、受身との共起関係について扱った。日本語も中国語も可能を意味する要素と使役を意味する要素は共起可能である。中国語の使役は、可能表現「能」「可以」と共起している例文が見られ、他方日本語の使役は、「～コトガデキル」が使役表現と共起した例が見出された。日本語の場合は、使役を意味する要素が可能表現の前にくるが、一方中国語の場合は語順による制約はないという点で違いが明らかになった。

中国語では受身文を用いた文にも、可能表現が見られた。日本語ではまだ用例が見られなかった。中国語の場合は、受身が可能表現と共起可能であることが分かった。

第7章は、日本語と中国語の可能表現における否定形式の現れ具合について考察した。全般を見ると、日本語では可能表現が否定形により多く見られるのに対して中国語は肯定形に集中して表れる傾向があった。会話文と地の文に分けてみると、日本語と中国語共に、会話文では、「肯定形」が多く現れ、地の文では、「否定形」が多く現れている。原因としては、両言語共に、会話の時は、なるべく「否定形」の可能表現は避けている事が推測できる。なお、日本語と比べて、中国語は、疑問、反復疑問句や反語、念押しとなるものが現れる事が圧倒的に多いことが確認できた。日本語では、トータルで17例あったのに対し、中国語はトータルで166例であった。更に、その中でも日本語は「念押し」が7例で一番多く、中国語は「反語」が74例で一番多かった。

第8章では、可能表現と人称との関係について分析を試みた。ここでは、可能表現を含む文中に動作主が示されているのか否か、また示されているならば、その動作主が一人称、二人称、三人称のいずれであるかについて、分類を行い考察をした。その結果、日本語の場合も中国語の場合も、可能表現を含む文章は動作主が示されていて、その動作主が3人称の場合が多いことを明らかにした。

以上、本稿では、日中両言語のコーパスから実際の使用例を確認し、分析及び考察を行なった結果、先行研究での不備のあった問題点を解明し、その類似点と相違点を詳細に明らかにした。

参考文献

- 渋谷勝己 (1993) 「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』 33-1
——— (1986) 「可能表現の発展・素描」『大阪大学日本学報』 5
グループ・ジャマシイ (2003 [2002]) 『日本語句型词典』 北京：外语教学与研究出版社
- 吕叔湘主編 (2004 [1992]) 菱沼透等訳 『中国語文法用例辞典-<現代漢語八百詞増訂本>日本語版』 東方書店
- 朱德熙 (2003 [1982]) 『语法讲义』 北京：商务印书馆

新聞と週刊誌にみられる皇室敬語——戦後昭和と平成の事例を中心に——

スリ ブディ ルスタリ

本稿は、新聞と週刊誌の皇室記事を取り上げ、その中の敬語使用と、通時的な変化を明らかにすることを目的とする。皇室敬語の実態を明らかにしているものは幾つかあるが、多くの新聞にみられる敬語使用の傾向及び現在に至るまでの通時的な変化を明確にした研究はなかった。なお、週刊誌は皇室の話題をよく取り上げているが、週刊誌を対象にした皇室敬語の研究は見あたらなかった。

本稿は、戦後昭和から平成の現在までの新聞（5紙）と週刊誌（男女共通・一般社会人対象誌2つ、女性誌2つ計4誌）から記事を収集し、その中に使われている尊敬語及び謙讓語を取り上げる。皇室敬語に関する先行研究及び尊敬語、謙讓語の定義を第2章でまとめる。第3章では、本稿の資料の収集方法及び資料の一覧を載せる。用例の分析と考察は第4章から第7章までとする。

新聞記事の用例分析は第4章と第5章で行う。4章は謙讓語を、5章は尊敬語を取り上げる。第4章の分析からは、全ての対象紙において戦後昭和では、天皇や皇族より下位の者が彼らに対して動作を行うことを表すときに謙讓語がよく使われていることが明らかになった。しかし、平成になってからこのような動作では謙讓語の用例が極端に減って、平成5年以降では全く使われていないという結果が出た。第5章の尊敬語の分析からは、朝日と毎日では尊敬語の使用頻度が平成6年以降では低くなっているが、その他の3紙、特に産経の場合は最近の記事でも尊敬語を頻繁に使っていることがわかる。このように、尊敬語を極端に減らしてきた新聞でも、それほど減らしていない新聞でも、謙讓語が使用されなくなったと言える。新聞の皇室敬語における通時的な変化は、大まかにいうと、尊敬語の使用が「お/ご～になる」「～（ら）れる」「お/ご+動作名詞」に限られるようになっていくことと謙讓語が記事から消えているという2つの点である。

一方、第6章の週刊誌による謙讓語の分析では、週刊誌は新聞と違う傾向を見せている。特に用例が多かった民間人からの動作では、平成の記事からでも30%以上謙讓語が得られた。最後に、第7章の週刊誌による尊敬語の分析結果からは、4誌とも戦後昭和及び平成のいずれにおいても高い比率で尊敬語を使っていることが明らかである。週刊誌では戦後昭和から平成にかけて、通時的な変化があまりみられない。

以下では、各章の分析結果から全体の結論についてまとめる。

まず新聞について述べる。日経、読売、産経では尊敬語が頻繁に使われているにもかかわらず、謙讓語が使われなくなった。本稿は、謙讓語が使われていないことについて、森山由紀子（2003）の謙讓語の使用条件及び東弘子（2004）の話題人物に対する待遇決定のしくみを以て、その要因を探ってみる。

森山（2003）は、話し手と話題に出ている動作の主語が、話し手の尊者に対して動作を行うときに、その主語が話し手と無関係の人物である場合、謙讓語を用いる必要がないとしている。謙讓語を敢えて使うと、話し手とその主語が近い関係の人たちであり、両者が

補語（上記の話し手の尊者）に対して敬讓関係を持っているという印象が聞き手に与えられる。

東（2004）は、話題人物に対する待遇表現のしくみを図化し、話題人物を待遇するとき、話し手と聞き手との心的距離が大きく決定するとしている。この待遇表現の決定のしくみを使って東（2006）は新聞の皇室敬語を批判している。新聞が皇室構成員に対して敬語を使うと、この敬語表現から、読者は、まず新聞側が皇室構成員を心的に遠い存在の人物として割り振っているものと解釈する。それだけでなく、読者にはさらに、自分も新聞側と同じ仲間になって、新聞側とともに、皇室構成員を遠い存在として割り振って敬うという解釈ももたらされる。皇室構成員を敬う意図を持っていない読者は当然違和感を感じるだろうと指摘されている。

上記の2つの概念を組み合わせれば、皇室記事で天皇・皇族を謙讓語で上位待遇するとき、読者は、①本来新聞側と無関係の人物が新聞側と同じ基盤に立たされ、天皇に対して下位者として位置づけられるとの印象を受ける、②天皇を遠くに位置づけ敬うべきという新聞側の視点を共有させられる、③視点が共有させられているため、自分も天皇に対して下位者であると認識しているかのような立場になる、という3つの解釈をとると考えられる。謙讓語はこのように、尊敬語よりも違和感を与える可能性があり、その使用が早く消えるのではないかと考えられる。

次に週刊誌について述べる。皇室雑誌や女性誌などは、多様な読者を持っている新聞と違って、皇室の話題をよく取り上げているという点から、読者が皇室の話題を好む人が多く、話題を送る側（雑誌）と読者が皇室に対して同じような感情や視点を持っていると考えられる。東（2006）はこのことを指摘し、女性誌では皇室構成員に対して敬語が多く使われていても問題にされたことがないと述べた。こうした東（2006）の指摘を以て、本稿では、皇室の話題を多く取り上げる女性誌だけでなく、男女向けの雑誌も、尊敬語を頻繁に使うのみならず、謙讓語も依然として使用していることを明らかにした。

以上、本稿は戦後昭和から平成までの新聞と週刊誌の皇室記事を取り上げ、その中の尊敬語と謙讓語の使用及び通時的な変化を明らかにした。新聞では、特に謙讓語については著しい変化がみられる。聞き手中心になってきているという近年の敬語変化の中、新聞の謙讓語の使用は読む側の人に違和感を与え、使われなくなったのではないかと考察した。日常会話の中でも、このような傾向がみられるのかを興味深く感じ、今後の課題としたい。

参考文献

- 東弘子（2004）「「話題の人物」の待遇を決定するシステム」『名古屋大学国語国文学』95号：102-90
名古屋大学国語国文学会
- （2006）「批判的言説分析としての敬語分析—マスメディアにおける敬語・敬称の使用／非使用から」『社会言語学VI』9月号：61-75
- 森山由紀子（1989）「謙讓語成立の条件——「謙讓」の意味をさぐる試みとして」『奈良女子大学文学部研究年報』33号：1-19

ブルシャスキー語フンザ方言形態論

吉岡 乾

本稿はブルシャスキー語フンザ方言の文法を、形態論を中心として体系的に記述することを旨とした論文である。

論文全体の構成は、大きく4つに分割できる。最初に第1章で研究全体の目的・方法を述べる。そしてその後、第2章から第4章までで、形態論以外の部分の文法・概念を概観する。次いで第5章で抽象的なテンプレートを用いて形態論全体を示す。最後に、第6章から第12章までで具体的に、各屈折・派生要素や複合語形成に関し、実形式・用法を中心として記述・考察しており、そして第13章でそれらの考察を纏めている。

第1章は、研究方法や現地調査の情報、論文の構成を概説した章である。論文執筆前に現地調査に3度行き、データを収集した。加えて、先行研究のテキスト(物語100篇)を電子コーパス化し、更に、辞書(2冊)も電子データ化した。本稿は、自前のデータと、これ等の電子化した先行研究のテキスト・データとを合わせてデータベースとし、そこから分析・考察した。

第2章では、ブルシャスキー語の概要を示している。使用地域・背景文化・周辺言語・各方言・先行研究に関してと、本稿で対象とするフンザ方言の音韻論・統語論に就いて、簡潔に解説した。先行研究は、文法体系全体を論じているものがLorimer (1935-8)・Berger (1998)しか存在せず、他の研究は散発的で体系性に乏しい面がある。網羅的に記述しているBerger (1998)は、現時点でのブルシャスキー語研究の中で随一のものだろう。

その後は2つの章を割いて、形態論を記述・考察して行く上で前提として必要と考えられる概念——品詞とクラスとに関する解説をしている。品詞に関しては第3章で、その特徴・分類基準に就いての解説をしている。品詞は形態論的、或いは統語論的基準に基づいて、概ね、9つに分けられる。第4章は、クラスに関する章である。ブルシャスキー語には、意味に対応した名詞クラスが存在しており、大まかに考えて4種類ある。そのクラス分布と、各クラスに見られる特色とに関してこの章では記述した。

第5章で、形態論の記述を始める。この章では、品詞毎に分けて、語の実際の形式に関しての解説をしている。屈折する品詞の内、範列関係の語が開いた系である品詞に関しては、抽象化した型(テンプレート+接辞)で以てその形式を示し、閉じた系である品詞に関しては、ここで具体的な実形式を網羅的に示した。

第6章は、格の、主に用法に関して記述しており、格の中にも主要なもの・周縁的なもの、一次曲用のもの・二次曲用のもの、場所を表すもの・方向を表すもの、そして生産的に用いられるもの・固定化されているものといった異なりが存在することを示した。

第7章では特に、多様な形式を示しているブルシャスキー語の複数接尾辞を型で纏め、或る程度の出現法則までをも考察している。複数接尾辞はブルシャスキー語研究の黎明期から難題と言われて来ており、本稿ではその体系に関して、2つの辞書/語彙集をデータ

ベースとして、再検証を行った。

第8章は共起要素の観点などから、定性+数の概念を標示する2つの接尾辞の用法・概念範囲を検証した章である。この章では、数詞や指示形容詞などとの併用例を交えつつ、先行研究では扱っていない特定性というフィルターを通して、用法ごとの機能を明らかにした。

続いて第9章では動詞に関する屈折——即ち、活用に関して述べる。活用を更に分割し、時制・法・法的体系・副動詞・準動詞として、それぞれの実形式・用法に就いて示している。この章は基本的に、第5章で示した動詞類のテンプレートに実際の形式がどういった組み合わせで入り得るか、各形式の機能とを簡潔に解説している章である。詳細な変化表は巻末の付録に挙げた。

最後に3つの章を割いて、派生・複合に関する形態論を記述している。第10章では接辞による派生を示し、第11章では複合語形成に関することに触れた。第12章は動詞の、語根から語幹への派生に就いて論述する章となっている。この章では特に、研究者の間でも未だに一致した見解の無い、動詞接頭辞 d-を中心に考察している。最終的にはこの接頭辞の機能を、動詞の動作の完結性を標示する接頭辞であると結論付けた。その完結性付加という機能が、語根ごとに応じて多様な機能に変じ、その結果、受動／起動／結果残存／指示中心点の移動などといった副次的機能が出現する。

本研究では、辞書を用いての全語彙調査といった統計的な手段を用いている点、数点の先行テキストを束ねた大きなコーパスを用いている点など、これまでの研究にはなかった方法論を試みている。そうした考察から導いた、Berger (1998)などの先行研究と異なる記述・結論を、各章から1条ずつ、以下に示す。

- ・第6章：生産性の低い格の認定と、-e/mo の属格・位格への分離
- ・第7章：複数接尾辞のタイプ分けと分布傾向の推定
- ・第8章：定性+数の接尾辞が、定性を覆せない場合に特定性のみを示すという推測
- ・第9章：複数性接尾辞の一致対象は、「本位対象」とでも呼ぶべき項である
- ・第10章：重複操作の、派生と複合との差別化
- ・第11章：反響語の、反響要素に於ける音変化の傾向
- ・第12章：d-接頭辞の機能に対する、完結性標示という大機能1つでの説明

参考文献

- Berger, Hermann (1998) *Die Burushaski-Sprache von Hunza und Nager. Teil I: Grammatik* (1998a); *Teil II: Texte mit Übersetzungen* (1998b); *Teil III: Wörterbuch* (1998c). Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- Lorimer, D. L. R. (1935-8) *The Burushaski Language. vol.I: Introduction and Grammar* (1935a); *vol.II: Texts and Translations* (1935b); *vol.III: Vocabularies and Index* (1938). Oslo: H. Aschehoug & Co. (W. Nygaard).

2007 年度
卒業論文 要旨

日独対照研究
—身体部位名称を含む慣用句を用いて—

加藤 奈美
(欧米第一課程ドイツ語専攻)

キーワード：日独対照、慣用句、身体部位名称、意味派生

0. はじめに

ドイツ語・日本語にはそれぞれ多くの慣用句が存在し、日々日常会話の中で使用されている。そこで今回は身体部位名称を含む慣用句、なかでも「目/Auge」、「手/Hand」、「口/Mund」、「鼻/Nase」、「耳/Ohr」という五官に関わる名詞を含むものに注目し、調査した。慣用句において、比喩的に述べられているものは、語族も文化も違う両言語においてもそれなりの共通点が見られる。そして、それぞれの身体部位名称には辞書上に記述されているもの、更には比喩化して特定の意味が与えられている。

本論文では、日本語とドイツ語においてどの程度それぞれの身体部位名称に与えられている意味に共通点があるのかを調査する。なお、本稿では紙面の都合上、「鼻/Nase」のみを取り上げることとする。

1. 先行研究の概観

卒業論文では、小林(2000)、伊藤(1992)、Itoh(2005)の3つを挙げたがここでは紙面の都合上、本論文に最も関わりを持つItoh(2005)を挙げる。小林(2000)は、スペイン語と日本語において慣用句の対照をしたものであり、伊藤(1992)は、ドイツ語と日本語の慣用句の対照研究を行なっていて、慣用句を構成するレベルによってタイプ分けをし、日独の対応関係を探るものである。そして、Itoh(2005)は、ドイツ語と日本語において身体名詞、および動物の名詞を用いた慣用句表現を網羅的に対照したものである。

1.1. 鼻についての記述 [Itoh(2005) p. p. 143~149 を要約]

1.1.1. 暗喩的意味

(1) 意味、感覚

(1) für etwas eine gute/feine Nase haben¹

<~のための良い鼻を持っている>→「~についてよい感覚を持っている」²

¹例文番号、グロス、および「」内の和文は筆者による。グロスの略称は、巻末を参照。また、例文は全てItoh(2005)による。Itohは独文をドイツの地方新聞各紙より、日文は毎日新聞より用例を収集している。

²<>及び→は、執筆による。<>内は慣用句の直訳を記し、→より後が慣用句の意味となっている。

Die	Wähler	haben	eine	feine	Nase	dafür ³
Art-M-3Pl-Nom	M-3Pl-Nom	V-3Pl	Art-F-3Sg-Acc	Adj-F-3Sg-Acc	F-3Sg-Acc	Adv
Die	elector	have	a	fine	nose	for it

「有権者はそれに関して、良い感覚を持っている。」

(2) 鼻が利く

(...) 絵本を片端から (...) 読んでいきましょう。そうすると、こういうのが好き、これは楽しめそう、と鼻が利いてくるようになります。

② 金銭

(3) sich eine goldene Nase verdienen <黄金の鼻を稼ぐ> → 「莫大な金を稼ぐ」

Jahrelang	hat	der	Anwalt	sich	sowie	seinem	Staat
Adv	V-Past-3Sg	Art-M-3Sg-Nom	M-3Sg-Nom	Prep	Conj	Art-M-3Sg-Dat	M-3Sg-Dat
For years	have	the	lawyer	himself	and	his	state

mit	dem	Verkauf	von	Humanität	gegen	harte	D-Mark
Prep	Art-M-3Sg-Dat	M-3Sg-Dat	Prep	F-3Sg-Dat	Prep	Adj-F-3Sg-Acc	F-3Sg-Acc
with	the	sale	from	humanity	against	hard	D-Mark

eine	goldene	Nase	verdient.
Art-F-3Sg-Acc	Adj-F-3Sg-Acc	F-3Sg-Acc	V-P.P.
a	golden	nose	earn

「長年の間、弁護士と国は人間性を失ってでも厳しいドイツマルクの中で莫大な金を稼いでいた。」

(4) 鼻薬を嗅がせる

しかし、現実はそのそんなに甘くない。(...) 一時だけ鼻薬を嗅がされたような結果に終わる可能性が高い。

③ 人／頭数

(5) pro Nase 「一人当たり」

Vier	Wochen	Kuba	kosten	alles	inklusive	pro	Nase	1200	Ostmark
Num	F-3Pl-Acc	N-3Sg-Nom	V-Pres-3Pl	Art	Adv	Prep	F-3Sg-Acc		F-3Sg-Acc
four	week	Cuba	cost	all	inclusively	per	nose		Ostmark

「4週間キューバに滞在するのに、全て含めて一人当たり 1200 マルクかかった。」

³ dafür は前置詞 für と事物を表す代名詞結合形

④小さな単位

(6) 鼻の差

スモールも、同じく1位、2位が30万台、3位と4位が20万台、(...)、まさに鼻の差しかない。

表1：鼻/Nase を含む慣用句表現⁴

意味的機能	ドイツ語	日本語
意味／感情	+	+
金銭、	+	+
人、頭数	+	-
小さなこと	-	+

1.1.2. 具象性⁵

「鼻」を用いた慣用句で具体的表現を担う物は以下に分類される。

- ①鼻を高くする
- ②鼻の状態変化
- ③不愉快な状態
- ④鼻を用いた振る舞い

2. 先行研究を踏まえての仮説

先行研究から、「目」、「手」、「口」、「鼻」、「耳」がそれぞれ比喩化されてさまざまな意味を持つことが分かった。しかし、先行研究では日・独それぞれの慣用句の意味が全体数の中でそれほどの割合を占めるのか、また更に詳しく分類は出来ないのかという疑問点がある。そのため、本論文で筆者は先行研究から以下の分類に段階を設けて日独の対照をすることとした。

- ① ドイツ語の慣用句に日本語に対応した慣用句であるか。
- ② 対応した場合、慣用句で用いられているそれぞれの名詞に当てられた意味は何であるか。
- ③ 対応した日本語慣用句がない場合、どのような意味を持っているのか。

ある程度、共通して用いられる諺や言い回しの数があると予想しているが、それぞれの文化や言語の影響によって、日本語・ドイツ語のどちらかにしか出現しない意味があることも期待できる。

⁴表中の+/-は、それぞれの意味的機能を担う表現がある/なしを示す。

⁵伊藤(1992)において、Bildichkeit と言う言葉に対して「具象性」という日本語訳を当てている。Itoh (2005)での Bildhaftigkeit も同様の意味と筆者は判断したため、本稿では一貫して、「具象性」という言葉を用いる。

3. 調査と分析、および考察

今回、調査に用いる資料は

- ・日本語：日本国語大辞典第二版編集委員会（2001）『日本国語大辞典 第二版』小学館
- ・ドイツ語：Scholze-Stubenrecht, W. (2002) „Duden Band 11 Redewendungen“ Dudenverlagの2冊である。Duden Band 11 Redewendungen は、ドイツ語における慣用句を名詞ごとに分類して、辞書化したもので、収録慣用表現数は、10,000 語に上る。

日本語は、「目」、「手」、「口」、「鼻」、「耳」が見出し語として載っている項で慣用句として挙げられているものを、ドイツ語もそれぞれの項に掲載されているものを、それぞれ手作業で抽出し、分析に用いる。日本語は 81 例、ドイツ語 45 例抽出できた。

3.1. 辞書における記述と筆者が設けた基準

はな

☐①哺乳類の吻の先端ないし顔の中心に隆起し、呼吸、嗅覚をつかさどり、発声にも関与する器官。また、ひろく脊椎動物の嗅覚器の存在する部分をいう。一般的には、体の先端部の一部の表皮が陥入してできた腔所(嗅窩)で、嗅覚細胞と嗅覚神経が分布している。

②「はなうた(鼻唄)」の略

③(鼻は一人に一つあるところから)人一人指している語。

④(自分をさし示すとき、自分の鼻をさすところから)自分自身をさしている語・

⑤錠をいう、盗人仲間の隠語。

☐鼻腔の粘膜から分泌する液。はなみず。

[日本国語大辞典第二版編集委員会（2001）第10巻 pp.1271 より抜粋、要約]

Nase

1 鼻；鼻ずら

2 (鼻に似た突出部や突端。例えば：)

a) 船首、機種；(自動車の)前部

b) 岩鼻；突出部

[国松孝二編（1988）pp.1607～1608 より抜粋、要約]

以下では、日本語の語義を中心に語義の整理を行う。日本語の語義を中心に、ドイツ語の慣用句を分類する理由としては、日本語を母語とするドイツ語学習者がドイツ語慣用句を理解し、その理解を通して、よりドイツ語の会話力や読解力を高めることに役立つことを、本論文で目標としているためである。

日本語の、「鼻」の原義に基づいて、以下のように意味の派生があったと仮定する。

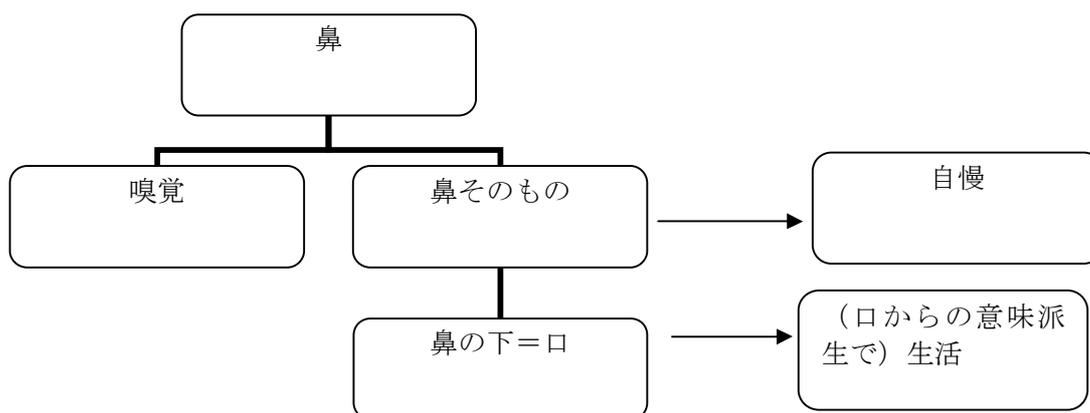


図1:「鼻」の意味派生

3.2. 調査結果、及び考察

以下に、今回の調査結果を記しその後考察を行なった。調査結果では、上記した意味派生を基に日本語、ドイツ語の慣用句を分類し、意味派生から分類し切れなかったものは新たに項目を設置し、その数を記した。

表2:「鼻」に関する調査結果⁶

	日本語	ドイツ語
嗅覚	5 (5%)	0 (0%)
嗅覚→感覚、センス	0 (0%)	3 (7%)
鼻そのもの	26 (30%)	4 (9%)
鼻の下=口	1 (1%)	1 (2%)
口→生活 ⁷	3 (3%)	0 (0%)
口→発言	0 (0%)	2 (4%)
あしらい、軽蔑	11 (12%)	2 (4%)
わずかな差、目の前	4 (4%)	6 (13%)
当て、予想	4 (4%)	0 (0%)
顔、人そのもの、気持ち	8 (9%)	13 (30%)
気持ち→自慢	21 (23%)	1 (2%)
その他	8 (9%)	13 (29%)
計	91 (100%)	45 (100%)

⁶表内での、網掛けをして特記した部分は今回、相違点として顕著な部分として挙げられたということの意味する。

⁷「口」の項では、飲食物の通る器官である「口」から転じて「生活」、また言葉を発する器官であることから転じて「発言」という意味があり、それぞれ「口」の意味派生として日本語・ドイツ語で大きな割合を占めている。

「鼻」では様々な意味派生を持ち、どれか一つに集中して意味を持つわけではないことが、表より見て取れる。また、辞書上での「鼻」の意味の記述には、一切「自慢」に関する記述は見られないにも関わらず、どちらにも「自慢」という意味要素は含まれていて、日本語では特に、23%の割合を占めている。

さらに、「鼻の下」と言う部位から「口」に意味が転換し、「口」の意味派生を「鼻」に含んでいることも興味深い。しかし、「口」の意味派生でも、日本語では「生活」を、ドイツ語では「発言」を示しているという、相違点も挙げられる。

上の表2の結果から見えるように、意味派生において「鼻」に与えられる意味には共通部分も多いが、日本語、ドイツ語それぞれにしか与えられていない意味も見られる。また、共通部分においても、慣用句全体の中で占める割合が違う点から、日本語、ドイツ語の両言語で「鼻」と言う単語から連想される意味に差を捉えることができるため、この調査結果から次のように意味派生を捉えなおすことが出来る。

以下の図では、二重線が日本語・ドイツ共に見られた意味派生、点線が日本語のみ、太線がドイツ語のみを表す。

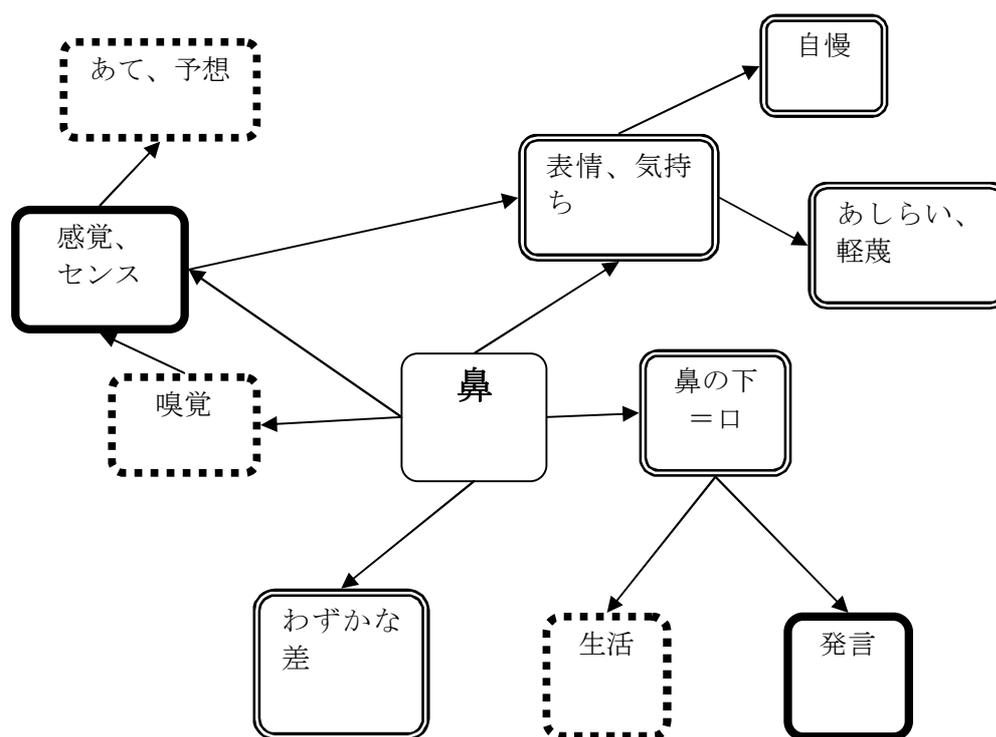


図2：「鼻」の慣用句における意味派生

4. 終わりに

今回の研究によって、日本語とドイツ語の身体名詞を用いた慣用句において、数々の共通点、そして相違点を見出し、分類をすることが出来た。さらに、本論文ではそれぞれの慣用句を慣用句の有無によって分類するだけではなく、全体の数に対する割合を示すことによって、両言語における身体部位名称の派生した意味の使用比率を明示することが出来た。日本語と同じように使われる慣用句も多数存在した。

しかし、分類や分析において不十分な部分もあった。特に、辞書の記述による意味派生を中心としたために、「その他」に分類せざるを得ない慣用句が多い身体部位名称もあった。また、辞書上の意味だけでなく、文化や日本語・ドイツ語、それぞれの言語や文化に由来した意味もあり、分類に偏りが出てしまったのでその点の改善を今後の課題としたい。

略号一覧

1	1 人称	M	男性名詞
2	2 人称	M.V.	ムードを表す助動詞
3	3 人称	N	中性名詞
Acc	対格	Nom	主格
Adj	形容詞	Part.	現在分詞
Adv	副詞	Past	過去形
Art	冠詞	Pl.	複数形
Cop	繫辞	P.P.	過去分詞
Conj	接続詞	Pres	現在形
Conj I	接続法 I 式	Prep	前置詞
Conj II	接続法 II 式	Pron	代名詞・所有代名詞
Dat	与格	Rel	関係代名詞
F	女性名詞	Sg.	単数形
Gen	属格	V	動詞
Inf.	不定形		
Int	疑問詞		

参考文献

- Scholze-Stubenrecht, W. (2002) *Redewendungen*. 2. neu bearbeitete und aktualisierte Auflage. Duden Bd.11. Mannheim. Duden.
- Itoh, Makoto (2005) *Deutsche und japanische Phraseologismen im Vergleich* Julius Gross Verlag, Tübingen
- 伊藤眞 (1992) 「慣用句対照研究 日・独慣用句の対応関係」『言語文化論集』第36号 筑波大学 現代語・言語文化学系 pp.155～169 所収
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編 (1996) 『言語学大辞典 第6巻 術語編』東京：三省堂
- 川島淳夫他編 (1994) 『ドイツ言語学辞典』東京：紀伊国屋書店
- 国松孝二編 (1988) 『小学館 独和大辞典「第2版」』東京：小学館
- 小林和世 (2000) 「日西対照研究—身体部位名称を用いた表現を資料として—」西日本言語学会 『ニダバ』第29号 pp.58～67 所収
- 日本国語大辞典第二版編集委員会 (2001) 『日本国語大辞典 第二版』東京：小学館
- 橋本郁雄「ドイツ語」(1989) 亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 第2巻 世界言語編 (中)』東京：三省堂 所収

ロシア語動詞と日本語動詞のアスペクトの対応関係に寄せた対照研究

小湊 歩

(ロシア・東欧課程ロシア語専攻)

キーワード：対照研究、ロシア語、日本語、アスペクト

1. はじめに

本稿は、ロシア語動詞の完了体・不完了体¹が日本語の動詞複合体²のどのアスペクトに分類されるのかを考察した対照研究である。この研究の結果、ロシア語動詞と日本語動詞複合体の対応関係に偏りがあることが分かった。また、ロシア語では表現されにくい形式のアスペクトが存在することが明らかになった。

2. アスペクトに関する先行研究

2.1. ロシア語動詞に関するアスペクト

Timberlake (2004) には、ロシア語動詞の完了体・不完了体の特徴が述べられている。以下の表にその記述をまとめる。

表1：ロシア語動詞の完了体と不完了体の違い

	完了体	不完了体
基本的意味	ある時間の中で起こる動作変化	ある時間の中における状態や継続性
形態的特徴	・不完了体動詞に接辞がついた形をしていることが多い	・接辞がついていない ・接辞がついた完了体動詞に二次派生的に接辞がついていることがある
統語的特徴	・完了体動詞 <i>удаться</i> (manage to, to be successful at) の補語となる ・時を表す副詞的前置詞句 <i>за</i> (within) とともに現れる	・段階を表す動詞 <i>начать/начинать</i> (begin)、 <i>продолжать</i> (continue)、 <i>кончить/кончать</i> (finish) の不定詞補語 ・時を表す対格と共起できる

[Timberlake (2004) 筆者による要約]

2.2. 日本語動詞複合体のアスペクト体系

金田一 (1995) では、金田一 (1950) での動詞分類の研究を踏まえ、日本語動詞複合体のアスペクト体系の整理が行なわれている。以下にその記述をまとめる。

¹ ロシア語のアスペクトについて述べる場合は、ロシア語学の慣例に従い、perfective を完了体、imperfective を不完了体と呼ぶこととする。

² 本稿において、「動詞の語幹部分+形態素」を「動詞複合体」と呼ぶこととする。「動詞の語幹部分」とは、終止形・辞書形の活用で得られる形式のことを示し、「形態素」は、特にこの「動詞の語幹部分」にアスペクト的意味を添えるものを指す。

表 2：日本語動詞のアスペクト範疇

	下位分類	左記のアスペクト をとりうる動詞	代表的な形態素
状態 アスペクト	S1 既然	瞬間動詞	-ている、-たところだ など
	S2 進行	継続動詞	-ている、-つつある、-ているところだ など
	S3 反復進行	瞬間動詞	-ている、-つつある、-ているところだ など
	S4 将然	瞬間動詞	-ようとしている、-ところだ など
	S5 単純状態	状態動詞	-φ、-ている
動作 アスペクト	A1 終結	継続動詞	-てしまう、-おわる など
	A2 既現	瞬間動詞	-てしまう
	A3 始動	継続動詞	-はじめる、-だす、-かける
	A4 将現	瞬間動詞	-かける、-かかる
	A5 単純動作	瞬間動詞	-φ
	A6 継続	継続動詞	-φ、-つづける、-てきた など
	A7 反復継続	瞬間動詞	-φ、-つづける、-てきた など

[金田一 (1955 : 39-56) 筆者による要約]

3. 仮説

ロシア語動詞の完了体・不完了体が日本語動詞複合体のどのアスペクトに対応するのかという予想を以下に示す。

表 3：ロシア語動詞と日本語動詞複合体のアスペクトの対応予想

ロシア語動詞	日本語動詞複合体		
体の分類	アスペクト	下位分類	代表的な形態素
完了体	動作 アスペクト	A5 単純動作	-φ
完了体		A1 終結	-てしまう、-おわる など
完了体		A2 既現	-てしまう
完了体		A3 始動	-はじめる、-だす、-かける
完了体		A4 将現	-かける、-かかる
完了体？/不完了体？	状態 アスペクト	S4 将然	-ようとしている、-ところだ など
完了体？/不完了体？		S1 既然	-ている、-たところだ など
不完了体？		S2 進行	-ている、-つつある など
不完了体？		S3 反復進行	-つつある など
不完了体		S4 単純状態	-φ、-ている
不完了体	動作 アスペクト	A6 継続	-φ、-つづける など
不完了体		A7 反復継続	-φ、-つづける、-てきた

表 3 中の疑問符“？”は、筆者が完了体・不完了体のゆれを予想した部分に付した。

日本語動詞複合体のうち、A5：単純動作、A1：終結、A2：既現、A3：始動、A4：将現、S4：将然といったアスペクトは、完了体に対応するであろう。一方、S2：進行、S3：反復進行、S4：単純状態、A6：継続、A7：反復継続といったアスペクトは不完了体に対応するであろう。S1：既現は、完了体・不完了体いずれも取りうる可能性がある。これらの調査に関する内容を4章で示す。

4. 検証

4.1. 調査資料

- ・内藤濯訳 (2000) 『星の王子さま』 東京：岩波書店
- ・перевод Галь, Н. (1979) *Маленький Принц* Москва：Издательство ПРАВДА

4.2. 対照方法と分類方法

ロシア語動詞は、完了体・不完了体の形態が客観的に判断可能なので、ロシア語動詞の完了体・不完了体が、日本語動詞ではどのアスペクトに対応しているか（翻訳されているか）という観点で対照を行なっていく。

4.2.1. ロシア語動詞の分類とその基準

本稿で対象とした形態は、現在形、過去形、未来形、命令形、不定形に限定した。完了体・不完了体の区別³は、研究社露和辞典初版（2003）に拠った。

4.2.2. 日本語動詞複合体の分類とその基準

日本語動詞複合体は、まず「動詞の語幹部分」の分類から行なう。その動詞分類に応じて、形態素を判断材料として用い、アスペクトを判断していく。動詞とそれに対応するアスペクトとの関係を以下の表に示す。

表4：動詞分類に基づくアスペクトの分類

動詞の種類	形態素	アスペクト	
瞬間動詞	-ている	S1	既現
	-ている	S3	反復進行
	-うとしている、-ところだ	S4	将然
	-てしまう	A2	既現
	-かける、-はじめる、-うとする、-だす、-うになる	A4	将現
	-φ	A5	単純動作
	-φ	A7	反復継続
継続動詞	-ている	S2	進行
	-てしまう、-おわる	A1	終結
	-かける、-はじめる、-うとする、-だす、-うになる	A3	始動
	-つづける	A6	継続
状態動詞	-φ、-ている	S5	単純状態

³ ロシア語動詞には、完了体・不完了体同型のものも存在するが、今回の調査資料の中には現れなかった。

4.3. 調査結果

始めに、以下の図1で調査資料から得られた用例数の関係を示す。ロシア語動詞[A]は、露文資料から得られた完了体・不完了体の用例数である。日本語動詞[B]は、和文資料から得られた動詞複合体の用例数である。そして、 $[A] \cap [B]$ は、ロシア語動詞が日本語動詞に対応していた用例数である。表5でロシア語動詞の完了体・不完了体が日本語動詞複合体のいずれの aspekto に対応しているのかを示す。なお、本稿に挙げる用例数はすべて延べ語数である。

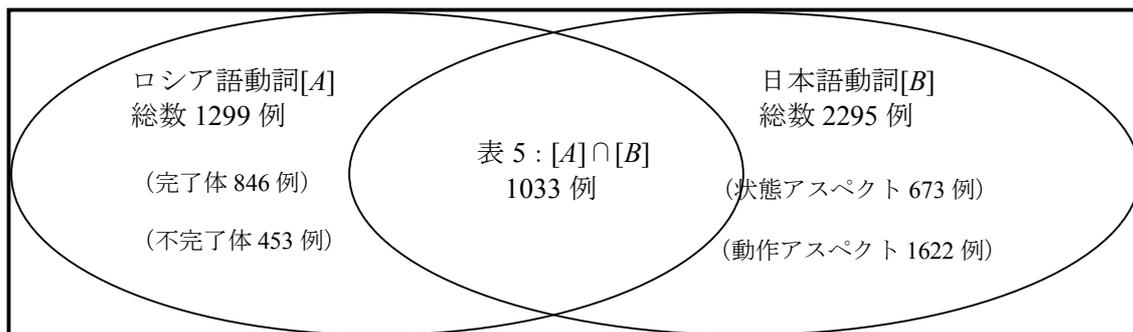


図1：動詞の総数に関する集合関係

4.3.1. ロシア語動詞と日本語動詞複合体の aspekto 対応関係

ロシア語動詞の完了体・不完了体が日本語動詞複合体のどの aspekto に対応しているかについて、以下の結果が得られた。

表5：動詞の対応表

ロシア語動詞			日本語動詞複合体	
筆者の予想	完了体	不完了体	aspectto	下位分類
完了体	556	18	動作 aspectto	A5 単純動作
完了体	7	4		A1 終結
完了体	3	3		A2 既現
完了体	8	4		A3 始動
完了体	8	1		A4 将現
完了体？/不完了体？	1	0	状態 aspectto	S4 将然
完了体？/不完了体？	11	24		S1 既然
不完了体？	25	80		S2 進行
不完了体？	0	1		S3 反復進行
不完了体	1	2		S5 単純状態
不完了体	1	275	動作 aspectto	A6 継続
不完了体	0	0		A7 反復継続
(合计数)	621	412		

5. 分析と考察

ここでは、4章で得られたデータである、ロシア語動詞が日本語動詞複合体に訳されている例から考察する。

完了体は、S1：已然、S2：進行、S5：単純状態、A1：終結、A2：既現、A3：始動、A4：将現、A5：単純動作に当てはまるデータが得られた。そのうち、A5：単純動作は、金田一（1955）で述べられていた通りの結果となった。完了体は、ある動作・作用が原因となって次の動作・作用を呼び起こすような場面で用いられた。広い意味である動作・作用の結果が残存している際に用いられやすい傾向があった。

不完了体は、S1：已然、S2：進行、S3：反復進行、S5：単純状態、A1：終結、A2：既現、A3：始動 A4：将現 A5：単純動作、A6：継続に当てはまるデータが得られた。このうち、A6：継続は金田一（1955）で述べられていた通りの結果となった。不完了体は、動作アスペクトと対応する箇所も見られたが、その多くは時間のとらえ方を変えたものであり、やはりベースには状態性を見て取ることができた。よって不完了体は、状態アスペクトに対応する傾向があるといえる。以下、それぞれの対応関係を細かく見ていく。

5.1. ロシア語動詞完了体と日本語動詞状態アスペクトの関係

完了体の全用例数 621 例中、日本語動詞複合体の状態アスペクトに対応するのは 38 例という結果が得られた。よって、やはり完了体は日本語動詞複合体の状態アスペクトにはほとんど対応しないと見えるだろう。S1：已然及び S4：将然との対応だが、S1：已然に関しては 11 例、S4：将然に関しては 1 例という結果が得られた。

S4：将然は和文資料からは 8 例見つかった。そのうち、完了体が対応しているものは 1 例、不完了体が対応しているものはなかった。

2.1.節で、完了体が S4：将然と対応するのではないかという予想を立てた。しかし、完了体が将然態に対応している例は、下記の 1 例のみが得られるに止まった。

(01a) А когда он в последний раз полил чудесный цветок
then when 3sg.NOM. in last-ACC. time-ACC. (Pfv)water-sg.pt. beautiful-ACC. flower-ACC.
и собрался накрыть его колпаком, ему даже захотелось
and (Pfv)intend-sg.pt. (Pfv)cover-inf 3sg.ACC. cap-INS. 3sg.DAT. even (Pfv)want-pl.pt.
плакать.
(Ipfv)cry-inf

[Маленький Принц : 283]

(02b) そして、わかれのしるしに、花に水をかけて、覆いガラスを、かけてやろうとしていると、王子さまは、いまにも涙がこぼれそうになりました。

[星の王子さま : 50]

例文 (01a) から、完了体動詞が 2 つ重なって、日本語動詞複合体の「かけてやろうとしている」というアスペクトに対応していると見ることができる。このように動詞を組み合わせてものが日本語の動詞複合体に対応している。

和文資料では 8 例あった S4：将然というアスペクトが、完了体 1 例と対応し、不完了体は対応せずという結果を考えると、S4：将然のアスペクトは、ロシア語ではあまり積極的に表現されないと言えそうである。実際、日本語動詞複合体で示される 7 例は、露文資料において別の表現形式を取っていた。

5.2. ロシア語動詞完了体と日本語動詞動作アスペクトの関係

完了体の全用例数 621 例中、日本語動詞複合体の動作アスペクトに対応しているものは 556 例であるという結果が得られた。この結果によって、完了体は日本語動詞複合体の動作アスペクトに対応することが多いという予想通りの結果が得られた。更に、金田一（1955）で指摘されていたとおり、完了体は単純動作にかなり多く対応するという結果が得られた。

5.3. ロシア語動詞不完了体と日本語動詞状態アスペクトの関係

不完了体の全用例数 412 例中 107 例が日本語動詞複合体の状態アスペクトに対応していた。状態アスペクトに対応するロシア語動詞が 145 例あった中で、107 例が不完了体であったことを考慮すると、不完了体が動詞複合体の状態アスペクトに対応する傾向があると言える。また、不完了体 435 例中 A6：継続に対応するものは 275 例あり、金田一（1955）が指摘する結果が得られた。

5.4. ロシア語動詞不完了体と日本語動詞動作アスペクトの関係

不完了体の全用例数 412 例中 328 例が動作アスペクトに対応していた。この 328 例のうち、A6：継続が 316 例であり、金田一（1955）で述べられていたような結果が得られた。その一方で、数こそ少ないが動作アスペクトに対応している不完了体も見られた。その中でも不完了体が A4：将現に対応している例は、1 例得られた。以下に例を示す。

(02a) Мне было не по себе, положение становилось серьезным,
1sg.DAT. C.sg.pt. neg. about self-PRE. place-NOM. (Ipfv)stand-pl.pt. serious

воды почти не осталось, и я начал бояться,
water-NOM. hardly neg. (Pfv)leave-pl.pt. and 1sg.NOM. (Pfv)begin-sg.pt. (Ipfv)be scared-inf.

что моя вынужденная посадка плохо кончится.
that 1sg.NOM. unavoidable-NOM. landing-NOM. awfully (Pfv)end-sg.pr.

[Маленький Принц : 279]

「状況が深刻になり、水がほとんど残っていなかったことだけでなく、この不時着が恐ろしい結末を迎えてしまうかもしれないことに恐怖を覚え始めた。」

(02b) ちょっとやそっとでは、パンクがなおりそうもないので、気が気ではありませんでした。それに、飲み水も底をついていて、手も足もでないことになりそうだったので。

[星の王子さま : 38]

例文 (02a) の *становится* ((Ipfv)stand) が、(02b) で「なおりそうもないので、気が気ではない」の部分に対応していると見ることが出来る。この場合、露文の表している状況と邦文の指している状況は同じ場面のはずである。しかし、時間のとらえ方が若干異なっているように感じる。つまり、例文 (02a) では、「今、深刻な状況が続いている」というとらえ方をしている。さらに注目したいのは、「この状況が続くと（未来のある点で）恐ろしい結末を迎えてしまう」という部分に完了体が使われている点である。よって、ベースとなる状況説明に不完了体を使用し、そのベースの延長線上に起こるであろう出来事に対しては完了体を使用しているのである。言い換えれば、日本語では個々に A4：将現というアスペクトを使って表現しているのに対して、ロシア語では実際にはそうならない場合、不完了体と完了体を共起させてそのことを示すものと考えられる。

5.5. ロシア語動詞が日本語動詞複合体に対応していないケース

ロシア語動詞が日本語動詞複合体と対応していないケースには、大きく 2 つあった。無生物主語の言い換えと副動詞・形動詞の使用による言い換えである。何れもそれぞれの言語の特徴を加味して行なわれたものであると考えられる。

6. おわりに

本稿を通じて、ロシア語動詞の完了体・不完了体が日本語動詞複合体のアスペクト的特徴に応じて偏りがでることが明らかになった。ただし、調査にあたっては調査資料がやや文学的すぎたため、同一の語句が繰り返し使われているケースが多かったことが挙げられる。また、登場しない露文資料・和文資料のいずれにも登場しなかったアスペクト (A7：反復継続) があったため、使用頻度の低いものに関して調査できなかったという反省もある。今後の課題としては、より広範囲の調査資料を準備することが必要であるといえる。

加えて、本稿ではロシア語からみた日本語動詞複合体という観点で論を進めたが、逆に日本語からみたロシア語動詞という観点からみたとき、言い換えられやすいアスペクトがあることがわかった。これらが実現する環境についてさらに研究が必要であるが、今後の課題としたい。

グロス一覧

NOM. : 主格、GEN. : 生格、DAT. : 与格、ACC. : 対格、INS. : 造格、PRE. : 前置格、(Pfv) : 完了体、(Ipfv) : 不完了体、inf. : 不定形、1 : 1 人称、2 : 2 人称、3 : 3 人称、sg. : 単数、pl. : 複数、pr. : 現在、pt. : 過去、neg. : 否定辞、C : コピュラ、ad. : 副動詞、AUX : 助動詞、* : 非文、RP : 関係代名詞

参考文献

- 金田一春彦 (1946) 「国語動詞の一分類」 金田一春彦編 『日本語動詞のアスペクト』
(1976) 所収：5-26 東京：麦書房
- _____ (1955) 「日本語動詞のテンスとアスペクト」 金田一春彦編 『日本語動詞
のアスペクト』 (1976) 所収：27-61 東京：麦書房
- 国立国語研究所 (1985) 『現代日本語動詞のアスペクト』 東京：秀英出版
- 東郷正延・染谷茂・磯谷孝・石山正三編 (2003) 『研究社露和辞典』初版 東京：研究社
- Comrie, Bernard. (1978) *Aspect —an introduction to the study of verbal aspect and related
problems—* Cambridge : Cambridge University Press.
- Timberlake, Alan. (2004) *A Reference Grammar of Russian.* Cambridge : Cambridge University
Press.

参考資料

- アントワーヌ=ド=サンテグジュペリ 内藤濯訳 (2000) 『星の王子さま』 東京：岩波書
店
- Антуан де Сент-Экзюпери перевод Галь, Н. (1979) Маленький Принц *Антуан де
Сент-Экзюпери.* 266-319 Москва : Издательство ПРАВДА

ソロン語の母音調和に関する音響音声学的研究

佐藤健太郎

(欧米第二課程フランス語専攻)

キーワード：ソロン語 ツングース諸語 アルタイ諸言語 音響音声学 母音調和

0. はじめに

本研究では、ツングース諸語の1つであるソロン語¹の母音体系および母音調和がどのような仕組みになっているのかを、これまでされることがなかった音声学、特に音響音声学の側面から分析する。また、これまでの研究で主張されてきた母音調和体系に関しても、改めて検討を加えることを目的とする。

なお、本稿では英語文献の日本語訳はすべて筆者による。

1. 先行研究

1.1. ソロン語の音韻体系についての先行研究

ソロン語の音韻体系に関する記述としては、津曲 (1989)、池上 (2001)、Kazama (2003)、朝克 (2003) などがある。ここでは紙面の都合上、それぞれが設定しているソロン語の音韻体系、特に本研究と直接関わりを持つ母音音素についてのそれぞれの記述をまとめて概観する。それぞれをまとめたものが表1である。

表1 先行研究における母音音素体系

	I類	II類	III類
津曲 (1989)	/a, o, u/	/ə, ø, ʉ/	/i, e/
池上 (2001)	/a, o, u, ā, ō, ū/	/ə, ø, ʉ, ē, ē, ū/	/i, e, ī, ē/
Kazama (2003)	/ɪ, a, o, u, e, ee/	/i, ə, ø, u/	(なし)
朝克 (2003)	/a, aa, o, oo, u, uu/	/ə, əə, ø, øø, ʉ, ʉʉ/	/i, ii, e, ee/

全体の中で特に他とは異なる分類をしているのが Kazama (2003) で、他の研究者がいわゆる中性母音として分類しているIII類を認めておらず、/i/系列は/i/, /i/としてそれぞれI類、II類に振り分け、/e/系列はI類へと分類している。結果的に、現在のソロン語の母音体系に関する記述はおおよそその点で Kazama (2003) とそれ以外に二分していると言えよう。

1.1.1. 母音音素の音質

それぞれの母音音素の音質についての記述があるのは朝克 (2003) のみであった。Kazama (2003) については、風間伸次郎氏により直接解説を頂いた。ここでは両者が主張する各母音の音質について見ていく。

¹ ソロン語はアルタイ諸言語のひとつであるツングース諸語に属する。主な話者は中国の内蒙古自治区呼倫貝爾 (ホロンバイル) 盟などに分布し、中国で鄂温克 (エウエンキ) 族と呼ばれる人たちの人口は 26,315 人 (1994 年の統計) である。ソロン語は「形態的には、接尾辞、語尾の付加による膠着的構造を示す。格の種類はかなり多い方であり、満州語・女真語以外のツングース語には見られない属格をも備えている。統語的には SOV 型である。(津曲 (1989))」とされている。また、ソロン語は文字を持たない。

1.1.1.1. Kazama (2003)

Kazama (2003) の設定する母音音素に関して、私信によれば、/i/[i], /ə/[ə], /o/[o], /u/[u], /ɪ/[ɪ], /a/[a], /ɔ/[ɔ], /ʊ/[ʊ], /e/[e~ɛ]がそれぞれ IPA 表記で当てられるという。

以上に加えて、これも私信によるが、①/ə/はあまりに出現例が少なく議論の余地がある、②/e/はおそらく長母音に限られ、歴史的に連母音 (ai, ia など) が変化したものであり、母音調和体系から外れる。その音価は検討の余地があるが、日本語のエ[e~ɛ]のように感じている、③/ɪ/も環境的にその後に広母音[a]などがくるときは[e~ɛ]の近くまで広くなるように思われる、ということも述べている。

1.1.1.2. 朝克 (2003)

以下は朝克 (2003:421-422) の「母音音素の基礎構造と特徴」という項をまとめたものである。

/a/ [a] 張唇奥舌広母音音素	/ə/ [ə] 張唇中舌半狭あるいは半広母音音素
/e/ [e] 張唇前舌半狭母音音素	/i/ [i] 非円唇前舌狭母音音素
/o/ [o] 円唇奥舌半狭母音音素	/u/ [u] 円唇奥舌狭母音音素
/ɔ/ [ɔ] 円唇中舌半狭母音音素	/ʊ/ [ʊ] 円唇中舌狭母音音素

以上でソロン語の音韻体系に関する先行研究を概観した。しかしどの研究においても、それらの音素、音質を設定するに至る客観的根拠が示されていないのが事実であり、それぞれの研究者の感覚的、経験的見地からの記述であると思われる。

1.2. 母音調和に関する音響音声学的な先行研究

ソロン語はおろか、ツングース諸語を音響音声学的に研究したものは筆者の管見のおよぶ範囲では見つかっていない。従って、ここではアルタイ諸言語まで幅を広げて、モンゴル語の母音調和を音響音声学的に研究している城生 (2005)、および母音調和の類型について考察した福盛 (2006) について見ていく。

1.2.1. 城生 (2005)

城生 (2005) はその研究目的を「これまで理論先行の形で行われてきたモンゴル語の母音調和について、実験音声学の観点から母音調和の根底にある音声事象を限りなく客観的に捉える (城生 (2005:27) 筆者要約)」とし、モンゴル語の単語をコンサルタントに読み上げてもらい、音響音声学的解析からモンゴル語の母音調和の特徴について考察を述べている。フォルマント解析によって音響ダイアグラムを作成した結果、モンゴル語の母音調和が、従来モンゴル語音韻論の分野で論じられてきた水平方向調和 (前舌と後舌との対立、図 1-1) とするにも、垂直方向調和 (広母音と狭母音の対立、図 1-2) とするにもどちらにも不備が残り、それらの要素が複雑に絡み合っ成り立っているという結果となった。その末に、「視点を枠外に置き、それぞれの対における白系を起点としてそこから黒系へと線

分を延長しその先に交点を求めるとすべてがほぼ 1 点に収束する（城生（2005:83）一部変更）」という「放射方向調和」（図 1-3）を提唱した。（図 1-1～1-3 は城生（2005:83-84）を基に筆者が作成）

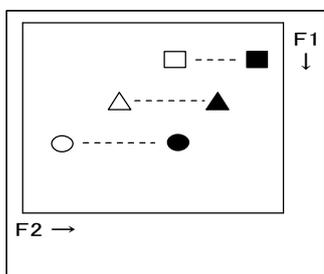


図 1-1 水平方向調和

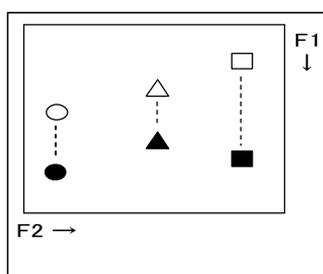


図 1-2 垂直方向調和

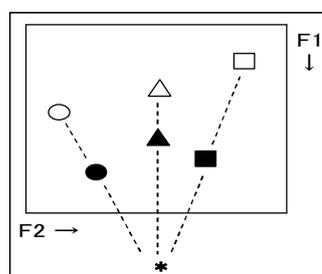


図 1-3 放射方向調和

1. 2. 2. 福盛（2006）

1. 2. 2. 1. 母音間の方向性

福盛（2006）は前舌母音群と後舌母音群が調和するトルコ語のような母音調和を「対角線方向調和」として提唱した。図 2 が「対角線方向調和」の例である。（図 2 は福盛（2006）を基に筆者が作成）

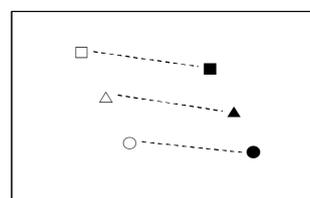


図 2 対角線方向調和

1. 2. 2. 2. 母音間の距離

これまでの母音調和を有する言語の分析において特に母音調音時の調音音声学的特徴、および組となる母音の配置に対する母音間の方向性については注意が払われてきたが、福盛（2006）では、音響ダイアグラムにおける母音間の距離という、上記の物とはまた異なる考察も述べている。たとえば、トルコ語の母音間の相対的な距離はモンゴル語のそれより長い。そういった音響音声学的な母音の配置に対する呼称として福盛（2006）は「近距離調和」と「遠距離調和」という音響音声学的類型を提唱した。表 2 は福盛（2006）がこれらの特徴をふまえてまとめたトルコ語、モンゴル語、アカン語の音響音声学的類型の分類思案である。なお「母音の距離」に関して、相対的に遠距離調和となるものが+、近距離調和となるものが-、該当する組がないものは 0 と示してある。

表 2 福盛（2006）の母音調和の音響音声学的類型による分類思案

類型言語	母音間の方向性	母音間の距離		
		a-e 間	a-e 以外の非円唇母音	円唇母音
トルコ語	対角線方向調和	+	+	+
モンゴル語	放射方向調和	+	0	-
アカン語	放射方向調和	0	-	-

2. 問題点

以上で概観してきた先行研究から，次章以降で論じる本研究に於いて設定される，ソロン語の母音音質および母音調和に関する問題点とその検証方法を整理すると，以下のようになる。

- I. ソロン語の母音体系に関する音声学的先行研究がほとんど無いことから，音響解析によってまず，ソロン語の母音体系および母音音質の実態を客観的根拠に依り正確に捉える。
- II. Iによって明らかになった母音体系から，さらにソロン語の母音調和体系がどのような方向性の特徴を持っているのかを考察する。さらに母音間の距離を見ることによって，ソロン語がどのような種類の母音調和を有するのかを検証する。

3. 本研究の目的と方法

3.1. 目的

本研究では今日的レベルにおけるデジタル音声処理の技術を用いた音響音声学的手法によってソロン語の母音音質および母音調和体系の実態に迫ることが目的である。そのため，ミニマルペアを用いて，フォルマント周波数の解析結果からそれぞれの母音音質について捉えていくことにする。

3.2. コンサルタント

本研究のコンサルタントのフェースシートは以下のとおりである。

- ・コンサルタント : TUOYA 氏 (女性)
- ・生誕年 : 1974 年
- ・言語形成期を過ごした所 : 中国内蒙古自治区呼倫貝爾盟鄂温克旗
- ・両親の出身地 : 中国内蒙古自治区呼倫貝爾盟鄂温克旗

3.3. 分析資料

それぞれの母音がどのような母音音質を持っているかを検証するために，各母音を含むミニマルペアをコンサルタントに発音してもらおうという方法をとった。対象となる語は朝克 (2003:423-424) にそれぞれの音素を含む語として挙げられているものである。

表3 分析資料²

/a/ : h <u>a</u> (前肢)	ba <u>l</u> (蜂蜜)	ta <u>ar</u> (従父兄弟)
/i/ : h <u>i</u> (空気)	bi <u>l</u> (腹)	ti <u>ir</u> (奪う)
/e/ : h <u>e</u> (おい)	be <u>l</u> (ペしゃんこ)	te <u>er</u> (恐ろしい)
/ə/ : h <u>a</u> (限り)	ba <u>l</u> (目出度)	ta <u>ar</u> (防げ)
/o/ : h <u>o</u> (すべて)	bo <u>l</u> (秋)	to <u>or</u> (それで)
/u/ : hu <u>u</u> (ボート)	bu <u>l</u> (轆)	tu <u>ur</u> (小ガラス)
/ø/ : h <u>ø</u> (鍋墨)	be <u>l</u> (姉妹の子)	te <u>er</u> (謎)
/ʉ/ : hu <u>ʉ</u> (利子)	bu <u>l</u> (もう少し)	tu <u>ur</u> (糸口)

² 下線は筆者による。

表3はすべて朝克(2003)を基にした音素表記である。このように各母音を含むミニマルペアを提示している文献は他にはなく、従ってこれらの分析を主軸として扱っていく本研究は、朝克(2003)の主張に完全に負って進むことになる。

3.4. 実験装置

録音機器は東京外国語大学研究講義棟録音編集室内に設置されているAKG社製のマイク(スタジオコンデンサーマイクロフォン C3000B)と EDIOR 社製 USB インターフェース(AUDIO Capture UA-5)を用いてパーソナルコンピュータで直接録音した。録音に用いたソフトは Audacity ver.1.2.4 で、サンプリングレートは 48kHz, 量子化 16bit・monoral で wave ファイル化して保存した。

3.5. 実験手順

録音は 2006 年 12 月に東京外国語大学研究講義棟録音編集室において行った。録音の際、表3で挙げた各語を単語ごとにカード化し、ランダムにシャッフルしたものを提示し3回ずつ発音してもらい録音した。カードには音素表記が書かれておりそれを読み上げてもらったわけだが、事前に各語をどのように発音するか確認した上で実験を行った。

本研究では3回の発音のうち最もなめらかで自然度が高いと筆者が判断したもののみを解析するという方法をとった。

解析に用いたソフトは *praat*, Ver.4.5.01 (WinXP 対応) である。当該母音の各フォルマントの値は自動算出によって求められるが、最終的な判断はサウンドスペクトログラムを用いての筆者の目視に依ったことを付け加えておく。

4. 解析結果

4.1. フォルマント数値

解析の結果、各語から得られたフォルマント測定値を次の表4に示す。F1, F2 はそれぞれ第1フォルマント, 第2フォルマントであり、単位は Hz である。

表4 母音のフォルマント測定値

母音	単語	F1	F2	母音	単語	F1	F2
/a/	ha	1100	1634	/i/	hi	243	2931
	ba ^l	955	1878		bi ^l	397	2404
	taar	1073	1741		ti ⁱ r	262	2832
/e/	he	589	2588	/ə/	hə	446	1347
	be ^l	606	2561		bə ^l	431	1282
	teer	641	2554		təer	434	1300
/o/	ho	838	1251	/u/	hu	408	973
	bo ^l	868	1339		bu ^l	383	998
	toor	816	1304		tuur	432	1043
/ø/	hø	537	1012	/ʉ/	hʉ	320	769
	be ^l	594	1037		be ^l	359	884
	teer	519	995		teer	292	775

4.2. F1-F2 散布図

表4の値をグラフソフト Sma4win を用いてF1-F2 散布図にしたものを以下の図3に示す。

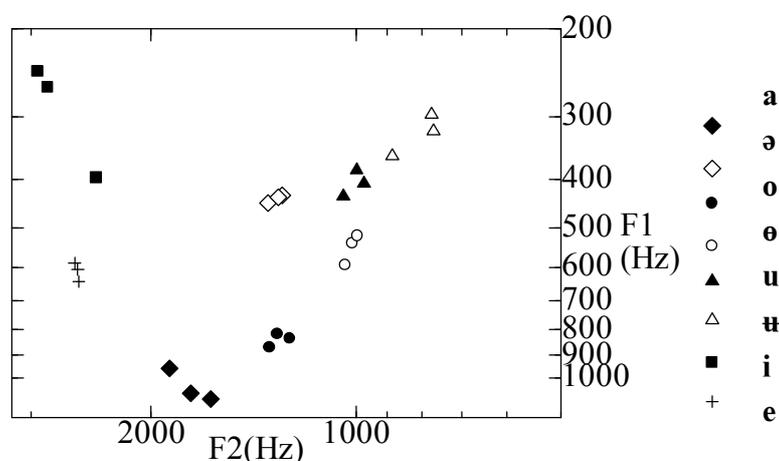


図3 F1-F2 散布図

5. 考察

5.1. 母音音質

図3から求めた8つの母音の音質をIPAによって表したものを以下に示す。

/a/ [a] 非円唇中舌広母音	/ə/ [ə] 非円唇（やや後寄りの）中舌半狭母音
/i/ [i] 非円唇前舌狭母音	/e/ [e] 非円唇前舌半狭母音
/o/ [ɔ] 円唇後舌半広母音	/u/ [u] 円唇，やや後舌，やや狭い母音
/ø/ [ø] 円唇後舌半狭母音	/ʊ/ [ʊ] 円唇後舌狭母音

1.1.1.2.で見た朝克（2003）と比べるとその差は顕著である。/ə/については、朝克（2003）の言う所謂中舌中段母音ではなく、後寄りで半狭であった。また特に/o/と/ø/、/u/と/ʊ/の対については、[±back]という素性においてまったく逆であるという結論となった。これに従うとすると朝克（2003）の音素表記は実現する音と反対となり誤解を招く可能性がある。従って以後、筆者のデータに基づく音素表記を以下のように改めることにする。

/a/ [a] 非円唇中舌広母音	/ə/ [ə] 非円唇（やや後寄りの）中舌半狭母音
/i/ [i] 非円唇前舌狭母音	/e/ [e] 非円唇前舌半狭母音
/ɔ/ [ɔ] 円唇後舌半広母音	/u/ [u] 円唇，やや後舌，やや狭い母音
/ø/ [ø] 円唇後舌半狭母音	/ʊ/ [ʊ] 円唇後舌狭母音

網掛けを施したのが変更点である。これは朝克（2003）の/o/と/ø/、/u/と/ʊ/の表記を逆にし、さらに実際の発音と同じ形に変更したものである。なお/a/に関しては、/ə/または/ə/とするのは一般的ではないと判断し、/ə/のままとした。

のみであった状況が解消され、図5のような完全な放射方向調和が成り立つことになる。

しかしながら[i]は特定の環境で現れる可能性もあり、/i/または/e/が広い幅を持っていると言う解釈も出来る。また音素が成り立つかどうかといった議論は音韻論の分野の問題であるので、ここではそういった可能性を指摘するにとどめる。

5.2.2. 母音間の距離

図4を見ると、母音調和で対応する各母音間の距離はa-ə間では遠距離で、o-ɔ間、u-u間では近距離であることが目視的にわかる。これらを表2の福盛(2006)の分類思案に当てはめてみると、どの類型とも完全には一致しないが、表5のようにモンゴル語と非常に似たものとなった³。これはソロン語が歴史的にモンゴル語と交流があったことが関係しているとも考えられる。

表5 ソロン語を福盛(2006)の分類思案に当てはめたもの

言語	母音間の方向性	母音間の距離			
		a-e 間	a-ə 間	左記以外の非円唇母音	円唇母音
モンゴル語	放射方向調和	+	0	0	-
ソロン語	放射方向調和	0	+	0	-

6. おわりに

本研究の最大の問題点は被験者が1名であったことである。ソロン語の記述には未だ不安な部分が多く、そのような状況の場合は、研究結果としても当然2人以上の被験者から導かれた結論の方がより説得力があるのは明らかである。被験者の数を増やすことによって、データの正確性を補完していくのが今後の課題である。

参考文献

- 池上二良(2001)⁴ 「ツングース語の変遷」『ツングース語研究』所収 397-445 東京:汲古書院
 城生佰太郎(2005) 『モンゴル語母音調和の研究—実験音声学の接近—』東京:勉誠出版
 朝克(2003) 『エウエンキ語形態音韻論および名詞形態論』東京:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
 朝克・津曲敏郎・風間伸次郎(1991) 『ソロン語基本例文集』北海道:北海道大学文学部
 津曲敏郎(1989) 「ソロン語」亀井孝・千野栄一・河野六郎編『言語学大辞典 第2巻 世界言語編 中』所収 522-3 東京:三省堂
 福盛貴弘(2006) 「母音調和の音響音声学的類型—トルコ語・モンゴル語を起点として」城生佰太郎博士還暦記念論文集編集委員会編『実験音声学と一般言語学—城生佰太郎博士還暦記念論文集—』所収 99-106 東京:東京堂出版
 Kazama, Shinjiro 2003 *Basic Vocabulary (A) of Tungusic Languages (ELPR Publications Series A2-037)* Grant-in-Aid for Scientific Research on Priority Areas Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology Endangered Languages of the Pacific Rim. Osaka: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University

³ なお、ソロン語において/a/は非円唇母音の/e/と対応せず、同じく非円唇母音の/a/と対応する。従ってここでは新たにa-ə間という項目を設ける。

⁴ 池上(2001)は、氏による「ツングース語の変遷」(『言語の系統と歴史』[岩波書店 昭和46年(1971)所収]と「ツングース諸語」(『言語学大辞典』第2巻[三省堂 平成元年(1989)]所載)を合わせて、一部を除き、補訂したものである。

ビルマ語の助動詞-khE.についての考察

高橋 麻衣

(東南アジア課程ビルマ語専攻)

キーワード：ビルマ語、助動詞、-khE.、過去

1. はじめに

動詞に意味を添えるもの、アスペクトを規定する機能を持つもの等、ビルマ語¹には 59 個の助動詞が存在する(Okell 1969:33 参照)。本稿ではその助動詞の中から-khE.を取り上げ、考察を行う。原田・大野編(1990)は、-khE.の訳語として「…した(過去を示す助動詞)」と「…してくる(移動を示す助動詞)」を挙げている。しかし、文法書や教科書では、原田・大野編(1990)で示された-khE.の 2 つの機能に加えて、他の機能が挙げられている事が多い。また、ビルマ語の動詞文の性質上、-khE.を付加しなくても過去を表しうる。この事を踏まえ、① -khE.の使用状況、②-khE.の機能の 2 点を明らかにする事を本稿の目的とする。

2. ビルマ語の動詞文について

本稿では紙面の都合上、1 節で平叙文の叙実法、叙想法、活写法、2 節で助動詞文についてのみ、藪(1992)を参照し、まとめた。

2.1 平叙文

ビルマ語の平叙文は、法の助詞(VSM:動詞文標識助詞)により法が表される。

<叙実法> V-tE_ ことがらを事実として確定的に述べる。

01) la_ ^tE_ || 「来た」「(習慣としていつも)来る」

come-VSM/rls

<叙想法> V-mE_ ことがらを不確定なこととして述べる。

02) la_ -mE_ || 「来るだろう」「来よう」

come-VSM/irls

<活写法> V-pyi_ ことがらが今、眼前に起こっている様として述べる。

03) la_ ^pyi_ || 「来た(向こうからやって来るのが見えている)」

come-VSM/inch

¹ ビルマ語はシナ・チベット語族、チベット・ビルマ語派、ロロ・ビルマ語群に属する。ミャンマーのほぼ全域にわたって通用している。子音音素 33 個、母音音素 7 個、声調 3 個。語順は SOV である(藪 1992:569-568 要約)。本稿で使用した音声表記は以下の通りである。[]内は IPA 表記である。IPA 表記の無いものは、IPA と同記号である。子音：無声無気音 / p, t, s, c[tɕ], k / 無声有気音 / ph[pʰ], th[tʰ], sh[sʰ], ch[tɕʰ], kh[kʰ] / 有声音 / b, d, z, j[dz], g / 歯間音 / T[t̪], D[d̪] / 声門音 / h // 'ʔ / 鼻音 / m, n, ny[n̪], ng[n̪] / 無声鼻音 / hm[m̩], hn[n̩], hny[n̩], hng[g̩] / 側面音 / l, hl[l̪] / 半母音 / w, hw[ɰ] // y[j], hy[ɕ] / 子音と母音の間に入る介子音は、/-y-/、/-w-/、後続する音に同化する鼻音はすべて /N[-]/ 母音：/a[ɑ], i, u, e, E[e], O[ɔ], o/ 軽声母音は /A[ə]/ 声調：下降調 /- / 低平調 /- / 高平調 /:/ / その他の記号：語境界;スペース 句中の語境界; -(ハイフン) 統語的結合による声有化; ^ 句点; || 読点;

2.2 助動詞文

助動詞は、動詞の直後に置かれる。つまり V-PV という形になる。

04) sa:-^pa_-^tE_|| 「食べました」

eat-PV/plt-VSM/rls

05) ba.ma_-lo. pyO:-^ta'-tE_|| 「ビルマ人の様に話す事が出来る」

Burmese-like speak-PV-VSM/rls

3. 先行研究

本稿では-khE.についての詳しい記述がある文法書 2 冊、教科書 1 冊を先行研究として扱った²。

3.1 Myint Soe (1999)

Myint Soe(1999)は-khE.を‘distal’(移動³)の助動詞とし、先行する動詞によって異なる 4 つの -khE.の機能を提示している。

①-khE.が動作動詞に後続する時、「どこか他の場所でVし、今はここにいる」という意味になる。

06) tiN_hla_eiN_-Athi'she:thou'-khE.-tE_|| (Myint Soe 1999:214)

Tin Hla house-new paint-PV-VSM/rls

「ティンフラ（固有名詞）は新しい家にペンキを塗って来た」

②-khE.が状態動詞に後続する時、移動(distal)と完了相(perfective)の 2 通りに解釈される。

07) nga. yaN_^kouN_-hma_ ne_-^khE.-tE_|| (Myint Soe 1999:214)

1 Yangon-LOC be(live)-PV-VSM/rls

「私はかつてヤンゴンに住んだことがある」

「私はヤンゴンに残った」

③-khE.が感情を示す動詞と共起する時、-khE.は空間的な移動ではなく、時間的な移動として使われる。

08) Tu.-AcauN:-ca:-ya.-^tO. waN:tha_-^khE.-tE_|| (Myint Soe 1999:215)

3-matter-hear-PV-when happy-PV-VSM/rls

「彼のその知らせを聞いた時、嬉しかった」

² 本稿で扱った英語文献についての記述は、筆者が訳したものである。また、例文番号とグロスも筆者による。

³ 小西・南出(2001)では‘distal’の訳語として「末端」のみが載っていたが、Myint Soe(1999:214)で「distal(physical dislocation)」という記述があった事から、Myint Soe(1999)では‘distal’が「移動」の意味で使用されていると解釈した。

④-khE.が動作動詞に後続した時、‘la_ 来る’ と類似した働きをする。

09) nga.-hpE'-ko_ hlyau'-khE.-ø|| (Myint Soe 1999:215)

1-side-ALL walk-PV-#

「私の所へ歩いて来い」

3.2 澤田(1999)

澤田(1999)では「-khE.は、もともと現在位置への移動という機能を持っており、それが派生して、過去から現在までの持続と単に過去を示す機能を持つようになった」(澤田 1999:12 を要約)と述べられている。この3つの機能についての説明は以下の通りである。

①現在位置への移動「…てくる」

10) eiN-hma_ ne.lE_sa_ mA-sa:-^khE.-bu:-la: || (澤田 1999:12)

house-LOC lunch NEG-eat-PV-VSM/neg-QS

「家で昼食を食べて来なかったのか」

②現在までの持続「…てきた」

11) tE'kATo_ du.ti.yAhni'-ka. bAma_sa_ TiN_-^khE.-^pa_-^tE_ || (澤田 1999:12)

university sophomore-ABL Burmese study-PV-PV/plt-VSM/rls

「大学2年生の時からビルマ語を勉強してきました。」

③過去「…た」

終助詞-tE⁴だけで過去の出来事を十分に表せるものであり、-khE.はあくまでも2次的なものである。

12) pa.tha.ma.u:^shouN: yo.ma.-ho_tE_-hma_ Tu_-nE. twe.-khE.-tE_ || (澤田 1999:12)

first time Yoma-hotel-LOC 3-INS meet-PV-VSM/rls

「一番最初にヨーマホテルで彼と会った。」

3.3 Okell and Allott(2001)

Okell and Allott(2001)は-khE.の機能として、①空間、位置に関係するもの、②時間に関係するもの、③条件節での使用、④助動詞‘-lai’ きっぱりと～する’との対立の4点を挙げている。

①空間、位置に関係するもの

i)-khE.が動作動詞に後続した際は、「他へ動く前にVする」という意味になる。

13) pi'si: tha:-^khE.-pa_-ø|| (Okell and Allott 2001:24)

luggage put-PV-PV/plt-#

「(ここに来る前に)荷物をそこへ置いて下さい」

「(出かける前に)ここに荷物を置いて下さい」

⁴ 2.1で挙げた、藪(1992)の「法の助詞」と同じものである。

ii)-khE.が移動動詞に後続した際は、「そこからここへVする」となる。

14) kha.na. ne_-yiN_ la_-^khE.-mE_|| (Okell and Allott 2001:26)

in a moment be-PV/con come-PV-VSM/irls

「しばらくしたら、ここへ戻って来る」

15) pyaN_-^khE. “come back” pyaN_-Twa: “go back” (Okell and Allott 2001:25)

back-PV 「戻ってくる」 back-go 「戻っていく」

②時間と関係するもの

-khE.が時間と関係がある時、時制は過去となる。-khE.の付加は任意である。

16) E:di_-AcheiNAkha_-hma_ba.ma_-naiN_ngaN-ha_ AtO_cE_waN:-^khE.-tE_||

that-time-LOC Burma-country-NOM very wide-PV-VSM/rls

(Okell and Allott 2001:26)

「その当時ビルマはかなり広がった」

③条件節での使用

条件節においても-khE.の付加は必須ではない。しかし、V-khE.とされる場合が多い⁵。

17) AshiN_pye_-^khE.-yiN_ lou'-pe:-^pa_|| (Okell and Allott 2001:27)

convenient-PV-PV/con do-give-PV/plt

「都合がよかったら、やって下さい」

④助動詞-lai'との対立

Okell and Allott(2001:26)に「詳細は Allott(1965)を参照せよ」との記述がある為、本節では Allott(1965)の大略を以下に示す。

Allott(1965)では-khE.と-lai'を位置のカテゴリーの助動詞として論を展開している。Allott(1965)の見解をまとめると、「-khE.は、話し手の位置と動作が行われた位置の2つの場所を繋ぐ。一方、-lai'は、話し手の位置と動作が行われた位置に何の関係性も持たない。」となる。また、「-khE.は状態動詞とは共起しない」(Allott 1965:296)という記述が見られた。

3.4 先行研究のまとめと問題提起

現在位置への移動は-khE.の機能として全ての先行研究で指摘されていた。しかし、la_との類似、過去、継続など、先行研究が明言した-khE.の機能には揺れがあった。

本稿の目的である、①-khE.の使用状況、②-khE.の機能を明らかにする為に問題として挙げられるのは、次の2点である。

a)状態動詞への後続

Allott(1965:296)で「状態動詞とは共起しない」との記述があった。その後、Okell and Allott(2001)の例文で '-waN: 広い' という状態動詞への後続の例も挙げていることから、Allott

⁵ Okell(1969:279)においても、Okellは-khE.の条件節での使用を挙げている。

の見解は自らによって覆されている。しかし、動作動詞や移動動詞の様に状態動詞への後続が多用されるかは疑わしい。

b)-khE.の付加しやすい状況

澤田(1999:12)と Okell and Allott(2001:26)で-khE.の付加の任意性が指摘されているが、-khE.の付加が好まれる例はないのだろうか。

4. 調査と分析

4.1 調査

本稿で行った調査は、資料による調査とコンサルタントへのアンケート調査である。本稿は資料による調査を中心とし、アンケート調査は補足として行った。資料による調査は、文語体、口語体の資料 8 点から手作業で-khE.を拾った。扱った資料と得られた-khE.の総数を以下の表 1 に示す⁶。

表 1 調査資料と得られた-khE.

	資料名	語数	得られた-khE.
文 語 体	ja_nE_cO_mAmAle: (1973) “Twe:” :4-45	8038	44
	奥平龍二編(1996)『基礎ビルマ語読本』:2-5	559	13
	hmu:khiN_ (2006) ‘MTV’ “mya.wa.ti_ 9”:53-55	1139	39
口 語 体	lu_ ^thu.u:hla. (1968) ‘me. ta’ Tu_’ “myaNma. pouN^pyin mya.”:23-25	559	2
	lu_ ^thu.u:hla. (1968) ‘taN_she: lawn_be:’ “myaNma. pouN^pyin mya.”:57-60	756	5
	kaN_chuN. (1997) ‘chi’-lai’-ta_ touN_’ “a.pyosiN-^to. Ti.-TiN.-^Ta.hmya.”	1276	2
	kaN_chuN. (1997) ‘sa.ka’-hniN. tha.bi_-^to_’ “a.pyosiN-^to. Ti.-TiN.-^Ta.hmya.”	863	4
	yE.Ti’ (2006) ‘International News’ “mya.wa.ti_ 9”:76-77	915	28
	合計	14105	137

アンケート調査はビルマ語を母語とする以下の 3 名に協力して頂いた(年齢は 2007 年現在)。

- A: 36 歳 女性 ヤンゴン出身 1996 年来日
 B: 40 歳 女性 ヤンゴン出身 1992 年来日
 C: 47 歳 女性 マンダレー出身 1999 年来日

4.2 分析

-khE.に先行する動詞の分類、-khE.の出現位置の 2 つ視点から分析を行った。

4.2.1 動詞分類による分析

-khE.に先行する動詞を動作動詞、状態動詞、移動動詞、感情を示す動詞の 4 つに分類した。動詞分類の手順は以下の通りである。

⁶ 本稿の調査で使用した資料の日本語訳、グロス、例文番号は筆者によるものである。また、アンケート調査の例文出題も筆者による。

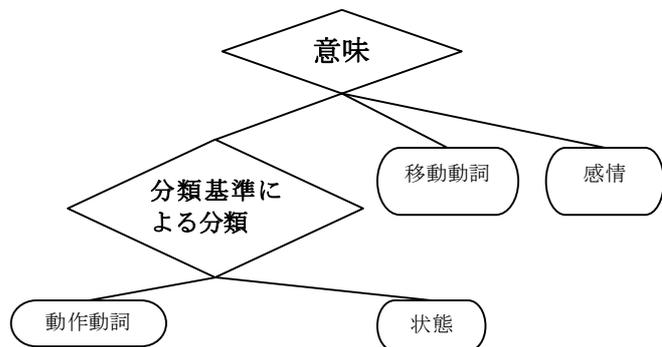


図1 分類方法

動作動詞と状態動詞は Okell(1969)を参考にし、以下の様に分類した。

<分類基準>

①命令形をとる→動作動詞

命令形をとらない→状態動詞

①で分類できないものに関して

②名詞に先行する→動作動詞

名詞に先行しない→状態動詞

この分類の結果を表2に示す。

表2 動詞分類の結果

	動詞例	小計
動作動詞	si: 乗る、sutaun: 祈る、sho: 言う(2)、TiN_ca: 学ぶ(2)、TiN_ 学ぶ、co:sa: 努力する(2)、hnan_ 預ける、など	60
状態動詞	mya: 多い、myO_ 流される、hma'Ta:-la_ 覚えている、hyi_ ある(5)、hyi-la_ あり続ける、pyi' なる(5)、など	64
移動動詞	siN:-la_ 降りてくる、la_ 来る(8)、Twa: 行く、など	12
感情動詞を示す動詞	waN:Ta_-la_ 嬉しくなってくる	1

3.4 で-khEの状態動詞への後続を疑問視したが、調査の結果、動作動詞への後続と状態動詞への後続はほぼ同等の結果が得られた。また、'la_ 来る'での使用が高いのも特筆すべき点であろう。「ビルマ語には同義あるいは類義の2つの動詞からなる複合動詞が多く存在する⁷」(澤田 1999:10 より要約)という性質ゆえに、先行研究で類似性が指摘されていた-khE. と-la_が結びつきやすい事が考えられる。卒業論文では-la_との結びつきについてアンケート調査を行ったが、本稿では紙面の都合上、割愛する。

4.2.2 出現位置による分析

本稿では従属節内での出現に焦点をあてた。調査で得られた-khEのうち、全体の59%である81例の-khE.が従属節内に現れた。そのうち従属節内でも主節内でも-khE.が使用されていた10例を除いた71例について分析したところ、42例の-khE.が主節の出来事より時間的に前の出来事を示していた。次がその例である。

18) tho_ myo.yo_-^ko_ myaN_ma_thE'kAri_211-^twiN_ miN:-^TI_ tI_-^khE.-TI_-hu_
 that wall-ACC calendar of Myanmar 211-LOC king-NOM build-PV-VSM/rls

⁷ 'thau'paN. 援助する (thau' 支える+paN. 援助する)' や 'to:tE' 進歩する (to: 進む+tE' 進む)' がその例である。

5. おわりに

本稿では-khEの使用状況と機能を明らかにする事を目的とし、調査・分析を行った。-khE.はどの動詞にも付加し得るものであり、過去を強調させる機能を持っている事が明らかとなった。卒業論文では主節内で使用される-khE.、従属節内と主節内の両方で使用される-khE.についても分析を行ったが、傾向を見出す事が出来なかった。しかし、‘la_ 来る’と多く共起するといった偏りも見られる為、意味的に付加されやすい、または音声的に付加されやすい等、何か傾向があるのではないかと筆者は考える。

今回は文書による調査のみに止まった為、得られた例文の幅が狭かった事は反省すべき点である。-khE.の使用状況をより明らかにする為には、書き言葉、話し言葉の両面においてより多くの用例を収集する必要がある。

略語一覧

VSM/rls	終助詞(叙実法)	V	動詞	LOC	於格	PV/plt	助動詞(丁寧)
VSM/irls	終助詞(叙想法)	1, 2, 3	1, 2, 3 人称	ALL	向格	PV/con	助動詞(条件節)
VSM/inch	終助詞(活写法)	NOM	主格	NEG	否定辞		
#	終助詞(命令法)	ACC	対格	QS	疑問詞		
VSM/neg	終助詞(否定)	ABL	奪格	PV	助動詞		

参考文献

澤田英夫 (1999) 『ビルマ語文法 (1年次)』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語研究所
 藪司郎 (1992) 「ビルマ語」 亀井孝、河野六郎、千野栄一編 『言語学大辞典第3巻・世界言語編』 : 567-610 所収 三省堂

Allott, Anna (1965) CATEGORIES FOR THE DESCRIPTION OF THE VERBAL SYNTAGMA IN BURMESE. *Lingua*(1965): 283-309.

Myint Soe (1999) *A Grammar of Burmese* UMI Dissertation Services, Michigan.

Okell, John (1969) *A Reference Grammar of Colloquial Burmese*. Oxford University Press.

Okell, John and Anna Allott (2001) *Burmese/Myanmar Dictionary of Grammatical Forms* Curzon Press.

使用辞典

小西友七・南出康世編(2001) 『ジーニアス英和辞典(第3版)』 大修館書店

原田正春・大野徹編(1990) 『ビルマ語辞典』 日本ビルマ文化協会

ビルマ語助動詞配列の再考察

田森 佳奈

(東南アジア課程・ビルマ語専攻)

キーワード：ビルマ語、述語文、法的表現、助動詞、配列順序

0. はじめに

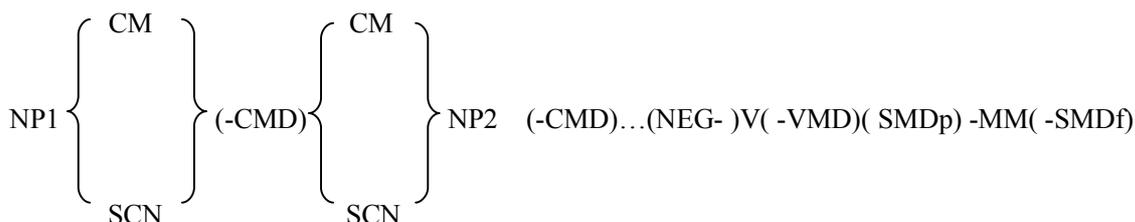
ビルマ語¹の法的表現に関する論文は、他のテーマと比較して非常に少ないと言える。筆者の知る限り、直接に法的表現を取り上げた論文は存在しない。

本稿ではビルマ語の法的表現のうち、命令・禁止表現、祈願・懇願表現、勧誘表現を中心とし、各表現形式の助動詞の配列順に注目し考察することを目的とする。

0-1. ビルマ語述語文の構造

ビルマ語述語文の構造の概略をここでは述べる。詳細は Okell(1969)、大野(1983)、澤田(1988)等を参照されたい。

はじめに、澤田(1988)にならってビルマ語述語文の構造を示す。



NP:	名詞句	V:	動詞
CM:	格標識	VMD:	動詞修飾素
SCN:	特殊補語名詞	MM:	法標識
CMD:	補語修飾素	SMDp:	文修飾素(MMに先行)
NEG	否定接頭辞(ma-)	SMDf:	文修飾素(MMに後続)

(澤田 1988 : 74)

¹ ミャンマー連邦のほぼ全域で通用する言語。シナ・チベット語族、チベット・ビルマ語派、ロロ・ビルマ語群に属する。33個の子音音素と7個の母音音素、ならびに3個の声調を持つ。音節構造は、子音+母音に声調がついたものを基本とする。
(藪 1992 : 567-570 一部要約)

本稿では『E メール用ビルマ語発音記号』に従い、以下の音韻表記を用いた。[]内は国際音声字母(IPA)による。IPA表記の無いものは、IPAと同記号である。<子音>無声無気音/p,t,s,c[tʃ],k/、無声有気音/ph[pʰ],th[tʰ],sh[sʰ],ch[tʰ],kh[kʰ]/、有声音/b,d,z,j[ʃ],g/、歯間音/T[tʃ]/D[dʃ]/、声門摩擦音/h、鼻音/m,n,ny[ɲ],ng[ŋ]/、無声鼻音/hm[ɱm],hn[ɱn],hny[ɱɲ],hng[ŋŋ]/、側面音/l/、無声化音は/h-/を付加し/hl[l̥]/、半母音/w/の無声化音/hw[m]/、半母音/y[j]/の無声化音は/S[s̥]/、介子音2個/C-y-/C-w-/、末子音2個、声門閉鎖音/-ʔ/、後続の音に同化する鼻音は/N/で表記する。<母音>/a,e,i,o,u,E[ɛ],O[ɔ]/の7個。母音の長短の対立はない。軽声化した母音は/A[ə]/で表す。この軽声化母音には声調の区別が無い。<声調>Creaky Tone(高いところから急激に下降する) /-/, Level Tone(低い位置で平らに長い) /-/, Heavy Tone(高く平らで長い) /-/. 本稿での名称はOkell(1969:11-12)によった。<その他の記号>記号”~”は、直後に続く子音が同一調音点において有声化することを示す。記号”||”は句点、”|”は読点を示す。

以上のことを、例文を上げつつ概説することにする。ここでは、主動詞・vsm²・丁寧の助動詞/-pa_/が含まれる述語文の説明を中心とする。

vsmとは、澤田(1995b)では「機能辞」と呼ばれ「補語や文などの構造的単位を形成し、その機能を決定する助辞」のことである。藪(1992)、澤田(1999)では、「動詞文標識」とも呼ばれる。

以下の先行研究からの例文において、特にことわりのない限り逐語訳と和訳は筆者による。澤田(1999)は動詞/sa:/「食べる」を例とした一連の例文をあげている。

- (1) sa: (^pa_) ^tE_ ||
 食べる (丁寧) vsm 「食べる(食べます)」
- (2) sa: (^pa_) mE_ ||
 食べる (丁寧) vsm 「食べる (食べます)、食べよう (食べましょう)、食べるだろう (食べるでしょう)」

vsmの/tE_/は現在の出来事、過去の出来事、現在の習慣、不変の出来事を示す。また、/mE_/は意志、推測、未来を表す。

例文(1)と(2)は同じ形式によって否定を作ることができる。すなわち、否定接頭辞/ma-/を動詞に前接し、vsmは/hpu:/となる。

類似した意味の動詞、あるいは違う意味を表す動詞を連続させて使うこともある。これらを澤田(1999)では「複合動詞」と呼んでいる。

前者の例は以下のとおりである。

- (3) taN: -^paN: (pa_) ^tE_ ||
 依頼する 懇願する (丁寧) vsm 「謝罪する(謝罪します)」
- (4) mA taN: -paN: (pa_) phu: ||
 否 依頼する 懇願する (丁寧) vsm 「謝罪しない(謝罪しません)」
- 2つの動詞の間に否定辞/ma-/は介在しない。

後者の例は以下のとおりである。使役の助動詞/-se_/が後接する場合。

- (5) twE. -^se_ (pa_) ^tE_ ||
 会う 使役 (丁寧) vsm 「会わせる(会わせませす)」
- (6) mA twE. -^se_ (pa_) phu: ||
 否 会う 使役 (丁寧) vsm 「会わせない(会わせません)」

例文(4)同様、否定辞/ma-/は動詞の間に介在しない。

また、澤田(1999)が指摘しているように、丁寧の助動詞/-pa_/は複合動詞の内部に介在することはない。

以上、0-1.では例文(1)~(6)をあげ現代ビルマ語の述語文の構造と丁寧の助動詞/-pa_/が付加されたときの構造を確認した。命令・禁止表現については次節で確認する。主動詞に後接する/-pa_/以外の助動詞に関しては、詳しくは藪(1992)等の研究を参照されたい。

0-2. 命令・禁止表現

以下、命令・禁止表現の例文を挙げる。例文は澤田(1999)によるが、逐語訳・和訳は筆者による。

- (7) sa: (^pa_) - φ ||
 食べる (丁寧) - φ 「食べろ(食べなさい)」

² 略語一覧は稿末にあげる

命令の否定文では、vsm は /-nE./ である。

- (8) mA sa: (pa_) nE.||
否定 食べる (丁寧) vsm 「食べるな(食べないでください)」

0-3. 祈願・懇願表現

次に、現代ビルマ語の祈願文と懇願文について例を確認しておく。

0-2.でも述べた通り、使役文では丁寧の助動詞は V -(丁寧) -AUX -se_ の順で現れる。しかし祈願文・懇願文では以下にあげるように丁寧の助動詞 /-pa_/ は、V -se_ -(丁寧) -vsm あるいは V -(丁寧) -se_ -φ で現れる。

- (9) aTE' -taya.hnasE_ -^cO_ Se_ -^pa_ -se_||
齢 -120 -超える 長い -(丁寧) -se_ 「120 歳以上まで長生きできますよう」
(Okell 1969:404)
- (10) ye_ -tAhkwE' -lau' Tau' -pA -ya -^se_||
水 -一杯 -位 飲む -(丁寧) -AUX -se_ 「水を一杯飲ませてください」
(Okell 1969:405)

0-4. 勧誘表現

次に、現代ビルマ語の勧誘表現について概説する。現代ビルマ語の勧誘文は /V -ca -sO./ と /V -ya -auN/ の 2 形式である。大野(1982:79)で挙げられている例文をあげる。和訳も大野(1982)による。

- (11) ywa_ -ko praN -ca -sO.
村 -へ 帰る -ca -sO. 「村に帰ろう」
- (12) thamiN: sa: -ca -ya -auN
ご飯 食べる -ca -ya -auN 「ご飯を食べましょう」

勧誘文の否定は /ma -V -bE: -ne_ -/ で表される。例文(13)は筆者による作例。

- (13) thamiN: mA ca: bE: ne_ ca -ya -auN||
ご飯 否 食べる bE: 居る ca -ya -auN 「ご飯を食べずにいましょう」

0-5. /-se_/ を用いた表現形式

以下、同一形態素 /-se_/ を用いて表される形式には使役文、祈願文・懇願文、命令文が存在する。ここでは、前述していない使役文と /-se_/ を用いた命令文について概説する。

0-5-1. 使役文

はじめに、使役文の例を確認しておく。現代ビルマ語では、いわゆる使役文は /-se_/ と /-hkaiN:/ を用いた 2 つの形式がある。

- (14) canO_ Tu.^ko_ hta. -se_ -^pa_ -^tE_||
私 彼-を 立つ -se_ -(丁寧) -vsm 「私は彼を立たせた。」
- (15) canO_ Tu.^ko_ hta. -hkaiN: -^pa_ -^tE_||
私 彼 -を 立つ -hkaiN -(丁寧) -vsm 「私は彼を立たせた。」

/-se_/ と /-hkaiN:/ の用法はいくつかの点において異なっている。詳しくは岡野(1994)、安田(2000)を参照されたい。

/-se_/ は例文(5)、(6)であげたように、複合動詞の 2 番目の要素として用いられ文法的な働きをする。その配列は使役文においては V -se_ -(丁寧) -vsm となる。しかし、祈願文では、V -(丁寧) -se_ -φ、懇願文では V -(丁寧) -AUX -se_ となるのである。

祈願・懇願表現の /-se_/ と比較すると、使役の機能を持つ /-se_/ は主動詞と結びついて複合動詞を形成し、その間に小辞は介在できない。一方で、祈願文・懇願文では、2つの動詞の間に助動詞が介在することができる。

こうした分布や現れ方の違いについては Okell(1996)をはじめとするいくつかの研究で指摘されてきた。

0-6. 諸構文のレベル

同じ vsm をとるものを本稿では文構造上同一レベルと呼ぶこととする。したがって、祈願・懇願表現は否定にすると vsm に /-nE./ が現れることから命令・禁止表現と同一レベルのものであることがわかる。また、勧誘文には /-nE./ が現れないことから祈願・懇願とは違うレベルであることがわかる。 /-se_/ を用いた使役表現は一般陳述文と同一レベルである。

1. 先行研究

ここでは、助動詞配列に注目した安田(2002)の研究をあげる。同様の研究は Bernot(1980)でも行われているが、最新のものを本稿ではあげることにした。

安田(2002)ではリストアップした 65 個の助動詞に関し、総数 865 個の用例を元に助動詞の配列表を作成した。

65 個の助動詞は、Okell and Allott(2001)で示されている助動詞 67 個より、/-'a:ci://-seiN://-tE./ の3つを考察対象から外し、藪(1992)に従い /-leiN./ を加えたものである。詳しくは安田(2002)を参照されたい。

ただし、筆者はビルマ語の助動詞が安田(2002)の様に一次元化するかどうかについては疑問をもっている。その理由を例文(16)(17)をあげ説明する。

- (16) pyaN -la_ -^chiN -^tE
 戻る 来る ～したい vsm 「戻ってきたい」
- (17) pyaN -^chiN -la_ -^tE
 戻る ～したい 来る vsm 「戻りたくなくなった」

この例文では、助動詞 /-chiN/ の順序が異なることで、その働きも異なっている。このことから、助動詞配列は一次元化できないと考える。

しかし、0-3. で述べたとおり、祈願・願望表現と使役表現の違いは丁寧をあらわす助動詞 /-pa_/ を中心に置いて一次元化して考えると明確になる。よって、本稿では安田(2002)より祈願・願望表現と使役表現、丁寧の /-pa_/ に関わる部分だけを抽出し、各表現形式中の助動詞配列を確認する。

安田(2002)にならい以下の制約を設ける。

- A. 主動詞に近いものから順に、第1類、第2類・・・第20類とする。
- B. 現れる環境に制限のある場合には()でその環境をしめす。
- C. 「 」内の訳は安田(2002)によるものである

表①; 助動詞の配列順(安田(2002)をもとに、ここでは第1,7,11,12,16,17,18類と vsm に後接する類だけをとりあげた)

主動詞	第1類	第2～6類		第7類	第8～10類		第11類	第12類
		/-ya/ (受身の形式)			/-se_ 「～させる」			/-ya/ 「～させる」
	第13類～第15類	第16類	第17類	第18類	第19類	vsm		終助詞
		/-pa_ 丁寧	/-ya/ 「～させよ」 (懇願文)	/-se_ 「～であれ」 「～させよ」 (祈願・懇願文)			/-ouN:/ 「まだ～」 /-tO./ 「もう～」	

この配列からも 0-2. で述べたように /-se_/ を含む用例が、使役表現と法的表現の中で異なることがわかる。次節では /-se_/ を含む使役文と祈願文・懇願文の違いについて形式的違いの観点から詳しく見ることにする。

2. 問題提起・調査方針

本稿では、自作のコーパスから用例を収集し、安田(2002)であげられている助動詞配列の再考を行う。この際扱うのは祈願文・懇願文・命令文と比較のため /-se_/ を用いた使役文のみとする。

3. 調査方法

本稿ではビルマ語資料から助動詞 /-pa_/ の動詞述語文の用例を採集し、安田(2002)との比較を行う。資料 D、資料 E に限っては時間上の制約から /-pa_/ を含みかつ /-se_/ を含む用例のみを採集した。

表②；調査資料（〈 〉内は本稿での略語）

資料 A 〈myei'〉	“myei'aN_miN:sa_lou'sa_mApa_bE:kwE_ra_je:priN rauN:lo.mya:mriNmAla: ” 口語体現代小説
資料 B 〈ko_〉	“ko_ma_” 口語体現代小説
資料 C 〈クレ〉	“BURMESE CHRESTOMATHY” 会話書き起こし
資料 D 〈宮廷〉	『マンダレー宮廷説話集』 植民地時代以前からミャンマー—滞在していた著者によって集められた説話を、ミャンマー人作家がビルマ語へ訳した文語体小説 時代設定が古く、古典作品と言える
資料 E 〈チャン〉	『チャンズィッター他 児童用戯曲集』 ト書き部分は口語、台詞部分は文語で書かれた王朝を舞台とした児童劇脚本

4. 研究結果・考察

以下に各資料からの用例数を示す。

表③；資料からの用例数

資料	用例数
〈myei'〉	12
〈ko_〉	19
〈クレ〉	311
〈宮廷〉	76
〈チャン〉	8
計	426

5つの資料から総計 426 の用例を得た。助動詞 /-pa_/ だけを含む用例のほか、他の助動詞と共起している例も得ることができた。

安田(2002: 64)の助動詞配列の表と照らし合わせた結果、本稿での調査でも助動詞 /-pa_/ の配列は安田(2002)と概ね同じ結果が得られた。しかし、筆者が得た用例 426 例のうち、3 例は安田(2002)には当てはまらないものであった。それらについて以下考察を行う。

安田(2002)の配列に当てはまらない用例はいずれも助動詞 /-se_/ を含む例であった。助動詞 /-se_/ を含む形式としては、A 祈願、B 懇願、C 使役、D 命令の 4 種類が考えられる。以下

表④では /-se_/ を含む用例数を前述した A から D の 4 種類に分類したものである。なお「分類不可」とは筆者・コンサルタント³共に A から D の上記 4 つともに判断しきれなかった用例である。

表④；助動詞 /-se_/ を含む用例数

	<myei'>	<ko_>	<クレ>	<宮廷>	<チャン>	計
A 祈願	0	0	0	14	2	15
B 懇願	0	0	6	3	2	11
C 命令	0	0	0	12	2	14
D 使役	0	0	0	44	2	42
分類不可	0	0	0	3	0	6
計	0	0	6	76	8	90

安田(2002)に当てはまらない例文は、更に分類すると「分類不可」に含まれる 3 例であった。そのうち、例文(18)と(19)は助動詞 /-pa_/ がひとつの文で繰り返し挿入されている。

また、例文(20)も「分類不可」に含まれるものであるが、「祈願」に分類される(21)と /-pa_/、 /-ya_/、 /-se_/ の組み合わせは同じものの、その配列が微妙に異なるものである。この 2 つを比較し考察を行う。

(18) tiN_ -pa_ -ya -^se_ -^pa_
 tiN_ -pa_ -ya -se_ -pa_ 「はい(僧侶・王族等限られた者に対して)」
<宮廷>

(19) mE -ca pe: -^pA -ya -^se_ -^pa_ -la:
 くじ -引く 与える -pa_ -ya -se_ -pa_ ~か?
 「くじを引かせてくださいますか？」
<宮廷>

(20) mA me. -^se_ -ya -^pa_
 否 忘れる -se_ -ya -pa_ 「忘れません」
<宮廷>

(21) mA me. -^pA -ya -^se_ hniN.
 否 忘れる -pa_ -ya -se_ vsm 「忘れませんように」
<宮廷>

例文(18)と(19)、(20)と(21)に別けて考察することとする。

4-1. 複数の /-pa_/ が生起する場合

まず、例文(18)と(19)について考察を進める。

例文(18)と(19)はいずれもコンサルタント A により受容可能であると判断された文である。しかし、コンサルタント C からは、少なくとも現代ビルマ語での使用は認められないとの指摘があった。

/-pa_ -ya -se_/ の表現形式は、表②に従って分類すると以下のようになる。

pa	ya	se
第 16 類	第 17 類	第 18 類

表②に従って考えると、第 16 類以降で /-pa_/ が配列されることはない。つまり、例文(18)(19)のように、 /V -pa_ yase_ pa_/ の形式をとることは考えられないわけである。

最後項に接続される /-pa_/ が表②のどの類に入るのか、または新たな類を加えるべきなの

³ コンサルタント A 女性 マンダレー出身 50 歳代 (2007 年現在)
 コンサルタント B 女性 ヤンゴン出身 30 歳代 (2007 年現在)
 コンサルタント C 女性 マンダレー出身 40 歳代 (2007 年現在)

かを探るために以下の作業を行う。

例文を否定文にする、すなわち、*vsm* である /-phu:/あるいは /-nE./ が加わることで第 19 類に /-pa_/ が加わるべきか否かを探る。その際、コンサルタント A,C の 2 名に随時確認を行った。

例文(18)の否定文

- (22) ma Sau' -tiN_ -pa_ -ya -se_ nE.
 否 述べる -pa_ -ya -se_ *vsm* 「いいえ」

コンサルタント C によると、もともと例文(18)は/Sau'-tiN_/という複合動詞であるため、否定文にした場合には/Sau'/を加える必要があるという。(コンサルタント A は/Sau'/を挿入しない文も受容可能であると判断された。)また(22)の最後には /-pa_/ を付加することは不可能であるという指摘をコンサルタント A,C の両名から受けた。*vsm* である /-nE./ が加わることで /-pa_/ が付加できない理由としては、 /-pa_/ が *vsm* を担っているということが考えられる。しかし、 /-pa_/ が *vsm* の働きをする例を筆者は目にすることがなく、その可能性は薄いように思われる。

例文(19)の否定文

- (23) mE -ma -ca pe: -pA -ya -^se_ -nE.
 mE -否 -ca 与える -pa_ -ya -se_ *vsm* 「くじを引かせないでください」

コンサルタント A によると、例文(20)は例文(24)と同様に考えられるという。以下はコンサルタント A による作例。

- (24) Twa: ^pa la:
 行く (丁寧) ~か? 「行くのですか?」

(24)の否定は /ma- V -nE./ の禁止文であり(例文(25))、 /ma- V -bhu:/ の形(例文(26))にはならないという。

- (25) mA Twa: ^pa nE.
 否 行く (丁寧) *vsm* 「行かないでください」

- (26) mA Twa: -pa_ bhū: la:
 否 行く (丁寧) *vsm* ~か? 「行かないのですか?」

このことから、1 例のみではあるが /V pa-ya-se_ -pa_ -la:/ の形式もまた、懇願文(広くは命令文)の一種と認めることが出来ると考えられる。しかし、例文(22)と同じ理由から、二つ目の /-pa_/ の働きを特定することは現段階では難しいと考える。

4-2. 同一形態素の組み合わせで、配列が異なる場合

次に、例文(20)と(21)について考察を行う。この二つは助動詞の配列に限っては安田(2002)のとおりである。しかし、(20) mA -me. -se_ -ya -pa_ と(21) mA -me. -pa_ -ya -se_ -hniN. を比較してみると、下線を引いた部分は配列がことなるものの同じ形態素の組み合わせである。異なる点は、例文(20)には *vsm* がない点である。それだけの違いなのだが、前者の訳は「忘れません」、後者は「忘れませんように」となる。

コンサルタント A は例文(20)と同意の文として、以下の例をあげた。

- (27) mA- me. -^pa_ -bhū:
 否 忘れる (丁寧) *vsm* 「忘れません」

(20)は「誓いの文」であり、(21)は「懇願の文」であるという。1-1. で見たように配列順序によって意味が変わる用例であると考えられる。

5. おわりに

本稿で取り上げる範囲においては、助動詞配列は安田(2002)と概ね同等の結果となった。しかし、複数の /-pa_/ が生起する用例は安田(2002)には含まれておらず、助動詞配列が完全に網羅された表であるとはいえない。加えて、例文(20)と(21)をもって、動詞配列順を一次元化することが不可能である点を指摘したい。また、今回の調査で得られた特殊な用例が、古典作品にのみ見られたことが興味深い。しかし、なぜこのような配列が起こるのかは現段階では筆者には分からなかった。本稿では指摘にとどめることとする。

ビルマ語の法的表現を中心とした助動詞配列に関し、今回の調査では明確な結果が得られたとはいえない。資料とする作品の再選などを今後の課題とし、更なる調査・研究を行いビルマ語の助動詞配列に関し考察を進めていきたい。

逐語訳略語一覧

vsm	verb sentence marker	AUX	助動詞
否	否定接頭辞/ma- /	φ	ゼロ
(丁寧)	丁寧を表す助動詞	V	動詞

参考文献

- Bernot, D. (1980) "Le Prédicat En Birman Parlé", Langues et Civilisations de l'Asie du Sud-est et du Monde Insulindien no.8, France
- 原田正春 (1966) 『基礎ビルマ語』、大学書林、東京
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一 編 (1996) 『言語学大辞典 第6巻(術語編)』三省堂、東京
- 岡野賢二 (1994) 「現代口語ビルマ語のいわゆる使役形式 -sei と -khain: について」(未発表)
- 大野徹 (1983) 『現代ビルマ語入門』、泰流社、東京
- OKELL, J. (1969) "A reference grammar of colloquial Burmese" Oxford University Press, U.K.
- 澤田英夫 (1988) 「現代ビルマ語における動詞配列の類型について」『言語学研究』、第7号：73-110、京都大学言語学研究会
- _____ (1995a) 「要求と希求をつなぐもの・分かちもの -独立した類をなすビルマ語の願望表明文」『東南アジア史学会会報』63号、東南アジア史学会
- _____ (1995b) 「現代ビルマ語の願望表明文の文末要素 -sei_ の機能について」『言語研究』第108号：158(第110回日本言語学会大会発表要旨)
- _____ (1999) 『ビルマ語文法(1年次)』(東京外国語大学外国語学部ビルマ語専攻1年次用教材。非公刊)
- 藪司郎 (1992) 「ビルマ語」、亀井孝・河野六郎・千野栄一 編『言語学大辞典 第3巻・世界言語編』所収、三省堂、東京
- 安田哲(2002) 「ビルマ語の動詞句の構造について」東京外国語大学 修士論文

資料一覧

- Corny, William S. (1957) "BURMESE CHRESTOMATHY", Baltimore: American Council of Learned Societies, U.S.A. : 92-124
- Feilding, Hall 編(1966) Khin Than Myint 訳 "Mandalay Nanndwinn Pounbyin-mya" (『マンダレー宮廷説話集』), Kyipwayei Pounhneitai, Myanmar
- Ne Winn Myint(1995) "ko_ma", Swe_bo:^tO_sa_pe, Myanmar
- _____ (1995) "myei'aN_miN:sa_lou'sa_mApa_bE:kwE_ra_je:priN|rauN:lo.mya:mriN mAla:|", Swe_bo:^tO_sa_pe, Myanmar

広告キャッチフレーズにおける比喩の諸相

土佐 栄樹

(欧米第二課程スペイン語専攻)

キーワード：広告キャッチフレーズ・比喩・トピック・イメージ・語彙論

0. はじめに

本稿では、広告キャッチフレーズ¹を用いた比喩²の研究を行う。比喩表現についての先行研究を概観してみると、形式面、内容面双方からの研究は存在するが、それらは比喩表現集成という形にとどまり、比喩表現の傾向についての詳しい記述はなされていない。また、広告キャッチフレーズを用いた研究においても、比喩表現について客観的なデータに基づく研究はまだされていない。

読み手である消費者に訴えるという使命を持つ広告キャッチフレーズを研究対象とし、比喩表現の使用傾向をより明らかにすること、また、広告キャッチフレーズの表現効果として比喩がどのような役割を果たしているのかを明らかにすることが本稿の目的である。

1. 先行研究

文学作品から比喩表現を収集し、分類した先行研究としては国立国語研究所(1977) および中村(1977)がある。また、広告キャッチフレーズを用いた先行研究としては、瀬戸(2005) および李欣怡(2006)があげられる。以下それぞれの先行研究について概観する。

1.1. 国立国語研究所(1977)

国立国語研究所(1977)では、50の文学作品から比喩表現を収集し、9,035例の比喩表現について形式的に分類するという研究がされている。分類に際しては以下の3つの分類を設定し、指標比喩 1,264例、結合比喩 5,337例、文脈比喩 2,434例という結果を得ている。

表1：比喩表現の基本分類

①指標比喩	受けて側での比喩の成立に直接に形式的に関与しているような特定の言語形式を備えている比喩表現 (01) ³ その露は月光を吸い <u>ちょうど</u> 荒絹の <u>よう</u> にぼんやりと照っていた。
-------	---

¹ 広告のキャッチフレーズに関してはキャッチコピー、広告文など様々な呼び名があるが、本稿では国立国語研究所(1977)に倣い、「キャッチフレーズ」という語を用いる。

² 国立国語研究所(1977)は、「比喩とは、表現主体が、表現対象を、それを過不足なく直接にさし示す言語形式を使わないで、その代わりに、言語的な意味では他の事物・事象に対応する言語形式を提示し、その言語的環境との違和感や、それが現れることの文脈上の意外性などで、受容主体の想像力を刺激して、両者の共通点を推測させることによって、間接的に伝える表現技法である。」[国立国語研究所(1977: 154-155)]と定義している。本稿においても、この定義を用いることとする。

³ 以下、例文番号は筆者による。なお、表1内の例文はすべて国立国語研究所(1977)によるものであり、(01)の下線部も前掲書によるものである。

②結合比喩	語・接辞など何らかの言語単位の結びつきに、少なくとも言語上の論理的な飛躍が感じられる比喩表現 (02) どす黒い臭い
③文脈比喩	言語形式の内部に比喩性を持たず、主として先行する文脈での関係で比喩として成立する比喩表現 (03) ⁴ ゆうべの夢の出来事が、今夜もくり返された。

[国立国語研究所 (1977 : 175-181) をもとに筆者が作成]

1.2. 中村 (1977)

中村 (1977) は、表現形式ではなく内容に着目し、370 の文学作品から 6746 例の比喩を収集・分類し、『比喩表現辞典』にまとめている⁵。分類に際しては、「トピック」と「イメージ」という語を設定した。以下はその説明である。

ただ、そうは言っても、「ネリマ大根のような足」という例が〈足〉を話題にした表現だという点は確かだし、〈ネリマ大根〉を思い描くことも確かだ。(中略) そこで、ともかく話題になっている〈足〉を“トピック”と呼び、ともかくひとつの映像が通りすぎる〈ネリマ大根〉や〈ゾウ〉をともに“イメージ”と呼ぶことにしたい。

[中村 (1977 : 84)]

また、分類項目として製品・自然・人間・抽象的關係など 12 の大分類を設定し、それらに下位分類を施している。分類項目は『分類語彙表』を基に設定したという記述が中村 (1977) に見られたが、明確な分類基準の説明はない。

さらに中村 (1977) では比喩表現の内容的分類について、語の「カテゴリー転換」という観点から考察をしている。この記述においては広告キャッチフレーズを例にとり、カテゴリー転換について概観している。そのなかで「物体に限らず、いろいろなものを人間めかして扱う例が圧倒的に多い。」[中村 (1977 : 80)] と述べている。次に抽象体 (感覚や概念といったもの) を物体 (五感で感じ取れるもの) として扱う例が多いと考察している。

1.3. 瀬戸 (2005)

瀬戸 (2005) は、比喩の中でも擬人法に焦点を当てた先行研究である。「擬人法は、表現に命を吹き込むことによって、表現全体を生気づける」[瀬戸 (2005 : 19)] とし、「日常のことばの中で、擬人法がもっとも活躍するのはどのような場面だろうか。(中略) 間違いなく、その重要なレジスター (使用領域) のひとつは、宣伝である。新聞・雑誌などの広告は、擬人法の宝庫である。」[瀬戸 (2005 : 19) より筆者要約] と記述している。

⁴ 言語表現上では、二晩同じ夢を見たと解釈できるが、先行する文脈との関係で比喩表現となっている。この例において「ゆうべの夢の出来事」が、実は現実には起こった出来事を指していることが、先行する文脈から理解できると説明されている。

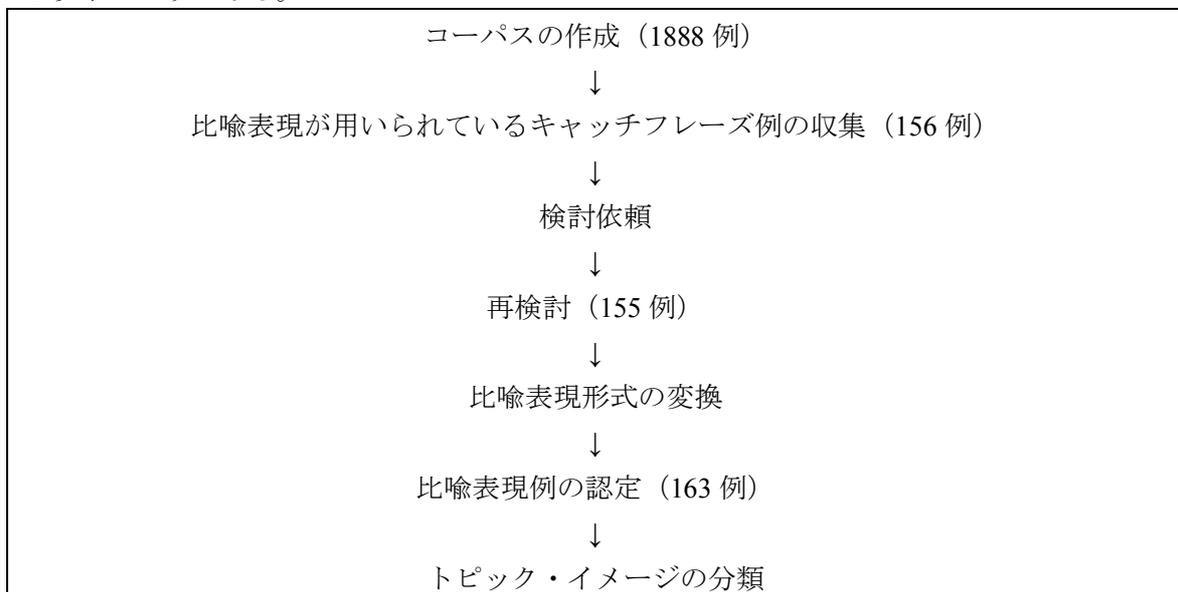
⁵ その後、中村 (1995) という、約 2,000 例を加えた増補版を出版したが収集方法に変更がなかったため、今回は分類方法について詳しい記述のされている中村 (1977) を挙げる。

1.4. 李欣怡 (2006)

李欣怡 (2006) は広告キャッチフレーズに格助詞「へ」が多用されることに焦点を当て、2003～2004年の新聞広告のキャッチフレーズを調査している。そして、広告キャッチフレーズにおける格助詞「へ」の機能は「変化の起点(=「現状」)と終点(=「理想」)の両者を意識させ、変化を際立たせる性質を持つ。(中略)現状をよりこのましい「理想」へと変えてくれる商品やサービスへの欲求が喚起され、特に商品の画期性が強調される広告において、その効果をいっそう高める」[李欣怡 (2006: 27)] と結論づけている。

2. 調査方法

今回の調査では、まず広告キャッチフレーズのコーパスを作成⁶し、そのコーパスから比喩表現例を抽出してトピック・イメージの分類を行うという手順をとった。手順をまとめると以下のようなになる。



本章では比喩表現の抽出方法と、分類方法を分けて概説する。

2.1. 比喩表現の抽出方法

まず、コーパスから比喩表現を抽出する流れを、実例を使って示す。

例：重力と戦う下着



⁶ コーパスは、東京コピーライターズクラブのホームページ「東京コピーライターズクラブ：コピー検索システム」を用いて筆者独自に作成した。同ホームページは、各年の東京コピーライターズクラブ編『コピー一年鑑』に所収されているキャッチフレーズをまとめたものである。

上記のとおり、主述の関係を明確にし、「主部→述部」という流れに沿って比喩表現形式を変換⁷している。そして本稿では中村（1977）に倣い、「トピック」「イメージ」という用語を用いる。そして「たとえられるもの＝トピック」「たとえるもの＝イメージ」という軸に沿って、主部をトピック、述部をイメージと設定する。

得られた例については、今回設定した調査手順の確実性を高めるために、上記の基準からコーパスから抽出した比喩表現について日本語学の研究者である 20 代男性 1 名に比喩表現の検討を依頼した。

2.2. 分類方法

トピックの分類においては、中村（1977）の用いた分類基準をそのまま用いることはせず、国立国語研究所編（2004）『分類語彙表』の中で、部門として設定されている最も大きな意味的分類項目、およびその下位分類として設定されている分類項目を用いることとする。分類項目は以下のとおりである。

表 2：トピックの内容的分類項目

大分類《部門》	抽象的關係	人間活動の主体	人間活動—精神および行為	生産物及び用具	自然物及び自然現象
下位分類	事柄・類・存在・様相・力・作用・時間・空間・形・量	人間・家族・仲間・人物・成員・公私・社会・機関	心・言語・芸術・生活・行為・交わり・待遇・経済・事業	物品・資材・衣料・食料・住居・道具・機会・土地利用	自然・物質・天地・生物・植物・動物・身体・生命

また、イメージの調査については、中村（1977）および瀬戸（2005）の記述を検証するという狙いのもと、トピックが人間扱いされている例⁸について調査する。その際、比較の対象として、トピックが物体扱いされている例も、出現例を調査する。今回はカテゴリー間の置き換えを考察の対象とする。したがって、「人間扱いされているもの」については表 5 による下位分類項目のうち【人間】【家族】【仲間】【人物】【成員】をトピックとしている例は考察の対象からはずし、「物体扱いされているもの」については、【生産物及び用具】の大分類項目をトピックとしている例すべてを同じく対象からはずす。

3. 調査結果と考察

3.1. トピックについて

得られた 163 例のうち、160 例についてトピックに基づいて分類したところ、以下のよう

⁷ 国立国語研究所（1977：305）では、比喩思考の原型を抽出するために出現した表現を基本形に変換するという作業についての記述がある。詳しくはそちらを参照されたい。

⁸ 今回はイメージとなる語がたとえば人間だけでなく動物や植物にも当てはまるものであっても「人間に当てはまる」イメージであればカウントする。この判断基準に関しては大雑把なようであるが、商品やサービスの認知や販売促進を図る広告キャッチフレーズの表現である以上、たとえば前述の「重力と戦う下着」という比喩表現において、「戦う」という語から動物をイメージすることは少ないだろうと筆者は考えている。

な結果が得られた。

表3：トピックについての分類結果と出現例⁹

大分類項目	下位分類 (出現数)	出現例
抽象 (19)	存在 (1)	しくみ
	様相 (4)	安全・美しさ (美)・無事・安全
	力 (1)	重力
	時間 (8)	きのう・夏・近未来 (未来)・夏・未来・一秒・世紀・生年月日
	作用 (1)	爆発
	空間 (1)	大画面 (画面)
	量 (3)	六十億分の一 (分数)・体重・距離
人間主体 (31)	人間 (8)	自分・男・私・空気感・空気感・我輩 (私)・人・ボク (僕)
	家族 (4)	父・おじいちゃん・子供・バカ息子 (息子)
	仲間 (2)	メル友 (友)・恋人
	人物 (1)	サラリーマン
	公私 (8)	新宿/渋谷/池袋 (街)・国・京都・三重・プライベート・静岡県 (県)・中国・日本中 (日本)
	社会 (8)	会社・店・お店・会社の外 (会社)・世界・工場・駅・塾
人間活動 (40)	心 (9)	ハート (心)・誤解・目覚め・快眠・こころ (心)・研修・ほほえみ (微笑み)・心・タマ (魂)
	言語 (9)	雪印・明治乳業・良品・マスコミ・マイライン・ニュース・図鑑・ラジオ日本・言葉
	芸術 (3)	神話・写真・音楽
	生活 (8)	出張・就職・就職・ゴルフ・ズル休み (ずる休み)・人生・仕事・魔法
	行為 (2)	想像力・想像力
	交わり (1)	和
	経済 (6)	おくりもの・お歳暮・節電・オーダー・経済・バブル (バブル景気)
	事業 (2)	料理・あとかたづけ (片付け)
生産物 (33)	物品 (1)	論吉 (お札)
	資材 (4)	紙・蛇口・釘・シール
	衣料 (2)	下着・ボスジャン
	食料 (8)	アングルトリス・ビール・ガム・ウイスキー・ウイスキー・響・スローフード・めんたい
	住居 (6)	家・LDK・家・家・ドア・塀
	道具 (4)	ハンコ・ゴム (コンドーム)・ピアノ・バター
	機械 (6)	時計・ケータイ (携帯電話)・テレビ・電車・エアバッグ・お風呂カー (車)
	土地利用 (2)	土地・埼京線 (路線)
自然物 (37)	自然 (5)	音・紫外線・そよ風・電気・音
	物質 (2)	火・Co2 (二酸化炭素)
	天地 (7)	太陽・ながれ星 (流れ星)・地球・山・空・地球・おとめ座 (星座)
	植物 (4)	花・木・盆栽・木
	動物 (5)	豚・人類・ペット・馬・鳥
	身体 (12)	のど・皮膚・体・おっぱい・毛穴・爪先・目・腕・耳・目・てのひら・目
	生命 (2)	ウンチ・顔の成長 (成長)

表3を見てみると、1つの大分類項目の中でも出現数に差があることがわかる。また、広告の内容を実際に調べてみると¹⁰、分類項目によってどのような広告の表現に使われるかに

⁹ 【抽象】：【抽象的關係】、【人間主体】：【人間活動の主体】、【人間活動】：【人間活動－精神および行為】、【生産物】：【生産物および用具】、【自然物】：【自然物および自然現象】の略である。出現例については、同じ語が出てきたものでも区別して示している。また、出現例にあるカッコ内の記述は、国立国語研究所編（2004）で調べた際に変更りに用いた語である。

¹⁰ 得られた比喩表現例については実際に各年の『コピー年鑑』を参照し、広告の内容についても調査した。

ついて傾向を探ることが出来る。以下、広告キャッチフレーズにおける比喩表現の用法という観点から、3点に分けて述べる。

3.1.1. 商品など、広告の内容に焦点を当てる用法

まず【生産物】のトピックにおいては、多くの例が広告の内容と関連している。以下¹¹はその例である。

(04) アングルトリスが帰ってきた (トリスウイスキー／サントリー)

生産物：食料

(04) の例のように、商品名が直接比喩表現になっているようなものの他、企業名をそのまま用いている比喩表現や、企業広告で「会社」や「店」というトピックを用いた例なども広告の内容と関連した例と考えることが出来る。これらは【人間活動】の【言語】や、【人間主体】の【社会】に見られた。

(05) 明治乳業が胃潰瘍 (バター／明治乳業)

人間活動：言語

(06) 川じゃない。店へ飛び込め！ (企業／マツヤレディス)

人間主体：社会

これらの例においては、商品や企業を直接比喩表現として取り上げることによって、読み手の興味をひきつけようとする意図が見て取れる。言い換えれば、比喩表現によって広告の内容に焦点が当てられるということである。

3.1.2. 広告主のメッセージに焦点を当てる用法

上記の傾向とは逆に、【抽象】の中での【時間】や、【人間活動】の【心】のカテゴリーなどは、広告の内容とトピックに関連性が見られない例が多い。

抽象：時間

(08) いま、世界は、ほほえみが足りない！ (企業／タイ国際航空)

人間活動：心

(07) 生年月日を捨てましょう。 (企業／宝島社)

これらの例では、広告の内容というよりも、その広告を通じて発信したいメッセージに焦点が当てられるという傾向が見てとれる。

¹¹ 下線およびカッコ内の記述は筆者による。下線はトピックを表し、カッコ内は (広告物／広告主) を表している。なお、グロスも筆者によるものであり、〈大分類：下位分類項目〉を表している。

3.1.3. 広告物と読み手との関係に焦点を当てる用法

【自然物】の【身体】のカテゴリーにおいて、トピックの表す内容が広告の内容ではなく、それを使用する人間であるような例が見られた。

(09) その綺麗な爪先は、コンタクトレンズには、よく切れるナイフなのです。(コンタクトレンズ／

自然物：身体

チバビジョン)

上記で述べた二つの傾向とは別に、この様な例は読み手である消費者に焦点を当てる比喩表現であるということが出来る。

3.2. イメージについて

トピックを人間として扱っている、つまり人間のイメージである比喩例は、54 例であった。特に【生産物】のなかの【食料】のカテゴリーでは 8 例中 6 例、【自然物】の中の【動物】のカテゴリーでは 4 例すべてという顕著な出現率を示した。逆に【抽象的關係】においては 19 例中 2 例という低い出現率であった。

(10) めんたいは、エビフライなんかには負けないぞ (福岡ダイエーホークス日本シリーズ応援キャンペーン／岩田屋)

一方、トピックを物体として扱っている比喩例は 28 例であった。人間めかして表現する比喩表現が広告キャッチフレーズにおいても多いということは、中村 (1977) および瀬戸 (2005) の記述を確かなものにする結果であるといえる。

なお中村 (1977) において、抽象体を物体扱いする比喩例も多いという記述があったが、今回の調査対象の中ではもっとも出現率の高かった【自然物及び自然現象】のカテゴリーと、【抽象的關係】における出現率に大きな差が見られなかったため、はっきりと傾向を示すには至らなかった。

4. まとめと今後の課題

今回の調査で明らかになったことは以下の 2 点である。

- 広告キャッチフレーズにおいては、伝えたい情報に焦点を当てるという形で比喩が機能している。広告の内容によって、その用法が異なる。
- 中村 (1977) および瀬戸 (2005) の記述にあるように、比喩表現の中ではトピックを人間扱いする表現が多い。

広告キャッチフレーズを用いて比喩表現を調査することで、読み手の興味をひきつけるための比喩の役割だけでなく、比喩表現の使用傾向についても考察することができた。また、今回の調査を通じて、比喩表現を語彙面から考察するという方法の妥当性も主張できるのではないかと考えている。

先行研究と同様に比喩表現の収集が筆者の内省によるものとなった点は今後の課題である。また、今回は出来なかったが、国立国語研究所（1977）で設定された比喩表現形式を用いて調査をすることも今後の課題である。また、今回独自に作成したコーパスを活用し、広告キャッチフレーズや比喩表現の研究を更に進めていきたい。たとえば（07）の例などは比喩表現とモダリティ表現が共起することにより比喩表現の実現可能性を高めているような例と考えることもできる。こうしたさまざまな現象も大変興味深いものであるため、今後の課題としたい。

参考文献

- 国立国語研究所（1977）『比喩表現の理論と分類』 東京：秀英出版
瀬戸賢一（2005）「日常のメタファー—ふだん着の擬人法」『日本語学』24-6：14-24
中村明（1977）『比喩表現辞典』 東京：角川書店
_____（1991）『日本語レトリックの体系—文体の中にある表現技法のひろがり』 東京：岩波書店
_____（1995）『比喩表現辞典』 東京：角川書店
李欣怡（2006）「格助詞「へ」で終わる広告コピーにおける「へ」の機能—格助詞「に」との互換性という観点から—」『日本語科学』20：27-46
李徳奉（1990）「言語学における比喩研究の最近の動向から」芳賀純・子安増夫編（1990）『メタファーの心理学』157-166 所収 東京：誠信書房

参考資料

- 国立国語研究所編（2004）『分類語彙表』増補改訂版 東京：大日本図書
東京コピーライターズクラブ編『コピー年鑑』2000-2004 東京：宣伝会議
「東京コピーライターズクラブ：コピー検索システム」
http://www.tcc.gr.jp/v2/index_main.html

ヒンディー語の echo formation

仲地 加奈

(南・西アジア課程ヒンディー語専攻)

キーワード：ヒンディー語、echo formation、反響方法、母音交替

0. はじめに

ヒンディー語では、echo formation がよく使われる。「echo formation や echo word は南アジアの言語の典型的な特徴であり、ヒンディー語の khana vana ‘食べ物’ etc のような語のことである。このような echo formation の語は base word の後ろに(しばしば、前に)echo word がくる。echo word は base word の語頭音節を違う音節に置き換えて作られる。echo word は base word を反響し、意味的な広がりを与える。」(Abbi, 1994 : 27-8 要約, 筆者訳, 以下も欧文文献の訳は全て筆者による。)ここで例に挙げられている khana vana という語は khana が base word であり、食べ物という意味の単語である。そして反響された要素 vana を echo word と呼んでいる。本稿ではこれらの呼び名を使用し、echo formation を EF, base word を BW, echo word を EW として表す。そしてこれらのほかに順番の上で先に来る要素を先行要素、後に来る要素を後続要素と便宜上呼ぶことにする。

本稿では辞書から EF を収集し、分析する。そして次にコンサルタントへのアンケート調査で実際の使用状況を明らかにする。

1. 先行研究

南アジア言語の reduplication 全体について広く記述した本である。ヒンディー語の EF の品詞や形態について書かれている。またヒンディー語の EF の作られ方について詳しく述べてあるのでそれについても以下に挙げる。

南アジアの多くに広がっている現象である echo formation という形態はほとんどの学者に認められている。この現象は文語よりも口語でよく起こる。

echo word は base word の語頭にある音素(子音でも母音でも)、もしくは音節を違う音素、音節にかえて、部分的に繰り返すものである。replacer(音素/音節)は程度の差はあれ固定している。base word の後ろ(まれに前にくることもある)に echo word がくる。

ヒンディー語の echo formation は語頭音節の子音を /v-/ に置換して反復するパターンが一般的である。/v-/ 以降はすべて同じように繰り返される。語頭音節の母音は base word の語頭音節のものと同じである。

ヒンディー語の EF は、したがって次のように表される：

(C) V → v V

base word が母音からはじまっているとき、echo word では base word の前に /v-/ をおく。

Udhar ‘貸し付け’ ; *Udhar vUdhar* ‘貸し付け, etc’

base word が v-からはじまる語は replacer の v-は脱落する :

vərdan ərdan ‘骨, etc’

[Abbi (1992 : 20, 23-4)より要約]¹

2. 調査

2.1. 辞書による調査

EF は Abbi (1992)にもあるように口語的な表現であるので見つかる語彙数は少ないことが予想されるが、語彙化されている EF を分類することにより、EF の反響方法や replacer、EF の品詞の頻度といった点を明らかにすることを目的としている。

2.1.1. 調査方法

本稿ではコーパスとして McGREGOR(2003)の THE OXFORD HINDI-ENGLISH DICTIONARY を用いる。この辞書には 7 万語を越える単語が収録されている。これをはじめから見ていき EF と思われる単語を手作業で拾っていく。そうして拾った語を純粋な EF に絞るために、語彙数のより多いヒンディー・ヒンディー辞典である Varmā(1991-93)の *Mānaka Hindī kośa* を参照した。この辞書は 1 巻が 21948 語、2 巻 2112 語²、3 巻 23653 語、4 巻 21082 語、5 巻 25396 語からなる。

2.1.2. 選定基準

以下にあげる選定基準をもとに EF を THE OXFORD HINDI-ENGLISH DICTIONARY より収集した。

- ① 先行要素と後続要素が 2 音節以上異なるものは省いた。
- ② 全く同じ単語の繰り返しは、除外した。
- ③ THE OXFORD HINDI-ENGLISH DICTIONARY 及び *Mānaka Hindī kośa* において先行要素と後続要素を特定するハイフンの記述がない場合は、音が繰り返されているのではなく、もともと 1 語であると判断し、除外した。
- ④ 先行要素・後続要素が、ともに同一単語の活用形・派生形である場合は除外した。
- ⑤ 先行要素と後続要素の間に別の要素がさらに挿入されているものは除外した。
- ⑥ *Mānaka Hindī kośa* で先行要素・後続要素ともに見出し語として載っているものは含めなかった。ただし、語源の説明部分や意味における記述においてどちらかの要素のエコーと明示されているものに関しては EF に含めた。
- ⑦ どちらの要素も単独でいずれの辞書にも記載のなかったものは、除外した。

¹ Abbi(1992)の表記方法と本稿は異なる立場を取っているが、そのまま載せた。

² 他の巻と比べ語彙数が少ないのは印字ミスだと考えられるが、正確な数が分からないのでそのまま載せた。

2.1.3. 調査結果

2.1.3.1. 反響方法

Abbi (1992)では反響方法を語頭音素、音節を違う音素もしくは音節にかえる反響方法があると述べられていた。また語頭子音が脱落するという方法も挙げていた。

Abbi (1992)の反響方法、及び予想される反響方法を筆者がまとめたものが次である。BW, EW において変化せずに繰り返される部分は、今回問題にしていないので便宜的に X とする。なお I ~ VII のローマ数字は筆者による分類記号である。

I 語頭音節(子音+母音)の交替 (C₁)V₁X-(C₂)V₂X

II 語頭音素(子音)の交替 C₁VX-C₂VX

III 語頭子音の脱落 CVX-VX

IV 母音交替 CV₁X-CV₂X

V 子音の挿入 VX-CVX

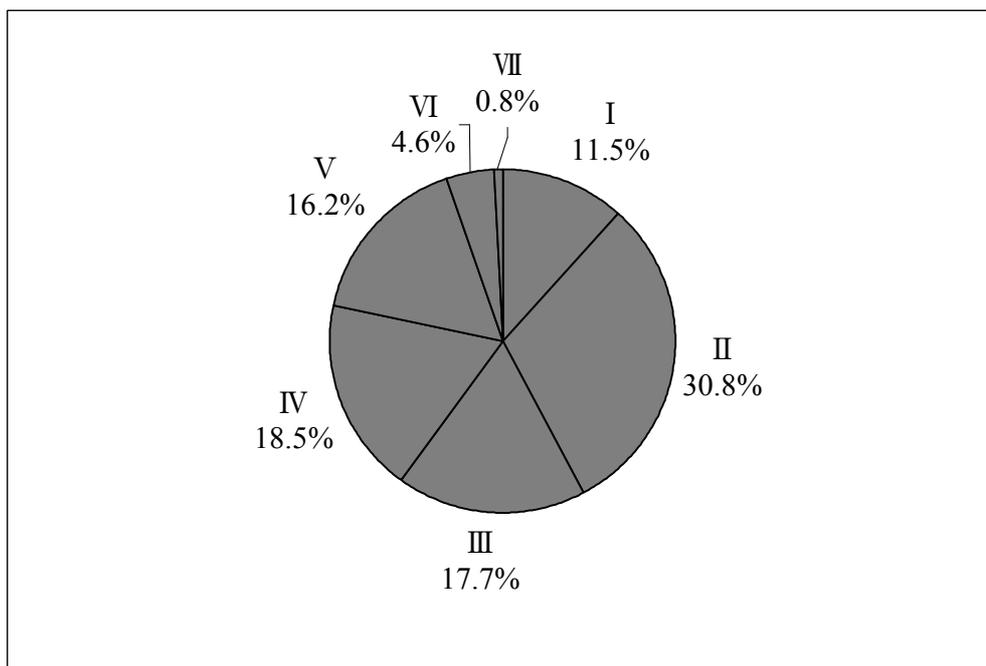
※ 語頭母音の交替 V₁X-V₂X

これらはすべて前の部分を BW として記しているが実際の EF において EW が先んじていても BW を基準に上の反響方法に沿って分類する。たとえば atā-patā は patā が BW であるので、語頭子音の脱落 CVX-VX とする。

反響方法として事前に考えていた V₁X-V₂X、語頭の母音交替は今回の辞書による調査では 1 例も見つからなかったため、省いた。そして表 1 においてあらたに付け加えた語末長母音の脱落+m-CVX という反響方法は EF の一般的な形とは異なっているが、2.3.の選定基準のいずれにも反さず、また後置詞-m の用例も見つからなかったため、今回は含める形をとった。

表 1. 反響方法

反響方法	分類記号	データの数
(C ₁)V ₁ X-(C ₂)V ₂ X	I	15
C ₁ VX-C ₂ VX	II	40
CVX-VX	III	23
CV ₁ X-CV ₂ X	IV	24
VX-CVX	V	21
語末長母音の脱落+m-CVX	VI	6
その他	VII	1
合計		130



以下にそれぞれの例を挙げる。

- I. (C₁)V₁X-(C₂)V₂X : sac-muc 本^当に (sac 「本^当の」)
- II. C₁VX-C₂VX : camak-damak きらびやかさ (camak 「光^つたり輝^いたりすること」)
- III. CVX-VX : ās-pās 近^くに (pās 「近^くに」)
- IV. CV₁X-CV₂X : cup-cāp 黙^つて (cup 「沈^黙」)
- V. VX-CVX : uthalnā-puthalnā 混^乱する (uthalnā 「動^く」)
- VI. 語末長母音の脱落+m-CVX³ : thukkam-thukkā つばを掛^け合うよ^うな激^しいののしりあ^い (thukkā 「つば」)
- VII. その他 : phus-phusaṛ ささやき (phus 「さ^さや^き」)

今回得られたデータの数を見ると、I～Vの反響方法が一般的なようである。その中でもAbbi(1992)でも述べられていた、IIが最も一般的なEFの形態ではないかと考えられる。Iの(C₁)V₁X-(C₂)V₂Xは、VI.語末長母音の脱落+m-CVXとその他を除いた他の方法に比べてデータ数が少ない。今回得られたデータは馴染みのある語が多く(筆者の内省による)、この方法は語頭音節がすべて交替するので、口語で新しく作られることは少ないのではないだろうか。

2.1.3.2. 母音交替

2.1.3.1.によってIIの次に多くのデータが得られたIV.CV₁X-CV₂Xを先行要素と後続要素の

³ このVI.語末長母音の脱落+m-CVXという反響方法は、事前に予想していた他の5つの方法と違い、後続要素のCVXがBWである。しかし今回見つけたこの方法がEFが例外なく、EWの部分^が先行要素となっていたので、この表記方法をとった。

母音別に分類し、調べた。

表 2. 母音交替

V ₁	V ₂	データの数
ā	ū	4
ī	ā	4
u	ā	1
ū	ā	4
e	ā	5
ai	ā	2
o	ā	4
合計		24

全体量が少ないため、これ以外のものが出てくる可能性も十分に考え得るが、これを見る限り ā 以外の母音はすべて ā に交替している。そして ā は ū に交替している。まったく例外が出ていないことから、高い確率で ā は ū に、そして ā 以外の母音は ā に交替すると言っていいだろう。

2.2. アンケート調査

アンケートの形式としては、今までの調査において EF が収集されなかった語を選定して、筆者自身が 1 語につき 3、4 個の EF を作成した。作成の際、これまでの調査から一般的であると考えられる I～V の反響方法で行った。

そしてその EF をごく自然に使える場合は◎、一応使えるという場合は○、若干違和感があると言う場合は△、明らかに不自然であると言う場合は×の 4 段階で回答してもらった。そして補助的に使ったことがある、聞いたことがある、両方ある場合にはそれを選択してもらった。

辞書による調査で得られたデータとこのアンケート調査の結果はいくつか異なるものがあった。それは辞書における文語と、回答の際、口語を意識するアンケートによる違いだと考えられる。

そこでアンケート結果を反響方法、母音交替という点から対照する。アンケート全体の結果を、アンケート調査で用いた I～V と※の反響方法別にまとめたものが表 3 である。数が多いものを網掛けで表示した。

表3. アンケートにおける反響方法

分類 記号	反響方法		◎	○	△	×	—
I	(C ₁)V ₁ X-(C ₂)V ₂ X		0	2	6	16	0
II	C ₁ VX-C ₂ VX	C ₂ : v	55	4	0	3	2
		その他	1	1	5	7	2
III	CVX-VX		2	3	17	38	2
IV	CV ₁ X-CV ₂ X	V ₁ : ā, V ₂ : ū	13	15	2	1	1
		V ₁ : ā 以外の母音, V ₂ : ā	6	12	7	10	1
		その他	3	3	6	3	1
V	VX-CVX	C : v	10	0	0	1	1
		その他	0	0	1	3	0
※	V ₁ X-V ₂ X	V ₁ : ā, V ₂ : ū	2	4	2	0	0
		その他	0	1	3	4	0

上の表から、replacer が v-である EF はII, Vどちらもほとんどの EF が自然に用いられているようである。このことから先行研究で述べてあるように replacer は v-が最も一般的なものであることが明らかになった。またIIIに関しては、辞書による調査では一定の量が見つかったにもかかわらず、ほとんどの EF が不自然であることが分かった。IVは、ā が ū に交替する EF, ā 以外の長母音が ā に交替する EF のどちらも許容度が高いようである。また※でも語頭母音の ā が ū に交替する EF は、比較的受け入れられているようである。◎は少なかったが、○を選択したコンサルタントは聞いたことがあると回答しており、この反響方法が存在することが明らかになった。※は辞書による調査で収集されなかったものである。そのため、文語よりも口語において、より用いられる反響方法であるのではないだろうかと考える。予想される EF の形式とは異なるものもいくつか設問に取り入れたが、ほとんどの EF が全員に受け入れられるものではなかった。しかしIVに関しては、予想される結果と異なるものが出た。

そこで次に母音交替別に結果をまとめる。今回母音交替に関して揺れが出るとは予想しておらず、そのため得られたデータの数に大きく偏りが出ている。なお、◎を3点、○を2点、△を1点として計算した。

表 4. アンケートにおける母音交替

CV ₁ X-CV ₂ X	V ₁	V ₂	◎	○	△	×	—	計
V ₁ : ā, V ₂ : ū	ā	ū	13	15	2	1	1	71
V ₁ : ā 以外の母音 V ₂ : ā	ī	ā	2	2	2	2	0	12
	u	ā	1	0	2	1	0	5
	ū	ā	1	2	0	1	0	7
	e	ā	0	3	3	5	1	9
	ai	ā	0	2	1	1	0	5
	o	ā	0	3	0	1	0	6
	au	ā	2	1	0	1	0	8
その他	a	ū	0	2	2	0	0	6
	ā	ī	0	0	2	2	0	2
	ā	e	0	0	1	3	0	1
	ā	o	0	0	4	4	0	4
	i	ū	3	1	0	0	0	11
	ī	ū	0	0	4	0	0	4
	ai	au	0	0	2	2	0	2

母音交替は辞書の調査結果から、ā は ū に、ā 以外の母音は ā に交替することが明らかになった。

ā が ū に交替する EF は、ほとんど全部の EF が受け入れられ、また聞いたことがあると回答していたため、広く使われる反響方法であることが明らかになった。それに比べ、ā 以外の母音が ā に交替する EF は、全体的に見ると ā が ū に交替する EF より受け入れられていない。

その他に関しては、ほとんどが予想通り、△や×と回答と回答する人が多かった。しかしその中で、a から ū への交替、i から ū への交替、ī から ū への交替は×と回答した人がいなかった。このことから、EW の ū が固定してきているのではないだろうか。それは ā が ū に交替する EF はほとんど全部の EF が受け入れられていたことから言えるだろう。

3. おわりに

本稿では、辞書による調査とアンケート調査によって、一般的な反響方法と、母音交替について明らかにしてきた。

I.C.V₁X-C₂V₂X の語頭音節の交替は、辞書による調査からはあまり見つからなかった。アンケート調査でもほとんどが受け入れられなかったことから、口語ではあまり起こらない反響方法といえる。

先行研究にもあるように、最も一般的な EF は、Ⅱの語頭子音を v に交替する方法であることが検証できた。しかし同じように先行研究の中にあった replacer の v-は脱落するというⅢの方法であるが、辞書からは多くのデータが収集されたものの、アンケートにより一般的ではないことが分かった。

また先行研究になかった反響方法である、Ⅳの母音交替が一般的に起こりやすい EF の形態であることが分かった。この母音交替は ā から ū への交替が最も受け入れられている。ā 以外の母音は ā に交替することが多いようであるが、広く受け入れられている反響方法とは言い難い。また ā から ū への交替が一般的であることから、EW の ū が固定してきている可能性が考えられる。しかし ū が固定している可能性を予測できなかったため、アンケートで用いた語彙が少なかった。今後、多くの語彙を調査することが必要であると思われる。

アンケート調査の結果、Vの子音の挿入に関しては先行研究にあるように、口語ではほとんどの場合 v が挿入されることが明らかになった。

※の語頭母音の交替は、辞書からはデータが得られず、アンケート調査によって存在することが分かった。このことから文語よりも口語で起こりやすい反響方法である。この反響方法も ā から ū への交替は受け入れられていた。このほかの母音交替も起こるのかについてこれから調査していきたい。

参考文献

- Abbi Anvita (1992) *Reduplication in South Asian Languages. An Areal, Typological and Historical Study*. New Delhi : Allied Publishers Limited.
- McGREGOR.R.S. (ed.) (2003[1994]) *THE OXFORD HINDI-ENGLISH DICTIONARY* (11th edition) . New Delhi : Oxford University Press.
- Varmā Rāmachandra (1991) *Mānaka Hindī kośa , voll a-ka* . (2nd edition) . Allahabad : Hindī Sāhitya Sammelana
- _____ (1992) *Mānaka Hindī kośa , voll2 kha-ta* .(2nd edition) . Allahabad : Hindī Sāhitya Sammelana
- _____ (1990) *Mānaka Hindī kośa , vol3 tha-pa* . (2nd edition) . Allahabad : Hindī Sāhitya Sammelana
- _____ (1991) *Mānaka Hindī kośa , vol4 pha-la* . (2nd edition) . Allahabad : Hindī Sāhitya Sammelana
- _____ (1993) *Mānaka Hindī kośa , vol5 va-ha* . (2nd edition) . Allahabad : Hindī Sāhitya Sammelana

スペイン語における認識に関わる二動詞
— *saber* と *conocer* —

西野 剛

(欧米第二課程 スペイン語専攻)

キーワード：*saber*、*conocer*、知る、わかる、内的思考

0. はじめに

スペイン語において、日本語の「知る、知っている」に対応するといわれる主な動詞には、*saber* と *conocer*¹の2つがある。両動詞はともに多義語であり、辞書、文法書等では客観的根拠による明確な記述がされておらず、意味の観点から比較・対照することは容易ではない。以下の例²でみられるように、どちらか一方が許容される場合、ともに共起可能な場合などがあり、英語の *to know*、日本語の「知る」に対応するスペイン語表現を用いる際、スペイン語学習者には、*saber* と *conocer* の使い分けが困難である。

- (1) No {sé / *conozco} si te gustaría.
否 know.現.1.単 接 間目.2.単 like.過未.3.単
(君が気に入るかはわからない。)
- (2) {Sabe / Conoce} muchas cosas de Japón.
know.現.3.単 many.女.複 thing-複 前 Japan
(彼は日本のことをたくさん知っている。)
- (3) {Conozco / *Sé} a Manuel.
know.現.1.単 前 人名
(私はマヌエルを知っている。)

本研究では、統語、意味の両面から、この2つの動詞の性格を明らかにすることを目的とした。本稿においては、1.で統語的特徴に関して、2.で意味的特徴に関して実施したコーパス調査の結果を示し、3.では全体のまとめを提示する。

1. 統語的特徴

統語的特徴に関しては、*saber*、*conocer* それぞれがとる補語に関して考察した加藤(1990)を参考に、スペイン語コーパスを用いて調査を行った。1.1では加藤(1990)を挙げ、1.2.でコーパスの詳細を提示し、1.3.ではコーパスの調査結果を示し、筆者による考察を述べる。

¹ 本稿では、*saber*、*conocer* の全ての人称・時制などの活用形を含めた代表形として、*saber*、*conocer* を用いる。

² 本稿における例文の通し番号、グロス、訳は全て筆者により、出典が表記されていないものは作例。略号一覧は本稿末で提示する。

1.1. 加藤 (1990)

加藤 (1990) は、2つの動詞が選択する補部の種類によって、それぞれの動詞の語彙的な要因の考察を行った。以下は、加藤 (1990) で提示された補部の選択のまとめである。

表1 加藤 [1990 : 49]³

補部 \ 動詞	saber	conocer
名詞句	+*	+
que 節	+	+*
si 節	+	+*
Qu-節	+	+*
不定詞節	+	-

表をみてわかるように、加藤 (1990) で主張されたことは曖昧であり、客観的なデータによる裏づけもなされていなかった。コーパス調査ではまず、上記の統語的特徴を検証し、それ以外のものに関しては、特に二動詞間で差があらわれたものを取り上げる。

1.2. コーパス

インターネット上のスペイン語コーパス、*corpus del español* を使用した。このコーパスは13世紀から20世紀までの資料を世紀ごとに分けた上、話し言葉・文学・その他の3つの分野⁴に均等に分け、総単語数1億語からなる。本研究は通時的観点からの考察はしないので、20世紀の用例のみを扱った。20世紀の用例の内訳は、話し言葉680万語、文学675万語、その他680万語、総単語数2035万語である。現在使用されていない、または誤植と思われるもの—*sauer, sabra, sabeis*—を除くと、20世紀における *saber* の総用例数は38793例、*conocer* は12935例であった。なお、各用例の検索には、コーパスに付属の検索ソフトを使用した。

1.3. 調査結果

加藤 (1990) の統語的特徴をコーパスで検証した結果を以下の表で示す。表1を再度引用し、加藤 (1990) で示された評価と共に、本研究で得られた数値的データを挿入する。なお、表中の数値は、コーパス内の各動詞別の総用例数に占める割合を表す。

表2 加藤 (1990) で提示された統語的特徴の検証結果 (%)

補部 \ 動詞	saber		conocer	
名詞句	1.4	+*	7.2	+
que 節	20.6	+	1.4	+*
si 節	6.3	+	0.1	+*
Qu-節	16.8	+	0.7	+*
不定詞節	4.8	+	0.0	-

³ 表中の「*」は、何等かの制約が加わることを表すものである。なお、英語でいえば、que 節は that 節にあたり、si 節は if 節に相当する。Qu-節に関する説明はなかったが、疑問詞節と判断した。

⁴ それぞれの分野の20世紀における内訳は、話し言葉—2040以上のニュースのインタビューなどを書き起こしたものの、文学—850の小説や物語、その他—基本的にはニュースからの4770以上の記事、である。

筆者が注目した統語的特徴として、関係詞節と二動詞に先行する目的格代名詞を表でまとめる。表 2 と同様に、表中の数値は、コーパス内の各動詞別の総用例数に占める割合を表す。

表 3 筆者が注目した統語的特徴の検証結果 (%)

補部 \ 動詞	saber	conocer
関係詞節	21.7	2.4
目的格代名詞	7.5	15.2

総合的にみて、*saber* は関係詞節、疑問詞節などをとることが圧倒的に多いこと、*conocer* は名詞を対象とすることが相対的に多いことがわかった。

saber は、関係詞節、疑問詞節、条件節 (si 節) が後続する用例が、全体の 44.8% もあり (*conocer* は 7.2%)、抽象的な事象を認識の対象としてとることが、*conocer* に比べ圧倒的に多いことが考えられる。目的格代名詞が先行する用例の中でもっとも多いのが、主に抽象的事象を指す *lo* (具体物を指す場合もある) であることもその裏づけになる。

一方、*conocer* は名詞が後続する用例が多いとはいえ、*conocer* の全用例の 1 割未満にとどまり、目的格代名詞も人や名詞をあらわす場合が多いとはいえ、圧倒的な数ではなかった。それでも *saber* と比較すると明らかに名詞への偏りがみられ、*conocer* の重要な特徴であるといえるだろう。

なお、前述のように本節は付属の検索ソフトを使用しており、副詞などが動詞と認識の対象との間に入った場合は検索にかからないため、実際手作業での調査を行えば、それぞれの用例数が増加するのは間違いないだろう。

2. 意味的特徴

意味的特徴に関しては、*saber*、*conocer* と対応する日本語表現を、対訳コーパスを用いて調査した。2.1.ではコーパスに関して述べ、2.2.ではコーパスを調査した結果を示す。

2.1. コーパス

インターネット上の西和コーパスとして、*Concordancias paralelas del diccionario español-japonés de Kenkyusha* と *Concordancias paralelas de Yo soy un gato* を使用する。前者は研究社の西和辞典から用例を収集し、詳細についての記述はないが、一例につき一文で表示され、総例数は 24318 例である。後者は小説からの用例で、同様に詳細に関しての言及はないが、一例につき一文以上で表示され、総例数は 2026 例である。

小説からの用例として、スペイン語小説 *La Hermandad de la Sábana Santa* とその日本語訳『聖骸布血盟 (上)』、『聖骸布血盟 (下)』をコーパスとして使用し、用例を手作業で収集した。スペイン語小説は 527 ページ、日本語訳は 2 冊あわせて 726 ページである。

2.2. 調査結果

3 つの西和コーパスを調査した結果、*saber*、*conocer* とともに「知る」、「わかる」との対応

が他の表現に比べて圧倒的に多いことがわかった。*saber* においては全用例の 50.7%が「知る」か「わかる」と対応する用例であり、*conocer* も全用例の 56.4%を占めていた。*conocer* と「わかる」の関連性は低く、*conocer* と対応する「わかる」の用例は、全用例 298 例中 11 例 (3.7%) であった。一方、*conocer* と対応する「知る」の用例は 157 例 (52.7%) で、全用例の半分以上を占めていた。*saber* に関しては、全 1311 例中、「知る」が 388 例 (29.6%)、「わかる」が 277 例 (21.1%) であった。*conocer* と「わかる」との対応が極端に低いことも注目すべき点ではあるが、*conocer* と「知る」との対応が *saber* のそれを、比率にすると上回っているという点にも注目したい。以下、表でまとめる。

表 4 *saber*、*conocer* と対応する「知る」、「わかる」

	<i>saber</i>	<i>conocer</i>
「知る」	388 (29.6%)	157 (52.7%)
「わかる」	277 (21.1%)	11 (3.7%)
「知る」 + 「わかる」	665 (50.7%)	168 (56.4%)

以上のことから、*saber* は「知る」、「わかる」とほぼ均等に対応すること、*conocer* は「わかる」とはほとんど対応せず、「知る」との対応関係が相対的に強いことがみてとれるだろう。

2.3. 分析

コーパスの調査結果より、*saber*、*conocer* がそれぞれ「わかる」と対応する用例数に大きな差があることがわかった。本節では、高橋 (2003) の「わかる」の意味的特徴を参考にし、詳細な分析を試みる。2.3.1.では高橋 (2003) を挙げ、2.3.2.で分析方法と分析結果を述べる。

2.3.1. 高橋 (2003)

高橋 (2003) では、「知る」、「わかる」が要求する補語を分析し、二動詞の多義構造の、それぞれの別義の関連付けが行われた。以下、高橋 (2003) で「わかる」の別義として認定された意味特徴を取り上げ、用例とともに挙げる。

- ・別義 1a : <主体に><ある対象と><その対象がもつ内容を><同定する>
<能力がある> ※類義表現 : 「理解することができる」
(4) 太郎 (に) は中国語がわかる。
- ・別義 1b : <主体が><ある対象と><その対象が持つ内容を><同定する>
※類義語 : 「理解する」
(5) 「国は沖縄の痛みを全然分かっていない」と話し、(後略)
- ・別義 1c : <これまで明らかでなかった事柄が><明らかになる>
(6) サッカーのイングランド・プレミアリーグ、チャールトンが清水のMF 三都主の獲得に動いていることが 17 日わかった。
- ・別義 2 : <他者の依頼・命令を><受け入れる>
(7) 「よし。怪しまれないように身辺を見張っている」

「分かりました」

[高橋 2003 : 35-8 抜粋]

2.3.2. 分析方法、結果

分析対象としては、西和コーパスを調査した結果から得た「わかる」と対応する *conocer* の用例 11 例、*saber* はインターネット上の 2 つのコーパスから得た「わかる」と対応する 139 例を用いる。これらを高橋 (2003) の「わかる」の意味特徴に基づいて分類し、*saber*、*conocer* が「わかる」と対応して用いられうる意味範疇を分析する。

分析方法としては、まず、出現状況が特徴的である別義 2 を調査し、次に、別義 1c の分類基準を「「わかる」の主体が表示されず、挿入も可能ではない」と設定し、さらなる参考基準としては、「「わかる」の対象が新規情報であること」とした。それ以外のものに関しては別義 1a と別義 1b に分類したが、高橋 (2003) においてはその境界が曖昧であったため、金田一 (1950) の分類⁵にならい、別義 1a を状態動詞、別義 1b を瞬間動詞として扱った。そのため、現在の事象を表す際、別義 1b はテイル形を用いることが必要となり、さらに、過去の事象をあらわす場合も、テイル形を用いるか、対象をヲ格で表示する必要性があることを別義 1b の分類基準とした。なお、以上の客観的な分類基準に加え、筆者は自分の内省により、別義 1a は「理解することができる」、別義 1b は「理解する」、別義 1c は「明らかにする」との置き換えが可能であるかについて確認を行った。上述の客観的な分類基準を図 1 でまとめる。

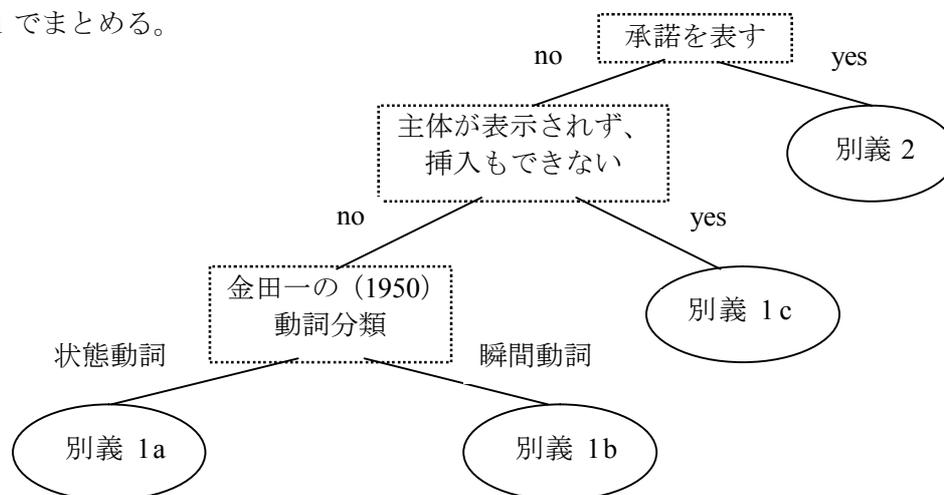


図 1 高橋 (2003) における「わかる」の別義の筆者による分類基準

⁵ 「わかる」の分類に関して、金田一 (1950) は次のように述べている。なお () 内は筆者による。

最初に挙げた「理解できる」の意の「分る」もこの分類 (状態動詞) に入り、「—ている」をつけずにそのままで現在の状態を表す。

「分っている」の場合の「分る」は、「理解できる」の意の「分る」とは別語で、「知識としてもつ」の意の自動詞で、これもまた瞬間動詞である。

[金田一 1950 : 9-10 抜粋]

以上のように分類した結果を、以下の表で示す。

表 5 *saber*、*conocer* と高橋 (2003) の「わかる」の意味的特徴との対応

	「わかる」				合計
	別義 1a (理解することが できる)	別義 1b (理解する)	別義 1c (明らかに なる)	別義 2 (承諾)	
<i>saber</i>	119	8	12	0	139
<i>conocer</i>	3	1	7	0	11

「わかる」が承諾の意味を表す場合は、二動詞ともに対応することができないことがわかった。スペイン語において承諾を表す表現は他 (*vale*、*de acuerdo*) に存在しているため、日本語とは異なり、認識を表す動詞で承諾の意味を表す必要がないことが理由として考えられる。動詞別にみると、*saber* は、「わかる」が状態動詞的に用いられた用例と対応することが圧倒的に多かった。一方、*conocer* は「わかる」が「明らかになる」という意味で用いられる用例との対応関係が強かった。すなわち、「わかる」の主な用法である、「AをBであると同定する」という特徴をもった用例と対応する *conocer* の用例が少ないという結果であった。「知る」との対応関係が強いことから、認識の過程において、*conocer* は内的思考を表すことがほとんどできないことが要因として考えられる。

3. まとめ

本研究では、*saber*、*conocer* の統語、意味の両面からコーパスを用いて検証を行った。統語的特徴としては、*saber* は疑問詞節、関係詞節など抽象的事象が対象となる用例が多く、*conocer* は相対的に名詞や人称代名詞など具体物が対象となる用例が多かった。意味的特徴としては、相対的にみて、*saber* が「わかる」、*conocer* が「知る」との関係が深いことがわかった。*conocer* が「わかる」と対応可能となるのは、「明らかになる」と類似した意味で用いられる場合である、という結果があらわれた。

前節でも述べたように、以上のことの要因としては、認識の過程において内的思考を伴うかどうかという点が、統語・意味の両面で重要であると筆者は考える。統語的特徴に関しては、*conocer* は名詞句を補語とする用例が多いことから、内的思考をあらわすことが難しく、*saber* は抽象的事象を補語とする用例が大部分を占めることから、内的思考をあらわすことができると考えられる。意味的特徴に関しては、*conocer* が「知る」、*saber* が「わかる」と深く関係していることも、同様のことを指し示している。はっきりとした結果はあらわれなかったが、両動詞の主な傾向として主張したい。

4. おわりに

本研究の課題としては、統語的特徴と意味的特徴との間に、考察に用いたデータの量の差があったこと、検索ソフトを使用したため、検索にかからない用例が多数存在すること

が予想される点、意味的特徴をみる際、客観性に徹しきれなかった分析方法もあったこと、加えて上述の考察の発展などが挙げられる。考察に関しては、*saber* と *conocer* がどのような環境において置換が可能となるか、日本語の「知る」との対応関係と加えて、今後発展を試みたい点である。紙幅の都合により本稿では割愛したが、*conocer* と「知る」の意味範疇が対応すると考えられる用例で、*saber* があらかずことのできないものもあり、*saber*、*conocer* の相違点を明らかにする上で重要であることが考えられる。

略号一覧

1	1 人称	現 直説法現在形	不 不定詞	前 前置詞	女 女性
2	2 人称	過未 直説法過去未来形	単 単数	接 接続詞	
3	3 人称	間目 間接目的格代名詞	複 複数	否 否定詞	

参考文献

- 加藤ナツ子 (1990) 「スペイン語動詞の文脈特性 — saber と conocer の補部の選択 —」三好行雄編『学苑』所収 46-56 東京：昭和女子大学近代文化研究所
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究 5』所収 日本言語学会 (金田一春彦編 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』に再録 5-26 東京：麦書房)
- 高橋圭介 (2003) 「類義語「しる」と「わかる」の意味分析」日本教育学会学会誌委員会編『日本語教育 119号』所収 31-40 東京：日本教育学会

参考資料

- ナバロ, フリア (2005a) 『聖骸布血盟 (上)』(白川貴子訳) 東京：ランダムハウス講談社
- _____ (2005b) 『聖骸布血盟 (下)』(白川貴子訳) 東京：ランダムハウス講談社

Navarro, Julia (2004) *La Hermandad de la Sábana Santa*. Barcelona : Travessera de Gràcia

Davies, Mark. *corpus del español*. <http://www.corpusdelespanol.org/> 07/1/16

Tinoco, Antonio Ruiz. *Corpus paralelo español -japonés*.

<http://lingua.cc.sophia.ac.jp/ling-japonesa/article.php?sid=85> 06/12/1 [T①]

. *Concordancias paralelas de Yo soy un gato*

<http://lingua.cc.sophia.ac.jp/paralelo3/paralelo3.php> 06/12/1 [T②]

広島方言の継続アスペクト

仁村 哲也

(欧米第一課程 英語専攻)

キーワード：広島方言，継続アスペクト，～ヨル／～トル，トル系形式の進出

0. はじめに

本稿は、広島方言のアスペクト「～ヨル／～トル」の継続相の継続アスペクトにおける使用実態の調査および結果の考察を発表することを目的とする。

0.1. アスペクトについて

本稿で用いる継続アスペクト、結果アスペクトという用語は、継続相における、いわゆる進行態(～している最中である)、結果態(～してしまっている)という意味で用いており、その定義は同じく井上・沖・木部(2002)の分類にならい、それぞれ「継続相における変化過程継続および動作過程継続のアスペクト」、「継続相における変化達成後の主体結果及び客体結果のアスペクト」とする¹。

0.2. 西日本の方言における「動詞＋～ヨル／～トル」の意味

0.2.1. 元来の「～ヨル」と「～トル」

標準語では、基本的に継続アスペクトも結果アスペクトも「～テイル」でしか表すことができない。しかし西日本諸方言では、アスペクトの継続と結果に応じて、ヨル系とトル系²が使い分けられるということがその特色として言われてきた。例えば、標準語で「桜が散っている」というのを広島方言においては、

サクラガ チリヨル (継続アスペクト) =桜の花びらが今まさにひらひらと舞い落ちている

サクラガ チットル (結果アスペクト) =桜の花びらはもうすっかり地面に落ちてしまっている

というように使い分けられるが、継続アスペクトの場合でもヨル系のほかにトル系が用いられることが指摘されている。

0.2.2. 「～ヨル」と「～トル」の変遷

上でみた～ヨル／～トルの使い分けが現在変化しつつある点について、次のような指摘

¹ これらの用語は、金田一(1955)など伝統的には進行態、既然態(結果態)という呼び方もされてきたが、ここでは最近の呼び方になった。

² 本稿ではドルや、チヨル、ジョルなどもトル系の一つとしている。

がなされている。

西日本全域におけるアスペクト表現の大きな流れは、進行態<継続アスペクト>と結果態<結果アスペクト>とが「テ」を介する形式で統合されるという変化である。言い換えれば、～ヨル（～オル）と～トル（～テオル）で言い分けていたものが、～トル（～テオル）ひとつになるという動きである。これには、<中略>内的変化の進行に加え、標準語の干渉が加速度を与えていると考えられるのだが、その結果、本来進行態を担っていた～ヨル（～オル）がアスペクトの枠から追い出されつつある状況が各地で観察される。

[井上(1998: 22) < >内は筆者による]

広島方言においても、

サクラガ チットル（継続アスペクト）＝桜の花びらが今まさにひらひらと舞い落ちている

という形が出て来ており³、このように継続アスペクトの場合にもトル系が用いられる傾向があるのは、西日本諸方言に共通する現象であるが、各地方言において地域差があるほか、動詞の分類や、もしくはテンスとの絡みによっても違いが見出されうることが先行研究⁴の中で指摘されていた。またこのような継続アスペクトでの「～トル」の許容度は世代によっても差があると思われる。本稿では広島市においての現状を見ていきたい。

1. 先行研究

1.1. 工藤・木部(2000)の調査

西日本諸方言におけるアスペクト表現の詳細な調査報告として、工藤・木部(2000)がある。この調査では、様々な種類の動詞をあらゆるテンスとアスペクトを組み合わせつつ各調査地でコンサルタントにアンケート調査をしており、また調査地は西日本全体を網羅している。

1.2. 岸江(2001)の研究

岸江(2001)は上の工藤・木部(2000)の調査結果を基に、～ヨル／～トルの対立と競合(対立を欠き、両者が使われる⁵)という観点から西日本各地のアスペクト表現に関する考察を行っている。工藤・木部(2000)での調査結果を 1)テンス現在、2)テンス過去、3)テンス未来という 3 つのテンスに分け、継続アスペクトにおける～ヨル／～トルの対立の状況を各地毎にグラフにして示している。その結果、工藤・木部(2000)の調査では、あらゆるテンスにおい

³ 今回の筆者の調査の中でも多数見られた形式である。

⁴ 岸江(2001: 77)より。

⁵ 岸江(2001)による定義。

て、継続アスペクトがヨル系しか現れないという完全対立型⁶の方言は皆無であるが、地域によってヨル系の使用の程度に差が見られた。

なお、岸江(2001)は「アメガ フリヨル」のようにヨルのみに回答があったものは「ヨル専用」、「アメガ フットル」という回答があったものは「トル専用」、両形式を回答している場合は「ヨル・トル併用」、「アメガ フッテイル」のようにヨル・トルを回答しなかったものは「他形式」として整理し、調査地ごとに比較している。広島市では、継続アスペクトにおいてテンス現在では44例中ヨル専用が25例(57%)、ヨル・トル併用が12例(27%)、トル専用が2例(5%)、他形式が5例(11%)程となっている。テンス過去では18例中ヨル専用は4例(22%)、ヨル・トル併用は8例(45%)、トル専用は4例(22%)、他形式が2例(11%)となっている。また、テンス未来では5例中ヨル専用が2例(40%)、ヨル・トル併用が2例(40%)、トル専用が1例(20%)となっている。

広島だけではなく、調査した西日本全域でこのようにヨル専用の割合がテンス現在に比べて過去と未来で低かったことから、岸江(2001: 80)は「テンス現在の動詞継続過程にみられるヨル<明らかにトルの誤植であると思われる>の進出は、テンスとも絡んで、案外、テンス未来及びテンス過去で先行し、その結果、テンス現在に及んだものかも知れない。」(<内は筆者による)と述べている。

また、岸江(2001)は、～ヨル／～トルが継続アスペクトにおいて動詞の種類などによって、それらが完全に使い分けられる場合と競合する場合とがあることを、次のように述べている。

「歩く・降る」などの主体動作動詞（非限界動詞）ではヨル・トルの競合が起きるのが普通である一方、「来る・死ぬ」などの主体変化動詞（限界動詞）では対立するのが一般的であり、競合は起こりにくい。また、これらの中間段階として、「開ける・作る」などの主体動作客体変化動詞（限界動詞）に方言によっては競合している場合と対立している場合とがある。

[岸江(2001: 82)]

テンス現在における、広島市での調査結果では、継続アスペクトの場合、主体変化動詞では16例中ヨル専用が16例(100%)、主体動作客体変化動詞では8例中ヨル専用が6例(75%)、ヨル・トル併用が2例(25%)となっている。主体動作動詞では9例中ヨル・トル併用が8例(89%)、トル専用が1例(11%)となっている。

岸江(2001)は、調査された西日本のほぼ全域でこれと同じような結果が出たことから、この調査結果が「ヨル／トルの競合はまず、非限界動詞である主体動作動詞で起きて、次に限界動詞である主体動作客体変化動詞に進み、最後に同じく限界動詞である主体変化動詞へと至る」(岸江(2001: 85)による工藤(1998)の要約)と推定した工藤(1998)を裏付けると結論付けている。

1.3. 先行研究の問題点

⁶ 岸江(2001)による用語。

1.3.1. 工藤・木部(2000)の問題点

工藤・木部(2000)の調査には以下のような問題点があることを指摘しておく。

- i. 各地域でコンサルタントが1人ずつしかおらず、その年齢や性別もまちまちであるため、単純に地域毎に比較して傾向を見ることができない。
- ii. アンケートは、標準語で提示された文を方言ではどのように言うかコンサルタントが自由に答える形式で、それがどの程度自然な表現であるのか、またそれ以外の表現の許容度などは調べられていない。
- iii. テンス過去や未来においては調査項目数が減っており⁷、傾向を見る上で調査項目数が十分とは言えない。

このように調査段階で既に多くの問題点があるため、その結果を考察および研究の資料として用いるのはあまり適切ではないと考えられる。

1.3.2. 岸江(2001)の問題点

岸江(2001)は工藤・木部(2000)の調査結果を集計し、結論として1.2.で述べたような2つの考察をしているが、上記のように、工藤・木部(2000)の調査に既に多くの問題点がある。そこで本稿では、それらの問題点を解消したアンケート調査を自ら実施し、岸江(2001)の考察を検証するとともに、先行研究で行われていない世代差の面からもできる限り調査を試みる。

2. アンケート調査

2.1. 調査概要

今回のアンケート調査では、1.3.1.で示したような工藤・木部(2000)の問題点を解消するため、以下の2点に注意してアンケートを作成した。

- i. できるだけ多くの動詞を調べる。

先行研究と同様の動詞の分類表の分類に従い、主体変化動詞、主体動作客体変化動詞、主体動作動詞から、それぞれ4つ(死ぬ、開く、行く、来る)、2つ(開ける、消す)、6つ(飲む、叩く、遊ぶ、歩く、降る、泣く)の動詞を調査に用いた。

- ii. 最も自然な表現を聞き出すとともに、ヨル系形式・トル系形式をあらかじめ提示してそれぞれの表現の許容の程度も調べる。

それぞれの質問に対してあらかじめヨル系形式、トル系形式を提示し、ごく自然に使える表現の場合は◎、普段使わないが使っても不自然ではないという表現の場合は○、使うと若干不自然な感じがする表現の場合は△、使うと明らかに不自然であるという表

⁷ 地域によってわずかに誤差はあったが、調査項目数は基本的にテンス現在で44、テンス過去で18、テンス未来で6であった。

現の場合は×、以上の四段階で許容度を答えてもらった。また、ヨル系形式、トル系形式共に◎が付かない場合には回答者が最も自然であるという表現を記入してもらった。

以上 2 点に留意してアンケート調査を行った。動詞、テンス、アスペクトの分類およびその他の形式は基本的に全て工藤(1995)および井上・沖・木部(2002)に従った。その分類は以下のとおりである。

表 1 動詞の分類表

動詞の分類		調査に用いた動詞
(a)主体変化動詞	(a1)無意志的自動詞	死ぬ、開く
	(a2)意志的自動詞	行く、来る
(b)主体動作客体変化動詞	(b0)他動詞	開ける、消す
(c)主体動作動詞	(c1)他動詞	飲む、叩く
	(c2)意志的自動詞	遊ぶ、歩く
	(c3)無意志的自動詞	降る、泣く

[井上・沖・木部(2002)をもとに筆者が作成]

表 1 で右端の列にあげた動詞に関して、テンス現在・過去・未来における、継続アスペクトの場合の言い方を調べた。

2.2. コンサルタント

今回のアンケート調査では、様々な方に協力してもらい、テンス現在・過去・未来すべてを 64 名のコンサルタントから調査した。同じアンケートでテンス現在にしぼった調査人数 32 名を含めると、計 96 名となる。コンサルタントは、15 歳までを広島市近郊で過ごし、現在も広島市で暮らす人たちを選んだ。

3. 調査の結果と考察

3.1. テンス別にみた分析

まず、テンス別に許容度の違いを見ていく。図 1 は、テンス現在、過去、未来それぞれにおけるヨル系とトル系の許容度の全世代の数値を合計し、グラフにしたものである。なお、ここではテンス現在のみの回答のコンサルタントは除き、3 つのテンスすべてのデータを得られたコンサルタント 64 名の回答をグラフにしている。

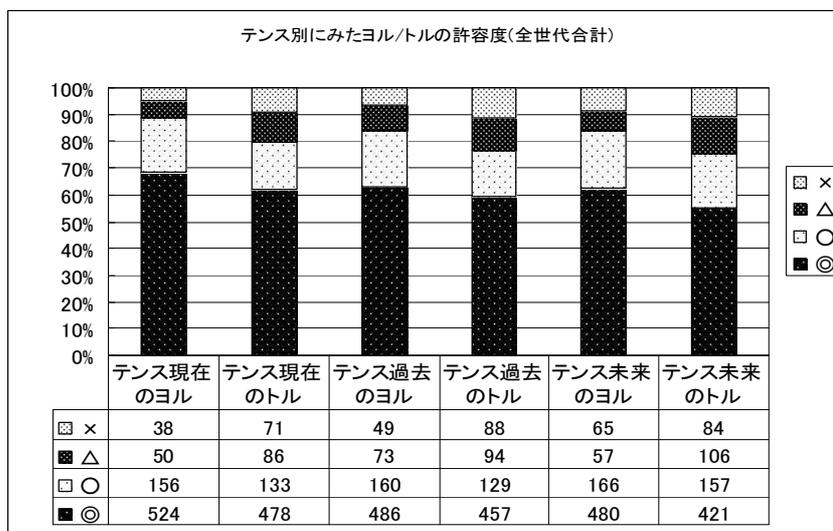


図 1

トル系の進出という観点からテンス別に見てみると、どのテンスにおいてもトル系の許容度はほぼ同程度で、テンスごとの際立った特徴は確認されず、岸江(2001)の述べるように、テンス未来および過去でトル系の許容度が高いというような現象は、今回の調査では見られなかった。この傾向は、世代別に分けて見たグラフでも同様であった。従って、トル系の許容度を根拠に、岸江(2001)の述べていた継続アスペクトのトル形式がテンス未来および過去で先行したという考察は疑わしいものと考えられる。これは筆者の推測であるが、工藤・木部(2000)の調査で、テンス現在に比べてテンス過去および未来では調査項目数が減っていたことが、全体におけるトル系の許容の割合を引き上げることとなったのではないかと考えられる。

3.2. 動詞別にみた分析

前節においてテンスごとにヨル系およびトル系形式の許容度に違いはないということが確認されたので、図 2 ではテンス現在にしぼって、トル系形式の許容度を動詞群別・世代別にグラフにしてみる。なお、テンス過去および未来においてもテンス現在のそれと傾向に大きな差異は認められなかった。

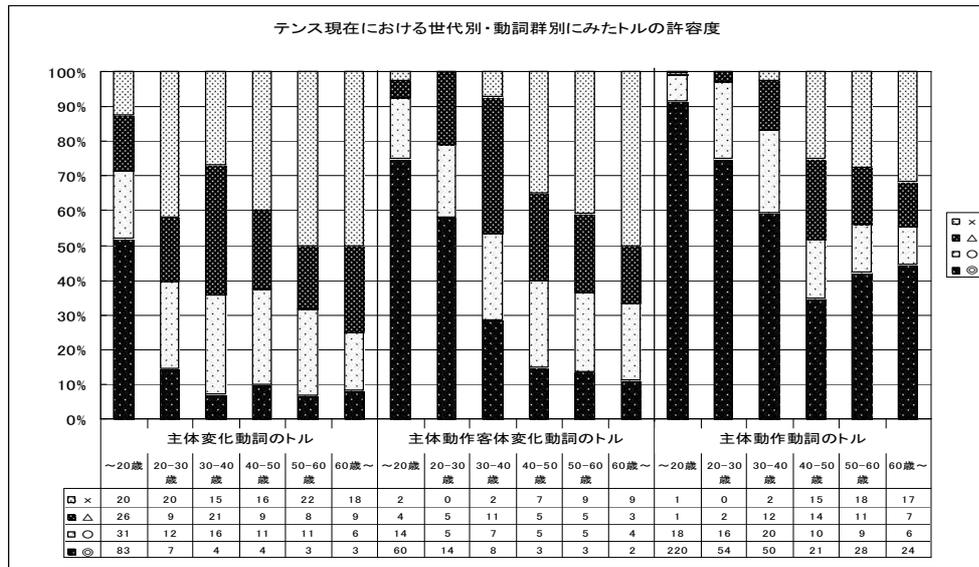
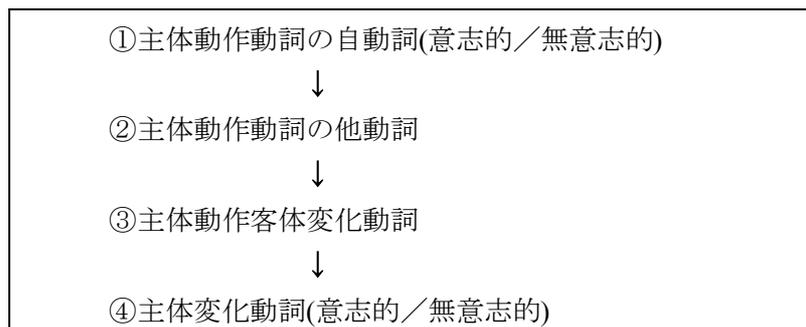


図 2

まず、同じ世代で動詞群別にトル系の許容度に注目して見ると、あらゆる世代においてトル系の許容度が主体動作動詞、主体動作客体変化動詞、主体変化動詞の順に高くなっており、工藤(1998)および岸江(2001)の主張に従う傾向が出ている。さらに、動詞個別にトル系の許容度を比較してみると、全世代において、主体動作動詞の中でも他動詞よりも自動詞の方が概して許容度は高かった。ただ、意志的自動詞と無意志的自動詞の許容度は主体動作動詞においても主体変化動詞においても許容度に違いはなく、意思的か無意志的かということは許容度には関わっていないようであった。

以上を整理すると、継続アスペクトにおけるトル系形式の進出の順序は次のようになる。



なお、3.1.で証明したとおり、このトル系形式の進出順序とテンスとの相関関係はない。

次に、同じ動詞群で世代別に見てみる。継続アスペクトにおけるトル系形式の許容は近年発達したものであるため、全体的に若い世代ほどその許容度は高いことがグラフから見て取れる。主体変化動詞に注目してみると、これは20歳未満と20歳以上との間で(◎)の割合に大きな差ができており、それ以上の年代においては際立った許容度の差は見られない。したがって、主体変化動詞における継続アスペクトでのトル系の使用は、20歳未満の世代が広島方言を習得したこの20年以内、ごく最近に進行したものと考えられる。また、主体

動作客体変化動詞および主体動作動詞においては、継続アスペクトでのトル系の使用を全く認めない(×)の回答の割合に、40歳を境として、大きな差が見られる。このことから、これらの動詞においては、40歳以上の世代と40歳以下の世代の両者の言語習得期の境目に、継続アスペクトのトル系に対しての許容度に変化があったことが推測される。

以上から、広島市では、継続アスペクトにおけるトル系の使用が主体動作動詞および主体動作客体変化動詞において許容され始めたのが、約30年から40年前、主体変化動詞において許容され始めたのはここ最近20年以内、という結論が導き出されるであろう。

4. まとめと今後の課題

今回の調査では、広島県広島市における継続相継続アスペクトでの、ヨル系形式とトル系形式の対立と競合の程度を世代別に明らかにした。その上で、トル系形式の進出順序が主体動作動詞、主体動作客体変化動詞、主体変化動詞の順であることを確認し、さらに主体動作動詞内では自動詞から他動詞へ、という順であるということが発見できた。

今回の調査の問題点としては、まず調査方法がアンケートによる調査に限定されていたことがあげられよう。今後は今回の調査を確認する意味でも、日常会話を録音した資料を用いた分析を試みると、より実際の使用状況に近づいた分析結果が出せると考えられる。

なお、トル系形式の進出順序であるが、今回の調査では動詞分類を完全に工藤(1995)および井上・沖・木部(2002)に基づいて行ったので前述のような結果が出たが、分類上同一区内の動詞間でも許容度に差が出たことなどから、動詞分類そのものから再考する必要もありうるだろう。

参考文献

- 井上文子 (1998) 『日本語方言アスペクトの動態—存在型表現形式に焦点をあてて—』 秋山叢書
- _____・沖裕子・木部暢子 (2002) 「テンス・アスペクト」 大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック』 科学研究費成果報告書 65-83, 所収
- 岸江信介 (2001) 「西日本諸方言アスペクトにおけるヨル／トルについて」 工藤真由美編『方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究』 科学研究費成果報告書 77-89, 所収
- 金田一春彦 (1955) 「日本語動詞のテンスとアスペクト」 金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』 (1976) 27-61, 麦書房 所収
- 工藤真由美 (1998) 「西日本諸方言と一般アスペクト論」 『言語』 27-7. 34-40, 大修館書店
- _____・木部暢子編 (2000) 『方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究』 科学研究費成果報告書

文章表現におけるオノマトペの使用傾向

増野 奈央

(南・西アジア課程ヒンディー語専攻)

キーワード：オノマトペ、文体論、語彙化

0. はじめに

本稿は、文章表現におけるオノマトペ¹の使用傾向を多角的に分析することで、オノマトペの客観的考察を目指す。オノマトペには、「にやにや」等、一目でそれと判断できるものから、「にやつく」等文章に溶け込んでしまうもの、「りやりりや」等見慣れない形が存在し、どこからどこまでをオノマトペと判断すべきか明らかではない。

本稿では、小説29作品中からオノマトペと思われる語を全て抜き出し、統語的・音韻形態的に分析した上で、辞典を用いて語彙化の有無を調べる調査を行った。また、表記方法、作家別の分析も行い、「オノマトペとはどのような語のことをいうのか」を明らかにする。

1. オノマトペとは

オノマトペに関する用語は、先行研究ではばらつきがあり、その定義もさまざまである。本稿においては、語彙化されたものと、語彙化されていないもの両方を取り扱うため、その両者それぞれを示すものと、その両者を示す総称が必要である。そこで、本稿で扱う用語をここで確認する。

1.1. 用語の定義

二つの先行研究から、オノマトペに関する用語を参照した。

田守・スコウラップ(1999)では、オノマトペについて以下のように述べている。

オノマトペは、もっとも一般的な定義では、現実の音を真似ている音、あるいは少なくともそのように見なされる語を指す(ぎしぎし、quack等)。しかしながらこの術語は、声を含む音を表す語に対してだけでなく、動作の様態(くねくね、zigzag)や、肉体的(ぼっちゃり、plump)あるいは精神的(もさつ、sluggish)な状態を描写する語に対しても、用いられることがある。本書では、この術語を後者のように広義の意味で用いる

【田守・スコウラップ(1999:10)より引用】

また、田守・スコウラップ(1999)は、具体的説明がないものの、語彙化されていないオノマトペのことを「臨時語」と呼んでいる。

飛田・浅田編(2002)は、「外界の物音や人間・動物の声」または「外界の様子や心情」が「具象的な

¹ この用語の選定基準については1章で詳しく説明する。

現実から抽象的な言葉」に至るまでには5段階が必要だといひ、その最終段階「活字化できる音声連続及び発音できる文字表記によって対象の音・声または様子を表現したもので、一定グループの人々（多くは同国語人）の間で抽象的・普遍的に通用する」もののみを「擬音語」ないし「擬態語」とした。

【飛田・浅田編(2002:5-7)より要約】

以上の先行研究を参照し、本稿では、総称を「オノマトペ」とし、語彙化されたものを「擬音語擬態語」、語彙化されていない臨時的なオノマトペを「臨時語」とした。

1.2. 特徴

オノマトペの統語的・音韻形態的分析で用いた分類基準は、田守・スコウラップ(1999)の統語的・音韻形態的特徴を参考にした。以下、簡単にその紹介をする。

1.2.1. 統語的特徴

オノマトペは統語的に、文中で副詞、動詞、名詞、形容詞・形容動詞として働くほか、「～という音」という構造をもつ「引用用法」、文中で単独で現れる「文外独立用法」、述語部分が省略された「動詞省略」がある。

【田守・スコウラップ(1999)より要約】

以下の調査ではオノマトペをこれら7つの用法で分類する。

1.2.2. 音韻形態的特徴

田守・スコウラップ(1999)によると、オノマトペの音韻形態には、①1モーラ語基で構成されているもの（「ふ」等）②2モーラ語基で構成されているもの（「がば」等）があるという。そしてそれぞれ反復したり、促音・撥音・長音・「り」が付加される。

例) CVCV²-「むく」(2モーラ語基礎)+ri「り」の挿入→CVCVri「むくり」

これらのオノマトペを構成する要素、反復、促音・撥音・長音・「り」の挿入を田守・スコウラップ(1999)にならって「オノマトペ標識」とする。

2. 先行研究

ここでは、オノマトペの範囲に関する先行研究を見る。

1.1.で述べた、飛田・浅田編(2002)の「擬音語・擬態語に至る5つの段階」を参照し、表にした。

² Cは子音、Vは母音、riは「り」をさす。

表 1：擬態語・擬音語に至る五つの段階

具象	現実の音・声や様子 (1)類似の音・声や様子で模倣する（身振りを加えた模倣） (2)音・声による対象の音・声や様子の表現（楽器などによる模倣） (3)「映像」による対象の音・声や様子の表現（マンガによる音の表記など） (4)文字による対象の音・声や様子の表現（個別的・一回性が強い）
抽象	(5)擬音語・擬態語（一定グループの人々に普遍的に通用する）

【飛田・浅田編（2002：8）を参照し筆者が作成】

3. 調査

文学作品 29 作品³を調査対象とした。文学作品の選定基準は一般向け短編小説であること。ジャンルについては特に問わなかった。文学作品 29 作品から、音韻形態的にオノマトペであると考えられるものを抜き出し、以下 4 つの視点から分析した。

3.1. 統語的・音韻形態的特徴

今回得られたオノマトペ数は、小説全 29 作品 892 ページ中 1070 例である。小説 1 ページにオノマトペが出てくる平均は 1.23 例であった。最低値は南原幹雄(1996)「決闘小栗坂」の 0.5 例で、最高値は町田康(1999)「矢細君のストーン」の 2.83 例である。

図 1 は、今回出てきたオノマトペ 1070 例を、統語的特徴別に分け、その割合を出したものである。

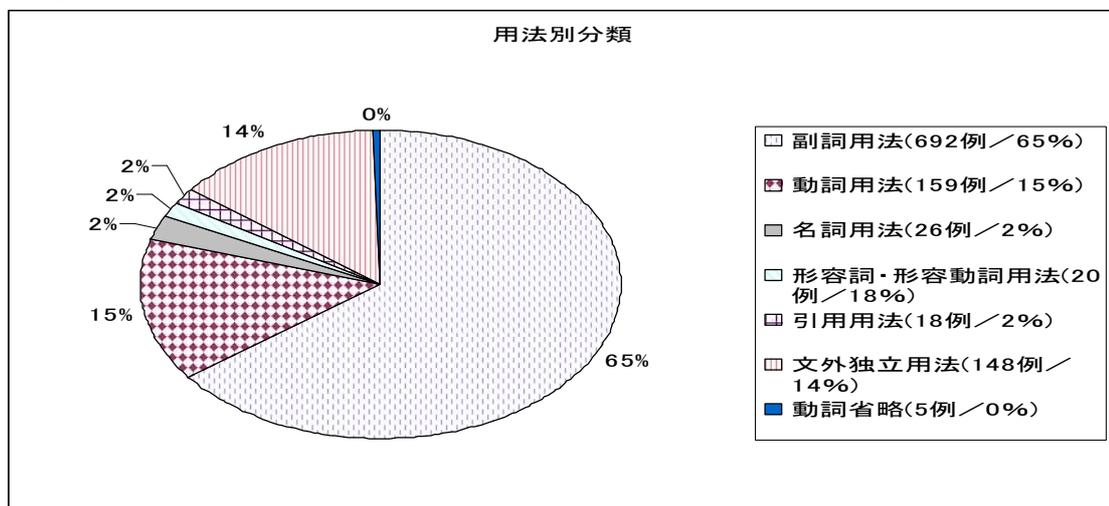


図 1：用法別分析

³ 調査に用いた文学作品は次の通りである。

安西篤子(1996)「刈萱」/ 池波正太郎(1973)「東海道・見付宿」(1973)「赤い富士」(1973)「陽炎の男」(1973)「嘘の皮」/ 北方謙三(1996)「杖下」/ 小松重男(1996)「一生不犯異聞」/ 筒井康隆(1972)「無風地帯」(1972)「澱の呪縛」(1972)「青春賛歌」(1972)「水蜜桃」(1972)「紅蓮菩薩」(1972)「芝生は緑」(1972)「日曜画家」(1972)「亡母湯仰」/ 南原幹雄(1996)「決闘小栗坂」/ 船戸与一(1996)「夜叉鴉」/ 町田康(1999)「鶴の壺」(1999)「矢細君のストーン」(2001)「工夫の減さん」(2001)「権現の踊り子」(2003)「ふくみ笑い」(2003)「逆水戸」/ 三島由紀夫(1961)「憂國」(1961)「苺」(1962)「帽子の花」(1962)「月」/ 皆川博子(1996)「土場浄瑠璃の」/ 宮部みゆき(1996)「謀りごと」

グラフを見ると、オノマトペは文中で、副詞か動詞として働くのが一般的であるといえる。副詞用法は更に、「と」を共起するもの、「に」を共起するもの、助詞を伴わないものの3分類に分け、その傾向を見た。「と」を伴うオノマトペは最も多く、他に比べて多様な音韻形態をとる。これはとりうるオノマトペの形態に制限が少ないということである。また、助詞を伴わないオノマトペは、ほとんどが4モーラで構成されていた。つまり、とりうる音韻形態がかなり制限されているということである。

動詞用法も名詞用法も、CVCV2型、CVV2型、CVN2型や、CVQCVri型、CVNVCVri型などのオノマトペの典型的な音韻形態をとるものが多い。この2つの用法では、あまり多くの音韻形態は出てこない。引用用法は全体数が少ないため、傾向はつかみにくい。他の用法に比べ、音節数の多いオノマトペが見られた。

文外独立用法は3番目に多い用法となったが、作家によって使用に偏りが見られる。文外独立用法は他の品詞からは独立しているので、とりうる音韻形態は自由である。事実、文外独立用法は「その他の音韻形態」に分類されるものが多かった⁴。その一方で、オノマトペの典型的な音韻形態であるCVQCVri型とCVNVCVri型は見られなかった。これは、CVQCVri型とCVNVCVri型がある程度の制約の中で現われるということを示唆している。

3.2. 辞典分析

文学作品から抽出したオノマトペ1070語を辞典で調べる。用いる辞典は以下のA、Bの2冊である。

A. 飛田・浅田編(2002)『現代擬音語擬態語用法辞典』1064語

B. 山口編(2003)『暮らしのことば 擬音・擬態語辞典』1992語⁵

飛田・浅田編(2002)を主に使うのは、オノマトペを扱った辞典の中で、最も見出し語の選定基準が明確だと思われるからである。しかしこの辞典は「人間の声に表れる擬音語で、感動詞の用法が主であるものを除く」とされているため、その点をカバーしている山口編(2003)を補足的に用いる。文学作品から抽出したオノマトペのうち、Aの辞典に載っていたものは擬音語・擬態語として語彙化しているとみなし、それらを除いたオノマトペを、次の6つの分類にわけるとする。

I. どちらの辞典にも載っていないもの

II. Aに語基のみ同じ形の見出し語があるもの

III. Aに載っているが用法が異なるもの

IV. Aに載っていないがBに載っているもの

V. Aに載っていないが、Bに語基のみ同じ形の見出し語があるもの

VI. Aに載っていないが、Bに用法が異なるものが載っているもの

⁴ それぞれの用法で「その他の音韻形態」に分類されたオノマトペの割合は、以下の通り。

副詞用法(10.2%)、動詞用法(5%)、形容詞・形容動詞用法(27.8%)、引用用法(27.8%)、文外独立用法(38.5%)、動詞省略(20%)

⁵ 山口編(2003)に正確な収録語数が掲載されていなかったため、筆者が数えたもの。

下の表 2 は、I～VIに分類されたオノマトペを用法別に分類したものの。

表 2：辞典分析用法別

	副詞 用法	動詞 用法	名詞 用法	形容詞・形 容動詞用法	引用 用法	文外独 立用法	動詞省 略	計
I	30	5	5	0	8	57	1	106
II	5	11	0	4	1	5	1	27
III	0	2	0	0	0	0	0	2
IV	18	10	4	0	0	13	0	45
V	4	0	0	0	1	6	0	11
VI	3	5	0	0	0	0	0	8
計	60	33	9	4	10	81	2	199

総オノマトペから擬音語・擬態語を取り除いたものの内訳を出すと、I「どちらの辞典にも載っていない」が最も多く、全体の約 52%を占めた。II～VIに関しては、何らかの形で辞典に載っているとみなせるが、Iのどちらの辞典にも載っていないオノマトペは、臨時語である可能性が高い。そこで、以下でIに分類されたオノマトペを詳しく見ていく。

表 3：I.どちらの辞典にも載っていないもの

用法	計	種類と音韻形態
副詞用法	30	と 20 (CVCV2…3 CVCVQ…3 CVQ…2 CVN…2 CV2…1 CV3…1 CVCVV…1 その他…7) に 1 (CVCV2…1) なし 9 (CVCV2…8 その他…1)
動詞用法	5	スル 5 (CVCV2…4 CVQCVri…1)
名詞用法	5	その他…5
引用用法	8	CV6…3 CVQ…2 CV2…1 その他…2
文外独立用法	5 7	CVQ…7 CV2…1 CVCVN…5 CV3…2 CVVQ…2 CVNQ…1 CV2Q…1 CV6…1 CVCVQ…1 CVCVV…1 CVV5…2 CVCVNQ…1 CVCVN3…1 CVCV4…1 その 他…30
動詞省略	1	その他…1
	106	

総オノマトペから擬音語・擬態語を取り除いたものの内訳を出すと、I「どちらの辞典にも載っていない」が最も多く、全体の約52%を占めた。

II～VIに関しては、何らかの形で辞典に載っているとみなせるが、Iのどちらの辞典にも載っていないオノマトペは、臨時語である可能性が高い。この項目ではオノマトペの典型的な音韻形態である、CVQCVri型やCVNVCVri型があまりみられない。

副詞用法でI「どちらの辞典にも載っていない」に分類されたもののうち、「と」を伴うものは20例、「に」を伴うものは1例、伴わないものは9例だった。「と」を伴うオノマトペはオノマトペ度が高い⁶といえる。

動詞用法では、I～VIに分類されたもののうち「スル」がつくものは14例、派生動詞は19例であった。全体的な割合に比較すると、I～VIに分類されたオノマトペの中では、接尾辞を伴う派生動詞の割合が大きくなった。つまり、全体の動詞用法のうち、スル動詞はほぼ辞書に載っているが、派生動詞の方はあまり載っていない。派生動詞はIIやVに分類されることが多く、Iに分類されるものはあまりない。これは、派生動詞が臨時的であるということではなく、派生動詞が文章にとけこみすぎて、オノマトペであると判断しづらいいということである。辞典に載っていないからといって、そのオノマトペが臨時語であるとは判断しきれないということが言える。

名詞用法では、I「どちらの辞典にも載っていない」とされたものが5例あり、全てが「がらくた」であった。残りの6例がIV「Aに載っていないがBに載っているもの」に分類された。つまり、名詞として用いられたオノマトペのうち、辞典に一切載っていなかったのは「がらくた」という語一語のみである。これは名詞の語彙性⁷の高さを示している。

形容詞・形容動詞用法は、擬音語・擬態語を除いたオノマトペ群の内、4例すべてがII「Aに語基のみ同じ形の見出し語があるもの」に分類された。さらに、4例中3例は「にこにこ」からの派生であると思われる「にこやか」であった。形容詞・形容動詞として用いられるオノマトペは動詞や名詞と同じく、語彙性が高いといえる。引用用法では、10例中8例がI「どちらの辞典にも載っていない」に分類された。引用用法は、オノマトペ度が高いということがいえる。

文外独立用法は、擬音語・擬態語を除いたオノマトペのうち41%を占める。また文外独立用法全体(148例)のうち、I～VIに分類されたオノマトペ(81例)は約55%になる。さらに、81例中57例がI「どちらの辞典にも載っていない」に分類された。これは文外独立用法のオノマトペ度の高さを示している。

ただし、Iに分類されたオノマトペの中で、「びかびか光る」「ふるふる震える」など、複数の作家によって用いられているオノマトペが存在した。これらのオノマトペは、一般に広く認められるほどではないが、一部の人々に受け入れられる表現、いわば俗語的なオノマトペであるといえる。

⁶ 田守・スコウラップ(1999)で、「ある語が話者によって直接的な模倣として認識される程度、すなわちその語がそれによって指示される音、様態、状態の非恣意的な現れとして認識される程度」を「オノマトペ度」と呼ぶ。

⁷ 田守・スコウラップ(1999)で、「オノマトペと推測される語が、言語の中でどれほど完全に語として機能しているかという程度」を「語彙性」という。

3.3. 表記別分析

オノマトペを表記別に分類した。平仮名のみ、片仮名のみ、漢字のみ、平仮名+漢字、片仮名+漢字という表記方法があったが、平仮名のみで表記されているものがほとんどを占め、1048例であった。それ以外の22例を見てゆくと、用法、音韻形態共に、特徴と言う特徴は見つからなかったが、片仮名で表記されたものは、ほとんどが三島由紀夫の作品の用例であり、漢字で表記されたものは全てが池波の作品の用例であった。表記方法では、どのような統語的・音韻的特徴のときに何が用いられやすいかはわからないが、作家の嗜好によるものが大きいということがいえる。

3.4. 作家別分析

作家別に分析するにあたり、特に複数の作品を調査した町田康・筒井康隆・三島由紀夫・池波正太郎の4人を対象とした。

表は作家別の1ページあたりのオノマトペ数と、辞典分析の結果を割合として出したものである。

表4：作家別辞典に載っていないオノマトペの割合

作家	全オノマトペ数	オノマトペ数 / 1p	I～VI (割合)	I (割合)
町田康	390	1.98	139 (35.6%)	90 (23.1%)
筒井康隆	273	1.06	29 (10.6%)	10 (3.7%)
三島由紀夫	96	1.17	12 (12.5%)	2 (2.1%)
池波正太郎	147	0.70	5 (3.4%)	0.0 (0%)

1ページあたりのオノマトペ数で1.98例というデータが出ている町田康は、オノマトペの使用を好む作家であるといえるが、同時に辞典に載っていないオノマトペの割合もダントツに高い。町田が用いたオノマトペでI「どちらの辞典にも載っていない」に分類されたものの中には、「びかびか」や「ふるふる」などのように他の作家も用いている表現もあるが、玄関の引き戸を開けるときの音を「りやりやりやりりゃ」と表現したり、中年女性の唇を「ぼっさりした」と表現するなど、見慣れない表現も目立つ。また、町田の作品中で出てきた「ぐじぐじ」は辞典に載っていない上、他の作家の使用も見られなかったため、臨時語であると判断してよいと思われるが、町田の作品中で3回使用が見られた。これは一般的に見て臨時語であっても、町田の中ではかなり語彙化した表現であるのかも知れず、「個人的なオノマトペ」の存在が示唆される。

4. まとめ

オノマトペの使用には作家の嗜好がかなり見られ、その使用傾向は様々であるが、その様々な使用傾向を分析する中で、オノマトペの段階があらわになった。

「にやつく」「ぼやける」などの接尾辞を伴う派生動詞や、「にこやか」などの派生形容

動詞は擬音語擬態語辞典には載りにくい。そのため辞典に載っていないオノマトペがすべて臨時語であるとは言いがたい。このように、一般語彙として定着しすぎて、オノマトペであると認識されないものの存在も確認することができた。また、完全な臨時語だけでなく、「びかびか」「ふるふる」などのような、一部の人々に共有されるが擬音語擬態語辞典には載らない、俗語的なオノマトペと、個人的には語彙化している個人的なオノマトペがあると考えられ、2.3.で引用した飛田・浅田編(2003)の「現実の音が擬態語・擬音語に至る5段階」に次のような段階が新たに加えられるようである。

表5：擬態語・擬音語に至る段階

具象	現実の音・声や様子 (1)類似の音・声や様子で模倣する（身振りを加えた模倣） (2)音・声による対象の音・声や様子の表現（楽器などによる模倣） (3)「映像」による対象の音・声や様子の表現（マンガによる音の表記など） (4)文字による対象の音・声や様子の表現（個別的・一回性が強い） (4') 臨時語'（臨時的だが個人的には定着した表現） (4'') 臨時語''（一部の人間に共有される表現） (5)擬音語・擬態語（一定グループの人々に普遍的に通用する）
抽象	(6)一般語彙（擬音語・擬態語であると認識されなくなる）

なお、(4)～(4'')に関しては、擬音語擬態語辞典にも、一般の辞典にも載っていないが、(6)は擬音語擬態語辞典には載っていないが一般の国語辞典には載っている。

5. おわりに

本稿は、文章表現におけるオノマトペの使用に焦点を置き、その傾向を分析した。今回調査によって、文学作品におけるオノマトペの使用傾向をつかむための数量的データを出し、多角的に分析することが出来た。そのことにより、どこからどこまでがオノマトペなのか、オノマトペが語彙として認定されるまでにはどのような段階を踏むのかといった問いに対し、先行研究より詳しい答えが出ることが出来た。

今回調査する中でわかった俗語的・個人的なオノマトペは、これから擬音語擬態語として語彙化してゆくかもしれない可能性を秘めた語群であり、大変興味深い。今後機会があれば、この部分に対象を絞り、もっと詳しく調査してみたい。

参考文献

- 田守育啓・ローレンス＝スコウラップ(1999)『日英語対照研究シリーズ オノマトペ ―形態と意味―』 東京：くろしお出版
- 飛田良文・浅田秀子編(2002)『現代擬音語擬態語用法辞典』 東京：東京堂出版
- 山口仲美編(2003)『暮らしのことば 擬音・擬態語辞典』 東京：講談社

中国語（北京官話）指示代詞の統語的用法

森川 太介

(東アジア課程・中国語専攻)

キーワード：中国語、指示代詞、統語

0. はじめに

中国語¹には「这・那」という、それぞれ近称、遠称を表す二つの指示代詞²が存在する。しかし、これら指示代詞の統語的な用法に関してはまとまった研究は存在していない。本稿では、これら指示代詞の統語的な用法について明らかにすることを目的とする。

1. 先行研究

詳細な先行研究は紙幅の都合上割愛するが、ここでは「这・那」の品詞についての言及がなされている北京・商務印書館・小学館共同編集(2003)、指示代詞について網羅的に扱っている朱德熙(1982)、本稿の直接の先行研究にあたる望月(1968)について扱う。

1.1. 北京・商務印書館・小学館共同編集(2003)

北京・商務印書館・小学館共同編集(2003)は「这」について、指示代詞としての用法のみを認め、「この. その」「これ. それ」「こちら」「現在, いま. →語気を強める働き」などの意味を載せている(北京・商務印書館・小学館共同編集(2003: 1903-4)を要約)。また、「那」については、指示代詞としての用法の他に接続詞としての用法を挙げ、指示代詞としての用法については「あの. その」「あれ. それ」などの意味を載せ、接続詞としての用法については「それでは. それなら」という意味を載せている(北京・商務印書館・小学館共同編集(2003: 1028)を要約)。

1.2. 朱德熙(1982)による研究

朱德熙(1982)はまず「代詞は人称代詞、指示代詞、疑問代詞の3種類に分けられる」³(朱德熙(1982: 80))と述べている。

指示代詞についての朱德熙(1982: 85)の記述をまとめると以下のようになる。

- ・指示代詞には代替作用と指称作用がある。
- ・近称は「这」、遠称は「那」である。
- ・「这」「那」に対応する疑問代詞は「哪」である。

¹ 本稿で扱う中国語とは、北京を中心として広く使用されている北京官話を指しており、方言差は考慮しない。

² 中国語の代詞は名詞以外のものに代替、あるいは指称することもあるため、本稿では代名詞という用語ではなく、代詞という用語を使用することとする。

³ 以下、中国語文献からの引用はすべて筆者が翻訳したものである。

・「这」「那」は単独で用いることも、量詞や数量詞と結合して用いることもできる。

ex. 这个、那个、这一个、那一个

・その他に「这・那」による語には以下のものがある。

1. 時間： 这会儿 那会儿 [多会儿]⁴
2. 場所： 这儿 那儿 [哪儿] 这里 那里 [哪里]
3. 方式： 这么(办) 那么(办) [怎么(办)]
 这样(办) 那样(办) [怎样(办)]
 这么样 那么样 [怎么样]
4. 程度： 这么(大) 那么(大) [多(大)、多么(大)]
 这样(大) 那样(大)

なお、3. 方式 と 4. 程度 の双方に这么、那么、这样、那样が分類されているが、これはそれぞれの語の後に動詞(办など)が置かれるか、形容詞(大など)が置かれるかによる分類である。

指示代詞の統語的用法については「「这・那」は普通主語となり、目的語となることはあまりない。主語となるときには、人を指すことも物を指すこともできる」(朱德熙(1982: 86))として以下の例を挙げている⁵。

(1) Zhè shì wǒmen bānzǎng.
这 是 我们 班长。

这 be IPL leader

こちらは我々の班長です。⁶

朱德熙(1982: 86)

また、「“那”が主語となる場合、「もしそういう話ならば」という意味を表すこともある」(朱德熙(1982: 86))として以下の例を挙げている。

(2) Nà kě bù xíng.
那 可 不 行。

那 can not good

それなら駄目かもしれない。

朱德熙(1982: 86)

1.3. 望月(1968)⁷

望月(1968)では、指示代詞の統語的用法について以下の表を示した。表の中の「○印は「そ

⁴ [] で囲まれている語は、それぞれの指示代詞に対応する疑問代詞である。

⁵ 例文番号は、すべて執筆者による。また適宜グロスおよびピンインを付加した。また、指示代詞に下線が付されていないものは、執筆者が付加し、傍点だったものは下線に変更した。

⁶ 中国語文献からの例文に関しては、和訳も筆者による。

⁷ 望月(1968)の論文では中国語の表記に関して本稿とは異なった字体が用いられている。以下に本稿との対応を例示する。這(望月) / 这(本稿)、那 / 那、個 / 个。本稿ではすべての文字を適宜簡体字に直した。

の機能が一般的であること」を，△印は「その機能が一般的でないこと」を，×印は「その機能が存在しないこと」を示す」（望月(1968 : 4)）。

表 1 : 望月(1968 : 4)

文成分	主語			表語	目的語	定語	補語	中心語
	名詞述語文	形容詞述語文	動詞述語文					
説明	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
这 ⁸	○	△	△	×	×	○	×	×
这个	△	○	×	○	○	○	×	○

以下、それぞれの成分についての望月(1968)の説明を要約する。

- ① 名詞述語文の主語は「这」が普通で、「这个」は他と特に区別しようとするときに使われるだけで、普通は使われない。
- ② 形容詞述語文の主語で「这」が主語になるのは、主として口頭語に限られ、それも空間的に現前するものを指して言う場合には使われず、先行叙述を指示する場合にしか使われない。
- ③ 「这个」が動詞述語文の主語になることはない。例外として、「这个」と「那个」を並列させるときには使うようである。「这」は主語になる場合があるが、人を指すことはなく、先行叙述を指示する場合に限られる。
- ④ ここでいう表語というのは、「是」とともに述語を構成する成分である。表語としては「这个」は使われるが、「这」は使われない。
- ⑤ 「这个」は目的語となるが、「这」は目的語にならない。ただ、「这」と「那」を並列させる場合は例外である。
- ⑥ 「这」が定語になっている例は、「这个」が定語になっている例に比べてかなり少ないけれども、決して「破格」的用法ではない。ただ書面語について見ると、「这时〔候〕」「这方面」のように時間・場所を表す場合以外には一例しかない。
- ⑦ 「这」も「这个」も補語になることはない。
- ⑧ 「这个」は中心語になりうる。「这」は中心語になることはないが、人称代詞や固有名詞が「这」の定語となることがある。

望月(1968 : 4-6)を要約

以上の説明によって、「这」は「是」とともに用いられる場合を除いて、単独で文成分になり得ない傾向がある。「是」を伴う場合に「这」が単独で主語になり得るのは、「是」が量詞と同様に、「这」に安定感を与えるものと思われる。「这是……」が安定感をもっているからには、「这个是……」とは普通には言わないのも納得できそうである。

望月(1968 : 6)

⁸ 望月(1968)は「这」(近称)にのみ言及しているが、これにより指示代詞の総体的用法を示しているので、「那」(遠称)についても同様に考えているものと推測される。

1.4. 先行研究の問題点

以下に先行研究で食い違っている点及び問題点を示す。

- ・ 目的語の位置に「这・那」を置くことができるのかどうか
- ・ 望月(1968)の言うように「「这」が定語になっている例は、「这个」が定語になっている例に比べてかなり少ない」(望月(1968:5))のか

なお、北京・商務印書館・小学館共同編集(2003)で主張されている接続詞としての用法と、朱德熙(1982)で主張されている「「那」が主語となる場合、「もしそういう話ならば」という意味を表すこともある」(朱德熙(1982:86))という用法は同じ現象を指していると思われる。ここでは、この「那」は接続詞的な用法であると判断し、指示代詞としては扱わないことにする。

2. コーパス分析による指示代詞の用法の研究

2.1. 研究方法

1.4. で記した問題点を明らかにするために、コーパス分析を行う。インターネット上に公開されている文学作品のコーパス「亦凡公益图书馆」から、現代中国（戦後に書かれたもの）の文学作品を無作為に選んだ。今回分析に用いた作品は王朔『空中小姐』(29,143字)、张卫『你别无选择』(58,322字)、谭竹『一生有多长』(85,077字)の3作品である。

研究方法としては、コーパスから指示代詞を用いた文を抽出し、指示代詞「这・那」が単独で使われているもの、指示代詞の後に（数詞と）量詞がついたもの、里・儿がついたもの、么がついたもの、样がついたものに分類する⁹。その後、指示代詞が単独で使われているものについて、それぞれの指示代詞の統語的用法を以下の基準によって分類する。

なお、朱德熙(1982)では「这会儿・那会儿」という例も挙がっていたが、実際には一例も見つけられなかった。

- ・ 名詞述語文主語……動詞として「是」が使われている文の主語。
- ・ 形容詞述語文主語……動詞が存在せず、形容詞が述語である文の主語。
- ・ 動詞述語文主語……「是」以外の動詞が使用されている文の主語。
- ・ 目的語……名詞述語文、動詞述語文を問わず、目的語の位置に来るもの。
- ・ 定語……「这孩子（この子供）」のように名詞と連用され、名詞を修飾するもの。

2.2. 研究結果

対象となった3作品から指示代詞である「这・那」を抽出した結果、それぞれ1217例¹⁰、671例¹¹抽出された。それを形態ごとに区分すると表2のようになる。

⁹ 「这／那」であっても刹那、这不、这才のように、それが含まれる語で指示代詞以外の品詞である場合には抽出しない。

¹⁰ 空中小姐：171例、你别无选择：337例、一生有多长：709例

¹¹ 空中小姐：174例、你别无选择：185例、一生有多长：312例

表 2:「这・那」の用例数内訳

形態	用例数
这	487 (40.0% ¹²)
这+(数詞+)量詞 ¹³	375 (30.8%)
这里・这儿	37 (3.0%)
这么	171 (14.1%)
这样	147 (12.1%)
計	1,217 (100.0%)

形態	用例数
那	233 (34.7%)
那+(数詞+)量詞	229 (34.1%)
那里・那儿	32 (4.8%)
那么	144 (21.5%)
那样	33 (4.9%)
計	671 (100.0%)

更に、「这」「那」がそれぞれ単独で使われた場合である、487 例及び 233 例を 2.1. で設定した分類基準に従って分類すると表 3 のようになる。

表 3:「这」「那」が単独使用された場合の分類

	这	那
名詞述語文主語	112 (23.0%)	49 (21.0%)
形容詞述語文主語	17 (3.5%)	3 (1.3%)
動詞述語文主語	67 (13.8%)	5 (2.1%)
目的語	0 (0.0%)	0 (0.0%)
定語	291 (59.8%)	176 (75.5%)
計	487 (100.0%)	233 (100.0%)

まず、作品による有意な差異は見られなかった。

そして、「这」「那」ともに定語が過半数を占める結果となった（例文 3）。特に「那」では 75%以上を占めている。今回抽出された「这+量詞・那+量詞」の総数（「这+量詞」375 例、「那+量詞」229 例）と比較しても、「这・那」の定語としての用例が「这+量詞・那+量詞」よりもかなり少ないとした、望月(1968)の主張には問題がある。

- (3) Qíguài de shì tā nà zhuāngshù
奇怪 的 是 他 那 装束:
strange NOM be 3SG 那 costume
おかしいのは、彼のあの恰好だ。

動詞述語文主語は特に「这」で多く見出された（例文 4）。望月(1968)では動詞述語文主語の指示代詞は、「先行叙述を指示する場合に限られる」（望月(1968:5)）と述べられている。この動詞述語文主語の性質については、第 3 章で更に詳しく見ていくことにする。形容詞

¹² 小数点第二位を四捨五入。

¹³ ある語が量詞であるか否かの判断は、北京・商務印書館・小学館共編(2003)による。

述語文主語の用例は「这」「那」共にあまり見られず、一般的な使用ではないとした、望月(1968)の主張を補強する結果となった。目的語に関しては、実際の用例は一例も発見できなかった。

- (4) 这 Zhè shuōmíng sīxiǎng bù jiànkāng!
 这 show thought not sound
 これは思想が健全でないことを証明している！

3. 主語に用いられる「这」に関する研究

第2章では「这」が動詞述語文の主語となる例が多数抽出された。第3章では、以下の分類基準に従い動詞述語文主語及び名詞述語文主語の位置に現れる「这」を分類し、考察する。

3.1. 研究方法

朱德熙(1982)及び北京・商務印書館・小学館共同編集(2003)の記述を基に、指示代詞を以下の3種に分類する。そして、分類基準に従い、動詞述語文主語である「这」66例、及び名詞述語文主語である「这」112例を分類する。

- 代替作用……先行する発話に登場する事物、あるいは文脈全体を指し示している指示代詞
- 指称作用……現前する具体物や状況を指し示している指示代詞
- 強調作用……特に何かを指し示す作用を持っているわけではなく、即時性など強意、強調の意味を持つ指示代詞

3.2. 研究結果

動詞述語文主語である「这」67例及び名詞述語文主語である「这」112例を3.1.で記した分類規準に従って分類すると、表4のようになる。

表 4：動詞述語文主語及び名詞述語文主語である「这」の分類結果

分類基準	用例数	
	動詞述語文主語	名詞述語文主語
代替作用	65 (97.0%)	89 (78.8%)
指称作用	0 (0.0%)	19 (16.8%)
強調作用	1 (1.5%)	4 (3.5%)
その他	1 (1.5%)	0 (0.0%)
計	67 (100.0%)	113 (100.0%)

3.3. 考察

表4に見られるように、動詞述語文主語の「这」は2例の例外を除き、ほぼすべてが例

文5のような、代替作用としての用例であった。これは、動詞述語文主語の指示代詞は、「先行叙述を指示する場合に限られる」（望月(1968:5)）とした望月(1968)の研究を裏付ける結果となった。

- (5) (略) Hái yào huà wàiguó nǚrén, xǐhuan tāmen de fúzhuāng zěnmé bú dào wàiguó
 still want paint foreign woman like 3PL GEN clothes why not to foreign:country
qù ne Zhè shuōmíng sīxiǎng bú jiànkāng!¹⁴
 go Rex 这 show thought not sound
その上外国の女性を描き、外国の服装が好きなのにどうして外国に行かないの
だろうか。これは思想が健全でないことを証明している！

対して、名詞述語文主語である「这」は17%が例文(6)のような指称作用の用法である。

- (6) Dàjiā kàn, zhè shì gāojiǎobēi (略)
 Everyone look 这 be wine:glass
 「みなさんご覧ください、これはワイングラスです。(略)

以上のことから、動詞述語文主語と名詞述語文主語の「这」を比較すると、動詞述語文の主語となる「这」は文脈を指し示すことはできるが、現存する事物を指し示すことはできないということ、および名詞述語文の主語となる「这」にはそのような制限はないということがわかる。

4. おわりに

本稿において、望月(1968)の研究を数値的なデータをもって確認することができた。その結果、形容詞述語文主語と目的語の位置には原則的に指示代詞を単独で置くことができないとする望月(1968)の主張を裏付けることができた。また、動詞述語文主語の位置に指示代詞を単独で置く用法には現前する具体物や状況を指し示す「这」を置くことができないという望月(1968)の主張を確認した。ただし、定語については「这・那」の定語としての用例が「这+量詞・那+量詞」よりもかなり少ないとした、望月(1968)の主張には誤りがあることを確認できた。

また、主語の位置に置かれる「这」については、そこから一歩進んで、名詞述語文主語の位置に現れる「这」と動詞述語文主語の位置に現れる「这」を比較し、名詞述語文主語には指称、代替それぞれの作用を持つ「这」を置くことができるということを明らかにすることができた。

卒業論文では、動詞述語文主語の「这」に指称作用が現れない原因として、「它」や「这+量詞」を代わりに使用しているという仮説を立て、検証してもみたが、思うような結果は得られなかった。これは今後の課題である。

¹⁴ 下点線は下実線によって示された指示代詞が代替している部分を表す。

【グロス略称一覧】¹⁵

1: the first person, 2: the second person, 3: the third person, ASSOC: associative, BA: ba, BEI: bei, CL: classifier, CRS: Currently Relevant State, CSC: complex stative construction, DUR: durative aspect, EXP: experiential aspect, GEN: genitive, NOM: nominalizer, PFV: perfective aspect, PL: plural, Q: question, REx: Response to Expectation, RF: Reduce Forcefulness, SA: Solicit Agreement, SG: singular

参考文献

北京・商務印書館・小学館共同編集(2003)『中日辞典 第2版』東京：小学館
望月八十吉(1968)「中国語の指示詞」『中国語学』177：3-8 中国語学研究会

朱德熙(1982)『语法讲义』北京：商务印书馆

Li, Charles N. and Thompson, Sandra A. (1981) Mandarin Chinese. London:University of California Press

コーパス

亦凡公益图书馆 <http://www.shuku.net/> (2006.09.22)

谭竹『一生有多长』 <http://www.shuku.net:8082/novels/yishen.html> (2006.09.01)

王朔『空中小姐』 <http://www.shuku.net:8082/novels/wangshuo/stewarde.html> (2006.08.31)

张卫『你别无选择』 <http://www.shuku.net:8082/novels/dangdai/zwnbwxz.html> (2006.08.31)

¹⁵ グロスの表記方法、略号は Li and Thompson(1981)に准じた。

動物名詞を用いた拡大 *Augmentativbildung* についての研究

柳 有紀子

(欧米第一課程ドイツ語専攻)

キーワード：ドイツ語、*Augmentativbildung*、拡大、接頭辞、動物

1. はじめに

1.1. 本稿で扱う対象

ドイツ語には、名詞や形容詞に動物名詞を付加して「ひどい～」、「とても～だ」といった意味をあらわす方法がある。以下に例を挙げる。¹

例：Affenhitze (affen- 猿+Hitze 暑さ) ひどい暑さ

hundeelend (hunde- 犬+elend 惨めな) ひどく惨めな

このように動物名詞は、造語において、形容詞的あるいは副詞的に基礎語²を強調する機能を持っている。動物名詞が本来持つ「犬」や「猿」などの具体的意味のほかにもこのような性質があることは、ドイツ語学習者にはとても興味深く、またなぜそのような造語が起こりえるのか不思議に思うところである。そこで本稿では、①どの動物名詞がどの名詞・形容詞を修飾・強調しえるのか、②拡大³における各動物名詞の使用状況、③なぜそのような造語が起こりえるのか、許容できるのか、を4つの調査を通して明らかにする。

1.2. 動物名詞の定義

本稿では、動物をさす名詞を動物名詞と呼ぶこととする。なお、この言葉はどの先行研究にもよらず、独自のなものである。本稿で扱う動物名詞の範囲は、『日独仏西基本語彙対照表』(以下、国立国語研究所(1986)とする)に記載されている、分類番号 1561 の 20 語に Sau (ぶた)⁴を加えた以下の合計 21 語とする。

表 1：本稿で扱う動物名詞

Hund	犬	Vieh	家畜	Schaf	ひつじ
Hase	ウサギ	Fuchs	きつね	Schwein	ぶた
Rind	うし	Bär	熊	Sau	
Pferd	馬	Affe	猿	Kuh	雌牛
Ochse	雄牛	Hirsch	しか	Ziege	やぎ
Stier		Katze	ねこ	Löwe	ライオン
Wolf	おおかみ	Maus	ねずみ	Esel	ろば

¹ 以下、用例はすべて国松編(1998)が出典である。括弧内の補足は筆者による。

² 複合名詞を、意味上の役割を考えて二分割したとき、最初の構成素を規定語 *Bestimmungswort*、後の構成素を基礎語 *Grundwort* という(野入・太城(2002)を筆者が要約)。

³ 本稿では「拡大」と *Augmentativbildung* を同義として扱う。

⁴ *Sau* は国立国語研究所(1986)には記載されていない単語だが、本稿で述べる拡大に使用されることの多い単語であるので、新たに加えた。また、*Sau* は *Schwein* よりも俗語的な言い方である。

2. 先行研究

先行研究をまとめると次のようになる。

- ①Augmentativbildung (拡大) とは、名詞や形容詞に接辞を結合させて元の意味の拡大を行う行為である。
- ②ドイツ語では、接頭辞による拡大は散発的で、多くは擬似接頭辞⁵によるものである。
- ③動物名詞を使用した拡大は少なく、ほとんどが口語において使用される。
- ④拡大をうけた語は、感情的な要素や侮辱的・否定的なニュアンスを帯びることがある。
- ⑤擬似接頭辞は、それ自身が、複合語の意味から最もよく連想されるものとして理解されるケースが多い。

先行研究の中で、動物名詞を用いた拡大は少なかった。例として挙げられていた動物は、Hund (犬)、Affe (猿)、Sau (ぶた) の3つにとどまり、他の動物についてはまったく言及がないが、他の動物はこのような機能を持つことがないのだろうか。さらに、動物名詞を用いた拡大は、口語にのみ使用されるという性格上、どの程度認知・使用されているのか文献を読む限りでは明らかではない。また、擬似接頭辞は、それ自身が、複合語の意味から最もよく連想されるものであるケースが多いと Kunkel-Razum and Münzberg ed. (2005) が指摘している。それならば、動物が各々にもつイメージによって、造語のされ方にも違いが見られるのではないだろうか。

3. 独和辞典による動物名詞を使った拡大形の収集

3.1. 調査方法

動物名詞が語のはじめについている全ての語を独和辞典で調べ、そのうち拡大形であると筆者が判断したものを手作業で拾っていく。使用した辞書は『小学館 独和大辞典 [第2版]』(以下、国松編 (1998) とする) である。以下の3つの判断基準をすべて満たしたとき、当該の単語を動物名詞を用いた拡大形であると判断した。

- 単語の形が[動物名詞]+[名詞]または[動物名詞]+[形容詞]の形で構成されていること。
基礎語が名詞の例: bären-「熊」+Hunger「空腹」→ Bärenhunger「ひどい空腹」
基礎語が形容詞の例: hunde-「犬」+schlecht「悪い」→ hundeschlecht「ひどく悪い」
- 動物名詞が付加されることで、元の単語の意味に①「すごい」「とても」「ひどく」など程度を強める意味、②「ひどい」「大きな」など量や大きさを増加・拡張させる意味、あるいは③「ひどい」「つらい」などの否定的意味が加えられているもの。
①の例: Saudumm「ひどく愚かな」 ②の例: Schweinegeld「多額の金」
③の例: Pferdarbeit「つらい仕事」

なお、拡大形の意味が基礎語に①、②、③に加えて他のニュアンスも付加されているものについては、拡大形としないこととした。したがって、以下のようなものは収集しなかった。

katzenfreundlich 「[うわべだけ] いやに愛想のよい、ご機嫌取りの」

⁵ 接頭辞と擬似接頭辞との境界はどの先行研究にも明確には記載されていないが、もともと「大きい」、「極めて」、「非常に」といった意味を持つものを接頭辞と呼び、その他の形容詞、前置詞、名詞、動詞から成り立ち、接頭辞と同じように働くものを擬似接頭辞と呼ぶようである。

→katzen- 「ねこ」 + freundlich 「友人らしい、友好的な」

- 動物名詞が付加される前と後で基礎語の意味が変化していないこと。したがって、以下のようなものは収集しなかった。

Hundeblöhen 「大変な仕事」 ←hunde- 「犬」 + Flöhen 「ノミとり」

3.2. 調査結果と考察

3.1.で記述した判断基準により拡大形と判断した単語は、それぞれ sau- (ぶた) は 12 語、hunde-(犬)は 8 語、affen-(猿)は 7 語、bären-(熊)は 5 語、schweine- (ぶた) は 4 語、pferde-(馬)・wolfs- (狼)・maus- (ねずみ)・löwen-(ライオン)は 1 語であった。それ以外の動物名詞については、比喩的な表現はいくつかみられたものの、拡大のようにただ単純に基礎語を強めたり、基礎語にネガティブな意味を付加したりしている例は見られなかった。

拡大形をそれぞれ見ていくと、各動物名詞によって後続する名詞・形容詞に違いがあるようだ。たとえば、Hundekälte (「犬」 + 「寒さ」) は国松編 (1998) に記載されているが Hundehitze (「犬」 + 「暑さ」) は記載されていない。このように、各動物名詞がその性質やイメージにより後続する語を選んでいる可能性がある。そこで、4 章と 5 章では、どの動物名詞がどのような後続語をとりえるのか、どの程度許容されるのかを調査していく。

4. インターネット検索サイト Google による動物名詞を用いた拡大形検索

4.1. 調査方法

3 章で拡大形と判断した語の、[動物名詞]と[基礎語]を全て組み換えたパターン (動物名詞 9 種 × 基礎語 30 語⁶ (名詞 14 語 + 形容詞 16 語) = 合計 270 語) をインターネット検索サイト Google⁷で検索した。それらがどの程度使用されているか、ヒット件数から判断する (2006 年 11 月 1 日実施)。

4.2. 調査結果と考察

調査結果を、基礎語の品詞別にそれぞれ示す (本稿では紙面の都合上形容詞のみを載せた)。各数字は各拡大形のヒット件数、網掛けになっている箇所の単語は国松編 (1998) に記載されているものである。

⁶ schnell (速い) のみ筆者が独自に加えた基礎語である。他にも Google では heiß (暑い)、weise (賢い)、schön (きれいな) などの基礎語でも検索したが、schnell 以外では各動物名詞の間でヒット件数が少なく、かつ差異があまりみられなかった。ここでは、名詞の Geschwindigkeit (速度) と Tempo (スピード) とも比較でき、かつ各動物名詞間でヒット件数に差の見られる schnell のみ挙げておく。また、Affenschwein (すごい幸運) の基礎語 schwein は、口語で「幸運」という意味であるが、それ自体がもともと動物名詞 (ぶた) なので、今回調査からは省いた。

⁷ Google はインターネット上の文章を検索対象に用いるという性質上、ドイツ語母語話者以外の文章も対象に入ってしまうというリスクはあるが、そのリスクを踏まえた上で今回はあくまでも傾向を見るという目的のために使用することとする。

表 2 : Google を用いた拡大形検索結果 (形容詞)

	sau- ぶた	bären- 熊	hunde- 犬	affen- 猿	Schweine -ぶた	löwen- ライオン	wolfs- おおかみ	pferde- 馬	maus- ねずみ
kalt 寒い	10400	35	5110	1310	33000	0	1	1	1
gut 良い	189000	23	1680	745	2820	130	47	1900	7
schlecht 悪い	31700	7	233	5	83	0	0	0	1
müde 疲れた・眠い	13600	151	133000	11	1230	4	37	36	1
geil 素敵な・カッコいい	382000	49	181	126000	23300	2	10	50	9
stark 強い・素敵な	116000	261000	75	21400	558	10100	99	527	723
schnell 速い	102000	5	29	1620	1080	7	0	3	150
miserabel 惨めな	1380	0	33000	0	0	0	1	0	0
elend 惨めな・不幸な	819	0	31000	0	259	0	1	92	1
tot 死んだ・枯れた	21200	45	131	28	15	1	2520	14	1350
blöd ばかげた	106000	2	65	134	74	0	1	1	0
dumm ばかな	55700	0	45	17	143	0	0	0	9
grob 粗い・がさつな	1510	0	7	0	1	0	11	0	0
ruhig 落ち着いた	70	22	0	0	4	0	0	0	0
frech 生意気な	4450	2	0	2	16	0	1	0	0
jung 若い	1010	24	53	51	22	0	47	3	16
合計	1036839	261365	204609	151323	62605	10244	2776	2627	2268

調査の結果、以下のようなことがわかった。

- 必ずしもヒット件数の多いものが辞書に載っているわけではなく、辞書に記載されていないにもかかわらず多く使用されているものも見つかった。
- [動物名詞]+[名詞]では、辞書に記述されている語とヒット件数の多い語の重なりは大きい。一方[動物名詞]+[形容詞]ではそれほど重なりは大きくない。
- 辞書に記述のないものでヒット件数が多いものが特に sau- (ぶた) で多く見られる。基礎語となる形容詞のバリエーションも豊富なことから sau- は生産性が高い。
- affen- (猿) と bären- (熊) は、共にヒット件数が多いが、どちらも後続する基礎語に偏りがかなりあり、少量の相性の良い基礎語がヒット件数を急増させている。
- pferde- (馬)、maus- (ねずみ)、wolfs- (おおかみ)、löwen- (ライオン)、は生産性が低いようだが、これらの動物名詞にも、ヒット件数の高い拡大形がいくつか見られた。
- 品詞別に表の合計ヒット数を比較してみると、形容詞の方がヒット件数が明らかに高く、より多く拡大形が使用されていることがいえる。

諺・慣用表現は、各動物名詞のイメージを映し出すが、これが現在使用されている拡大形（許容度の低い拡大形もあるが）と関連が見られたのは非常に興味深い。その一方で動物名詞 *Sau*（ぶた）は諺・慣用表現を持たないため、関連性は明らかにすることができず、また *Bär*（熊）については関連性を見つけることができなかった。

6.2. 動物名詞の生産性について

動物名詞 *hunde-*（犬）*affen-*（猿）*sau-*（ぶた）*bären-*（熊）*schweine-*（ぶた）においては、諺・慣用表現と意味的関連のありそうにない拡大形が多く見られた。これらの動物名詞は本来動物名詞の持つイメージが薄れ、様々な形容詞を拡大しうる機能があると筆者は考える。そして意味的関連のない基礎語を拡大しうるということはそれだけ生産性が高いということである。さらに、このような、形容詞を中心とした多くの語を拡大できるという機能は、動物名詞自体に強いインパクトがなくては成り立たないことである。そして多くの場合、それだけその動物名詞が否定的なイメージを持っているのであると考えられる。これに対して、*pferde-*（馬）は、否定的な意味を持たないと Itoh (2005) が述べているが、やはり3章、4章、5章の結果から、*pferde-*（馬）の生産性が低いことが確認できた。

7. おわりに

本稿では、これまでにあまり扱われてこなかったドイツ語の動物名詞について、拡大辞的用法という観点から4つの調査を行い、それぞれ考察を行った。その結果、①動物名詞には拡大辞的な働きを持つものと持たないものがあるということ、②辞書に表記されている拡大形が必ずしも実際使用されているわけではなく、辞書に表記されていないものも使用されているということ、③拡大辞的な働きを持つ動物名詞には、そのイメージや関連性に基づいて基礎語を限定しているものがあるが、比較的生产性は低いということ、④厭わしさ、否定的なイメージの強い動物名詞ほど生産性が高く、もともと動物名詞の持っていたイメージが薄れてしまうため、様々な形容詞を拡大しうるということ、を明らかにすることができた。

しかし、いくつかの反省点もあるのでここで述べておきたい。まず、3章で独和辞典から拡大形を収集する際に、比喩的な慣用表現と拡大形との区別が意味の面で曖昧になってしまったことが挙げられる。調査段階でもこの点には留意し、慎重に行ったのだが明確な線引きをすることは困難であった。そして、5章のアンケート調査では、コンサルタントから、使用に年代差があると指摘を受けたにもかかわらず、それがうまくデータに出せなかった。これは、年代差を出せるだけのコンサルタントにあたっていけなかったことに問題があったので、今後はこの点に関して明らかにすることを課題としたい。加えて、今回はドイツ出身のコンサルタントのみに協力を依頼したが、コンサルタントから、オーストリアとドイツの間でも動物名詞に対するイメージにゆれがあるという情報が得られたので、これも今後の課題としたい。

参考文献

- 岩崎英二郎・早川東三・子安美知子他 (1971) 『ドイツ基本語辞典』 東京：白水社
- 川島淳夫編 (1994) 『ドイツ言語学辞典』 東京：紀伊国屋書店
- 岸本あゆみ (2003) 「ことわざ再考—ことわざから読み取る動物の多面性—」 立教大学ドイツ文学科研究室編 『立教大学ドイツ文学科論集 ASPEKT 36 号』 立教大学ドイツ文学科研究室
- 国立国語研究所 (1986) 『日独仏西基本語彙対照表』 東京：秀英出版
- 国松孝二編 (1998) 『小学館 独和大辞典〔第2版〕』 東京：小学館
- 野入逸彦・太城桂子 (2002) 『<ドイツ語文法シリーズ> 7 語彙・造語』 東京：大学書林
- 尾関英正 (2004) 「諺にみるドイツ人の動物観」 『亜細亜大学学術文化紀要』 第五号 亜細亜大学総合学術文化学会

- Drosdowski, G. ed. (1995) *Duden: in 12 Bänden. Bd. 4. Duden. Grammatik der deutschen Gegenwartssprache.* (5th reprinted edition) Mannheim; Leipzig; Wien; Zürich: Dudenverlag
- Drosdowski, G. and W. Scholze-Stubenrecht ed. (1998) *Duden: in 12 Bänden. Bd. 11. Duden, Redewendungen und sprichwörtliche Redensarten.* Mannheim; Leipzig; Wien; Zürich: Dudenverlag
- Erben, J. (1982) *Einführung in die deutsche Wortbildungslehre.* Berlin: Erich Schmidt
- Fleischer, W. (1983) *Wortbildung der deutschen Gegenwartssprache.* Tübingen: Niemeyer
- Itoh, M. (2005) *Deutsche und japanische Phraseologismen im Vergleich* Tübingen: Julius groos Verlag
- Kunkel-Razum, K. and F. Münzberg ed. (2005) *Duden: in 12 Bänden. Bd. 4. Duden. Grammatik der deutschen Gegenwartssprache.* (7th reprinted edition) Mannheim; Leipzig; Wien; Zürich: Dudenverlag
- Motsch, W. (1999) *Deutsche Wortbildung in Grundzügen.* Berlin • New York: de Gruyter

ウェブ資料

- Google <http://www.google.co.jp> (2006/11/1)

アイヌ語北海道諸方言における神謡の人称

山田洋平

(東アジア課程モンゴル語専攻)

キーワード：アイヌ語、神謡、人称、2 次的なサケへ

0. はじめに

卒業論文ではアイヌ語¹の神謡²を対象に、人称の使用の実態、特に主人公を指示する人称を調べた。神謡と呼ばれる物語のジャンルの中で、沙流方言においては日常使用される 1 人称単数 ku= やその他の文学で用いられる 4 人称 a=, =an でなく、1 人称複数 ci=, =as が用いられたりするといった特殊な傾向があることが知られている(中川 1997)。そこで本稿では沙流方言のみならず北海道各地の神謡の中で①どのような人称を用いて主人公を指示しているか、②2 種類の人称が混用される場合どこで人称が切り替わるのか、揺れが起こるのか、その要因は何か、といった点を考察し「神謡の人称」を再検討する。

1. 先行研究

本節では 1.1. でアイヌ語主格人称接辞の体系を概観した上で 1.2. において本稿で主要なテーマとなる神謡の人称に関する記述に触れ、1.3. で先行研究の問題点を指摘する。

1.1. 人称接辞

アイヌ語の動詞は人称標示が必須であり、文中の主語・目的語に応じて動詞に人称接辞が付されることで示される(表 1)。人称接辞は名詞や一部の副詞にも接続し、所有者・所属などを示す人称形を作ることがある。

4 人称⁴とは現在の沙流方言において、①一般人称、②受動文の行為の起点、③包括的 1 人称複数、④2 人称敬称「あなた様」、⑤引用文中の 1 人称、といった用法があるとされる(田村 1997)。アイヌ文学は多くこの 4 人称の引用文中の 1 人称という用法で語られる。

表 1：沙流方言における人称接辞³

	単数	複数
1 人称	k(u)=	c(i)=, =as
2 人称	e=	eci=
3 人称	φ=	φ=
4 人称	a=, =an	

¹ アイヌ語はかつて本州東北地方の北半分・樺太南部・千島・北海道に分布した系統不明の言語である(田村 1988)。アイヌ語の表記法は研究者によりまちまちであるが、本稿では主に中川(2006)を参考とし、カタカナ表記を併記せず、人称接辞と語幹の間は「=」で繋いだ。

また、本稿執筆にあたり千葉大学の中川裕氏、及び志賀雪湖氏からアイヌ語に関して多く御指導賜った。両氏にはこの場をお借りして感謝の意を表したい。

² 神謡とはアイヌの口承文芸の一種である。歌謡文学で、一定の節ごとにサケへとと呼ばれるリフレインを挿入する。アイヌ文学の特徴としては 1 人称叙述であるものが多いという点があげられる。

³ 目的語標示が無い時の、主語に対応する人称接辞のみで現れた場合を示した。また表中の()内はアクセントの無い母音の前で脱落すること(沙流方言以外では脱落しないことが多い)を、二つあるものは前者が他動詞(及びコピュラや名詞など)に接頭し後者が自動詞に接尾することをそれぞれ示している。

⁴ 中川(2001)の用語。なお「4 人称」という術語は定義の定まった語ではなく、亀井・河野・千野(1996)「4 人称」では個別言語学的に「包括的 1 人称複数」や「再帰代名詞」「指示転換」など様々なものに「4 人称」という名称が使用されているとしている。

1.2. 神謡の人称

田村編(2001:25)収録の神謡に付された註には次のような記述が見られる。

神謡では本来、人間の叙事詩や昔話などと違って、神の自叙に、引用文の言い方ではなく、直接本人が言う 1 人称複数形を使うものであったらしい。しかし((W))「筆者註・ワテケさん(和名:鳩沢ふじのこと)」の神謡では 1 人称複数形の代わりに、引用文中の中で「私」を表す、不定人称「筆者註・4 人称のこと」の形が使われているところも多い。これは叙事詩や昔話や日常会話の引用文と同じ形である。

すなわち、本来「神謡：1 人称複数⇔その他文学：4 人称」という様に人称の使い方が特殊な神謡も、結局 4 人称で語られることもあると述べられている。次の資料記号 sh6 の冒頭部分を見ると 1 人称複数と 4 人称が混用されていることがわかる。

例 1

saranip ci=eotarkin kane pet sam ta sap=an koonno...

サラニッ 1PL=揺らす ~ながら 川 のそば に 下る=4. と

(sh6;2-5,-)⁵

「サラニプを揺らしながら私が川のそばに下りますと」

これは物語冒頭部分であり、主人公以外の登場人物は確認されず、動詞 eotarkin と動詞 sap の主語が異なるとは考えにくい。この例のように冒頭の動詞についてのみ 1 人称複数を用いられ以降 4 人称になるという神謡の例は他にも多く見られる。このほか物語中盤で人称が変化するものや、1 人称複数になったり 4 人称になったりと揺れるものも多く存在する。

1 人称複数と 4 人称の使い分けについて中川(1997:216-228)ではもともと 1 人称複数で語られていたものが、他の文学の類推・混同から一部 4 人称で語られるようになったのが現在の形式であるとしている。一つの神謡の中で使用される人称が 1 人称複数から 4 人称に替わる現象について、中川(1997:225-227)では「場面転換の句からアの人称「筆者註：4 人称のこと」に変わってしま」う、「引用文中になるととたんにぐらつき出す」と指摘している。

1.3. 問題点

人称の替わる根拠に関する記述は、研究者が多くの資料に触れてきたことによる内省的な感覚に基づくものであり、例示され統計的に導き出されたものではない。本稿では、神謡での人称の使用実態を統計的にデータ化し考察する。

2. 研究方法

前項 1.3. を踏まえ、本稿での研究方法について述べる。2.1. では調査方法と考察のポイ

⁵ 例文の後ろのデータ元情報(A;B,C)はそれぞれ、A 例文の出典、B その行数、C サケヘを示す。例：(wa2-1;1-5,>apiskatu apiska)=田村(2002)『アイヌ語沙流方言の音声資料 2—近藤鏡二郎の録音テープに遺されたワテケさんの神謡Ⅱ』採録「kamuycikap」という神謡(記号は巻末に記した)の 1 行目から 5 行目を引用、サケヘは apiskatu apiska である。なお、このページの例 1・2 はともに元々サケヘを欠いており、それを「-」で示した。

ントについて述べ、2.2. で人称抽出の判断基準を示した。

2.1. 調査方法

資料は久保寺(1977)に従い、形式の面から神謡であると判断され収録書誌に神謡として紹介されていることを条件に選定した 123 話(総行数 30994)である。これらの資料について使用されている人称標示の種類を抽出、使用数および出現位置を見た。抽出は 2.2. に従い手作業で行った。4 人称は引用文中では地の文と人称の使われ方が異なる可能性があるため本稿では基本的に地の文を考察の対象としている。考察のポイントとした点は次の通り。

A・どのような人称が用いられるか(主人公は 1 人称複数か 4 人称か)。

B・異なる人称が混在する場合、人称が切り替わる、または揺れる条件は何か。

まず A について明らかにした上で人称が混在する場合を取り出す。B については先行研究で見た「場面転換」「引用文」といった条件が妥当か、また他の条件がないか考察する。

2.2. 判断基準

本稿では主として主人公を指示する地の文における人称の様相を見るため、同じ 4 人称の中でも、次の基準に従い田村(1988)の「引用の 1 人称」および「包括的 1 人称複数」のみ抽出する。4 人称が指示する対象は大雑把に分類して「主語が明確である(その発話の話者、ないし主人公)」または「主語が不明確である(その発話の話者でも主人公でもない)」の 2 パターンが考えられる。前者は田村(1988)でいう「引用の 1 人称」「包括的 1 人称複数」「2 人称敬称」に、後者が「不定人称」におよそ相当する。

まず地の文において指示内容が不明確で文中に説明のない場合は「不定人称」、指示内容が明確でも動作主の標識 or wa 「～から」で示されている場合は「受動文の動作主」を表すものとして除外した。除外されずに残った 4 人称は「引用の 1 人称」および「包括的 1 人称複数」であるとして考察の対象となる(図 1)。その両者の区別が必要な場合もその都度文脈から判断する。なお、2 人称敬称と考えられる例は今回見られなかった。

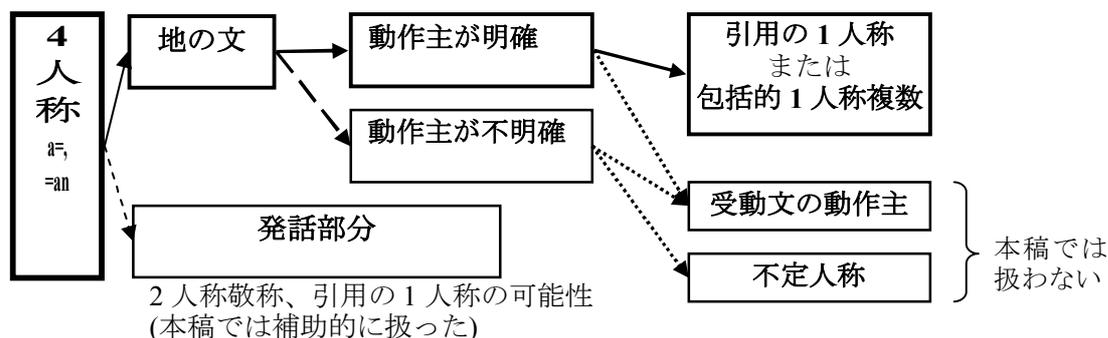


図 1: 4 人称の用法認定チャート(筆者作成)

3. 考察

3.1. 人称の現れ方

本稿で扱う資料では、人称の使用に関して大雑把に「人称が一貫している」「人称が途中

で切り替わっている」「2種類の人称が揺れている」といったものが見られた。このうちここでは「人称が一貫している」か否か、一貫していない場合その人称の分布はどのように

なっているかを図2に、各例の典型を図3に示した。

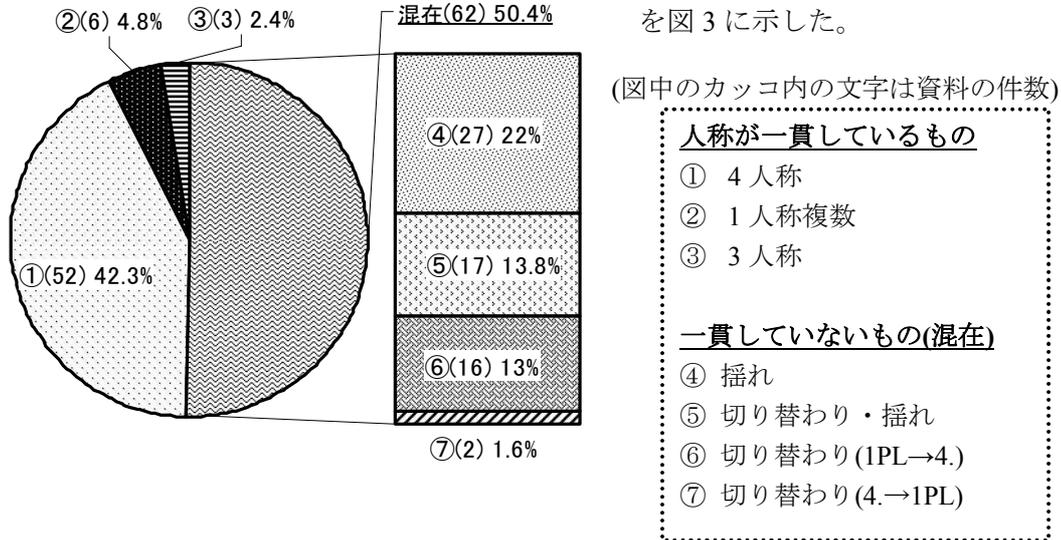


図2：人稱の現れ方

※以下は人稱接辭に関して1人稱複數に“/”、4人稱に“.”を用いて出現度數を示したものである。
括弧内は(1人稱複數の出現數:4人稱の出現數)の比を示し、1人稱複數の出現率を百分率で示した。

①一貫して4人稱を用いるもの

wa2-1 (0:21) 0

..... ¥¥

②一貫して1人稱複數を用いるもの

ni2(6:0) 100

/////

④揺れ(人稱が一時的に替わるもの)

oy2-8 (39:5) 88.6

////////////////////.////////////////////.////.////.////

⑤切り替わり・揺れ(1人稱複數から4人稱に切り替わっているが揺れも見られるもの)

ka2-1 (9:25) 26.5

////.////.////.////.....

⑥切り替わり(1人稱複數から4人稱に替わるもの)

oy1-15 (12:12) 50

////////////////////.....

⑦切り替わり(4人稱から1人稱複數に替わるもの)

oy3-18 (8:7) 53.3

.....////////////////

図3：人稱分布ダイアグラム 各分類の典型

これらの図からわかる様に、従来沙流方言において一般的とされた1人稱複數のみによ

って語られる資料(②)は今回対象とした全ての方言で少数であり、他の文学同様に4人称が用いられるものが多い。多数を占めた「混在」について、ここでは「神謡のある地点で人称が替わり、それ以降は最後まで同じ人称が用いられるもの」を切り替わりがあると表現し、「一時的に別の人称が現れても再度先の人称に戻ることがあるもの」を揺れがあると表現する。いずれも4人称の使用率が多く、1人称複数から4人称へ切り替わる例が多数を占める。⑤は揺れが起きながらも1人称複数で始まり4人称で終わるものを示し、その逆の例は見られなかった。

3.2. 以下では④～⑦の1人称複数と4人称が混在するものについてさらに詳細に見ていく。上記のように大雑把に分類した上で、切り替わるものに「神謡冒頭で切り替わるもの」「神謡中盤以降で切り替わるもの」があること、「神謡中盤以降で切り替わるもの」と揺れが見られるものはどのような条件で人称が替わるのかを検討する。

3.2. 人称が替わる条件

3.2.1. 先行研究で言及されたパターン

本節では人称がどのように替わるのか、今回対象とした資料のうち先行研究で触れられた「引用文」について実際得られたデータを示す。

計7例見受けられた。いずれも1人称複数が引用文前後で4人称になるものであるが、引用文前後で切り替わるものと揺れるだけのものがあった。さらに引用文直後で一度1人称複数が出現した上でそれ以降4人称に切り替わる例や、引用文直前で先に4人称に切り替わっている例も分類上ここに含めた。

例2

inkar=as akus samayunkur > iwan tewna iwan mukar ukose hine arki hine > ci=kor
 見る=1PL すると NAME 6 手斧 6 鉞 3.=背負う そして 3.=来る そして 1PL=持つ
sunku sunku corpok ta arki hine ene itak hi > toon wen cikap sirun cikap e=kor
 エゾマツ-RED. 下 に 3.=来る そして この 言葉 この 悪い鳥 腐った鳥 2.=持つ
ponpe i=korpare yan > sake ani inaw ani a=etke yakne > e=eyaykamuyneru kusu ne
 子供 4.=与える 命令 酒 で イナウ で 4.=遣す から 2.=崇められる から で
ruwe ne na sekor itak kor > a=kor sunku sunku turasi hemespa wa arki hi kusu > sunku
 ある よ と 3.=言う すると 4.=持つ エゾマツ-RED. 上 3.=上る て 3.=来る から エゾマツ
kitay wa a=yupkemawe a=ranaranke > ...
 上 から 4.=強い-風 4.=RED.-下ろす
 (ka2-3;16-50, >=tunoyake renoyake kutumke kamuyke kamuy cikappo humhum)

「(人の声がしたので)私が見るとサマユンクルという者、六本の手斧・六本の鉞を束ねて背負ってやってきた。私のエゾマツの下へ来てから言った言葉は「この悪い鳥、腐った鳥、お前の子供を俺にすれば酒とかイナウとともに遣してやろう。それによって神として崇められることになる」。言いながら私のエゾマツに上ってきたので、激しい風を下に吹いた」

例文中の下線部は引用部分と判断される部分であるが、その前後で人称が替わっていることがわかる。この部分以降、最後まで4人称が用いられた。他に、引用文の直後は1人称複数の一つ現れているがその次から4人称に切り替わったものや引用文の直前から切り替わる例もあった。中川(1997)は「引用文中になると」と記しているが、引用文前後でと言

い直すのが良いだろう。

3.2.2. 先行研究で言及されていないパターン

先行研究には無いが、人称の切り替わる条件として可能性のある例として、「2 次的なサケへ」の直後で変化するというものと「冒頭部のみ 1 人称複数」という例を挙げる。この他、語による偏りも人称の揺れに関わる可能性が示唆されたが、本稿では割愛した。

3.2.2.1. 「2 次的なサケへ」

「2 次的なサケへ」とは中川(1997:70-76)の用語で、神自身の鳴き声などを表すとしながら意味が不明なものが多く節ごとに挿入される一般のサケへと違い、意味があり文中で主人公のセリフとして繰り返し出てくる決まり文句のような句である。「2 次的なサケへ」の直後に現れる例が 4 例見受けられた。例こそ少ないが、この「2 次的なサケへ」の文法的位置付けや人称に与える効果を指摘できる可能性も考慮して同様の例を探す必要があるだろう。

例 3

irara kane okay pe a=nukar konno a=tovkopakasnu kane > suma rimrim > ota rimrim >
 悪さして 3=いる もの 4=見る と 4=酷くこらしめる して 石 ? 砂 ?

oka=as ki na >

いる=1PL する よ

(sh12;82-87,>=cawwakca)

「私は悪さをしている者を見つけるとひどく懲らしめながら暮らしていた。」

例 4

ekattar utar > terke siri > an=nukar ki wa > keytum or ta > yayrayke=an na > pet waysaysay

子供 たち 3=跳ねる 様子 4=見る する て 心 で 感謝する=4 よ 川 ? ? ?

> yuk okay yuk okay > cep okay cep okay > okay=as ki ko > okkaypo uteri >

鹿 3=いる 鹿 3=いる 魚 3=いる 魚 3=いる いる=1PL すると 男の子 たち

inawni anpa wa...

イノウ-木 3=持ってくる て

(ku2;148-158,>=karapitto karapitto karapitto)

「子供たちが跳ね回っているのを見て私は感謝をしていますと、男の子たちはイノウ(儀式に用いる木幣)に使う木を持ってきて…」

例 3 の囲み suma rimrim > ota rimrim > は日本語の「のしのし」に相当すると思われる。本来のサケへであると考えられる cawwakca は語義不明であり、たいてい節ごとに挿入されている。「2 次的なサケへ」がこれと共通するのは文脈と関係なく挿入されている点、異なる点としては出現が少なく、若干ながら意味も解釈されうる点である⁶。例 4 では 2 種の「2 次的なサケへ」が用いられていると考えられる。うち pet waysaysay は意味不明であり文脈に関係なく挿入される。他方 yuk okay yuk okay > cep okay cep okay > 「鹿がいる、鹿がいる 魚がいる、魚がいる」はところにより hawki=as 「といいながら」が後続することもあり、文脈から必ずしも独立しているとは言い切れないが、似た文句が繰り返され上記のように唐突に現われることもあることから「2 次的なサケへ」と判断した。

⁶ 意味は必ずしも不明ではない。サケへの起源は主人公である動物の鳴き声や足音であるとも言われる。

上記はほとんどが4人称で語られ、「2 次的なサケへ」の直後に1人称複数が出現した。数は少なく、全体の前半部のみで見られただけに過ぎないが、その他の部分では1人称複数の出現は見られなかった。

「2 次的なサケへ」が人称を替える機能がある可能性から、「2 次的なサケへ」が引用文に順ずるものであるといえるかもしれない。切り替わる例が無く、引用文前後の切り替わり・揺れより出現頻度が少ないことから、「準引用文」といえるような存在であるともいい得よう。しかし引用文前後では人称は1人称複数から4人称への移行しか見受けられなかったが、「2 次的なサケへ」前後では逆の切り替わり・揺れの例しかないことも考慮に入れるべきである。

3.2.2.2. 冒頭部のみ1人称複数

冒頭部では1人称複数が数回用いられるものの、すぐ4人称に切り替わってしまうという例は多いが、そのことを記述した先行研究は無かった。切り替わり(図2の⑥)に該当する16例について1人称複数の出現数を見ると(図4)、出現数1~3回に11例と集中、2回が最も多かった。それ以上では5,6,7回と続くが、全体の割合から言って冒頭であるか否か客観的な判断は容易ではない。全体の長さが神謡によってまちまちであるため、全体に対する割合は絶対的な基準としては扱えない。「冒頭部」の定義が明確な基準を設けられないため、本稿では「冒頭部で人称が切り替わりやすい」と述べるに留めることとする。

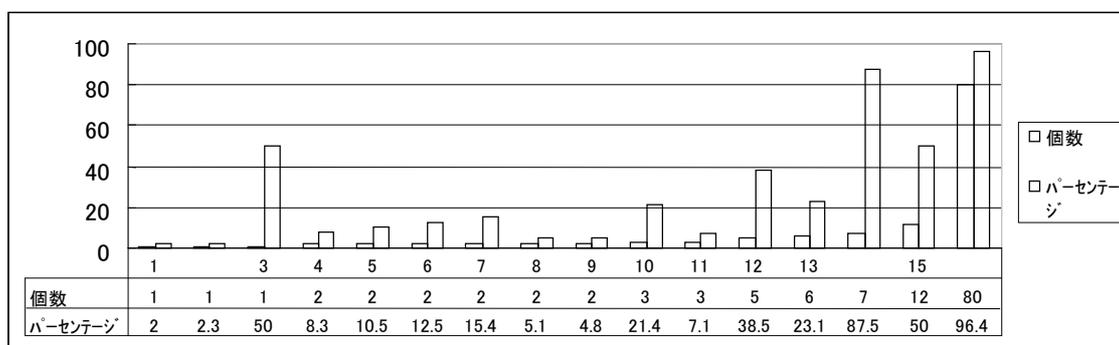


図4：人称の切り替わり位置(冒頭部で1人称複数の使用される個数・パーセンテージ)

4. おわりに

これまでに指摘されていない人称の切り替わり位置として「2 次的なサケへ」がある可能性が示された。今後神謡における「2 次的なサケへ」の機能についてさらに調査する必要があるだろう。「引用文」前後の揺れや「2 次的なサケへ」直後の揺れも永続的なものではなく1~3回で4人称に戻ってしまうものもあり、他の切り替わりのパターンとも関連させて「冒頭部」での切り替わりパターンを考える必要がある。その他の要因に関しては今回深く触れることのできなかつた「動詞の単複、種類」といった観点からの考察も視野に入れ

る。今後は書き起こされていない音声資料なども研究対象として「神謡の人称」の考察を深め、4人称の用法を方言ごとにより詳細に記述していく必要がある。

「2 次的なサケへ」の例などに見るように、神謡の研究によってアイヌ語の古い形式に迫れる可能性も視野に神謡の言語学的研究を進めることもできるのではなかろうか。

[記号一覧]

- | | | | | |
|---------|---------|----------|---------|--------|
| 1. 1 人称 | 3. 3 人称 | NEG. 否定辞 | PL. 複数 | SG. 単数 |
| 2. 2 人称 | 4. 4 人称 | PAS. 受動態 | RED. 重複 | |

【主な参考文献】

- 奥田統己編(1999)『アイヌ語静内方言文脈つき語彙集(CD-ROMつき)』札幌学院大学
亀井孝・河野六郎・千野栄一(1996)「4 人称」『言語学大辞典 術語編』1379 東京:三省堂
久保寺逸彦(1977)『アイヌの文学』東京:岩波書店
田村すゞ子(1988)「アイヌ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典第一巻』6-94
東京:三省堂
_____ (1998)『アイヌ語沙流方言辞典』(再版)東京:草風館
_____ 編(2001)『アイヌ語沙流方言の音声資料 1 — 近藤鏡二郎の録音テープに遺されたワテケさんの神謡』環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 A2-008 文部科学省特定領域研究
中川裕(1997)『アイヌの物語世界』東京:平凡社
_____ (2001)「アイヌ語」奥田統己『アイヌ民族に関する指導資料』北海道:財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構
_____ (2006)「アイヌ人によるアイヌ語表記への取り組み」『表記の習慣のない言語の表記』東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所刊

【主な調査資料】<>は本文中の資料記号

- 萱野茂(1998)『萱野茂のアイヌ神話集成 2 カムイユカ_ラ編 II』ビクターエンタテイメント株式会社 <ka2-1, ka2-3>
静内町教育委員会(1995)『静内地方の伝承 V — 織田ステノの口承文芸(5) —』静内町文化財調査報告 <sh6, sh12>
田村すゞ子(1988)『アイヌ語音声資料 5 -二風谷の昔話と歌謡・神謡-』東京:早稲田大学語学教育研究所 <ni2>
_____ 編(2002)『アイヌ語沙流方言の音声資料 2 — 近藤鏡二郎の録音テープに遺されたワテケさんの神謡 II』環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究大阪学院大学情報学部 <wa2-1>
北海道教育委員会(1993)『八重九郎の伝承』アイヌ民俗文化財口承文芸シリーズ XI <ku2>
北海道教育庁生涯学習部文化課編(1990)『アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ 3 オイナ(神々の物語)1』北海道教育委員会 <oy1-15>
_____ (1992)『アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ 5 オイナ(神々の物語)2』北海道教育委員会 <oy2-8>
_____ (1994)『アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ 7 オイナ(神々の物語)3』北海道教育委員会 <oy3-18>

漫才におけるおかしみの構造の言語学的分類

山本 貴也

(東アジア課程中国語専攻)

0. はじめに

漫才は、落語の流れを汲む日本の代表的な話芸の一種である。漫才についての言語学的研究は、金水 (1992) 以降いくつかなされている。本稿では、それらの研究を整理し、実際の漫才演目を分析することで、演者が聴衆に笑いを伝える上でどのような工夫をしているかを示し、漫才における笑いの構造の分類を試みる¹。

1. 先行研究

1.1. 金水 (1992)

金水 (1992) は、漫才では、グライス (1989) の提案した協調の原理²をあえてずらす行為が行われているとしている。金水 (1992) はさらに、そのずらし方に何らかの制限がある事に言及している。

「きのうはえらい雨でしたね」

「これはコップです」

といった会話を考えてみる。これは、漫才にならないわけでありませぬ。つまり漫才の会話は、全然関係のないことをいうのではなくて、一見相手の言うことをまともうけているように見えながら、しかし実は変であるというものでなければならない。つまり、どこかで必ずつながっているですけども、そのつながり方が普通でない、正常なやりとりからずれている。すなわちつながりからずれる、これが漫才のボケの標準的なあり方ではないかと考えるわけです。

(金水(1992:83-84))

1.2. 関 (2002)

関 (2002) は、金水 (1992) の指摘する「つながり」を考慮し「軸」という概念を提案している。そして、漫才におけるズレは、その軸を中心に既成概念が獲得概念へと変貌する事だと述べている。さらに、おかしみの構造を聴衆に伝える言語操作に、伝達的操作と展開的操作の二種類を設けている。

1.2.1. 伝達的操作

伝達的操作は、伝達内容の言語化の過程に関わる操作であり、他の発話から受ける拘束力が弱く、比較的独立したひとつの言語表現が笑いを喚起する。音・語・意味・文法などのレベルで軸転回が起動して、関連性を持たせる構造である。例えば、「案ずるより生むが

¹本稿中、漫才演者の専門用語であるフリ、ボケ、ツッコミは、安部 (2004) による定義を使用する。

フリ：ボケの先行部分でおかしみを効果的に伝達する言語操作

ボケ：おかしみの構造図を完成させる表現

ツッコミ：ボケの後続部分でおかしみを効果的に伝達する言語操作

²会話において話者が遵守するものと期待される大まかな一般原理。

易し」を「音」軸によって変貌させると、「杏より梅が安し」が現れるとしている。

・意味を転回軸にした例

転回軸	既成概念	獲得概念
意味	よし行くで	レディーゴーじゃ

(関 (2002:141) より一部改変)

・ジャンルを転回軸にした例
(不景気の原因を聞かれて)

転回軸	既成概念	獲得概念
ジャンル	消費税の値上げによる(消費者の買い渋り)	消費税の値上げによる地球の温暖化

(関 (2002:141) より一部改変)

1.2.2. 展開的操作

質問には返答、挨拶には挨拶を返すのが普通であり、会話への割り込みや発話権利の横取りは好ましくないが、それをあえて行う言語操作が展開的操作である。展開的操作においては、音、語、意味、ジャンル、事実などの転回軸は存在しない。

例) A: なんで不景気になったかわかるか?

B: ああ、そうだ、そりゃそうだな。

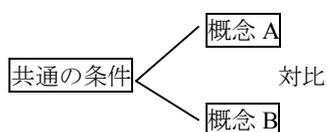
(関(2002:142)より抜粋)

上記の例では、Aの質問に対し、Bは返答を行っていない。このような構造が、展開的操作である。

1.3. 安部 (2004)

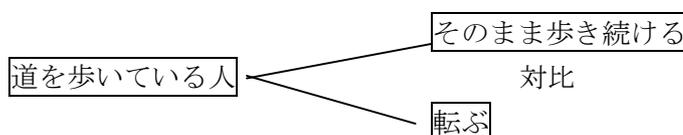
安部 (2004) では、「おかしみの構造図」を提案し、笑いの構造は以下の図で解説できるとしている。

「おかしみの構造図」



(安部(2004:105)より抜粋)

これは、共通の条件から連想される「概念 A」と、対比される「概念 B」が提示されることによって、笑いが生じるという事を示す図である。例えば、「道を歩いている人が転ぶ」という事におかしみを感じるのは、



という図で表わすことができる。これは、歩いている人は「そのまま歩き続ける」という概念 A と対比する形で、「転ぶ」という予想外の概念 B が提示されることによって、笑いが生じるということを示す。

1.4. 榎谷 (2006)

榎谷 (2006) は、安部 (2004) を基に、漫才におけるフリ、ボケ、ツッコミの機能を検証し、「おかしみの構造図」を形成する上でのツッコミの役割を示している。榎谷(2006)は、漫才におけるフリ、ボケ、ツッコミの三要素は全て、聴衆に「おかしみの構造図」を伝える役割を果たしていることを調査によって明らかにしている。本研究では、榎谷(2006)を踏まえて、演者の個々の台詞よりも、それらの台詞によって形成されるおかしみの構造に着眼点を置く。

2. 先行研究の考察

関 (2002) による、音、語、意味、ジャンル、事実の 5 つの転回軸は、判断基準が曖昧であり、意味や事実が軸となる場合などは、客観的に判断することが困難である。このことから、音、語、意味、ジャンル、事実という区分を行う基準は実際の漫才演目を分析する上では客観的とは言えない。

3. 研究方法

本稿では、研究に用いた資料と調査方法を提示する。

3.1. 資料

研究対象とする漫才資料は、年に一度テレビ朝日系列で生放送されている『オートバックス M-1 グランプリ』から、その 2001 年から 2005 年までの 5 年間に演じられた全 57 演目³を使用する。その理由は、これが漫才の全国大会であり、演者たちの技術が総じて高く、また時間制限が設けられており、演目の時間がおよそ同じであるからである。

3.2. 調査

調査は、以下の 1)~3)の手順で行う。

- 1) 研究対象とする漫才全 57 演目の中で、聴衆の笑いが確認できる部分を全て抜き出す。
- 2) 1) の操作で得られた笑いの構造を、以下の表⁴に整理する。

例	ボケ	共通条件	概念 A	概念 B

³ 実際には 60 演目であるが、テツ&トモの演目は歌芸が中心であるため、スピードワゴン、タイムマシン 3 号の演目は、著作権の事情により DVD 化の際音声の一部消されているため、調査対象から除外する。

⁴ これは、安倍 (2004) の提案したおかしみの構造図を元に筆者が作成したものである。

3) 抜き出した笑いの構造を、伝達的操作、展開的操作に分類する。分類基準は、関(2002)を元に、筆者が定めたものを使用する。その分類基準は以下の通りである。

発話権利の横取り、質問への不返答などを行わず、会話運営の形式的規則には反していない→伝達的操作

発話権利の横取り、質問への不返答など、会話運営の形式的規則に反している→展開的操作

4. 調査結果

調査の結果、漫才全 57 演目中、言語操作、言語外操作を含めた笑いの構造総数は 1341 例であった。1341 例中、伝達的操作は 885 例(66.00%)、展開的操作は 294 例(21.92%)、どちらにも属さないその他は 162 例(12.08%)であった。

5. 分類

本稿では、調査によって分類した伝達的操作、展開的操作、その他の操作をさらに下位分類することを試みる。

5.1. 伝達的操作

伝達的操作は、文法形式を転回軸にした操作である。つまり、文法的、表現形式的には何も間違っていない。伝達的操作においては、音、語、ジャンルなどの軸が明確で、概念 A が定まりやすい型と、概念 A を一概に定める事ができない型に分けられる事が分かった。以下、概念 A が定まりやすい型を伝達的操作 α 、概念 A が定まりにくい型を伝達的操作 β とする。伝達的操作 885 例中、伝達的操作 α は 641 例(72.43%)、伝達的操作 β は 244 例(27.57%)であった。

5.1.1. 伝達的操作 α

伝達的操作 α は、音、語、ジャンルなどを転回軸とする独立した構造である。転回軸が独立していて瞬間的であるため、概念 A が比較的定まりやすい。

例	ボケ	共通条件	概念 A	概念 B
フット A15	誤解です	エレベーターガール	5階でございます	誤解でございます

伝達的操作 α はさらに、何を転回軸にするかによっていくつかの種類がある。しかし、関(2002)をもとに明確に線引きを行う事は難しい。従って、今回は、顕著に見られたパターンを提示するに留める。

・音軸型

概念 A と概念 B が同じ、もしくは似通った音という共通点を持つパターン。関(2002)が

提示したものと同一である。

例	ボケ	共通条件	概念 A	概念 B
笑 B9	偽善者	トーマス	機関車	偽善者

この例では、**機関車**と**偽善者**という似通った音を軸にしている。音を転回軸とした例は、合計で 209 例あり、これは伝達的操作 α の 32.61% に相当する。この中で、音軸が単体で使われる例は、半数以下の 102 例であった。これは、単に音だけを転回軸にするのは安易な駄洒落と認識されているからであると考えられる。

・語軸型

概念 A と概念 B が、同義語、類義語、対義語、肯定/否定等の関係になっているパターン。

例	ボケ	共通条件	概念 A	概念 B
ダイ 11	不自由	相方の体型	太っている	体重が不自由

ダイ 11) は、**太っている**という所を、**体重が不自由**と一般的には用いない語を用いる事でズレを生んでいる。ダイ 11) のような例について、関(2003)は意味軸を提案しているが、本研究では同義語という軸を設け、語軸型に含めた。その理由は、関(2002)の意味軸は微妙なニュアンスの違いなどを無視しており、客観的分類ができないからである。語軸型は、伝達的操作 α 全 641 例中 36.97% に当たる 237 例で見られた。

・ジャンル軸型

概念 A と概念 B が、同じジャンルに属するパターン。

例	ボケ	共通条件	概念 A	概念 B
ます C11	コンタクト	横山やすしのネタ	メガネ	コンタクト

ジャンル軸型は、関(2003)が提示したものと同一である。ます C11) は眼の矯正器具というジャンルで共通する**メガネ**と**コンタクト**挙げている。ジャンル軸型は、伝達的操作 α 全 641 例の 49.14% にあたる 315 例に該当し、多く用いられる転回軸である。

・助数詞軸型

助数詞を転回軸に、概念 A と概念 B の間に数値的なズレを生じさせるパターン。(厳密には必ずしも助数詞を軸としているわけでは無いが、概念 A と概念 B に共通する要素をあえて定めると助数詞であるため、助数詞軸型と定義した。)

例	ボケ	共通条件	概念 A	概念 B
アジ 17	222 羽	庭に鶏	2 羽	222 羽

アジ 17) では、本来 **2 羽**いる鶏を、**222 羽**と大幅に増やす事でズレを生んでいる。～羽という助数詞を軸にした例である。

5.1.2. 伝達的操作 β

伝達的操作 β は、文法形式のみを転回軸にする操作である。文脈や聞き手の常識に依存するため、概念 A が 1 つに定まりにくい。

例	ボケ	共通条件	概念 A	概念 B
中 A13	コップの水を飲め	おぼれた子に一言		水を飲め

中 A13) では、おぼれた子に「水を飲め」というのは理不尽であることは、一般常識から推測できるが、概念 A を明確に定めることは難しい。伝達的操作 β は、演者のセンスによって無数に存在するため、一般化は難しい。ここでは、以下にいくつかの例を挙げるに留める。

例	ボケ	共通条件	概念 A	概念 B
フット A16	コーディネートを考えろ	(館内放送で) ~を着たおかあさん		コーディネートを考えろ

(館内放送で呼ばれた後、コーディネートに言及されるのはおかしい)

例	ボケ	共通条件	概念 A	概念 B
チュー A12	鬼退治専門学校	桃太郎		鬼退治専門学校に行く

(桃太郎が、物語中で鬼退治専門学校に行くのはおかしい)

このように、伝達的操作 β は概念 B を提示する事で聴衆に違和感を覚えさせるが、概念 A が定まりにくく、客観的分析が難しい領域であると言える。

5.2. 展開的操作

質問に対し答えない、発話権利の横取り、会話への割り込みなど、会話運営規則に違反している構造は、関 (2002) の展開的操作をそのまま当てはめることができる。しかし、関 (2002) は、展開的操作を下位分類していない。本項では、調査結果を分析し、展開的操作にはどのようなパターンがあるのかをまとめる。展開的操作全 294 例を分析した結果、展開的操作は、大きく 4 つのパターンに分けられる事が分かった。筆者はこれらを不返答型、横取り型、割り込み型、逸脱型と定義する。展開的操作全体(294 例)のうち、逸脱型 129 例(43.10%)、不返答型 99 例(28.45%)、割り込み型 56 例(25.94%)、横取り型 10 例(2.51%)である。

・逸脱型(129 例(43.10%))

本来なら存在しないとみなされるはずの聴衆に向かって話しかける構図を、逸脱型とする。

例	ボケ	共通条件	概念 A	概念 B
おぎ B20	騙されたい	結婚詐欺師になりたい		騙されたい

(結婚詐欺師の役であった演者が、最後に観客に向かって告白する構図。)

・不返答型(99 例(28.45%))

質問や挨拶に対して答えや挨拶を返さない、もしくは相手の発話内容を無視する構図を、不返答型とする。また、漫才特有の約束事である「ボケに対して突っ込む」という原則に反した場合も、不返答型に含めた。

例	ボケ	共通条件	概念 A	概念 B
フット B12	無視	注文する	対応	無視

(客の注文を無視して話を続けるという構図)

・割り込み型(56例(25.94%))

脈絡の無い台詞で相手の発話を中断する構図を、割り込み型とする。

例	ボケ	共通条件	概念 A	概念 B
中 A 8	え!?	ところで		え!?

(相方が話を始めようとしたところを、奇声を発してさえぎる構図。)

・横取り型(10例(2.51%))

本来であれば相手が言うはずである台詞を言ってしまう構図を、横取り型とする。

例	ボケ	共通条件	概念 A	概念 B
キン 15	突っ込みの台詞を取る	何でやねん	ツッコミが言う	ボケが言う

(本来ならツッコミ役が何でやねんと言うところを、ボケた本人が言ってしまうという構図。)

5.3. その他の操作

言語外操作や、あるあるネタのように言語操作であるにも関わらず、伝達的操作、展開的操作のどちらにも属さないと考えられるものを、その他の操作に含めた。

6. 結論

本研究において新たに提案したおかしみの構造の分類を表.1にまとめた。表.1によって、漫才演目における伝達的操作の割合は、66.00%と大半を占めることがわかった。これは、限られた時間でより多くの笑いの構造を聴衆に伝えることを目的とするしゃべくり漫才においては、独立性が強く、瞬間的に笑いを伝えることのできる伝達的操作を多用する工夫がなされている事を示している。

7. おわりに

本研究では、漫才演目の中で使用されている構造にどのようなものがあるかの分類に成功した事で、漫才の客観的分析方法を提案する事ができた。これは初の試みであり、金水(1992)から続く漫才の言語学的研究を一步進める事ができた。今後は本研究を元に、コンビによる差や、それぞれの型の演目内での位置などの個別具体例を研究していきたい。

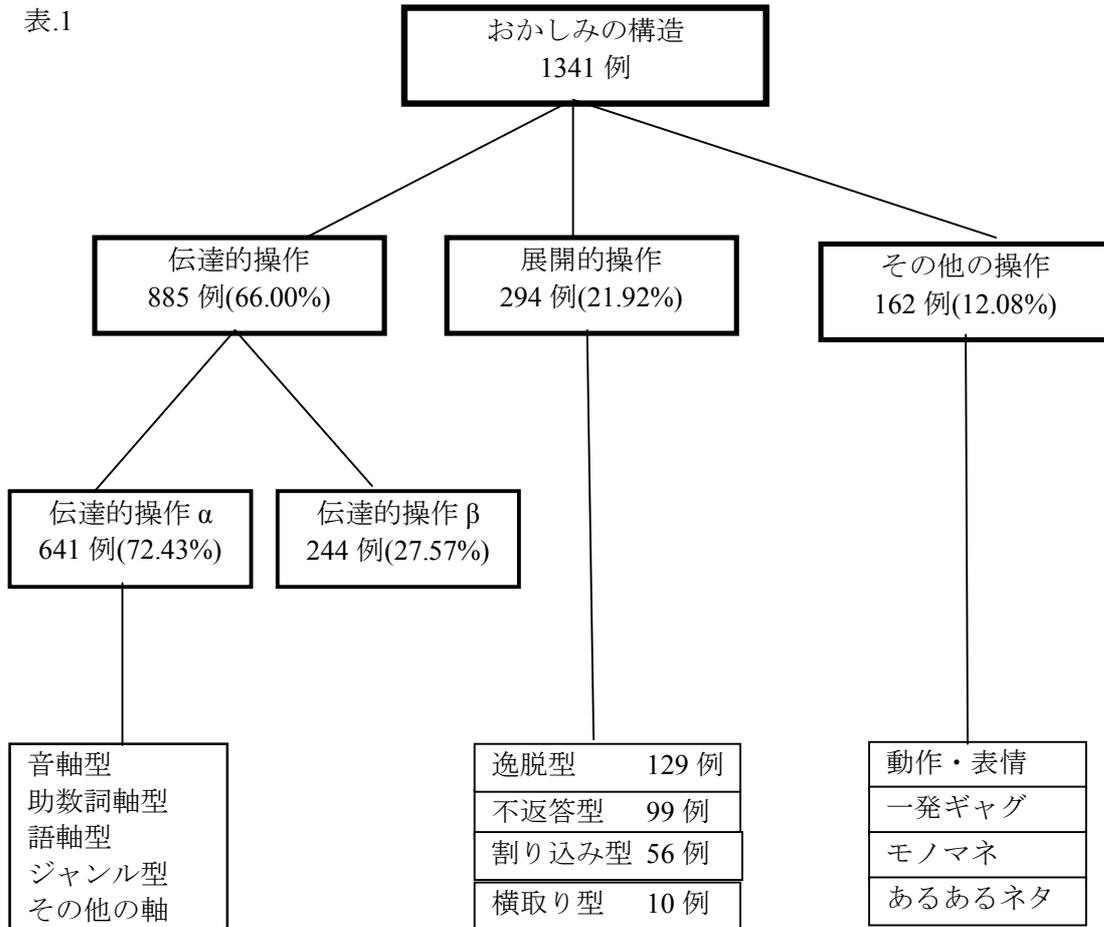
参考文献

- 安部達雄 (2004) 「笑いとおかしことば—漫才における「フリ」のレトリック—」 『文体論研究』 (50):102-4
- 金水敏 (1992) 「ボケとツッコミ—語用論による漫才の会話の分析—」 大阪女子大学国文学研究所編 (1992) 『上方の文化 上方ことばの今昔』 :62-90 和泉書院
- グライス著 清塚邦彦訳 (1998) 『論理と会話』 劉草書房 (原書 : Grice P. *Studies in the Way of Words* (1989 初出) Harvard College)
- 関綾子 (2002) 「おかしみの生成における言語操作の構造」 『早稲田日本語研究』 (10):135-146
- ブレイクモア著 竹内道子・山崎英一訳 (1994) 『ひととは発話をどう理解するか—関連性理論入門—』 ひつじ書房
- 梶谷知行 (2006) 「漫才のツッコミに関する一考察」 東京外国語大学記述言語学研究所編 『東京外国語大学記述言語学論集 思言』 (1):150-7

参考資料

「オートボックス M-1 グランプリ DVD」 (2001,2002,2003,2004,2005) コロムビアミュージックエンターテインメント

表.1



擬音語・擬態語から見た日本語非外来語片仮名表記の考察

吉田 由佳

(日本課程日本語専攻)

キーワード：日本語、片仮名表記、非外来語、擬音語、擬態語

0. はじめに

日本語における片仮名表記というと外来語が真っ先に思い浮かぶが、非外来語にも片仮名表記が少なからず見られる。本稿は中でも擬音語・擬態語に焦点をあて、コーパスから用例を集めた上で、これまでの片仮名表記に関する先行研究における擬音語・擬態語の位置づけを見直すことを目的とする。

1. 先行研究のまとめおよび問題提起

非外来語の片仮名表記については、日本語教育の分野において片仮名の使用場面を指導する必要性から論じられている。比較的新しいものでは小林(2003)と中山(1998)があり、卒業論文では小林(2003)と中山(1998)に加え、これら2つで挙げられている先行研究のうち論文と関係の深い6つについて見ていった。擬音語に関しては片仮名表記されることで各先行研究の見解がおおよそ一致しているが、擬態語が片仮名表記されるかについては先行研究間で意見が分かれていた。また、片仮名表記されるとしている先行研究の間でも擬態語でどの程度片仮名表記が使用されるかについて見解が異なっていた。以下に先行研究ごとの擬態語の片仮名表記に対する見解を表にまとめる。

表1 各先行研究における擬態語の片仮名表記に対する見解

	武部 (1968)	武部 (1979)	玉村 (1982)	玉村 (1984)	河原崎 (1989)	富田・眞 田(1994)	中山 (1998)	小林 (2003)
見解	—	△	—	△	○	○	○	—
備考	擬態語については言及なし	新聞などに限る	擬態語については言及なし	普通は平仮名表記	片仮名・平仮名どちらが普通かには触れず	本来的には平仮名表記?		現在は片仮名表記であることを示唆

—：言及なしまたは態度を保留 △：条件付きで認める ○：認める

なお、先行研究において実際に片仮名表記の用例を収集しているとはっきり分かるのは中山(1998)と小林(2003)のみであった。そのうえ、小林(2003)でも中山(1998)でも収集されているのは片仮名表記の用例のみである。そのため平仮名で表記されている擬態語がどのくらいあったのか、片仮名表記の擬態語が擬音語全体でどのくらいの割合を占めるかまではわからない。このことは擬音語についても同様に言える。

2. 調査

2.1. 調査方法

小説をコーパスとし、その中で使用されている擬音語・擬態語を手作業で抽出した。作家および作品の選出にあたっては、性別や年齢を考慮した上で手近にあるものから近年に出版されたものを選び（10年以内を目安）、歴史小説など現代の日本語と文体がかけ離れているおそれのあるものは避けた。今回調査した作家のデータを以下に示す。

表 2 本調査でコーパスとして使用した作家のデータ

作家名	性別	生年	出身地
中村航	男	1969年	岐阜県
本多孝好	男	1971年	東京都
乙一	男	1978年	福岡県
あさのあつこ	女	1954年	岡山県
宮部みゆき	女	1960年	東京都
島本理生	女	1983年	東京都

基本的に調査対象とした作品の全文を調査したが、宮部みゆきのみコーパスとした2つの作品がそれぞれ578ページ、452ページと長大であったため、はじめから200ページ程度までを調査した。なお、あとがきや解説、特別対談は調査対象から除外した。

今回の調査では短編・長編を問わずにコーパスを選んだこと、ページ数ではなく書籍の冊数でコーパスの規模を決めてしまったため（中村・本多を除く4名は2冊）、作家ごとで総作品数（最多7作品、最少2作品）および総ページ数（最多716ページ、最少273ページ）に大きく差が出てしまった。今後調査を継続する上での反省点としたい。

今回の調査は片仮名表記される擬音語・擬態語の割合を調べるのが目的であるため、延べ語数での収集はあまり意味をなさないと判断し、異なり語数のみで収集を行った。作家単位で、あるいは6名の作家全体でデータをまとめる際にも、重複する分は排除し異なり語数に直してある。ただし、同じ擬音語・擬態語で片仮名表記と平仮名表記の両方が用いられている場合はそれぞれ別のもので扱った。なお、意図的に重複して用例収集しているものがあるが、それについては次で詳しく述べる。

2.2. 調査対象とした擬音語・擬態語

『国語学大辞典』（国語学会編(1980)）によれば、擬音語・擬態語（オノマトペ）には「語源的オノマトペ」と「生きているオノマトペ」があるとしている。今回の調査では、『現代擬音語擬態語用法辞典』（飛田・浅田(2002)）を参照し、そこに掲載されているものを調査対象とした¹。ただし、「まあまあ」や「ちょっと」の「ちよっ」、「ずっと」の「ずっ」など『現代形容詞用法辞典』（飛田・浅田(1991)）参照、『現代副詞用法辞典』（飛田・浅田(1996)）参照との記述があるもの（あるいは用法）については「語源的オノマトペ」であると見なし、対象から除外した。

また、国語学会編(1980)には「擬声語と擬態語の境界は時々截然としない」[国語学会編(1980:214)]とあるが、実際に調査の過程で擬音語か擬態語か文脈からは判断のつかないものが多く見られた。それについては擬音語・擬態語の双方に含めて集計した。また、同一作家の同一作品中で、ある箇所では擬音語として、別の箇所では擬態語として用いられて

¹ ただし、動物の鳴き声など文脈から見て擬音語・擬態語であることが明白であるものは飛田・浅田(2002)に掲載されていなくても対象に含めた。

いる例もあったが、それも擬音語・擬態語双方にカウントした。

2.3. 調査結果

本節では調査の結果を作家別に提示する。卒業論文では、調査した作品別に擬音語・擬態語が何例現れたかを片仮名・平仮名別に示した後、擬音語の片仮名表記・平仮名表記および擬態語の片仮名表記の用例を挙げていったが、ここでは紙幅の都合上、各作家および全体での異なり語数の用例数のみを示す。

表 3 作家別および全体での片仮名表記・平仮名表記の用例数（擬音語・擬態語別）

	擬音語		擬態語	
	片仮名 (%)	平仮名 (%)	片仮名 (%)	平仮名 (%)
中村	31(27.7)	81(72.3)	21(9.3)	204(90.7)
本多	21(41.2)	30(58.8)	31(13.8)	193(86.2)
乙一	6(33.3)	12(66.7)	5(4.9)	97(95.1)
あさの	21(52.5)	19(47.5)	11(5.9)	176(94.1)
宮部	16(38.1)	26(61.9)	104(29.9)	244(70.1)
島本	2(28.6)	5(71.4)	6(5.6)	101(94.4)
全体	92(39.7)	140(60.3)	151(21.5)	550(78.5)

3. 考察

3.1. 擬音語・擬態語における片仮名表記の割合について

擬態語が片仮名表記される割合は、ほとんどの作家において擬音語が片仮名表記される割合に比べると圧倒的に少なかった。宮部は他の作家よりも擬態語の片仮名表記の割合が高いものの、それでも半数には遠く及ばない。この調査結果は、「擬態語は平仮名書きが普通」とした先行研究を支持するものである。

ただし、擬音語の片仮名表記も、あさのがかろうじて半数を超えるのみである。よって擬音語が基本的に片仮名表記されるとは今回の調査結果からは言えないと筆者は考える。

このような結果が出た原因には、2つ考えられる。1つは先行研究が擬音語・擬態語の表記の実態を調査しなかったため、実際には当時から存在していた擬音語の平仮名表記が無視されてしまっていたか、もう1つは先行研究が執筆された当時は擬音語を片仮名表記するのが普通であったが、近年に至るまでにそれが崩れたかである。どちらの原因によるものなのか判断するには、先行研究が執筆された頃まで遡って用例収集をする必要があるため、今後の課題とする。

また、「ブレイブ・ストーリー 上」（宮部(2006)）では擬態語の片仮名表記が 33.8%と比較的多く見られる上、片仮名表記と平仮名表記の揺れも 21 例もあり、揺れの原因がよく分からないものも多かった。これは擬音語・擬態語以外の片仮名表記と関係がある可能性がある。本作品では擬音語・擬態語以外の非外来語についても片仮名表記が多数見られた。他の非外来語の片仮名表記の割合が増えると擬音語・擬態語の片仮名表記もそれに比例して増えるなど何らかの関連があると思われるが、今回はあくまで擬音語・擬態語における片仮名表記に焦点を当てているため、詳しい考察は行わなかった。

なお、片仮名表記の擬音語・擬態語については同一作品中で一度しか現れないものが多数を占めていたが、平仮名表記のものについては同一作品中でも繰り返し使われることが多いばかりか、複数の作品および作家で見られるものも多かった。このように繰り返して使用されることの多い平仮名表記の擬音語・擬態語については「語源的なオノマトペ」化が

進んでいると筆者は考える。オノマトペ意識が薄れたものに平仮名表記が用いられる傾向は、以下の例からもうかがえる。同一作品中に登場するものでありながら、程度副詞的に用いられているときには平仮名表記されている。

神保町という本の町に行くには、JR 線御茶ノ水駅で降りればいいのだそうで、二人は駅に向かった。道々ルウ伯父さんは、蒸し暑くなってくるとお祖母ちゃんのガミガミ度合いが上昇してうるさいけど、言うことがメチャクチャなのでけっこう面白いとか、(中略) お正月からこちらの千葉の様子を、あれこれと話してくれた。

[宮部(2006:169)一部省略、下線は筆者による]

伯父さんはベッドから立ちあがった。ビールのせいで顔は赤いが、ちっとも酔っぱらっているようには見えない。ルウ伯父さんはめちゃくちゃお酒に強いのだった。

[宮部(2006:179)下線は筆者による]

3.2. 片仮名表記される擬音語・擬態語の形態的特徴について

片仮名表記の擬音語・擬態語の用例を見ると、最初の子音がカ行・ガ行・パ行の音のものが多かったが、これらの音で始まる擬音語・擬態語は片仮名表記・平仮名表記を問わず多かった。また、音節の長さも「ガァー」「パン」など1音節のものから「ドキ」「ポキン」などの2音節のもの、「バタバタ」「ガリガリ」など2音節の繰り返しのもの等さまざまな長さのものが見られた。以上のことから、形態的な特徴が片仮名表記の選択に及ぼす影響はないと筆者は考える。

3.3. 片仮名表記される擬音語・擬態語の意味的特徴について

3.3.1. 無感情性を示す片仮名表記

第一に、無感情性を表したいときに片仮名表記の擬音語・擬態語が使われる傾向にあることが挙げられる。

今回の調査では、機械の発する音を表す擬音語に片仮名表記が多く見られた。例えば「リレキシヨ」(中村(2005))の給油機のパネルの発する音「ピッピッ」やレジスターの発する音「チーン」「ガチャガチャ」、「夏休み」(中村(2006b))のグラフィックイコライザーの音「ポクポクポクポク」「チーン」、「火車」(宮部(1998))のファミコンの音「ピー」「プルル」などが挙げられる。さらに中村(2005)では、機械の発する音以外にも機械のしゃべる言葉に片仮名が使用されている箇所があった。

証明写真スタンドは、駅前にあった。(中略)

「ショウメンノ カガミヲミテ メノイチヲ テンセンニ アワセテクダサイ」

あらぬ方向から突然響き渡ったのは、メカと人間のハーフみたいな女性の声だった。

「イスヲ サユウニ マワスト タカサヲ チョウセツデキマス。ジュンピガ デキマシタラ ミドリノボタンヲ オシテクダサイ」

メカ娘は一方的に説明をし、一方的に黙り込んだ。

[中村(2005:15-6)一部省略]

一方、人間の話す言葉に対しても、メモの復唱や聞き手に意図が伝わってない言葉など、感情性を持たない言葉で片仮名表記が用いられている例が見られた。

——オカヤスデンキ、キキジギョウブ、ギジュツイッカ。ゼロ、ヨン、ゴ、ニイ、ハチ、……………
ゼロ。

僕はメモを復唱した。

[中村(2006b:66)]

「アノよ、おぬしも友達に聞いてきたのかの？」
 フードの人影は、杖を持ちあげてとんとんと肩を叩いた。
 「このことは、だいぶ評判になっとるらしいからの」
 それらの言葉は、狼狽して混乱してコントロールを失っている亘の心にも、かろうじて届いた。
トモダチ。トモダチに聞いてきた。
ヒョウバンになっている。

[宮部(2006:144)下線は筆者による]

これらの例のように、感情性を打ち消す効果を狙って片仮名表記が使われることもあると考えられる。

擬音語・擬態語においても、感情性の有無で片仮名・平仮名表記を使い分けていると思われる箇所があった。例えば中村(2006b)では、テレビゲームのキャラクターを選択する音に対して、片仮名表記の「ポーン」が使われた後、2ページ後には平仮名表記の「ぽーん」が現れている箇所がある。場面自体は変わっていないので、中村が意図的に片仮名表記と平仮名表記を使い分けているとしか考えられないが、片仮名表記の「ポーン」が現れた際、僕と吉田くんが二日後に迫ったユキたちとの対戦に勝機が見えていないのに対し、平仮名表記の「ぽーん」が現れた際にはユキたちに勝つ秘策を思いついており、それを実践するために練習しようとしているところである。

「・・・・・・・・もう全てお終いです」
 と、吉田くんは言った。
 「まあ、取りあえず練習しようよ」
 明るい声で僕は言った。吉田くんはのろのろと赤い帽子の少年を選択した。ポーンと音が鳴り、画面は戦闘フィールドに切り替わった。

[中村(2006b:182)下線は筆者による]

「今、もの凄くいい作戦を思いついた」
 吉田くんがゆっくりと顔を上げた。
 「おれは帽子の少年で闘う。そして吉田くんは恐竜で闘う。素早く選択しちゃえば絶対気付かれない」
 我ながらいい考えだった。吉田くんの顔が少しずつ輝きを増していくのがわかった。
 「それは卑怯です。だけど素晴らしいアイデアです」
 (中略)
 「よーし」僕は素早く赤い帽子の少年を選択した。ぽーん。
 「がんばりましょう」吉田くんは緑色の恐竜を選択した。ぽーん。

[中村(2006b:183-4)下線は筆者による]

前者は途方にくれて意識が遠のいた状態での動作であることを、後者は秘策でユキたちに勝利しようと明確な意思を持っている状態での動作であることを、中村はそれぞれ片仮名表記と平仮名表記を用いることで表していると筆者は考える。

また、『失はれる物語』(乙一(2006))に収録されている「傷」という作品中で、同じアサトという人物の骨が折れる音に片仮名表記の「ポキン」と平仮名表記の「ぽきん」両方が用いられている。前者はアサトが無意識のうちに「オレ」の傷を引き受けている場面、後者はアサトが自殺しようとして故意に他人の傷を引き受ける場面で現れている。

それまでかたわらにいて、恐ろしげに成り行きを見守っていたアサトの表情が、すっと消えた。焦点のあっていない、空ろな表情になり、ふらふらとそばに近寄ってきた。小さな手をのばし、そっとオレの腕に触る。止める間もなかった。彼は腕の激痛を吸収したのだ。腕の痛みが引くと同時に、アサトの腕からポキンという音がした。彼は無表情のまま、そのことが恐ろしかった。

[乙一(2006:112)下線は筆者による]

病院の正面玄関、ラッパを吹く少年のブロンズ像の前にアサトはいた。彼は、ギプスを腕に巻いた同い年くらいの少女に手を触れている最中だった。少女の傷をひきうけると、ぼきん、という軽い音が鳴るとともに、彼の腕が奇妙にねじれる。澄んだ目は骨折の激痛を少しも気にせず、静かな水面のようだった。

(中略)

「もうこれ以上、生きていたくないよ……………」

その時、オレはアサトが自殺するつもりであることを悟った。だから死ぬ前に、少しでも多くの傷を自分の体に移動させたのだ。他人の傷を癒し、その上、大勢の苦痛を肩代わりしたまま死ぬつもりなのだ。

[乙一(2006:131-2,134)一部省略、下線は筆者による]

このように、感情性のない・薄いものの音や動作をあらわす擬音語・擬態語には片仮名表記が使われやすく、逆に感情性を持たせたい時には、平仮名表記が選ばれる傾向があると筆者は考える。

3.3.2. 会話文中に見られる片仮名表記

第二に、片仮名表記の擬態語が会話文中に多く見られたことが挙げられる。今回の調査で収集した187例²の片仮名表記の擬態語のうち、31.1%の60例が会話文や手紙、インターネットの掲示板の中で現れた。特に中村については、21例中17例と81%が会話文中のものであった。以下で示すように、同一作品中で会話文と地の文とで片仮名表記と平仮名表記とが使い分けられている例も見つかった。

小銭入れを片手に家を出ると、つんと鼻の奥に刺さる水の臭いが風に運ばれてきた。あまりきれいとは言いがたい目の前の川からは、夜になるとたまにこうやってきつい臭いが上がってくる。

[島本(2003:21-2)下線は筆者による]

となりに並ぶと、周からはちょっと変わった匂いがしていた。何かの薬品を塗ったような匂いだった。

「なんだか鼻にツンとくる匂いがするけど、薬でも塗った？」

[島本(2003:36)下線は筆者による]

また、片仮名表記の擬態語はくだけた口調の会話文の中で特によく見られた。

「結婚してんのよ、そいつ。子供もいるし。不倫だったの」

聞き耳を立てている向かいの患者と見舞い客たちにわざわざ聞かせようとでもするかのような声だった。

「だから、もしゴタゴタ騒がれたらってビビったんじゃないかな。こっちには騒ぐ気なんてないのにさ。付き合ってたときから、臆病なやつだったから。そのままらっっちゃってもいいんだけど、何か馬鹿にされてるようだしさ。だから突っ返してきて欲しいの。アカの他人のあんたから、こんなもらう

² 同一作家内および6作家全体での異なり語数に直す前の値。3.1.の全体の数値と差が見られるのはこのためである。

謂れはないって」

[本多(2005:203)下線は筆者による]

会話文中で用いられる擬音語・擬態語の片仮名表記は俗語的な雰囲気を出す効果を狙ったものであると思われる。

なお、宮部(2006)で擬音語・擬態語以外でも片仮名表記が多く使われていることは先ほど述べたが、登場人物の発話中、特にカッチャンというかなりぞんざいな喋り方をする男の子の発話に片仮名表記がよく見られた。このことから擬音語・擬態語に限らず片仮名表記が俗語的な雰囲気を出すために使われる傾向がうかがえる。

3.3.3. 慣用的な表現の一部と化した片仮名表記

最後に、慣用的な表現の一部であることを表す擬音語・擬態語の片仮名表記が見られたことが挙げられる。例えば、「ピンとくる(こない)」の「ピン」、「ビクともしない」の「ビク」、「パァ」などが挙げられる。特に片仮名表記の「ピン」は7作品で現れており、片仮名表記の擬音語・擬態語の中では最も登場する作品数が多かったが、このうち4例が「ピンとくる(こない)」という表現の中で用いられていた。また、中村(2006a)の「月に吠える」で「ヒヤリ・ハット」という表現が見られたが、飛田・浅田(2002)の「ひやり」「はっ」の項目でこの表現が取り上げられていることから、定型化された表現であると言えるだろう。このように、慣用表現の一部として用いられる擬音語・擬態語に片仮名表記が用いられることがある。

これらに片仮名表記が使用されるのは、恐らく擬音語・擬態語を慣用表現の一部として使っていることを強調し、字義どおりの意味で使っているのではないことを表すためではないかと筆者は考える。

3.4. まとめ

今回の調査で明らかになったことを以下にまとめる。

- ① 擬態語については、今回の調査では平仮名表記が圧倒的多数を占めた。ただし、擬音語についても片仮名表記の例はあさのでかろうじて半数を超える程度にしか現れず、基本的に擬音語は片仮名表記されとした先行研究の記述と食い違いが見られた。
- ② 片仮名表記された擬音語・擬態語に形態的な特徴は特に見受けられなかった。意味的な特徴から見てみると、次のような場合に擬音語・擬態語の片仮名表記が用いられることが分かった。
 - I 機械の音や音声を表す場合および無感情性を表したい場合
 - II 会話文中において、俗語っぽさを表したい場合
 - III 定型化された表現の一部として用いる場合
- ③ 平仮名表記は、照応関係がすりきれて「語源的オノマトペ」化しつつある擬音語・擬態語に用いられる傾向がある。また、②のIとは逆のパターンで、機械の音や音声に感情性を持たせたい時には平仮名表記を用いることがある。

4. おわりに

以上、本稿では近年に書かれた小説をコーパスとして擬音語・擬態語を抽出したことにより、先行研究で見解が分かれていた擬態語の表記について、「平仮名表記が圧倒的に多い」と結論づけることが出来たうえ、多くの先行研究で「片仮名書きが普通」とされていた擬音語についても平仮名表記の用例が多く見られるという結果を得た。また、擬音語・擬態語の片仮名表記は、形態的な要因からではなく意味的な要因から選択されるものであり、その要因には、3つが挙げられることが分かった。また、平仮名表記についても「語源的オノマトペ」化を表す、片仮名表記の裏返しとして感情性を表すといった役割を担ってい

ることが分かった。

今後は擬音語片仮名表記の通時的な変化について調査するとともに、擬音語・擬態語の片仮名表記で見られた「無感情性を示す」という特徴が、擬音語・擬態語以外の片仮名表記でも見られるかなど他の品詞の片仮名表記にも視野を広げ、非外来語の片仮名表記の体系全体を見直していきたい。

参考文献

- 河原崎幹夫(1989)「片仮名の指導法」 加藤彰彦編『講座 日本語と日本語教育 9』245-264 明治書院
- 国語学会編(1980)『国語学大辞典』 東京堂出版
- 小林孝郎(2003)「片仮名語」と「カタカナ表記」 拓殖大学国際部編『拓殖大学日本語 紀要 13号』35-44 拓殖大学国際部 (未公刊)
- 武部良明(1968)「表記法—外来語」 早稲田大学語学教育研究所編『講座日本語教育 4』23-35 早稲田大学語学教育研究所
- _____ (1979)『日本語の表記』 角川書店
- 玉村文郎(1982)「仮名とローマ字」 国立国語研究所編『日本語と日本語教育 (文字・表現編)』18-47 大蔵省印刷局
- _____ (1984)「語の表記」 国立国語研究所編『語彙の研究と教育 (下)』122-135 大蔵省印刷局
- 富田隆行・眞田和子(1994)「片仮名の表記法」 国際交流基金編『新 表記』34-56 凡人社
- 中山恵利子(1998)「非外来語の片仮名表記」 日本語教育学会編『日本語教育 96号』61-72 外国人のための日本語教育学会
- 飛田良文・浅田秀子(1991)『現代形容詞用法辞典』 東京堂出版
- _____ (1996)『現代副詞用法辞典』 東京堂出版
- _____ (2002)『現代擬音語・擬態語用法辞典』 東京堂出版

参考資料

- あさのあつこ(2005)『The MANZAI 1』 ジャイブ
- _____ (2006)『NO.6 [ナンバーシックス] #1』 講談社
- 乙一(2002)『暗いところで待ち合わせ』 幻冬舎
- _____ (2006)『失はれる物語』 角川書店
- 島本理生(2001)『シルエット』 講談社
- _____ (2003)『リトル・バイ・リトル』 講談社
- 中村航(2005)『リレキシヨ』 河出書房新社
- _____ (2006a)『ぐるぐるまわるすべり台』 文藝文春
- _____ (2006b)『夏休み』 河出書房新社
- _____ (2006c)「ハミングライフ」 石田衣良・中田永一・中村航・本多孝好・真伏修三 山本幸久『LOVE or LIKE』111-162 祥伝社
- 本多孝好(2001)『MISSING』 双葉社
- _____ (2005)『MOMENT』 集英社
- _____ (2006)「DEAR」 石田衣良・中田永一・中村航・本多孝好・真伏修三・山本幸久 『LOVE or LIKE』165-245 祥伝社
- 宮部みゆき(1998)『火車』 新潮社
- _____ (2006)『ブレイブ・ストーリー 上』 角川書店

思言 東京外国語大学記述言語学論集 **第3号**

2007年11月30日発行

編集・発行： 東京外国語大学 記述言語学研究室（風間伸次郎）
〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1
電話 042-330-5357

Edited and Published by Department of Descriptive Linguistics
Graduate School of Area and Culture Studies
Faculty of Foreign Studies
Tokyo University of Foreign Studies
3-11-1, Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo,
183-8534, JAPAN

SHIGEN

vol. 3

Articles

- A Contrastive Study of the Sentence-final Particle *yum* in Mongolian and the Sentence-final Form *da, nada* in Japanese Jingang (3)
- Question Particle -ko in Finnish SAKATA Haruna (22)
- Irabu Phonology SHIMOJI Michinori (35)
- Specificity Marking in Burushaski YOSHIOKA Noboru (84)

Abstracts of the MA Theses

- On First Person Pronoun "MAN" of the Mongolian Language Chuluunbaatar Selenge (107)
- A Descriptive Study of the Fukushima Dialect: with a Special Focus on Verbs HATA Sayaka (109)
- Contrastive Studies of Japanese and Chinese Onomatopoeia HUANG Hui (111)
- A Descriptive Study on Sentence-final Particles in Mongolian Jingang (113)
- Contrastive Study of Potential Expressions Between Japanese and Chinese LI Jingyu (115)
- Honorific Expressions for the Imperial Family as Appearing in the Japanese Newspapers and Weekly Magazines Sri Budi Lestari (117)
- The Morphological Grammar of Hunza Burushaski YOSHIOKA Noboru (119)

Abstracts of the Graduation Papers

- A Contrastive Study of Japanese and German: Idiomatic Expressions Involving Body-part Nouns KATO Nami (123)
- Contrastive Studies on Aspects of Japanese Verbs and Russian Verbs KOMINATO Ayumu (131)
- An Acoustic Phonetic Study of Vowel Harmony in the Solon SATO Kentaro (139)
- An Examination of the Auxiliary Verb -khE. in Burmese TAKAHASHI Mai (147)
- A Re-consideration of the Auxiliary Verb Arrangement in Burmese TAMORI Kana (155)
- The Circumstances of Figure of Speech in Japanese Tag Lines TOSA Hiroki (163)
- Echo Formations in Hindi NAKACHI Kana (171)
- The Two Verbs Expressing Recognition in Spanish—*saber* and *conocer*— NISHINO Takeshi (179)
- The Progressive Aspect of Hiroshima Dialect NIMURA Tetsuya (187)
- An Examination of Tendencies Towards Onomatopoeic Expressions in Novels MASUNO Nao (195)
- A Syntactic Characterisation of the Chinese Demonstrative Pronouns "zhe" and "na" MORIKAWA Taisuke (203)
- A Study on Animal Nouns as Augmentatives in German YANAGI Yukiko (211)
- The Person System of Ainu Hokkaido Dialects: with a Special Focus on the Gods in Kamuyyukar Texts YAMADA Yohei (219)
- The Structure of Laughter in Manzai (Japanese Comic Dialogue) YAMAMOYO Takaya (227)
- An Examination of the Japanese Non-loanword Katakana Notation: with a Special Focus on Onomatopoeic Words YOSHIDA Yuka (235)

2007